

SDガンダムの的な男

迷える夜羊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SDガンダムに出てくる装備と技を身につけた男が人外と一緒にマジの人外になっ
ている物語

(不定期更新 批評・酷評はなしでお願いします)

目次

防振り主人公プロフィール（ネタバレあり）	1
始まり	13
初クエスト	20
大いなる巨人	27
第一回イベント	37
光の侍	45
武化舞可	56
第二回イベント	64
重戦車メイプル	72
正体バレました	78
龍帝剣	86

楓の木結成	94
第三回イベントに向けて	100
聖なる機兵	106
毛刈りとプレゼント	114
第三回イベントで事件発生!?	123
第三層と聖機兵の進化	130
第四回イベントの発表と新しい仲間	137
神秘の泉とサリーの決闘	144
第四回イベント始まりの時	150
突撃！楓の木	155
炎帝との遭遇	161
サリー救出作戦！	166

出撃メイプル!	213	巨大なゴーレムと合体は男のロマン	238
楓の木VS集う聖剣	179	ミイの理想	244
・・・ジブリで見たな・・・	185	ペインと剣豪	250
打ち上げと忘れていたアレ	191	五層と風邪と実家	255
アイテムの悲劇と神秘機兵	197	守護天使の試練	261
赤い卵と破異武立闘	203	勇気なんだけど・・・なんか違くない?	267
四層にフライングして玉璽を手にする	210		
熱血と華麗	215	アルガス騎士団	274
第五回イベントで腹いせそして再び事件が!?	222	六層に潜む恐怖	284
史上最強パーティーVS四体のゴーレム	231	魂が震える戦い	291
		サリーと雷の将軍	298
		新郎一人に新婦多数!?	303

七回イベント	310
extra 難易度は伊達じゃない！	315
最後に残ったのは最強の敵	322
烈火の鉄人	329
火の鳥	336
赤き獅子、青き狼	342
若き鬼	348
七層と色々なモンスター	354
空と海と神獣	359
雷龍劍の伝承者	366
白金のハルバード	372
みんなのパートナー	378

八回イベント	383
本選の始まり	389
いつの間にか忘れられた男	395
我ら夏侯兄弟！	401
蝶は妖艶に舞う	407
策士とは常に美しくあるべき	414
烈風の鬼ごっこ	421
荒れくれ者の大岩	425
精霊	430
みんなで楽しくボス戦（一人を除いて）	437
最後は大盤振る舞い	445
金色の神	452

二体の聖機兵	461
ド根性侍	467
不思議の鎧	474
月下の怪盗	482
愛の為に	489
王の剣	497
騎士エピオン襲来	504
鎧闘神VS鎧闘神	510
月の機甲神	516
トレーズ君臨	522
新生アルガス騎士団	528
海に眠りし財宝	537
八紘の陣	543

全てを欲する武者	550
大いなる怒り	556
伏龍、羽ばたく	563
煉獄の闇	570
三侯の魂	576
幻魔王	583
thunder storm	589
神雷を司る者	595
ラピッドファイア	602
第九回イベント	608
即席チーム	614
ボスは食べられるもの	619
囲まれる男	624

生まれ変わる二人

乙女心？

赤備えの鎧

ソウルドライブ

647 640 635 629

防振り主人公プロフィール（ネタバレあり）

主人公

慎 真斗（しん まさと）

プレイヤーネーム

スペリオル

ステータス（ゲーム開始時）

HP 500

MP 50

STR 30

VIT 20

AGI 30

DEX 15

INT 5

卓越したゲームスキルの持ち主で自他共に認めるゲーマー

相手の動きを直感だけで見抜き最小限の動きで敵を倒す

SDガンダムが好きでそれ系のスキルを集めている
ラッキースケベ体質でそれに巻き込まれる事が多い

本条 楓と白峯 理沙とはクラスメイト

最初の頃は二人に全く気づかれていなかったが

楓がメイプルだった時に会っており彼の方はその正体に気づいていた

しかしリアルバレは流石にマズイと思って黙っていたので

その後の第二回イベントで正体がバレた時にはかなり怒られた

ユニーク装備・騎士シリーズ

騎士の剣

STR+30 AGI+15

「破壊不可」「火炎斬り」「疾風斬り」

騎士の槍

STR+25 AGI+20

「破壊不可」「水流突き」「雷光突き」

騎士の盾

VIT+20 DEX+10

「破壊不可」「大防御」「奇跡の盾」「剣挿入」

騎士の鎧

VIT+40 INT+15

「破壊不可」「マウント装備」「ケンタウロス」

モチーフは騎士ガンダム

バランスタイプに秀でており全ての無駄がない

どんな状況であろうと対応する事ができる万能型

ユニーク装備・武者シリーズ

烈火刀

STR+50

「破壊不可」「烈火一閃」

閃光の薙刀

STR+40 AGI+10

「破壊不可」「閃光の舞」

新タネガシマ

STR+90 リロード時間10分

「破壊不可」

武者の兜

4 防振り主人公プロフィール（ネタバレあり）

VIT+40 DEX+10

「破壊不可」「烈火の魂」

武者の鎧

VIT+50

「破壊不可」「マウント装備」「烈火の旗」

モチーフは烈火武者ガンダム

パワーと守りに特化したタイプで

一対一での勝負を主にしている高火力型

ユニーク装備・龍帝シリーズ

爪龍刀

STR+40 AGI+15

「破壊不可」

牙龍刀

STR+40 AGI+15

「破壊不可」

龍帝剣

STR+50 AGI+20

「破壊不可」「龍帝の魂」

龍帝の兜

VIT+20 DEX+30

「破壊不可」「正義の心」

龍帝の鎧

VIT+25 AGI+20

「破壊不可」「マウント装備」「義兄弟の絆」「三位一体」

モチーフは劉備ガンダム

スピードタイプで攻撃力も高く

範囲攻撃を得意としている殲滅型

ユニーク装備・破牙シリーズ

破牙の兜

STR+50 AGI+20

「破壊不可」「破牙無礼怒」

破牙の鎧

STR+30 VIT+40

「破壊不可」「獸王武神」「破牙丸戦術」

破牙の籠手

STR+40

「破壊不可」「無手の心得」

破牙の脚甲

STR+20 AGI+30

「破壊不可」

モチーフは破牙丸

武器を持たない格闘系の装備

高速戦闘が得意な物理特化型

所有スキル

「貫通撃」「大切断」「大物喰らい」「不屈の闘志」「換装」

「三種の神器」「光の弓矢」「サイコゴレム召喚」「聖機兵」「金色の神」

「烈火の魂」「烈火の旗」

「武化舞可の號刀」「武化舞可の霸兜」「武化舞可の天翼」「武化舞可の大砲」「武化舞可の鎧甲」

「武化舞可の鉄肩」「武化舞可の俊脚」「烈火大鋼」「八紘の陣」

「破牙無礼怒」「獸王武神」「破牙丸戦術」「無手の心得」

「龍帝の魂」「正義の心」「義兄弟の絆」「三位一体」

「星龍斬」「真龍斬」「翔龍斬」「玉璽」「天翔ける戦神」

オリジナルスキル説明

『スキル：マウント装備』

能力：装備をインベントリに仕舞わず背中に装備出来る（三つまで）』

『スキル：剣挿入』

能力：片手剣をインベントリに仕舞わず盾に仕舞える』

『スキル：ケンタウロス』

能力：下半身が馬に変わりAGIが倍になる

効果時間は三十分』

『スキル：換装』

能力：予め登録しておいた装備と今着ている装備を入れ替える』

『スキル：三種の神器』

能力：呪文を唱えると炎の剣、力の盾、霞の鎧を纏い

1分間だけ以下のステータスで戦う事が出来る

使用回数は一日二回

HP 10000

MP 5000

STR 1000

VIT 1000

AGI 1000

DEX 1000

INT 1000

『スキル：光の弓矢』

能力：光の矢が当たった相手の動きとスキルを10分間封じる』

『スキル：サイコゴーレム召喚』

能力：MP10000のサイコゴーレムを召喚する

（サイコゴーレムのMPは5秒で1減りダメージを受ける事でも減っていく

そして0になると消滅する）』

『スキル：聖機兵』

能力：聖機兵を召喚しそれに乗って戦うスキルは呼び出される聖機兵によって異なる』

『スキル：金色の神』

能力：魔王と融合してスペリオルドラゴンへと進化する

スペリオルドラゴンになるとダメージを受けず一撃で敵を倒せる

効果は30秒 発動できる回数は一週間に一回』

『スキル：烈火の魂

能力：HPが30%以下になるとSTRが二倍になる』

『スキル：烈火の旗

能力：五分間、範囲にいる味方のSTRを15%上昇させる』

『スキル：武化舞可の號刀

能力：STR+500の武化舞可の號刀を装備しスキル『爆鳳霸』が使えるようにな

る

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：武化舞可の霸兜

能力：DEX+500の武化舞可の霸兜が装備できる

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：武化舞可の天翼

能力：武化舞可の天翼が装備でき空を飛ぶ事が出来る

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：武化舞可の大砲

能力：INT+500の武化舞可の大砲が装備できる

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：武化舞可の鎧甲

能力：VIT+500の武化舞可の鎧甲が装備できる

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：武化舞可の鉄肩

能力：状態異常を無効にする武化舞可の鉄肩が装備できる

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：武化舞可の俊脚

能力：AGI+500の武化舞可の俊脚が装備できる

他の武化舞可とは重複しない』

『スキル：烈火大鋼

能力：大鋼を呼び出してそれに融合する事が出来る（この状態でもスキルは使用可能）

使用回数は一日に一回』

『スキル：八紘の陣

能力：全ての武化舞可を装備する事ができ更にステータスを二倍にする

効果時間は十分 使用回数は三日に一回』

『スキル：破牙無礼怒』

能力：武器としてではなく防具として召喚可能な装備』

『スキル：獣王武神』

能力：五分間、獣の様な姿となりSTRが二倍になる』

『スキル：破牙丸戦術』

能力：獣王武神を発動している間のみ使用可能

相手の攻撃を吸収して自分の攻撃に変換して様々な技を放つ』

『スキル：無手の心得』

能力：武器を装備していない状態だとSTRが二倍になる』

『スキル：龍帝の魂』

能力：龍帝の真の力を解放しSTRが50%上昇する

効果時間は30分』

『スキル：正義の心』

能力：あらゆるバッドステータスを無効化する』

『スキル：義兄弟の絆』

能力：自分と同じステータスの関羽と張飛を召喚する

効果時間は三十分』

『スキル：三位一体

能力：義兄弟の絆を発動中にのみ発動可能

関羽と張飛のステータスの25%を自分のステータスに加える

効果時間は十分』

『スキル：星龍斬

能力：星のような斬撃を生み出し敵を攻撃する範囲技』

『スキル：真龍斬

能力：渾身の一撃を叩き込む技で防御貫通攻撃』

『スキル：翔龍斬

能力：空へと大きく飛び上がり斬撃を放つ飛んでいる敵には2倍のダメージを与える

る』

『スキル：玉璽（未完全）

能力：天玉鎧を呼び出し全てのパラメーターを二倍にする

効果時間は三十秒 使用回数はランダム』

『スキル：天翔ける戦神

能力：翔烈帝へと進化し全てのパラメーターを四倍にする

効果時間は5分 使用回数は一日一回』

始まり

つい先日、New World Online（略称：NWO）という最新のVRMMOが発売された

基本的にはオーソドックスなファンタジーRPGだが

プレイヤーの行動に応じてスキルを取得し

独自のビルドを作り上げていく形式のゲームで

その遊び方はまさに人それぞれと言う感じだった

そして慎 真斗もまたこのゲームを楽しみにしており

今日がまさにそのプレイをする日だった

「ワクワクするな．．．！早速、これを付けてっどー！」

ヘルメット型のゲーム機を装着しベッドの上に寝転ぶ

するとすぐに意識が遠退いて行き気が付くと電子的な空間に立っていた

「なるほどな．．．アバターはリアルの自分に近い感じになるのか．．．」

出来れば身長が低かったからそこは調節したかったな．．．」

真斗はそんな事を思いながら色々と初期設定を決めていく

「えつとまずはプレイヤーネームだよな．．．やっぱりここはスペリオルで！」

真斗は自分の大好きなSDガンダムから名前を取り

プレイヤーネームをスペリオルにした

「次にステータスを割り振るのか．．．とりあえずは攻撃よりにするか」

攻撃と速度にポイントを割り振り最後に選ぶのは武器だった

「やっぱり男と言えれば剣でしょ！」

そう言つてスペリオルはすぐに剣を選ぶと最初の街へと場所が変わっていた

「おゝここが最初の街かゝまあ始まったばかりだしそんなに人はいないな

とりあえずは森に向かって行ってモンスターを狩るとしますか」

こうして彼は初めての戦闘に挑む為森の中に入って行った

森に入るとすぐにモンスターと遭遇したがスペリオルは難なく倒していた

「やっぱり最初の森はそこまで歯応えのあるモンスターはいなかったな

こうなるとレベルを上げながらダンジョンを探すしかないか」

その後もスペリオルは順調にレベル上げをしながら

どんどん森の奥へ進んで行くと急に大きな洞窟を見つける

「おっなんだろ？あそこにボスでもいるのかな？」

スペリオルは何があるか分からない為

念の為ポーションを数本購入し準備を整えると中に入っていた

モンスター自体は出てこなかったのだが奥には扉があり

そこを開けてみると明らかに強そうなボスモンスターがいた

「いいね・・・！こういうのを俺は待ってたんだ・・・！」

スペリオルはすぐに攻撃を仕掛けるがダメージが通っている様子はなかった

「やっぱり初期装備じゃまともに攻撃は通らないか・・・！」

だがそれでこそゲーマーの血が疼くつてもんだ!!」

そう言ってスペリオルはボスモンスターの懐に入り込むと

剣を掌に乗せて掌底を放つ

すると先ほどまでダメージの入らなかったボスモンスターのHPが減っていた

「どんなもんよ！」

『スキル：貫通撃を取得しました』

「ん？貫通撃？」

スペリオルは取得条件を確認しようとステータスを確認するとすぐに納得する

『能力：VITを無視して相手にダメージを与える事が出来る』

取得条件：切先でVITの高い相手にダメージを与える』

「なるほど、この技は相手の防御力を無視して

攻撃を与えられるのか・・・これは良いものを貰ったぜ！」

それからスペリオルは新たに覚えた貫通撃を使い

ボスマンスターにダメージを与えていき

六時間にも渡る長期戦を果たしてどうにか倒す事が出来た

「はあく・・・めちやくちやキツかった・・・」

『スキル：大物喰いを取得しました』

『スキル：大切断を取得しました』

能力：モンスターやプレイヤーだけではなく

魔法や自然物も切る事が出来る

取得条件：ボスマンスターと6時間以上剣で戦う』

『スキル：不屈の闘志を取得しました』

能力：HPが0になっても一度だけ1残る

取得条件：ボス戦で1度もダメージを受けない』

「おお・・・一気に三つもスキルを覚えちゃったよ・・・」

スペリオルは新たに取得したスキルを確認した後で

倒したモンスターがドロップした宝箱を開ける

「これは・・・ユニーク装備か？」

中身はこのゲームの世界で一つしかないときれるユニーク装備だった

【騎士の剣】

STR+30 AGI+25

「破壊不可」「火炎斬り」「疾風斬り」

『火炎斬り』

能力：炎を纏った斬撃を放つ事で相手を炎上させる』

『疾風斬り』

能力：斬撃を放つ事が出来る射程は最大百メートル』

【騎士の槍】

STR+25 AGI+20

「破壊不可」「水流一閃突き」「雷光一閃突き」

『水流一閃突き』

能力：鋭い水の突きを飛ばす射程は最大三百メートル』

『雷光一閃突き』

能力：電撃を纏って相手を貫き背後に回る』

【騎士の盾】

VIT+20 DEX+10

「破壊不可」「大防御」「奇跡の盾」「剣挿入」

『大防御』

能力：周囲五メートルからの攻撃を防御する』

『奇跡の盾』

能力：一秒間に3%のHPを回復する（効果は一分）』

『剣挿入』

能力：片手剣を仕舞っておきいつでも武器を切り替えられる』

【騎士の鎧】

VIT+40 INT+15

「破壊不可」「ケンタウロス」

『ケンタウロス』

能力：下半身が馬に変わりAGIが二倍になる』

直ぐにスペリオルはその装備を身につけていく

「おー！こりやあいいいな！」

装備を身に纏ったスペリオルはフルフェイスの騎士になっており

まさにゲームに出てくる主人公のような姿だった

「流石に疲れたし今日はログアウトするか・・・」

こうして初めてのボス戦で疲れたスペリオルは
そのままログアウトするのだった

「ふう〜やっぱ初日からこんなハードなプレイするのはしんどいな・・・

明日もあるからちゃんと寝るか」

そしてスペリオルベッドはベッドの上で意識を無くすように

眠りにつくのであった

初クエスト

翌日、再びログインしたスペリオルは今回はクエストを受ける事にした

「昨日はレベル上げに夢中になって

あんまりクエストは見つけてなかったからな．．．」

スペリオルは森の中でクエストを探していると何やら欠けた石板を発見した

『クエスト：三種の神器を受けますか？』

「おっ？これってクエストアイテムだったのか」

イエスのボタンを押すとスペリオルの手に持っていた石板が光り出した

「うおっ!!いきなり光るからびっくりしたわ．．．」

「ってあれ？いつの間にこんな場所に．．．」

そこは森でもなければ街の外でもないどこかの城の中だった

周りを見渡すと王座に座っている一人の人物を見つける

その男は真っ黒なローブを身に纏い

髑髏の杖を持ったまさに魔王のようだった

『我が名は魔王サタン！勇者よ！我と勝負しろ!!』

「マジか・・・魔王って普通は序盤に現れちゃダメだろ・・・」

そんな事を言いながらもスペリオルは槍を構えて戦う準備をする

「とりあえず先制攻撃はさせて貰うか。水流一閃突き！」

スペリオルは一瞬で魔王との距離を詰めると槍を振り下ろす

しかしそこにはもう既に魔王の姿はなく背後から攻撃を受けた

「ちっ・・・転移かよ・・・厄介だな」

そう思いつつも即座に槍を構えると魔王の雷撃が放たれる

それを華麗に躲してスペリオルは槍を振り下ろすと攻撃が当たった

「おっ?どうやら攻撃している間は転移出来ないみたいだな

って事は狙うはカウンター戦法ってわけか」

『ぐぬぬ・・・あまり調子に乗るでない!』

すると今度はスペリオルの周りに魔法陣が現れ

そこから無数の電撃が放たれる

「ちっ!だがこれくらいなら!雷光一閃突き!!」

スペリオルはなんとかその攻撃を躲して魔王に近づき

その胸に槍を突き刺した

「コイツで・・・終わりだ・・・!」

スペリオルは自分の勝利を確信したがどうやらそれは甘かったようだ

魔王は黒い光を放つと黒い翼を生やし体がドラゴンのようになっていた

『まさかこの私の真の姿を見せる事になるとはな．．．！』

だがこの姿になった以上は貴様に勝ち目はない！』

「嘘．．．だろ．．．？」

『死ね!!勇者よ!!』

「っ！大防衛！」

魔王は炎のブレスを放ち躲す事が出来なかったスペリオルは

その攻撃を受け止める

しかしそれでも受け止めきれずに体が吹き飛ばされて柱に激突する

『これで終わりだ．．．！勇者よ．．．！』

そう言つて魔王がトドメを刺そうとした時

魔王に体当たりする存在がいた

それは石板の欠片を持った小さなスライムだった

『愚かな．．．！貴様のような矮小な存在が邪魔をするな！』

魔王は邪魔なスライムを倒そうとその爪を振り下ろそうとしたが

それをスペリオルが受け止めた

「させるかよ．．．！俺を助けてくれたコイツを．．．見殺しになんて絶対にするか！」
するとそのスライムの持っていた石板と

スペリオルの持っていた石板が光り出し空中で合わさった

そして石板がスペリオルの方を向くと石板に文字が映し出された

『スキル・三種の神器を獲得しました』

「これが新しいスキルか．．．！オーノホ・ティムサコ・タラーキイ!!」

スペリオルが呪文を唱えると光に包まれる

そしてその光が晴れると彼は三種の神器を纏っていた

炎の剣に力の盾そして霞の鎧を身に纏ったその姿はまさに勇者だった

「さあ、ここからが本番だ．．．！」

『面白い．．．！面白いぞ勇者!!』

スペリオルは十人に分身すると魔王に飛び掛かっていく

『そんな分身など我の前では無力と知れ!!』

そう言つて魔王は電撃を放つがそれは全て分身であり

本物のスペリオルは真上に飛んでおり

そのまま炎の剣を魔王の額に突き刺した

『バカな!!この俺がこんなところでええええええ!!』

魔王はポリゴンになって消滅し

スペリオルの画面にはクエストクリアの文字が書かれていた
「はあく……まじで強過ぎだろ……」

序盤で魔王は勘弁してくれ……」

そう思いながらスペリオルはログアウトするのだった

『スキル：三種の神器

能力：呪文を唱えると炎の剣、力の盾、霞の鎧を纏い

1分間だけ以下のステータスで戦う事が出来る

使用回数は一日二回

HP 10000

MP 5000

STR 1000

VIT 1000

AGI 1000

DEX 1000

INT 1000

取得条件：石板を持ったスライムを助ける』

一方その頃、運営側では

「何っ!?!あの序盤で現れる鬼畜魔王を倒しただど!?!」

「誰だ!その鬼畜を超えた化け物プレイヤーは?!」

「名前はスペリオルです!」

「今すぐにその時の戦闘映像を出せ!」

運営陣はすぐに画面を映し出すとそこにはあり得ない光景が映っていた

「・・・なんでこいつ最初の魔王と互角に戦えてるんだよ・・・」

「普通はこの最初の形態を倒すのすら困難なはずなんですけどね・・・」

「俺達が考えた最強の魔王だからな」

なんて話しているとスペリオルが魔王と倒してしまった

「なんであの雷撃を躲せるんだよ!?!スキルも使ってないのに!!」

「それだけのプレイヤースキルを持つてるって事か・・・」

ああ・・・これだからゲーマーは嫌なんだ・・・」

「だが問題はここからだ!コイツには第二形態がある!」

確かに彼らの言うとおり魔王は形態を変えてスペリオルを圧倒する

そして魔王を倒す為のイベントであるスライムが魔王に攻撃を仕掛ける

「普通はここでスライムを見殺しにするから

誰もクリア出来ないと思ってたんだけど・・・」

「・・・助けてますね・・・めっちゃいい子やん・・・」

そしてスペリオルは助けたそのスライムの石板と

自分の持っていた石板を文字を読んで三種の神器を身に纏い魔王を倒した

「・・・ヤバいな・・・一日に二回しか使えないとはいえ

アレを手に入れてしまったか・・・！」

「まあ大丈夫じゃないですか？一応は一分つという時間制限もありますし」

「その一分間だけあいつが無敵の状態になっちゃうけどな・・・」

「「ははは・・・」」

こうして自分達の悪ふざけで首を絞める事になった運営側だった

大いなる巨人

魔王との激戦を終えてスペリオルは新しいスキルの確認をしていたのだが

「……流石にこれは強すぎるよな……」

一分間で尚且つ一日に二回しか使えないスキルではあったが

現時点ではまさに無敵の状態になるという事だけは

今のスペリオルにも理解できた

「とりあえず今日はレベル上げだけにしておくか……」

そう思いながらスペリオルはいつもと違う場所へと足を伸ばしたのだが

「……なんでもこうも毎回、俺の前にはトラブルが舞い込んでくるんだか……」

そんな風に呆れながら呟くスペリオルの前には瓦礫となっている村と

その中で泣き崩れている家族の姿があった

そして極め付けはスペリオルの画面にはこう表示されていたのだ

『クエスト：目覚めし巨人』

これを見た瞬間にスペリオルは今日も

自分は激しい戦闘をする事になるのだと半分悟っていた

そして覚悟を決めてからYESのボタンを押してクエストを開始する

「おお！貴方は勇者様ですねえですか！」

実はこの村は巨人によって一夜にしてこんな有様になってしまったです！」

「巨人って・・・マジかよ・・・」

「はい・・・巨人はこの先に向かいました・・・！」

勇者様も気をつけてください・・・！」

そう言つて家族は荷物を纏めてその場を去つていき

スペリオルはその家族が話していた巨人を追いかけていく事にした

するとその道中で何やら妖精を捕まえたと騒いでる悪そうな男達がいた

「お前ら・・・今すぐにその妖精を解放しな・・・」

「さもないとぶつた斬るぞ〜」

「あん!? テメエは勇者じゃねえか!!」

「いいぜ!ここで引導を渡してくれる!!」

「言うと思つたよ・・・まあどうでもいいけどね・・・！」

そう言つてスペリオルは槍を構えてその悪そうな男達と戦闘を始める

「見るがいい！我が華麗なる剣技を！」

「いや自慢しなくてもいいから・・・水流突き！」

「おのれ良くも同胞を！なら今度は私の魔法で倒してくれよう！」

・おそらくは魔法使いらしき男が今度は火球を放ってくるが

「うゝん．．．魔王の雷撃の方が威力も速度も桁違いだったなゝ

．．．雷光突き」

残念ながら魔王を倒したスペリオルからしてみれば

これくらいは雑魚などの魔法など敵ではなく簡単に躲して突きを放った

「さてと．．．残るはお前だけだな？」

「ヒイ!?こうなったらせめて一矢報いてやる！うおおお!!」

「あく．．．火炎斬り」

スペリオルは容赦無く敵を燃やしてしまい戦闘は終了した

そして妖精が囚われていた鳥籠に近づいて彼女を解放してあげた

「助けてくれてありがとう！もしかして貴方も巨人を倒しにきたの？」

「一応はな．．．本当は嫌なただけど．．．」

「お願い！巨人の事は傷つけないであげて！」

「あん？どう言うことだ？」

「実は．．．」

その妖精の話ではどうやら巨人は元々、穏やかな性格で争いを好まないらしい

しかし今はとある呪術師によって操られた状況になつており

妖精はそれを助けようとしていたところを今の彼らに捕まったそうだ
「なるほどな．．．つまりはその術者を倒せば巨人も止まるってわけか」

スペリオルはそれを聞いて攻略のヒントになつたと思ひ

とにかくまずは巨人のいる洞窟まで向かう事にした

「ここが巨人が眠っている洞窟か．．．なんかやばそうだな．．．」

なんて事を話しているとスペリオルの後ろに巨大な影が現れて

危険だと思つてその場を離れると巨大な拳が振り下ろされた

そしてその拳の持ち主はピンク色の巨人だった

「あれが伝説の巨人か．．．いいいぜ！ やつてやる!!」

スペリオルは楽しそうに槍を構えて突つ込んでいくと

やはり拳が振り下ろされるのだが速度が遅く当たる事はなかった

「こんなもんじゃには効かねえぜ！ 水流突き!!」

そして懐に近づいた瞬間にスペリオルはスキルを使って片腕を吹き飛ばす

しかしその瞬間になんと巨人の腕が簡単に再生したのだ

「嘘だろ!! こりゃあ一撃で仕留めないとまた回復されるな．．．!」

ならやる事は決まつてる！ 短期決戦！ オーノホ・ティムサコ・タラーキイ!!」

スペリオルは三種の神器を身に纏って再び巨人に突っ込んでいく
先ほどと違って攻撃力は段違いなので簡単に巨人の腕を吹き飛ばし
更には防御力も違うので攻撃を受けても全くなんともない感じだった
「こいつでトドメだ！火炎斬り!!」

最後は額めがけて火炎斬りを放つと巨人は

あまりの火力にどんどんと溶けていきそのまま消滅してしまった

「・・・案外弱かったんだけど・・・なんか嫌な予感・・・」

あまりの手応えのなさにスペリオルは嫌な予感がしていると

「ほっくほっくほっ！よく私の作り上げた偽物の巨人を倒したしたね！」

「あく・・・やっぱり偽物だったんですか・・・」

そんな予感はしてました・・・」

「ではそのご褒美に見せてあげましょう・・・！これが本当の巨人です！」

そう言つて呪術師が水晶を掲げるとスペリオルの地面が揺れていき

そこから先ほどとが違う黒い巨人が姿を現した

『ウオオオオオン!』

「マジかよ・・・！ここで本物の登場はまずいだろ・・・！」

先ほどの戦いで既にスペリオルは三種の神器を使つてしま

更にはそのリキャストタイムの所為で再び纏う事は出来ない

とにかく今は避けるしかない」と巨人の攻撃を避けたのだが

その威力は凄まじくなんと洞窟が一撃で壊れたのだ

「アホか!? 洞窟を一発で壊すってどんな破壊力だよ!」

あんなもん三種の神器を纏ってても耐えられる気がしねえよ!!」

なんとか外に出てきたスペリオルはアホすぎる巨人の強さに思わず叫んでしまう

しかしそんな事は関係ないかの様に巨人は再び拳を振り下ろす

その後もなんとか巨人の攻撃を避けていくスペリオルだったが

もはや当たりの地形が完全に変わってしまうほど巨人の一撃が強力だった

「このままじゃ罅が明かない……!」

狙うは呪術師ただ一人か……! ケンタウロス!」

スペリオルはケンタウロスモードへと形態を変えると

そのまま呪術師に突っ込んでいく

「なっ!? こっちに来るな! サイコゴレムよ! 私を守れ!!」

呪術師は急いで巨人に自分の身を守るように命令するが

先ほどからの行動で巨人の動きがそこまで早くない事に気がつき

スペリオルはそれを狙って呪術師から巨人を引き離したのだ

そしてケンタウロスモードになればAGIは二倍になるので巨人が追いつけるはずもなく

そのまま呪術師に向かって突っ込んでいくと

ここでとんでもない事が起こってしまったのだ

「チィーこうなつたらここは逃げるしか！つてしまった!?水晶が!!」

なんと呪術師が逃げようとして巨人を制御していた水晶を割ってしまったのだ

「あれがなくては巨人はただ暴れるだけの怪物になつてしまう！」

こうなつては私も巻き込まれるだけ！ここは早くぎやああああ!!」

「そう簡単に逃すわけないだろうが」

なんとか呪術師が逃げる前に倒す事は出来たのだが問題は巨人の方だった

先ほどの話を聞いていたスペリオルはもう倒す以外の選択肢はないと思つていたのだが

問題は巨人のHPバーが全く表示されていないのだ

(つて事は間違いなくギミックで倒すつて事だよな・・・どうやつて?)

「・・・勇者様・・・どうかこれを使って巨人を眠らせてあげて・・・」

すると先ほどの妖精が何かを祈りだすと光に包まれた弓矢が姿を現した

「これは光の弓矢・・・この世で唯一巨人を倒す事ができる武器なの・・・」

「……いいのか……?」

「うん……あの子を……楽にしてあげて……」

「……分かった……!」

スペリオルはその弓矢を受け取ると巨人に向かって引き絞り

「……安らかに眠れ……巨人よ……!」

そして頭部の水晶目掛けてその矢を放った

光の矢が水晶に当たると巨人はゆっくりと姿を消していき

最後には頭部に残っていたその水晶だけが残されていた

スペリオルはその水晶を手にとると妖精に渡そうとしたが拒否された

「それは貴方が持っていて……その方がこの子も喜ぶから……」

そう言って妖精は姿を消してしまいスペリオルの画面にはクエストクリアの文字が

書かれていた

『スキル・サイコゴーレム召喚を獲得しました』

『スキル・光の弓矢を獲得しました』

『スキル・サイコゴーレム召喚

能力：MP1000のサイコゴーレムを召喚する

(サイコゴーレムのMPは5秒で1減りダメージを受ける事でも減っていく

そして0になると消滅する)

取得条件：サイコゴーレムを光の弓矢で倒す』

『スキル：光の弓矢

能力：光の矢が当たった相手の動きとスキルを10分間封じる

取得条件：サイコゴーレムに攻撃しないで呪術師を先に倒す』

「……こりやまた……厄介なスキルを獲得しちゃったな……」

そう思いながらスペリオールはログアウトするのだった

一方、運営側では……

「ぴぎやああああああああああああ!!?!」

「どうした!? そんな潰された猫みたいな声を出して!?!」

「大変だ! 目覚めし巨人が真ルートでクリアされた!!」

「何い!?! あの鬼畜仕様の真ルートにいくのが

困難なああのクエストがか!?!」

「一体誰だ! 俺達の汗水流して

作り出した超高難易度クエストをクリアしたのは!?!」

「スペリオールだ!」

「「じゃあ仕方がない」」

「しかしこれでサイコゴレムと光の弓矢はあいつの手に渡ったか・・・」

「・・・もうすぐ第一回イベントもあるしその時の様子次第では

スペリオルのスキルに修正入れるか？」

「そうだな・・・それにもう一人もヤバいしな・・・」

そう言つて運営陣が見ていたのは毒竜を食べる一人の少女の姿だった

そしてこの瞬間に運営の誰しもが思っている事があつた

((((あの二人が組んだら絶対にマズイ・・・!)))

どうか組まないでほしいと願うのだが

それは儚い夢になる事を彼らはまだ知らなかつた

第一回イベント

NWOの世界で遊んでいてそれなりの時間が経ったが

ようやく一回目イベントがやってきた

みんなは中央広場に集まると

そこにはこのゲームのマスコットキャラクターである

ドラぞうが表示されて今から始まるイベントの説明をしてくれる

『ガオ〜！これより第一回イベントのバトルロイヤルを開催するドラ！』

今回の戦いはイベントフィールドで

ポイント制でプレイヤーを倒せばポイントが増えていくドラ！

1位から10位までに入った人には豪華な報酬がもらえるドラ！

みんな〜！がんばるドラ〜！』

ドラぞうがルールを説明し終わるとカウントダウンが始まり

0になると同時に全てのプレイヤーがイベントフィールドに跳ばされる

「……ここからスタートか……さてど？」

プレイヤーはどこにいるかな？」

スペリオルはどれくらいの人がいるだろうと思つて周りを見ると

どうやら思つた以上に囲まれているようでスペリオルは槍を構える

「いいぜ・・・!どつからでもかかつて来いや!!」

スペリオルはスキルを一切使わないで

自分に向かつてくるプレイヤーを倒していく

「やつぱり雑魚を倒してもあんまし嬉しくはないな・・・」

まあポイントはいっぱいもらえるからいいんだけどさ」

「余裕こいてる場合か!」

「我ら三兄弟の攻撃を受けても」

「その余裕が保てると思つていいのか!」

「はい水流突き」

「「ぎやああああ!」」

なんかよくわからない三人組を倒しスペリオルは

やはり面倒な戦いはするべきでは無いとスキルを使う事にした

「ここはあいつに任せるとするか・・・サイコゴレム召喚!」

『ウオオオオン!』

「なんだこの怪物はあああああ!!?」

召喚されたサイコゴーレムは凄まじい攻撃力でプレイヤーを次々と倒していく
その光景を見ていたプレイヤーはまさに地獄絵図だと話していた

しかし後にこれよりも酷い地獄絵図になる事を誰も知らない

「おいおい・・・あんなの相手にしてたら命がいくつあっても足りないぜ」

「何あれ〜！反則すぎるでしょ〜!？」

「あれがトッププレイヤーの実力か・・・!」

もはやトッププレイヤーですらスペリオルのスキルは明らかにおかしく

その実力は既に一線を超えておりもはや向かってくるプレイヤーすらいなくなつた
そしてサイコゴーレムが消える頃にはもう誰もその場には誰も残つてはいなかった

「・・・なんか向かってくるプレイヤーが減ってきたな・・・」

それじゃあ俺もそろそろ動き出す事にするか・・・ケンタウロス!!」

スペリオルはケンタウロスモードになると

プレイヤーを探して森の中を突っ走っていく

そして見かけたプレイヤーを片っ端から倒していくので

その様子はまさに死神だったと後のプレイヤーは語っていた

『ガオ〜！これから中間発表をするドラ〜！』

一位はペインさん二位はスペリオルさん三位はメイプルさんドラ〜！

「これからはこの三人を倒した人に所有するポイントの三割を差し上げるドラク
一発逆転の可能性もちゃんとあるからみんな頑張るドラク！」

「ほう？どうやら敵が増えたみたいだな・・・」

「てか三位のメイプルは名前を聞いた事が無いな？」

「もしかして初心者か？だとしたら三位はすごいな」

「スペリオルは素直に三位のメイプルに感心していたのだが

「どうやらそんな暇もなくプレイヤーが向かってきた

「さてと・・・それじゃあ俺もそろそろ本気を出すとするか・・・！」

「行くぞ！サイコゴレム召喚！」

『ウオオオオン！』

「また巨人が出たぞおおお！全員逃げろおおお!!」

「サイコゴレムが出てきた瞬間にみんなは急いで逃げ出した

「しかしそれを許さないかのようにサイコゴレムは踏み潰していく

「もはや戦いというよりかは完全に蹂躪というような感じだった

「・・・これはもう俺は戦う必要なんてないんじゃないか？」

「だったら俺と戦って暇を潰さないか？」

「あん？」

そう言われて後ろを振り返るとそこには崩剣のシンが立っていた

「あんたか……いいぜ！勝負しようじゃねえか！」

「ああ……！本気で行くぜ！崩剣！」

シンは自分の持つていた剣を分裂させてスペリオルに向かつて飛ばすがなんとそれをスキルも何も使わずに弾くか叩き落としていた

「おいおい……！前にも思ったけどこれに反応するのかよ……！」

「これくらいは日常でもやった事があるからな……慣れつてやつだ！」

「どんな慣れだよ……てかどんな生活してるんだよ……！」

「何……ちよつとした厨二病つて奴だよ……！」

そう……スペリオルは男の子によくあるヒーローに憧れていた時期がある

そしてそれを真似してひたすらに練習を続けて更には中学になって

厨二病を患った時にそれは激しさをましてとうとう

自分の憧れていたヒーローの動きをマスターしてしまったのだ

しかもそれだけではなくなんと心眼までも会得してしまい

まさに厨二病を本当に実現させてしまった怪物なのだ

そしてもちろんそんなスペリオルにシンが勝てるわけもなく

「……いつで……！終わりだ！」

「あく……これで二回目かく……やられた……」

シンは悔しそうな顔を浮かべながら消滅していった

『ガオ〜！ここでタイムアップのお時間が来たドラ〜！』

一位から三位までの順位変更はなかったドラ〜！

それじゃあみんなにインタビューしていきたいと思うドラ〜

まずは三位になったメイプルさんから』

『いついつばい倒せてよかったでしゅ』

((あつ喃んだ……))

『ガオ〜！可愛いコメントありがとうドラ〜！次は二位のスペリオルさん』

「そうですね……挑戦をお待ちしております」

((絶対！に断る!!))

こうしてNWO初めての第一回イベントは幕を閉じて

スペリオルも現実の世界に戻った

翌日、真斗はあくびをしながら学校に向かい小説を読んでいた
するとそこへゲームの話をしている楓と理沙が入ってきた

(……会話の内容からしてNWOの話みたいだな……)

えっ？第三位!? って事は本条さんがメイプル!?)

聞き耳を立てていた真斗はその会話を聞いて驚いていたが

同時に話を聞いてあの異常な強さにも納得がいった

(・・・本条さんて天然なんだな・・・ゲームでもそれが出るって・・・)

もはやバグやチートを通り越した何かだな・・・)

そんな風に呆れていると真斗が小説を読んでいると楓が話しかけて来た

「あつ! それって最近出た恋愛小説だよね!？」

「あつああ・・・よかつたら貸してあげようか？」

「えっ!? でも慎はまだそれを読み終わってないんじゃ・・・」

「いや俺はもう読み終わって今は読みなおしてただけだから問題はないよ

放課後までに読み終わってなければ自宅に持って帰ってもいいからさ」

「本当!? それじゃあ放課後までに読み終わるね!」

「へっ・・・流星は優等生の慎さんは余裕ですねっ・・・」

私は今回の実力テストがかなり不安だっけってのに・・・」

「いやまあ・・・満点を取る自信はないけど赤点を取る自信もないから」

「グフっ!」

実際に真斗は満点こそ取る事はないが必ず学年二十位以内に入るほど頭はいい

つまり多少はサボったりしたとしてもそこまで順位を落とす事は無いという事だ

「うゝ．．．楓もそうだけどなんでみんな頭がいいのよゝ．．．」

「俺の場合は完全にスイツチを切り替えているだけかな？」

「スイツチ？」

「ああ。どうしても家に帰ってしまうと勉強したく無いと思っちゃうから

宿題とか勉強関連の事は必ず学校に残ってやる事にしてるんだ

テスト勉強なんかもその方が覚え易いし先生に聞けるしね」

「そっか！だから慎くんっていつも学校に残ってるんだね！」

「まあ．．．逆を言えば家に帰った瞬間に

スイツチが完全に切れるって事なんだけど．．．」

「スイツチかく．．．私には絶対に無理だ．．．」

理沙の言葉に真斗は苦笑いするしかなく

その間に先生がやってきて三人の会話は終わるのだった

光の侍

第一回イベントが終わりスペリオルはレベル上げに専念した

そして今日もそれは同じなのだが一つだけ違った事があった

「いや〜♪やっぱりイベント二位の人に護衛を頼んだのは正解だったわ〜♪」

それは今回は一人で来ているのではなく

イズという生産職の人と一緒に来ていたのだ

どうしてこうなったかと言うと

スペリオルは特に当てもなく出かけようとしていたのだが

その道の途中で困っていたイズを発見したのだ

話を聞くとどうやら本来の護衛を頼んでいたプレイヤーが

風邪でログイン出来なくなってしまうよう

自分一人で材料を取りに行く事になったしまいそこへスペリオルが現れて

レベル上げのついでに彼女の護衛も引き受けたという事だった

「それにしてもよかったの？本当に報酬とか出さなくて？」

「俺のレベル上げのついでですからね・・・流石にそれで報酬は貰えませんが」

スペリオルとしては今の装備に満足しているので作ってもらうつもりはなく、更に言うのならゲーム内でもお金もダンジョンやクエストを沢山クリアしているので

残念ながら欲しいと思えるほど困っているわけでもなかった

つまり今のスペリオルに報酬と呼べるようなものは何もないのだ

「うくん……なんだか申し訳ない気持ちになっちゃうけど」

「……ここで無理強いるのもなんだし……ここは貸し一つって事にさせてもらおうかね?」

「別に貸しにしなくてもいいんですが……まあ何かあったら頼らせてもらいます」

「それにしても……流石は騎士様よね」とも紳士的で優しいのね!」

「そうですか?自分はそう言うのをあまり意識した事はないのですが……」

「うくん……どうせだったらその仮面の下の素顔も見たいかも……」

「それだけは勘弁してもらっていいですかね?」

別に身バレを心配する必要はないのだが別に自慢できるような顔でもないのだ

スペリオルとしてはやはり顔を見せたくないというのが本音だった

後は単純に素顔を見せない方がカッコいいといううちよつとした厨二心もあった

「まあ私も嫌われたくはないし流石にそこまではしないわよ

でも……お姉さんとしてはいつかは見せて欲しいかな?」

「・・・倫理コードに引つ掛かるかもしれないので

胸を当てないでもらつていいですか？」

「大丈夫よ？これくらいじゃ反応しないって知ってるから」

なんで知ってるのとスペリオルは思わず聴きたくなつてしまったが
とりあえずは黙つておく事にした

こうして特になんの問題も無く材料調達を終えてイズの店に帰つた

「イズさくん！ちよつと聞きたい事が〜！」

「あらメイプルちゃん？どうしたの？もしかして装備の新調？」

「はい！今度は真つ白の大楯を作つて欲しいと思つて！」

「それならこの洞窟がいいんじゃないか？白い魚の鱗が沢山取れるからな」

「なるほど！・・・つて誰ですか？」

「・・・最初から居たんだが・・・気づいてなかったのか・・・」

スペリオルは自分の同級生に少しだけ呆れながらとりあえず話を続ける事にした
「・・・まさかそこまで尖つた性能だったとは・・・」

それじゃあその友達が来るまで洞窟にはいかない方がいいんじゃないか？」

「えっ!?どうしてですか!？」

「いやさつきも言つたけど白い魚の鱗が必要になるんだけど」

メイプルさんだと多分集めるのに相当の時間が掛かるかと・・・

何せ釣りに必要なステータスはDEXなので・・・」

「はう!?!」

スペリオルの言葉を聞いてメイプルはしょんぼりとした表情を浮かべていた
「うう〜・・・最初から一緒に行くつもりだったけど・・・」

これで手伝ってもらう理由が出来ちゃったよ〜・・・」

「さつきも言ったがこればかりは仕方がないからな・・・」

まあ時間さえ掛ければ初心者でも集める事は出来るはずだから

そこは根気よくやるしかないかな・・・どうしてもつていうのなら

友達に潜ってとってもらおうといいよ

それじゃあ俺はこれで」

「あつあの!フレンド登録してもらっていいですか!?!」

「・・・いゝよ」

正直、バレたのではないかと不安に思ったスペリオルだったが

天然であるメイプルならばそれはないだろうと思いつレンド登録した

「それじゃあ今度こそ俺はここで・・・イズさんもまた何かあったら連絡してください」

「今日はありがとうね〜♪このお礼は必ずするから〜♪」

スペリオルが店から出るとメイプルはずっと抑えていた疑問をイズにぶつけた
「イズさんイズさん！あのスペリオルさんってどんな人なんですか!？」

すごいカッコいい鎧だったしまるで王子様みたいでした!!」

「おっ落ち着いてメイプルちゃん・・・私も詳しくは知らないけど

このゲームが始まってからやっているトッププレイヤーの一人で

その強さからNWOの騎士なんて呼ばれているのよ?」

「ほへへ・・・なんかすごい人とお友達になっちゃった・・・!」

「メイプルちゃんもこの前の大会で三位だったんだから当然の事だと思うわよ?」

「えへへへ♪」

褒められて嬉しくなったメイプルは早速、友達のサリーと合流する為に広場に向かった
た

その頃、スペリオルはもつとレベルを上げに行きたいと思いとある洞窟に向かった

そこはまるで社のような形をしており誰も見つけた事のない隠しダンジョンになっていた

「・・・とにかく進んでみるか・・・果たして何が出てくるか・・・」

スペリオルは少し笑みを浮かべながらゆっくりと洞窟を降りていく

途中でモンスターなども現れたが特に問題も無く倒していき

いよいよボス部屋であろう扉の前に辿り着いてゆつくりと開けていく
するとそこにはそれぞれ大砲に大斧に刀をもった三人のボスがいた

『よくぞ来た！ここは我ら殺駆三兄弟の迷宮である！』

そして我の名は殺駆三兄弟の長男！古殺駆』

『同じく次男！今殺駆！』

『同じく三男！新殺駆！』

『『さあ！いざ尋常に我らと勝負だ！』』』

「・・・なんとというか・・・凄まじく濃いメンツだな・・・」

スペリオルはその凄まじい熱力に圧倒されてしまうが

実際に戦ってみるとその強さが身に染みて理解できた

(なるほどな・・・流石に兄弟という設定なだけあって連携が上手い・・・)

長男が遠距離から攻撃してきて動きを止めさせ

その隙に三男が懐に入ってきて俺の動きを牽制し

最後にパワーのある次男の一撃で俺のHPを削ろうとしてくる・・・

こりゃあ下手したらそこらのパーティーを相手にしてるのと変わらないんじゃないか？)

戦いの中でスペリオルは三人の特徴を瞬時に把握できたのだが

分かったからこそ自分がどうやって勝てばいいのか分かってしまった

「・・・なんか申し訳ないけど終わらせちゃうか・・・」

オーノホ・ティムサコ・タラーキイ!!」

スペリオルは三種の神器を身に纏うと

まず最初に遠距離から攻撃してくる古殺駆を切った

『ゴオ!?むっ 無念・・・!!』

『『兄者!!』』

「まずは一人・・・次は・・・お前だ!」

そう言つて次にスペリオルが切ったのは

早い動きとすごい剣技が特徴の新殺駆だった

『グッ!?まさか僕がこんなところで・・・!!』

『新殺駆!おのれ!よくも兄者と新殺駆を!もう許してはおかん!!』

どうやら最後の一人になった事でステータスが上がったようだが

今のスペリオルには勝つ事など出来るわけもなかった

「お前の攻撃力は俺の動きが止まって初めて効果を発揮するからな・・・」

その動きを止める二人が居なくなつてしまえばお前の攻撃を警戒する必要はない」

『ガッ!?そんな・・・我ら三兄弟が負けるなど・・・!!』

こうして最後の今殺駆も倒しスペリオルは初めてのダンジョンを一人で攻略した

そしてその報酬として三兄弟のいた場所に宝箱がありスペリオルは中身を確認する

ユニーク装備・武者シリーズ

烈火刀

STR+50

〔破壊不可〕〔烈火一閃〕

閃光の薙刀

STR+40 AGI+10

〔破壊不可〕〔閃光の舞〕

新タネガシマ

STR+90 リロード時間10分

〔破壊不可〕

武者の兜

VIT+40 DEX+10

〔破壊不可〕〔烈火の魂〕

武者の鎧

VIT+50

「破壊不可」「マウント装備」「烈火の旗」

「へえ〜……この鎧の侍版って感じか……!」

スペリオルはその装備を身につけると

今度は歴史に出てくる戦国武将のような姿になっていた

「う〜ん……これもいいけど……」

騎士シリーズもいいよな〜……」

どっちを装備していいのだろうと思っていると

『スキル・換装を取得しました』

「ん?なんか新しいスキルを獲得したな?」

スペリオルは何故か獲得した新しいスキルを確認する

『スキル：換装

能力：予め登録しておいた装備と今着ている装備を入れ替える

取得条件：騎士シリーズと武者シリーズの装備を手に入れる』

「おお!これなら毎回装備を切り替えなくて済むな!」

新しいスキルによって悩みが解決した

スペリオルは嬉しそうな顔をしながらログアウトした

一方その頃、運営側では……

「ああ……またスペリオルに隠しダンジョンをクリアされた……」

「そりゃああの鬼畜魔王を倒した怪物だぞ？クリアされるだろ？」

「それだけじゃねえぞ！なんかこつちも一人でダンジョン攻略して

ユニーク装備を手に入れた初心者がいるんだけど!!」

「嘘だろ!?そんなのはメイプルだけで十分だつての!!」

そう言いながら運営側がモニターをつけると

そこには嬉しそうにユニーク装備を見せるサリーと

それを褒めちぎるメイプルの姿が確認された

「まさかのメイプルの知り合いかよ……」

「……もしかして……」

とんでもない奴にユニーク装備が渡ったんじゃないか？」

「……第二回イベントの後に予定しているギルド

……もつと先送りにするか？」

「いや……問題を先送りにするだけだ……もう覚悟を決めよう……」

「「はあ……」」

しかし彼らはこの時にやはりギルドの実装を先送りにすれば良かったと

後で後悔する事になったのだった

武化舞可

翌日になるとスペリオルは新しい装備を試す為にダンジョンにやってきていた
「烈火一閃!」

その声と共に炎の斬撃が放たれ周囲のモンスターが倒れていく
「なるほど・・・烈火一閃は火炎斬りと同じ感じなのか・・・」

つつても威力はこっちの方が上みたいけど・・・」

そう言いながらスペリオルは刀を納めて次は背中の薙刀を使う
「はあああああ!!」

スペリオルは華麗に薙刀を振り回していくと簡単にモンスターが倒れていく
しかもそれだけではなく周りにある木までも真つ二つにしてしまっていた

「・・・流星にこれは振り回すの危険だな・・・」

あまりの威力に自分でやったにも関わらずスペリオルはドン引きしていた
「最後はこれなんだけど・・・これが一番試したくないな・・・」

そう言つて最後にスペリオルが取り出したのは新タネガシマだった

先ほどの二つの武器よりもこの新タネガシマは攻撃力が高いのだ

しかし試さない事にはその威力も分からないので実際に打つてみたのだが
「おわっ!？」

放つた瞬間にその衝撃にスペリオルは驚き砂煙が晴れていくと

そこには木々を薙ぎ倒した後だけが残っていた

「……これは滅多な事がない限りは使わないようにしよう……」

そう思っているとスペリオルの画面にリキヤストタイムが表示された

「なるほど……この新タネガシマは一発打つのに時間が掛かるのか」

なんとなく理解できたスペリオルは

とりあえず被害の状況を見るために奥まで進んでいくと

「……これはさつき俺が開けた穴じゃないよな？」

先ほどの弾が当たったであろう穴とは別にどこか繋がる大穴が広がっていた

「……こういう時に好奇心が勝つちやうのが俺の悪いところなんだろうな……」

本来ならばこういう時はクエストかボスが待ち構えているはずなので

しつかりと準備してからいくものなのだが

スペリオルは好奇心が勝ってしまったそのままその穴の中に入ってしまった

するとその穴の奥には祠のようなものが存在していた

そしてそれを見つけた瞬間にスペリオルの画面にはとあるものが表示されていた

『クエスト：闇皇帝を受けますか？』

「・・・明らかにボス戦じゃない・・・しかもめっちゃ強そうなの・・・」

もはや名前の時点で明らかかな強敵だという事はスペリオルも理解しており

かといつてここで引き下がるわけにもいかなかったのはいのボタンを押した

すると祠から明らかに黒い何かが噴き出してくるとスペリオルは別の空間に飛ばさ

れた

『我が名は闇皇帝・・・！よくぞここまでやってきたと言えよう・・・！』

しかし貴様の武勇もここまで・・・我自らが引導を渡してくれよう・・・！』

そうやって闇皇帝はスペリオルに突っ込んできて黒星剣を振り下ろしてくる

「あぶねっ!？」

『この一撃を受け止めるか・・・！だがこれはどうだ!？』

そうやって今度は黒星砲を撃ち込んできてスペリオルのHPが減らされてしまう

「いっつく・・・剣だけじゃなくて大砲まであるのかよ・・・」

しかも至近距離で打つてくるとか・・・こりゃあ受けるだけじゃダメだな・・・

改めてスペリオルは闇皇帝の行動を再認識して再び刃を構える

「烈火一閃!」

『ぐう!?!思った以上にやりおる・・・だがこの程度では我が前には無力だ!』

スペリオルが一撃を当てると闇皇帝は黒星砲を乱射してくる

しかし先ほどの攻撃で弾道を見切ったスペリオルはそれを躲しながら近づいていく
『愚かな！近づけるだけで我に勝てるかと本気で思っているのか!!』

闇皇帝はまるで待ち構えていたかのように黒星剣を振り下ろしたのだが
それは既にスペリオルも見切っておりその剣を受け止める事は出来た

『やはり貴様は愚かだ・・・これは先ほども同じ結果になったはずだ!』

再び黒星砲の直撃を受けたスペリオルは大きくHPを減らしてしまいが

これこそが彼にとって本当の狙いだという事に闇皇帝は気付いていなかった
「ありがとうよ・・・俺のHPを三割まで削ってくれて!!」

『ゴオオオオオオ!!??』

スペリオルは新タネガシマに武装を切り替えると

お返しとばかりに至近距離で砲撃した

それを受けた闇皇帝は大きくHPを減らし壁に激突する

「あつぶねく・・・烈火の魂があつてよかつたぜ・・・」

どうしてここまでスペリオルの攻撃力が上がったのか

それは武者の兜についているスキルのおかげだった

烈火の魂はHPが三割以下になるとSTRを二倍にしてくれるのだ

それを使ってどうにか逆転出来たとスペリオルは思っていたのだが

『・・・どうやら我はお前の事を甘くみていたようだな・・・!』

「マジかよ!?今ので削りきれてないってどんだけHPあるんだよ!!」

確かにスペリオルの言う通り今の一撃ならば

ボスマンスターであつても削り切れるはずだろう

・・・しかし目の前にいるボスマンスターは他とか違ったのだ

『よかろう・・・貴様に見せてやろう・・・我が本当の姿を・・・!』

そう告げると闇皇帝の体は完全なる怪物の姿へと変わっていきHPも回復していた
『まさかこの姿を晒す羽目になるとは』

しかしこの姿になった以上は貴様に勝ち目などない・・・!』

「マジかよ・・・!ここで二回戦は聞いてないっての・・・!」

思わず運営を恨みそうになるスペリオルだったが

そんな事を考える暇もなく闇皇帝は襲い掛かってきた

(早い!?さつきとは比べ物にならないスピードとパワー)

・・・あれを受けたら今の俺じゃ耐えられない・・・!)

先ほどの戦いで既にHPを三割にまで減らされてしまったスペリオルでは

闇皇帝の一撃に耐えられるかどうかすら不安なところだろう

そんな時に闇皇帝の後ろに錆びた大きな刀があるのが目に入った
(もしかして・・・あれが闇皇帝を倒す為の武器か！)

スペリオルは闇皇帝の攻撃を躲しながらその刀に近づいて掴むが
「ぐっ!?錆びついていて全然抜けない・・・!?」

なんとその刀は完全に錆びており鞘から抜ける感じがしなかったのだ
『貴様!?!よもやその存在に気がついたと言うのか!?

だが所詮は既に主を失った鈍・・・それと一緒に死ぬがいい!!』

「誰が死ぬか！俺はお前に勝つ為に絶対にこいつを抜いてやる！」
『よく言った！お前はなかなか熱いやつだぜ!』

「えっ?」

スペリオルが刀から声が聞こえてきて驚いていると

持つている刀から突如として炎が吹き出し錆が一気に落ちていく
「これが本来のこいつの姿なのか・・・!」

『おう！俺の名前は武化舞可の號刀！よろしく頼むぜ!』

「・・・まさかの鞘が喋ってるのかよ!？」

『そんな事はどうでもいいだろうが！さっさと俺を抜きやがれ!』

「おっおう・・・なんか命令されて抜くのもなんだけど・・・」

そう言いながらもスペリオルは號刀を抜くと炎が刀身に纏われており

それはまるで號刀が炎を呼んでいるようにもみえた

「すげえ……！これならあいつと戦える……！」

『……まさか武化舞可の號刀が復活するとは……！』

我を封印した忌々しい武具が……！今度こそ破壊してくれる!!』

そう言つて闇皇帝が突っ込んでくると頭に仕込まれていた刀で

スペリオルを突き刺そうとするが

「今更そんなもんが通用するかよ!!」

『ガア!?!』

スペリオルはその刀を躲して真つ二つに切り裂いた

「こいつで終わりだ！爆鳳覇!!」

『グアアアアア!!またしても貴様に邪魔をされるのか……！』

覚えていろ！光の武者よ……！ガアアアアア!!』

闇皇帝は炎の中で灰となって消滅し

スペリオルの画面にはクエストラの文字が書かれていた

「はぁ……出来る事ならもう二度と戦いたくないけどな……」

そんな事を思っていると先ほどの祠に戻されており

更には五つの光がスペリオルの中へと入っていった

『スキル：武化舞可の號刀、武化舞可の覇兜、武化舞可の天翼

武化舞可の大砲、武化舞可の鎧甲、武化舞可の俊脚を取得しました』

「・・・なんか色々と手に入ったけど確認するのは明日にしよ・・・」

流星に疲れ切っていたスペリオルはそのままログアウトのボタンを押すのだった

一方その頃、運営側では

「ヒッ!?!」

「どうした?なんか変な声が聞こえたけど?」

「・・・(チーン)」

「しっ死んでる!?!」

「いっ一体何があったんだ!?!」

そう思つて運営全員がその者が見ていた画面を見ると

そこには自分達を作り出した最強のモンスターである闇皇帝が

スペリオルによつて灰にされる瞬間が映っていた

「「「・・・(チーン)」」」

それから彼らが意識を取り戻すまでに1時間は掛かってしまったらしい

第二回イベント

スペリオルが新しいスキルを獲得して数日が経った後

NWOでは第二回イベントが今、始まろうとしていた

『ガオ〜！これよりNWO第二回イベントを開催するドラ〜！』

ルールは簡単で特別なイベントフィールドが期間限定で開かれて

そこにあるメダルを獲得するだけドラ〜！

メダルは十枚で好きなスキルか装備と交換する事が出来るドラ〜！

そしてここからが特別ルール！

第一回イベントの上位十名は既に金のメダルを獲得しているドラ〜！

それは一枚で十枚分のメダルとして換算されるけど・・・

メダルを持ったまま倒されるとドロップしてしまうドラ〜！

これは金のメダルを持ってない人でも同じだから気をつけてね？

ダンジョンでメダルを集めるもよし

フィールドを回って地道にメダルを見つかるもよし

プレイヤーを倒してメダルを奪うもよしドラ〜！』

その言葉を聞いてみんなは一斉に上位に入賞した人物を見るのだが

「(上位三人からメダルを取るとかどんな無理ゲー?)」

彼らは分かっていた・・・金のメダルをとる事がどれだけ難しいのかを・・・

『それじゃあカウントダウンを始めるよ〜!』

5・・・4・・・3・・・2・・・1!行つてらっしやいドラ〜!』

ドラぞうのカウントダウンが終わると

同時にプレイヤーは全員、イベントフィールドに飛ばされていた

「・・・ここが俺が始まる場所か・・・周りにプレイヤーはいないみたいだな」

そう思いながらスペリオルはとりあえず先に進んでいくと

何やら大きな砂漠地帯に出てきた

「・・・何というか・・・随分と広い場所に出たな・・・」

一応は警戒しながら先に進んでいくと

スペリオルはボスに繋がる転移陣を発見した

「・・・始まって早速ボスとか・・・俺の運つて一体どうなっているんだ?」

思わずぼやいてしまうが

特に行かない理由もなかったのでスペリオルは転移陣の中に入る

するとやはりボス部屋に繋がっていたよう

スペリオルの前には巨大な狸のモンスターがいた

「・・・闇皇帝と戦った後からかな・・・なんか可愛く見える・・・」

これまで本当に怪物という感じのボスとしか戦っていなかったスペリオルは

目の前にいる巨大な狸がボスとはとても思えないという顔をしていた

しかしそんな事を考えている間に狸は攻撃を仕掛けてきた

懐にある袋から葉っぱを取り出してそれを上空に投げると

それが急に鉄球へと姿を変えてスペリオルに降り注いでいく

「生憎だがそんな攻撃は通用しないぜ？武化舞可の鎧甲！」

『スキル：武化舞可の鎧甲

能力：VIT+500の武化舞可の鎧甲が装備できる

他の武化舞可とは重複しない

取得条件：闇皇帝を倒す』

スペリオルは武化舞可の鎧甲を装備すると

その鉄球をノーダメージで受け切ってしまう

「そんな簡単にやられるわけないだろ？武化舞可の俊脚！」

『スキル：武化舞可の俊脚

能力：AGI+500の武化舞可の俊脚が装備できる

他の武化舞可とは重複しない

取得条件：闇皇帝を倒す』

スペリオルは武化舞可の鎧甲を外すと今度は足に武化舞可の俊脚を装備する
そしてその圧倒的なスピードで狸の懐に入り込んだ

「至近距離でこいつを受け切れるか!?武化舞可の大砲!」

『スキル：武化舞可の大砲

能力：INT+500の武化舞可の大砲が装備できる

他の武化舞可とは重複しない

取得条件：闇皇帝を倒す』

最後は武化舞可の俊脚を外して武化舞可の大砲を背中に装備し

至近距離から放つとその圧倒的な威力に狸のHPは耐えきれずそのまま消滅した
「ふう・・・やっぱりあいつらが強すぎたな・・・」

なんとというか・・・狸には悪いけど手応えがなかったわ・・・」

少しだけ申し訳ない気持ちになりながらスペリオルは宝箱を開けにい

中にはメダルが二枚とスキルの巻物が入れられていた

「スキルの巻物か・・・一体どんなスキルなんだ?」

スペリオルはそのスキルの中身を確認したのだが

同時に自分に使えない物だと判断した

「これは確実に生産職向けのスキルだな．．．

これが終わった後でイズさんに渡すか．．．」

そう考えながらスペリオルは巻物をインベントリにしまつて洞窟を後にする

「さてと．．．歩いて探すのもアホらしいしこれを使うか．．．武化舞可の天翼！」

『スキル：武化舞可の天翼

能力：武化舞可の天翼が装備でき空を飛ぶ事が出来る

他の武化舞可とは重複しない

取得条件：闇皇帝を倒す』

スペリオルは武化舞可の天翼を装備して

空を飛びながら周りを探してみる事にした

すると明らかに不自然な看板の立っている巨大な湖を発見してしまった

「うわ．．．明らかにやつじゃん．．．

とりあえずは降りて看板を見てみるか．．．」

地上に降りたスペリオルはその看板に書かれている事を読んだのだが

どうやらこの湖にはとある姫の簪が沈んでいるという事が書かれていた

「ここにきてまさかの釣りかよ．．．こういう時はもちろん、武化舞可の覇兜！」

『スキル：武化舞可の覇兜

能力：DEX+500の武化舞可の覇兜が装備できる

他の武化舞可とは重複しない

取得条件：闇皇帝を倒す』

武化舞可の天翼を外し

今度は武化舞可の覇兜を装備したスペリオルは

そのまま竿を取り出して釣りを始める

「・・・なんとというか・・・すごく地味な気がする・・・」

確かにこのイベントが始まってまだ数時間しか経っていないのだが

明らかに今のスペリオルの姿は一番地味だと言っても過言ではなかった

そんな事を考えているとどうやら当たりが来たように竿を退いてみると

明らかに湖にはいないであろう巨大な魚が釣り上げられてしまった

しかもその巨大な魚は大きく口を開いてスペリオルを飲み込もうとしていた

「ふざけんなああああ!!武化舞可の號刀!!」

間一髪で反応したスペリオルは

武化舞可の號刀を呼び出して魚を真つ二つにすると

その体の中からおそらく看板に書いていたであろう簪が出てきた

「これが例の簪か……どんな効果があるんだ？」

銀の簪

DEX+10

バッドステータスを25%の確率で防ぐ

「……これ……俺にとつては別に嬉しくない装備だな……」

生憎とスペリオルは別にバッドステータスをそこまで受ける事はないので
残念ながらというべきなのかこの簪はとつても意味がないものだった

「どうしたもんか……イズさんにあげても喜ばないだろうし……」

「ちつちよつとすまない！」

「ん？」

スペリオルは声をかけられて後ろを振り返ると

そこには和装に黒髪の手を携えた美女がいた

「えつと……どちら様ですか？」

「私の名はカスミ……それよりもその簪……」

このメダルと交換してもらえないだろうか……！

そう言つてカスミは自分の持っているメダルを二枚見せてくれるのだが

正直な話、スペリオルはメダルも装備もどちらも要らなかつたので

「いやメダルは要らないですし欲しいのなら簪も差し上げますよ」

「なっ?! 流石にタダではもらえない! それでは君の努力が無駄になってしまっ!」

「いや別にそこまで努力してないんですけど・・・それに本当にいいんですよ」

メダルは自分で探したりしてちゃんと獲得したんで・・・

どうしてもタダが嫌だというのなら

今度、俺が困っていた時に助けてもらおうという事で」

「・・・分かった・・・そこまで言うのならば・・・」

これは貸し一つとしてありがたく受け取らせてもらおう」

カスミは不服そうな顔をしていたがスペリオルの提案にとりあえずは納得し

銀の簪を受け取ってスペリオルとフレンド登録しその場を後にした

「さてと・・・それじゃ俺もメダルを探しにいくとしますか・・・」

重戦車メイプル

第二回イベントが始まりメイプル達が

銀翼というモンスターを倒してしばらくステージを回っていた時だった

「あつ！サリー！あそこにお馬さんがいるよ！しかも二頭！」

「本当だ・・・HPバーが表示されないからモンスターではないかな？」

サリーはもしかしたらモンスターではないかと警戒していたが

HPバーが表示されずぐにモンスターではない事を悟る

しかしそれよりも早くメイプルは既にその二頭の馬に近づいていた

「ほらほらおいで♪お馬さんの大好きな人参もあるよ♪」

「どこでそんなの拾ったのよ・・・」

てかあんまり不用意に近づかない方がいいんじゃないか・・・」

いくらモンスターでないとと言っても危険ではないと言う保証はなく

だが防御力に極振りしているメイプルならば

そんな滅多な事はないだろうと思ってる

いつの間にか馬に懐かれておりしかもその背中に乗せてもらっていた

「・・・本当にメイプルは想像の斜め上をいくんだよな・・・」

「ん？どうしたのサリー？お馬さんに乗せてもらうの楽しいよ！」

「そう・・・それは何よりだけど・・・結局その馬は何なのかしら？」

普通の馬がこんなフィールドのど真ん中にあるなどあり得ないと考えたサリーはもしかしてこの馬はクエストか何かに関わっているのではないかと思っていると

まるでその考えに気がついたようにメイプルを乗せた馬が凄まじい勢いで走り去っていく

「ふえええええ!?急にどうしたのおおおお!?」

「メイプル!?急いで追いかけないとって・・・えっ？」

サリーは急いでその後を追いかけてようとしたのだが

自分ももう一頭の馬に捕まってしまふ

そしてその背に乗せられてメイプルと同じ方向に連れて行かれる

「はあ・・・はあ・・・急にお馬さんどうしたんだろう・・・？」

「・・・もしかしたら理由はこれなんじゃないかしら？」

そう言つてサリーの見つめる視線の先には巨大な中世の戦車があった

「ほへ・・・もしかしてこのお馬さん達はこれをどうにかしてほしいのかな？」

「間違い無いんじゃない？なんか全然動いてないでこつちを見てるし」

二人はまずどうしてこの戦車が止まってしまったのかその原因を調べる

「あつ！サリー！もしかして原因はこれじゃないかな〜！」

「どれどれ？あ〜．．．車輪に木が挟まっちゃったのか〜．．．」

車輪にはおそらく折れていたのであらう木が挟まっており

これによつて戦車は動かなくなつてしまつたのだと思つていた

「これぐらいならすぐに終わりそうだし抜いてあげようか！」

「うん！」

そう言つて二人が木を抜こうとした時に後ろで木々が倒れる音が聞こえた

嫌な予感がして振り返るとそこには一つ目の巨人がたくさんこちらに向かつてきて

いた

「嘘でしょ!?!メイプルは急いでその木を抜いて！」

私はここでこいつらの足止めをしておくから！」

「分かつた！なるべき急ぐから頑張つてね！」

サリーは武器を構えて向かつてくる巨人達の相手をし始め

その間にメイプルは木を抜こうとするが枝が引つかかつており中々抜けなかつた

（ぐっ!?!思つた以上に数が多い．．．!?!このままじゃまずいかも!!!）

「爆凰覇！」

「っ!？」

サリーはあまりにも数が多くて苦戦していたが

突如として放たれてきた炎の斬撃によって半数の巨人が消滅してしまった

「今のは一体!？」

「あっ! 抜けた! 抜けたよサリー!」

そんな事をしているとどうやらメイプルが木を引き抜けたようで

戦車が動くようになった瞬間に二頭の馬が光に包まれる

「ふえ!？」

そして気がついた時には二頭の馬と戦車は合体しており

それにメイプルが乗り込んでいた

『スキル・オーキス召喚を取得しました』

「オーキス? もしかしてこの戦車の名前なのかな?」

今はそんな事を考えてる場合じゃないか! サリー! 早く乗って!」

メイプルはサリーをオーキスの上に乗せると

そのまま巨人の群れに向かって突っ込んでいく

しかしオーキスの攻撃力は凄まじく速度を落とす事なく突き進んでいく

「うわあゝ．．．モンスターを轢いて倒すとか．．．」

「おおくー！これ凄い！これならフィールドも安心して進めるねー！」

「うっうん・・・そうだね・・・」

メイプルの進んだ後には草木はおろかモンスターすら倒れており

サリーはまたとんでもないスキルを手に入れてしまったと思うのだった

「・・・相変わらずだな・・・メイプルは・・・」

そしてその上空ではひっそりと二人を助けていたスペリオルがいた

本当ならばあまりこんな事をしてはいけないのだが見つけてしまった以上は

助けなくてははいけないと思ってしまい体が勝手に動いていた

「・・・それにしても・・・多分、運営の人は今頃、大慌てだろうな・・・」

一方その頃、運営側では

「・・・マジかよ・・・ただでさえ銀翼で卵を取られたのに

更にオーキスまで取られるとか・・・」

「完全にゲームバランスが崩れるよな・・・」

「そうなのか？あれはフィールド限定でしか使えないから問題は特になんじや」

「ああ・・・だがオーキスの装甲は使用者のVITに比例するから

フィールドの上ではダイヤモンドの砲弾となつてしまった・・・」

「・・・流星にオブジェクトが壊れるとかないですよね？」

「・・・今すぐに見直しをしろおおおお!!」

正体バレました

メイプル達が無事に森から離れたのを見送った

スペリオルはこれまでと同じくメダルを集めていた
思った以上に大量に見つかったお陰で

既に彼は二十枚以上のメダルを獲得していたのだが

「……流石にこれ以上は集められそうにないし……」

かと言って奪うのも面倒だな……どうしたもんか……」

そう……問題は二十枚を獲得した時点で

既にメダルを獲得しても意味はなく

今のスペリオルの手持ちのメダルが余ってしまったているのだ
しかし余っているとは言っても誰かに渡す予定もなく

どうしようかと悩んでいたまさにその時だった

「ん？なんか声が聞こえたな……ってあぶな!？」

「ちっ！仕留め損ねちゃったか……!」

スペリオルは咄嗟に盾で攻撃を受け止める事が出来たのだが

目の前にいたのはメイプルと一緒にいた例の少女だった

(この子は確かメイプルと一緒にいた……)

という事はおそらく白峯さんか……しかしどうしたものか……)

(この人……滅茶苦茶強い……!)

恐らくは第一回イベントの上位者……!)

スペリオルは剣を構えようとはせずただ様子を見ているだけだった

それを見てサリーも迂闊に手を出す事が出来ず

どうしようか考えていた時だった

「……はあ……やめだ……ほれ」

「えっ!？」

スペリオルは戦う事を止めて自分の余っていたメダルを渡した

サリーはどうしてこんな事をするのか疑問に思っていたが

「お前と戦うのは俺にとつても不利益だと感じたからな

それにメダルも余っていたし……戦って奪うよりも楽ではないのか？」

「……そうね……それじゃありがたいかも知らつておくわ……

それと……名前を聞いてもいいかしら？」

「スペリオルだ……そちらの名前は？」

「サリー……もしかしてスペリオルって

第一回イベントの上位者だったりするの？」

「ああ……第二位だ」

「どおりであの強さにも納得だわ……それで？この後はどうするの？」

恐らくはこの後は自分を狙ってくるであろう人物を

やり過ぎさなくてはいけないのだが問題はその場所

四六時中戦うわけにはいかないのどこかでやり過ぎす必要がある

「もしよかつたら私達と一緒に来ない？」

上位プレイヤーがいてくれたほうが何かと安心だし」

「願ってもない事だが……いいのか？」

「もちろん！こっちとしてもそっちの方がありがたいしね！」

「ではそうさせてもらうとしよう……そちらはどうするんだ？」

「っ!？」

スペリオルは暗闇の中に話しかけるとそこからカスミが姿を現した

「まさかゲームの世界で気配を察知されるとは……」

「カスミ！カスミももしかして襲ってくるプレイヤーから逃げてるの？」

「まあな。その時にお前達が戦っている音が聞こえて見に来たんだが……」

「そういえばこの前はこの簪をもらってしまっただけで申し訳なかったな」

「前にも言ったが俺は別に要らなかつたからな・・・」

「使ってくれる人間に渡した方が装備も喜ぶというものだ」

「えっ!?!もしかして二人も知り合いなの!?!」

「こうしてスペリオルはサリーとカスミと合流して

イベント終了までやり過ぎす事にした

「お帰り!あれ?カスミに・・・スペリオルさん?」

「あれ?もしかして知り合いだったの?メダルを分けてもらった縁で招待したの」

「そういうわけでよろしく頼む・・・」

「そういえばメイプル・・・そのモンスターはなんなのだ?」

「これはね!タイムモンスターって言って卵から孵つたんだよ!」

それからスペリオルは色々と情報交換をしている中でメイプルが気になった

「そういえばスペリオルさんって

フルフェイスの兜で顔を隠しているのって何か理由があるんですか?」

「別に理由はないけど・・・今の装備が気に入っているからね

もう一つあるんだけどそつちも何故か同じようなフルフェイスなんだよ」

「へえ!見せてもらってもいいですか?」

「いいよ。換装ー!」

スペリオルはスキルを使って騎士装備から武者装備に変更すると
今度はメイプルだけではなくカスミも興奮していた

「この前は詳しく見る事は出来なかったがかなりの上物!」

おまけに刀や薙刀も相当の物と見た!それに種子島まで!」

「かつこいい!まるで本物の侍みたいだよ!」

「あゝ・・・嬉しいんだけど二人とも落ち着いてくれないか?」

ようやく離れてくれてた二人に対してスペリオルは装備の説明をする

「こいつもユニーク装備で武者シリーズって呼ばれていてな

まあ名前の通り侍のような見た目の装備ってわけだ」

「それは分かったけどもしかしてさっきのスキルで装備を変えられるの?」

「ああ・・・と言ってもこのスキルは俺専用の物らしいけどな」

「そうなんだ・・・それじゃ取得するのは無理なのか?・・・」

そんな話をしているとイベント終了のアナウンスが響いて

スペリオル達は元のフィールドに戻って報酬を選んでいく

(さてどうしたものか・・・スキルを二つ取るとしても

残った枠一つをどうしたものか・・・ん?)

スペリオルが報酬を選んでいるとその中に奇妙な物が混ぜられていた（錆びた剣？まるでドラクエみたいな装備だな・・・）

ってステータス低いな・・・でもどうしてだろう・・・

俺はこいつに・・・心を惹かれている・・・）

どうせ悩んでいても仕方ないのでスペリオルはその剣を選んだ

そして他のみんなを見ていると何やらメイプルが

シロップを巨大化させてその背中に乗り空を飛んでいた

「・・・なんとというか・・・相変わらずだな・・・」

「本当よね・・・どこまでも斜め上を行くわ・・・あの子・・・」

「だな・・・それにしても明日から普通に学校があるから正直キツイな」

「あれそつちもなの？こつちも明日から・・・」

「そういうえばメイプルは大丈夫かな？」

あの子ってこうした長時間のゲーム初めてだから

明日は失敗しそう・・・」

「だらうな・・・おまけに天然だし」

「そうよね・・・あれ？どうしてアンタがメイプルのリアルを知っているの？」

「あっ・・・」

「ス〜ペ〜リ〜オ〜ル〜?」

「はぁ・・・とりあえず明日、正体を話すからそれで勘弁してくれ」

その後色々ありながらもスペリオルはログアウトし翌朝になって

学校に登校する途中で既に楓が失敗していた

「おはよう。メイプルさんサリーさん」

「えっ!?! どうして私達のゲーム名を!?!」

「・・・アンタがスペリオルだったのね・・・」

どうりで私達の事を知ってると思っただわ・・・」

「黙っていて悪かったな・・・」

あまりリアルをバラしたくはなかったし

二人は学校でも人気者だからな・・・」

「えっ? 私達ってそんなに人気なの?」

「知らなかったのか?」

クラスの付き合いたい女子のランキングで上位にいるんだぞ?」

「えっ!?! そんなランキングあったの!?! ほへえ〜知らなかった」

「いやツツコむところそこじゃないでしょ!?!」

こうしてスペリオルこと真斗は二人にリアルをバラし

これからは現実世界でも一緒に過ごそうになったのだった

龍帝劍

どうやらあれから楓はゲーム関係での失敗をかなり繰り返したようでお昼に真斗と合流する頃には既に顔を真っ赤にするほどだった

「ただけ失敗したんだよ本条さん……」

まあ可愛い失敗として認識されてるから良いけど

下手したら変な人って思われるかもしれないんだからね？」

「ううう……反省してます……」

「こりやあしばらくの間、ログインしない方がいいかもね」

「うへ……そういえば慎くんとか

理沙はそう言った失敗はしないんだね？」

「慣れてるから」

「うう……今だけは二人が羨ましいよ」

楓はどうして自分はあるな失敗をしてしまうのだと

落ち込んでいたが実際のところは二人もそれなりの失敗はしている

「前にも話したけど俺は学校と家を使い分けているだけだ

だから普通に家に帰ったらいつも通りに行動するぞ?」

「私はもう諦めてゲームの事以外は考えない!」

「……先に聞いとくけど次にあるテストは大丈夫なのか?」

「……聞かないで……」

真斗は呆れながらもとりあえずは一緒に食事をしているのだが

そんな中で楓がそういうえぼという事に気がついた

「そういうえぼ慎くんとは友達なんだし

苗字で呼んでるのはおかしいよね?

今度からは真斗くんって呼んでもいいかな!」

「遠慮していいかな? 男子からの視線が怖い……」

「ああ……この子はそういうった事に無自覚だからね……」

「??」

楓は分かっている様だが実際に二人はモテる部類なので

ただでさえ食事を一緒にしているだけでも恨みの対象なのに

これで名前前で呼ばれようものならば異端審問に掛けられかねない

「とにかく俺としては今のままでお願いしたい……」

俺としてもしばらくは本条さんと白峯さんでいくから」

「まあ私もそれでいいけどね．．．．．．そういえば今日もログインするの？」
「新しいイベントが迫ってきているからスキルとか装備を獲得しないとね」
「あんたもつくづくゲーマーよね．．．．．．」

「こうして真斗は学校を終えて家に帰るとNWOにログインする
「さてと．．．．．．今日はどこに向かうとするかね．．．．．．」

「あつ！スペリオル〜！こつちこつち〜！」

スペリオルは早速、冒険を進めようとするするとサリーが現れた

「どうしたんだ？今日はメイプルと．．．．．」

「ってあの失敗をした後じゃ無理か．．．．．」

「あの後も二回くらい失敗したからね．．．．．」

しばらくの間はログインしないって言ってたんだけど．．．．

スペリオルはギルド機能が実装されるって聞いた事ある？」

「確か特定のモンスターを倒さないとギルドハウスが貰えないんだったよな？」

「おまけに資金も必要って書いてあったし．．．．．．もしかして？」

「そう！メイプルが戻ってくるまでに私達で集めておくのよ！」

私は光虫を担当するからスペリオルには資金をお願いしたいんだけど」

「そういう事ならば非とも協力させてもらおうさ．．．．．」

丁度行く場所もあったしな」

「そうなの？まあとりあえずはよろしくね！」

そう言つてサリーはそのまま光虫を探しに向かい

スペリオルとはある場所に向かつた

その場所とはなんでも有名な盗賊がのさばっている様で

スペリオルはその討伐を任されたクエストを受けたのだが

問題はそのタイミングだった

「この錆びた剣をもらった瞬間から受けられるようになったから

間違ひなくこいつの本当の姿を見る事が出来るんだらうな」

そんな事を思いながらスペリオルは歩いて行くと

黄色のバンダナを巻いた複数の盗賊がいた

「おうおうおうおう！……」が俺達黄巾賊の領地だつて分かつてるのか!？」

(黄巾賊つて確か中国の歴史に出てきたような……気のせいかな?)

「お前からこそ盗んだ盗品を返してもらおうかな？」

「やれるもんならやつてみる！お前ら!!」

おそらくはリーダー格である男が合図をするとみんなが出てきたのだが
レベルはかなり弱く簡単に撃退する事が出来てスペリオルは呆れていた

「えく．．．もしかしくなくてもこれで終わりってわけなの？」

「くっ！まさかここまでやるとは．．．！」

「あらあら？随分と呆気なくやられてるじゃないの？」

「そっその声は張三兄弟様!？」

（おおう．．．これってなんとも濃い三兄弟が現れたな．．．）

その三兄弟は完全にオカマの姿をしており

スペリオルはその姿にドン引きしていた

「あんたらは退がってなさい！ここは私達が相手をしてあげるわ！」

「そういう事なら相手をしてもらおうか？オカマ三兄弟！」

「誰がオカマよ！行くわよ弟達！」

「はい兄様!!」

こうして張三兄弟もスペリオルと戦う事になったのだが

あまりに手応えは薄かった

（確かにさっきの兵士に比べたら強いんだろうけど．．．）

これくらい強い強さだと中ボスクラス．．．とてもじゃないけど楽しめないな

「「ギヤアアアアア!!?」」

スペリオルは張三兄弟のHPを一割まで削ると動きが変わった

「まさかここまで強いとは．．．！こうなったらあれをやるわよ！」

「はい兄様！」

「「太平要術、木星合身!!」」

呪文を唱えると三兄弟は合体していき巨人へと姿を変えた

「蒼天已死!!黄天當立!!」

「おもしれえ．．．！やっぱり戦いはこうじゃないとな！」

そう思つてスペリオルが剣を構えようとした時にあの錆びた剣が光り出した

『汝、龍帝の意思を継ぐ者よ．．．お前の望みはなんだ?』

「俺の望み?そんなもんみんなで楽しく笑つて過ごす事だ！」

『よかろう．．．我が力の一端をお前に貸してやろう．．．!』

どこからともなく聞こえた声が消えると錆びた剣から光が放たれそれが収まるとスペリオルは新しい装備を身に纏つていた

ユニーク装備・龍帝シリーズ

爪龍刀

STR+40 AGI+15

「破壊不可」

牙龍刀

STR+40 AGI+15

「破壊不可」

龍帝劍

STR+50 AGI+20

「破壊不可」 「龍帝の魂」

龍帝の兜

VIT+20 DEX+30

「破壊不可」 「正義の心」

龍帝の鎧

VIT+25 AGI+20

「破壊不可」 「マウント装備」 「義兄弟の絆」 「三位一体」

「これが新しい装備・・・そして龍帝劍か・・・!」

「そんな装備を身に纏ったくらいで勝った気になるんじゃないわよ!」

「いや!これで終わりだ!星龍斬!」

「ギアアアアア!!」

必殺の一撃を受けた巨人は完全に消滅しスベリオルが勝利を収めた

「これでクエストクリアだな．．．それじゃあ盗品を持って帰るとするか」

一方その頃、運営側では．．．

「．．．まあ予想はしてたけど．．．龍帝装備が取られちゃったな．．．」

「しようがないだろ？普通は報酬であれを選んだりしないぞ？」

「だな．．．なんでスペリオルはあれを選んだんだか．．．」

「何にしてもこれで三候の一人は揃ったわけだし．．．」

残りの二つに関しては今後のアップデートで加えるって事で」

「「意義なし！」」

「．．．そういえばメイプルがいなくて今日は平和だな．．．」

楓の木結成

あれからスペリオルは色々なクエストを行って
ギルドを建てる資金を貯めてくれたのだが

「……流石にこれは集めすぎじゃない？」

サリーの目の前には必要と考えていた経費の

およそ十倍の金額が表示されていた

「いやまあ……新しいスキルとかを試したら

いつの間にかそんな金額とかになって……

しかも色々なアイテムも手に入ったし……

流石にやりすぎたとは思っている……」

どうやら流石のスペリオルもやりすぎたと思っ
ているようで

顔も見えない運営の人に対して心の中で謝罪する
のだった

一方で運営側はここ数日のスペリオルの行いを見
て

胃に穴が空きそうになったのは言うまでもなかつ
た

「それで？今日はメイプルもログインするんだろ？」

「どこか良さそうなギルドハウスは発見したのか？」

「まあね♪思ったよりも良さそうな場所が何個かあったから

後はメイプルが来て決めてもらうだけかな？」

「ん？て事はもしかしてメイプルがギルドマスターになるのか？」

「そりゃあね？なんだったらスペリオルがやる？」

「遠慮しておきます」

そんな話をしていると何やら嬉しそうな顔をしながら

メイプルがログインしてきた

「うくん！久しぶりのNWODだ！今日は目一杯楽しむぞ！」

「メイプル！こっちこっち！」

「あつ！サリーにスペリオルだ！」

二人に気がついたメイプルは急いでやってくると

どうやらメイプルはログインしてなかったただけではなく

やりたくなる欲求も出てくるのでゲームの情報すら見てなかったようだ

「それは分かったんだが・・・なら何で俺は学校で避けられてたんだ？」

あれの所為でみんなから変な誤解を受ける事になったんだが・・・」

「へっ？いや～サリーとはまだしもスペリオルとはゲーム以外知らないと思って

それを考えたらなんか思わず話したらまずいと思っちゃって……」

「あく……確かにスペリオルのリアルってあんまり知らないかも」

「いやむしろそう言った事をリアルで話してくれよ……」

わざわざゲームで話すような内容じゃないだろ……」

言われてみれば確かにその通りだと思っていた二人の顔を見て

スペリオルはもしかしてメイプルだけではなく

サリーも天然なのではないかと思っていた

「どうか本題に戻ろうぜ？ギルドを立ち上げるんだろ？」

「あつー！そうだった！実はねメイプル」

サリーはメイプルがいなかった間にギルド機能が実装された事を説明した

そして既にその為に必要なアイテムと資金は集めている事を話した

「まあ……私はこの光虫を捕まえただけでそんなに苦労してないけどね

むしろ予想外だったのはスペリオルの資金集めのほうよ……」

「だからそれに関してはやり過ぎたって反省してるだろ？」

それよりも早くそのギルドハウスを見に行かないか？」

「それもそうね！それじゃ早速、しゅっぱーつ！」

こうしてサリーの案内でスペリオル達は色んなギルドハウスを見て回った

そんな中でようやくそれらしいものを見つけて早速、ギルド登録したへくどうやらここは五十人まで登録する事が出来るみたいね？」

「それなら誰か知り合いを誘えばいいんじゃないか？」

と言つてもまずは入つてくれるかどうかの相談からだけどな」

「それじゃあ早速、カスミとカナデに連絡してみるね！」

「行動はや!？」

メイプルのあまりに迅速的な行動に驚きながらも

一向はカスミとカナデに連絡を取り広場で待ち合わせて

ギルドに入らないかと提案する

「メイプルのギルドなら面白そうだね

是非とも参加させてもらおうかな」

「私も喜んで参加させてもらおうとしよう」

「本当!?!ありがとう!?!」

あつ!?!あそこにいるのはクロムさんにイズさんだ!?!」

メイプルは別の二人を見つけるとすぐさまそちらに向かつてしまい

残されたスペリオルは改めて自己紹介をする事にした

「だから行動早いな・・・てかせめて自己紹介くらいはして欲しかったんだが・・・

まあいいや・・・俺の名前はスペリオルだ。よろしくな」

「僕の名前はカナデだよ。よろしく」

スペリオルがカナデとの自己紹介を終えるとメイプルが二人を連れてきた

「メイプルちゃんかギルドを作るっていうから入れてもらおう事になったわ

これからもよろしくね？スペリオル」

「イズさんが仲間とは心強いな。そちらの男性は？」

「俺の名前はクロムだ、そちらの自己紹介は大丈夫だよ

第一回イベント二位のスペリオル」

「うーん！なんだか盛り上がってきました〜!!」

「盛り上がるのはいいけどまずはみんなにギルドハウスを見せようぜ？」

「あっ！それもそうだね！」

スペリオル達は仲間になった四人を連れてギルドハウスを見せると

みんなもどうやら満足してくれたようで三人は安心していた

「さてと・・・それじゃ改めてギルドマスターのメイプルさんどうぞ」

「えっ!?!私がやるの!?!スペリオルがやるんじゃないの!?!」

「俺は辞退させてもらいました。どうかこのメンバーを集めたのは

メイプルなんだから当然の人選だと思っただけど？」

「ううゝ．．．」

「そんなにしよぼくれてないでまずはギルドの名前を決めないと！」

「ギルドの名前？えゝと．．．！そうだ！楓の木！」

スペリオル達はその名前を気に入ってギルドの名前は楓の木に決定した

一方その頃、運営側では．．．

「．．．嘘だろ．．．ヤベエ．．．ヤベエよこのギルド．．．！」

「ああ．．．まさかこんな最悪なギルドが完成するなんてな．．．」

「俺．．．次のイベントが終わったらお休みをもらうんだ．．．」

「馬鹿野郎！そんな現実逃避しないで何か対策を考えるんだ!!」

「せめて対抗馬になってくれそうな集う聖剣と炎帝ノ国を応援するしかないな．．．」

「二二はあ．．．なんでこうも面倒ごとになるんだ．．．二三」

しかし彼らは知らなかった．．．この後で自分達の想像を超えるほど

この楓の木が波瀾万丈なゲームライフを送る事になるといふ事を．．．

第三回イベントに向けて

ギルド『楓の木』を立ち上げたスペリオル達は

第三回イベントに向けて各々、レベル上げや素材集めをする事になった

「……で……これは俺がいる必要はあるのだろうか？」

そこではサリーとカスミが無双しくロムが堅実に戦っている姿があり

とてもではないがスペリオルのいるところまでモンスターがやってこなかった

詰まるところ今のスペリオルは完全に暇を持って余っていたのだ

「はあく……これならメイプルの方に向かった方がよかったかもなく……」

「別に暇なのはいい事でしょ？てかあんたも少しは働きなさいよ」

「そうは言ってもなく……ぶっちゃけここの辺のモンスターは余裕だろう？」

俺が出るほどのモンスターとなると……もつと奥の方にいるんじゃないか？」

「それじゃあ先に進んでみる？」

「おいおい！この先は中級のボスクラスが大量に発生するんだぞ！？」

流石にそんな場所に行くのは危険だろう！？」

「そうか？俺はもう何度も足を運んでいるぞ？」

スペリオルの言葉を聞いて半信半疑ながらもサリー達は後を着いていく
そして奥の方までやってくるとクロムの言う通り中型のモンスターが大量に発生し
た

「さてと・・・それじゃあまずはお前に戦ってもらうぜ？サイゴゴレム!!」
『ウオオオオン!!』

「「えええ・・・」」

召喚されたサイゴゴレムは瞬く間にモンスターを粉碎していく

その光景を見ていたクロム達は一体、何を見せられているのだろうかと思っていた
「メイプルも大概だと思ってたけど・・・スペリオルも十分に異常だったわ・・・」
「てか第一回イベントで暴れてた巨人ってスペリオルのスキルだったのかよ・・・」

あんなのを見せつけられたら普通の奴は戦意喪失だろうな・・・」

「だな・・・おまけにあれとは別にスペリオル本人もいるのだから

もはや鬼に金棒ではなく鬼と鬼のコンビだな・・・」

「ん？なんか言ったか？」

「「いや何も・・・」」

「？」

自分がどんな風に言われているのか全く気づいていなかったスペリオルだが

次の瞬間に巨大なモンスターをかき分けてやってくる巨大なモンスターの姿があった

「大きき的にはサイコゴレムと同じ・・・どうやらボスモンスターみたいだな」

「ちよつ?!? そんな事言ってる場合!?! 今すぐに逃げないと!!」

「いや・・・最近はこのを使ってなかったまには本気を出さないとな?」

「「へっ?」」

「オーノホ・ティムサコ・タラーキイ!!」

スペリオルは三種の神器を身に纏うと

凄まじい速度で巨大なモンスターに突っ込んでいく

もちろんモンスターも攻撃を繰り返すのだが当たる様子は一切なく

そしてあつという間に懐に入り込まれると

スペリオルはモンスターの心臓に剣を突き刺し

その一撃によってモンスターは消滅し戦闘は終了した

「嘘でしょ・・・あんだだけのモンスターが一瞬って・・・」

「もはや化け物なのはスペリオルも一緒だったか・・・」

「ああ・・・どうやらこのギルドは変わり者しかいないみたいだな」

「ん? どうしたんだ? 早く帰ろうぜ」

アイテムを取り終えたスペリオルは

そのままサリー達と合流してギルドハウスに戻る事になった

「それにしてもあんたのスキルって異常過ぎるでしょ・・・」

「一体どんな事したらあんな事になるのよ・・・」

「ゲーム序盤に魔王と戦ったからなく・・・」

「そこから俺の普通が崩れたと思ってる」

「序盤から魔王!?!? どれだけ修羅の道を突き進んでるんだよ・・・」

「確かに・・・他にはどんな敵と戦ってきたんだ?」

「そうだな・・・サイコゴレムに闇皇帝とか言うのとも戦ったな」

「闇皇帝・・・名前だけで既にやばそうな予感がするんだけど・・・」

「まあな・・・遠近どつちもこなせる上に二段階目の進化まであったよ

あの時は流石の俺もHPを三割以下まで持っていかれたな」

「マジか・・・」

その後もギルドハウスに戻るまでサリー達はスペリオルの話を聞いて

やはり彼も異常の部類に入るのだと思いつながら呆れるのだった

「あつ! そういえばイズさんに渡すものがあつたんだつた!」

「私に?」

「実は第二回イベントでスキルの巻物を手に入れたんだけど

生産系のもので俺には使えなかったからイズさんに渡そうと思ってたんだ」

「本当に!? でもいいの? 何もお返しするものがないんだけど」

「別にいいですよ。俺が持ったままだと宝の持ち腐れになりますから」

「そう? それじゃあ遠慮なくもらうわね?」

そう言つてイズはスペリオルからスキルの巻物を貰い

それを開いてスキルを取得したのだが同時に驚いていた

「すごいわね!? 何に使うか分からないけど新しいレシピまで取得出来たわ!」

早速、今からこの思いついたものを作つていかないか!」

イズは早速、取得した新しいレシピに書かれていた物を作り工房に戻つた

「一体何が書かれていたんだろうな?」

「さあ・・・俺もあんまり見てなかったからなく・・・」

でもあんなに喜んでもらったのなら俺としても嬉しかったかな?」

「むゝ・・・」

「・・・で・・・なんで俺はあの二人に睨まれてるんだ!」

「いや俺に聞かれてもな・・・」

イズにプレゼントを渡した瞬間から

何故かスペリオルはメイプルとサリーの二人に睨まれていた

しかし何もした覚えがなくどうしてあんなに睨まれているのだろうと思っていると

「ふつ二人とも？そんなにスペリオルを睨まなくても・・・」

「カスミはいいわよね・・・既に簪をもらってるんだから」

「うっ!？」

「私達のもつと前から知ってるのに何ももらってないんだよね・・・」

(あく・・・これは何もしてないから怒っているパターンなの奴だ)

「こうしてログアウトするまでの間、スペリオルはずっと二人の睨まれ続けるのだった
勘弁してくれ・・・」

聖なる機兵

第三回イベントに向けて色々準備をしている中

スペリオルは新しいスキルが手に入らないかと探索を続けていた

「とはいえ・・・そんな簡単にスキルが取得出来るのなら

苦労はしないんだけどな・・・」

そんな事を思いながらスペリオルは近くの村までやってきた

そこはとても平和そうな村で特に何も起きそうにないと思っていると

「キヤアアアア!!」

「俺の脳内フラグの回収早すぎませんかね!？」

まさかの女性の悲鳴が聞こえて急いで向かってみると

そこにはサイコゴレム並に大きい機械の巨人が女性を攫っていた

「チィ!今からじゃ追いつかないか!」

動くスピードはサイコゴレムよりも早いので

足の幅によって負けてしまいスペリオルは一度、足を止めると

そこへおそらくは先ほど攫われた姫のような女性の侍女がスペリオルの前に現れた

「お願いします！どうか姫を助けてください！」

『クエスト・聖なる機兵を受けますか？』

（聖なる機兵？聖なるつてのは分かるけど機兵つてなんだ？）

よく分からなかったがスペリオルはとりあえずYESのボタンを押した
「安心してください・・・彼女は必ず俺が助けますので」

「ありがとうございます！おそらく彼らが向かったのは王家の谷です！」
「分かりました！貴方はここで待っていてください！ケンタロス！」

スペリオルはスキルを使って人馬状態となり急いで王家の谷に向かった
するとそこには大量のモンスターが待ち構えており

その数は百を軽く超えていただろう

「いちいち相手にしていたら面倒だな・・・ここは一気に・・・!ん？」

スペリオルがそのまま突き抜けようとした時

彼らの足元で何かを光っているのを確認した

突っ切るついでにそれを回収してみるとそれは耳飾りだった

「これは・・・もしかして先ほどのお姫様の物か？」

だとしたら後で渡した方がいいかもしれないな」

その耳飾りをインベントリの中にしまうとスペリオルは一気に洞窟を駆け抜ける

するとそこには先ほど見た機械の巨人がたくさんおりその中心には

明らかに他の巨人とは何かが違う機械の巨人の姿と

おそらくはそれを目覚めさせようとしている悪そうな騎士と攫われた姫の姿があった

(もしかしてあれが機兵か?そしてあいつらはそれを動かす為にお姫様を攫ったと

なるほどな・・・ならまずはここらでいっちょよ暴れるとしますか!)

「頼んだぜ!サイコゴレム召喚!」

『ウオオオオン!』

「なっ!?黒い巨人だど!?どっから出てきやがった!?!」

スペリオルはサイコゴレムを召喚して敵の機兵と戦わせると

その間にお姫様を元に向かい彼女の拘束を解いた

「なっ?!貴様いつの間にな!!」

「大丈夫ですかお姫様?」

「はっはい!でも彼らに聖機兵を渡すわけには!!」

「聖機兵?それってもしかして彼らの後ろにある・・・」

「はい・・・この世界に取って希望にも絶望にもなる存在・・・」

それが聖機兵なのです・・・!」

「なるほど・・・それは渡すわけにはいかないな・・・!」

スペリオルが剣を構えて戦う姿勢を取ると

先ほどの騎士はその場から離れて自分の機兵に乗りに向かった

「チイ!流石にこの数はサイゴゴレムでも勝てない!

となると俺が聖機兵に乗るしかないって事か!」

「ダメです!聖機兵は選ばれた者しか乗る事が出来ないんです!」

「でもやるしかないでしょ!貴方はここから離れてください!」

そう言つてスペリオルは姫様を逃すとそのまま聖機兵に乗り込む

しかしやはり姫様の言う通り全くと言つていいほど動く気配がなかった

「ぐっ!」

「ははは!所詮は聖機兵とはいえ動かなければただの木偶と一緒によ!

このまま我が剣の錆にしてくれるわ!」

「こいつ・・・!動けよ聖機兵!お前はこれでいいのか!」

お前は希望にも絶望にもなるんだろ!」

だったら・・・俺の希望になつてみせる!!」

その瞬間、スペリオルのインベントリに入っていたはずの耳飾りが光り出し

それと同時に聖機兵は起動し敵の機兵を殴り飛ばした

「馬鹿な!? 聖機兵を動かしただと!」

「全く・・・随分な寝坊助だな・・・ん? 聖機兵ガンレックス?

これがお前の名前か・・・それじゃあいくぜ! ガンレックス!」

ガンレックスの腕からライトソードを取り出すと

スペリオルはそれで敵の機兵を切り裂いた

そしてサイコゴレムの方の機兵も見事に両断し敵を退ける事が出来た

「ふう・・・流石に疲れた・・・」

『スキル・聖機兵を所得しました』

「新しいスキルか・・・」

『スキル：聖機兵

能力：聖機兵を召喚しそれに乗って戦う

スキルは呼び出される聖機兵によつて異なる』

「ん? ちよつと待つて?」

これ・・・暗に他にも聖機兵がいるって事だよね?・・・嘘でしょ?」

まさかのスキル説明でネタバレを喰らったスペリオルは

再び集めなくてはいけないのかと再び落ち込んでいた

そこへ先ほど助けた姫とその侍女がスペリオルの元にやってきた

「助けていただいてありがとうございます(ご)ございました

まさか貴方が伝説の勇者様だったなんて・・・」

「気にしないでください」

とにかく無事でよかったです」

「本当に感謝しています・・・勇者様」

そう言って姫はスペリオルの傍に行くと頬にキスを交わした

(NPCなんだけど・・・やっぱり恥ずかしいのがあるな)

こうしてスペリオルは新しいスキルを手に入れて

無事にクエストをクリアしたのだが

彼はこの後でもっと難しいクエストに挑む事になった

「それで?どうしてスペリオルの頬にキスマークがあるのかな?」

「そうね?そこら辺を詳しく聞かせてもらおうかしら?」

「ああ・・・そして事と次第によつては・・・」

「ちよつとだけ・・・お話する事になるかもね?」

(なんか皆さんめちやくちや怒ってるんですけどおおおお!?)

ギルドハウスに戻ってきたスペリオルだったのだが

すぐにフルフェイスの頬にキスマークがある事がメイプル達にバレてしまい
そして今まさにその理由についてを問い詰められていたのだった

「えつとですわ〜・・・実は先ほどまでクエストをやっています・・・」

「何？それは女の子からキスでもしてもらえるクエストだったの？」

「違います！断じて違います！新しいスキルが手に入るクエストです！」

「じゃあなんで頬にキスマークなんてあるのかしら？」

「えつと〜・・・そのクエストでお姫様を助けまして〜・・・」

「スペリオルはゲームのキャラにまで惚れられたのか？」

「そんなわけないでしょ!?!おそらくはそう言う仕様だったんでしょ!?!」

「そう・・・それなら後で運営に確認しないとね？」

（ふう〜・・・なんとか許してもらえたか？）

「でもそれとこれとは話が別」

「・・・はい・・・」

その後、スペリオルはそれぞれと一日過ごす事で許してもらった

その頃、運営側では・・・

「・・・なんかスペリオルに聖機兵取られたんだけどさ・・・」

「別に今更じやないか？」

スペリオルに取られるのなんて目に見えてただらう？」

「なあ・・・あれは姫様が途中で落とすアイテムを見つけないと

取得出来ない仕様になつてるけど」

「あいつなら簡単に見つけるよなく・・・」

「まあ！その嫌がらせに起動まで時間が掛かるようにしたけどな！」

「いや問題はそれじゃなくて・・・」

「あん？どうしたんだと煮え切らないな」

「その後でスペリオルがお姫様にキスされたらどろ？」

あれで楓の木の女性メンバーが怒っているみたいで・・・」

「・・・流石にここに乗り込んでくるなんてないよな？」

「そつそんな事あるわけないだろ？」

「ここは関係者以外は入れないエリアなんだぜ？」

「だつだよなく！あははは・・・はは・・・は・・・」

その後、何か物音がする度に怯える運営陣だったとき

毛刈りとプレゼント

あれから第三回イベントの為に楓の木は色んな事をしていた
そんな中でスペリオールとカスミとメイプルは

ドロップ率を上げる為の装備を作る為の素材集めに来ていた

「うくん・・・現状は毛刈りのスキルがないから

カスミに任せるしかないんだけど・・・

なんか俺・・・牧羊犬になった気分・・・」

と言うのも実はその素材は羊の毛から作らなくてはいけないくて

毛刈りのスキルを持っているのはカスミだけだったのだ

なのでスペリオールはケンタロスを使って羊を追い詰めているのだが

もはやそれが見方によっては完全な牧羊犬に近かった

「まあまあ・・・スペリオールは役に立ってるだけマシじゃん

私なんてAGI低くてもはやお手伝いにもなつてないよ」

「確かに・・・活躍したのはここに運ぶ運送だけだったな」

本当ならばメイプルもスペリオールと同じように手伝おうと

最初はオーキスで同じような事をしていたのだが

周りへの被害が尋常ではなく羊のモンスターも誤って倒してしまいぶつちやけた話、何もしない方が二人としてはとても助かっていた

「しかし数が減ってきてしまったな・・・もう少し別のところに行くか？」

「そうだな・・・メイプルはここで待機しててくれ

もしも羊が戻ってきたら俺達に教えてくれ

「はい」

スペリオルはカスミを背中に乗せて他の羊を刈りに向かい

ある程度の数をこなしているとメイプルからメッセージが入った

「・・・何故か」助けて”って書いてるのは気のせいかな？」

「ああ・・・そして俺は既に嫌な予感がしてる・・・」

嫌な予感がしながらもスペリオル達はとりあえずメイプルのいる場所に向かうと

そこには巨大な羊毛の塊がおりカスミは絶句しスペリオルは頭を抑えていた

「お前な・・・何をどうしたら数分でこんな事になるんだよ・・・」

「えへへ・・・羊さんと一緒に遊ぼうと思ったらこんな事に・・・」

しかも自分じゃ出られなくなっちゃって・・・」

「とりあえず今から出してやる”毛刈り”！」

カスミが毛を刈った事によってどうにかメイプルは脱出する出来たのだが

スキルの説明の為に先ほどと同じように再びスキルを活動し毛玉の状態になった

「しかもヒュドラのスキルを使えば毒状態にも出来るんだよ!」

「・・・お前・・・それでどうやって脱出するんだよ・・・」

「私も流石に毒無効を持つていないから今の状態で毛刈りは出来ないぞ?」

「はっ!?!」

「少しは考えてスキルを使えよ!?!丁度いいしそのまま反省してろ」

「そんなく・・・って何か止まらない!?!あくくくれくくく」

「・・・いいのか?放っておいて」

「むしろこれに懲りてあいつの暴走が止まってくれると助かる」

それからしばらくしてようやく毒状態が解除されて

解放されたメイプルを引き連れてスペリオル達はギルドハウスに戻ってきた

「はあく・・・何かメイプルと一緒にいると頭が痛くなってくる」

「ひどい!?!私は普通にゲームしてるつもりなのにく・・・」

「その言葉・・・百人中百人が嘘だつて答えるぞ」

「ううく・・・スペリオルがイジめるよく!」

「俺が悪者かよ!?!」

「それじゃあスペリオル君にお詫びの何かをもらったらどうかしら？」

「!？」

その言葉にいち早く反応したのは他でもないメイプルとサリーの二人だった
「そういえばイズさんとカスミにはプレゼントを渡してくれたのに

私達にはまだ何もくれてなかったわよね？」

「いやイズさんのはスキルだしカスミのは俺がいらなかったからであって」

「それじゃあ私達に有用なスキルとか装備とかくれてもいいんじゃないの？」

「そんなの持っていないから渡してないんだろ？」

「ふくん．．．スペリオルの中じゃ私たちは二人よりも優先度が低いんだ．．．」

「うぐっ！」

明らかに嘘泣きではあるがそれでもスペリオルの良心が痛む事には変わりなく

更に言うのであればここまで言われて引き下がるのも男らしくないと思い

「分かったよ！こうなったらお前らが文句も出ないような装備を探してきてやる!!」

そう言つてスペリオルは勢いよくギルドハウスを後にしてどこかへ行つてしまった

「二人共．．．流星に今のはイジメ過ぎじゃないか？」

「まあ二人共、スペリオルが好きだからついムキになっちゃったのよね？」

「うっ！／／／」

「全く……そこら辺を素直になればいいのに」

「……それあんたにも言えるからね？」

一方その頃、二人へのプレゼントを探す為にスペリオルは色々な情報を集めていた
「くっそ……」

あの二人をギャフンと言わせるだけの装備を絶対に手に入れてやる……！」

そんな中でスペリオルが手に入れたのはとある二つの装備の情報だった

一つはとある城のお姫様が持っていたとされる宝玉であり

もう一つは不死鳥が住んでいると言われている都に眠るテイアラだった

スペリオルは絶対にその二つの装備で満足させてやろうとそれらを取りに向かった

まず最初に向かったのは宝玉の方であり向かった先はオバケが住んでいるような城
だった

「おお……思った以上に雰囲気があるな……」

そんな事を思いながらスペリオルは城の最上階まで行くと

何やら明らかに敵そうな亡霊侍の姿があった

「うわ……完全に戦う流れだ……」

そしてスペリオルの言う通り亡霊侍は刀を抜いて襲い掛かってきたが

そこまで強いというわけでもなくスペリオルは武者シリーズに換装して刀で戦う

「あんたとは刀での真つ向勝負の方が良さそうだ．．．！」

頼むからこれで成仏してくれよ！烈火一閃！」

スペリオルの一撃を喰らい亡霊侍は倒れると

そこから魂が現れてとても穏やかな笑みを浮かべながら昇天していった

『ありがとう．．．あの人を解放してくれて．．．』

「ん？もしかしてあなたがこの城の．．．」

そして声が聞こえて振り返るとそこにはお姫様の幽霊が立っていた

『ええ．．．私はこの城の姫でした．．．』

そして彼は私の恋人だった男．．．彼との関係が原因となって国は滅び

彼はそのまま亡者となってしまった．．．解放してくれて本当に有難う．．．

お礼にこの秘宝を授けましょう．．．もう私達には必要のない物ですから』

「ありがとう．．．どうかあの世で幸せに」

姫の魂が消えると同時に綺麗な赤と青の玉がついた髪留めが落ちた

【炎水の宝玉】

STR+15 AGI+20

「破壊不可」「爆熱武者」「爆熱の陣」

『爆熱武者』

能力：使用すると装備が爆熱シリーズに変化する』

『爆熱の陣

能力：五分間の間、ステータスを50%上昇させスキル『熱火爆輪斬』が使用可能になる

爆熱武者を使用している間にのみ使用可能』

「・・・何か強そうなの手に入れちゃったな・・・まあいいや次に行こう」

次にスペリオルが向かったのは不死鳥の住んでいる都だった

そこも既に廃墟となつてはいたのだが

明らかに強そうな不死鳥が待ち構えていたのだが

「・・・随分と弱つてるな？もしかして戦う感じじゃないのか？」

『お主は・・・何者だ・・・？』

「えつとスペリオルつて言うんだけど・・・」

もしかしなくても弱つてる？」

『我は不死鳥・・・しかしその炎も弱まりつつある・・・』

故に次の転生は行えぬかもしれぬのだ・・・』

「炎？つまりは強い炎があればいいのか？だったら武化舞可の號刀！

からの～！爆鳳覇！！」

『うおおおお!!』

不死鳥はスペリオルの炎を受けるとそのまま灰へと変わり

そこから先ほどとは比べ物にならないほど小さな雛へと変わっていた

『感謝する・・・お陰で我は再び転生する事ができた』

「そりゃ良かったぜ」

『これは礼だ・・・受け取るがいい』

【不死鳥のティアラ】

VIT+20

「破壊不可」「不死鳥の癒し」「不死鳥の羽」「不死鳥の炎」

『不死鳥の癒し』

能力：五秒間に最大体力の5%の体力を常時回復する』

『不死鳥の羽』

能力：炎で出来た不死鳥を飛ばして相手に炎上ダメージを与える』

『不死鳥の炎』

能力：炎で出来た不死鳥を作り出して相手にぶつける

攻撃が当たった相手を炎上状態にする』

「おお・・・メイブルの為にありそうな装備だな・・・」

こうして無事に装備を回収できたスペリオルはその二つを持って帰り
ちやんと二人にプレゼントするととても嬉しそうにしていた

「わあ〜！綺麗なティアラだ〜！」

「ふっふ〜ん／＼／＼まあまあの髪留めじゃない」

「喜んでもらえて何よりだよ．．．でもこれっきりにしてくれよ？」

意外とその二つを探してくるの疲れたんだから．．．

「うん！ありがとうスペリオル！」

「おっおう．．．／＼／＼」

第三回イベントで事件発生!?

あれから素材を刈り終えて続けていよいよ第三回イベントの日となった

「う〜ん!♪三人ともすごく似合ってるわ〜!♪」

「そっそっかな〜?／＼／＼」

そしてメイプル、サリー、カスミの三人は

この間、刈った羊毛を使って作られた装備を身も纏っていた

「うう．．．／＼／＼」

私はこう言った格好はあまり好きじゃないのだが．．．／＼／＼

「そうか?すごく清楚な感じがして俺は好きだけど」

「あつありがとう．．．／＼／＼」

「私達は!?!」

「ふっ二人も似合ってるぞ

現実でもそんな服とかがあつて欲しいくらいだ」

「そっそっ．．．／＼／＼」

(自分達で感想を聞いておきながら自爆って．．．本当に初々しいわね♪)

メイプルとサリーの様子を見ながらイズはなんとも初々しいと身悶えていた

そんな事を考えているといよいよ第三回イベントのアナウンスが聞こえてきた

「今回は確か牛型のモンスターを倒してポイントを回収するんだったよな？」

「……サリーとカスミは当然としてメイプルはその装備を着ける必要あったか？」

「酷い!!私だつてちゃんと役に立つよ!オーキスだつてあるもん!」

「それだともはやどつちが牛か分からなくなつてしまふな」

「カスミまで!?!うう〜!絶対に見返してやる〜!」

「なんかギルド対抗つて事、忘れてないか?」

「そしていよいよイベント開始の合図が鳴り響いて

スペリオル達はイベントモンスターを倒しに向かった

まずは天翼で空を飛びながらモンスターを探して

見つけたら地上に降りて人馬状態でモンスターを倒していく

その繰り返しにより楓の木の中でスペリオルだけが個人ランキングの中に名前が

入っていた

「とはいえ……流石に狩り過ぎたな……ここら辺にはもうほとんどモンスターは残つ

てないな

仕方ない……少し遠出になるけど空を飛んで遠くの方まで向かつてみるとするか」

スペリオルは場所を移動してイベントモンスターを探していくと形は同じなのだが見た目が完全に牛柄の別モンスターが沢山いた

「これは・・・イベントモンスターって事で良いのか？」

それとも別のモンスターなのか？・・・分からんな・・・」

『ガオ〜！まさかスペリオルがこのモンスターを見つけてるなんて思わなかったよ〜！』

「ドラぞうか・・・って事はこいつはやっぱイベントモンスターなのか？」

『そうドラ！このモンスターは普通のよりも多くのポイントモンスターを落とすだけじゃなく

特殊なアイテムも落とす可能性があるから是非とも多く倒して欲しいドラ！

じゃあ頑張つてね〜！ガオ〜！』

「おお！ポイントを多く出すだけじゃなく特殊アイテムもドロップするのか!!

こりやあ何がなんでも逃すわけにはいかないな！」

スペリオルは凄まじい勢いでモンスターを倒していくと次々にポイントをドロップする

「本当に大量のポイントをドロップするな！でも特殊アイテムはまだ出ないのか・・・ならとにかく出るまで狩り続ければ良いだけの話だ！」

出来る事ならば自分一人でこのモンスターは全滅させたいと考えたスペリオルは落としたポイントやドロップアイテムなどを全く気にしないでずっと戦い続けた

そして目視出来るだけのモンスターがいなくなると近くにいないかを探して見つけると同時に全滅させるといふ事をイベント終了まで続けていた

「ふう……イベント終了まであと三分か……」

あらかたのモンスターは倒したしもうこれ以上はポイントも必要ないからギルドハウスに戻るか……

つて！その前に特殊なアイテムがなんだったのか確認しないと！

ようやくスペリオルは特殊なドロップアイテムの事を思い出して

急いで自分のインベントリを確認していくとそれらしい名前の物があつた
「あつた！これだな……えっ？……これが特殊なアイテムつて嘘だろ？」

どうやらそのアイテムは予想とはかけ離れた物だったようでスペリオルは絶句して
いた

「……これ……絶対にメイプル達に見つかったら殺されるな……」

とにかくスペリオルはみんななどの結果を共有する為にギルドハウスへと戻った
「うう……今回は活躍出来なかつたよ……ごめくん」

「気にしなくても大丈夫！元々、メイプルとは相性の悪いイベントだったし」

「そうね。それにギルド全体でのイベント報酬自体は貰えたし」

スペリオルが個人でランキングにも入っているから問題ないわよ」

「?どうしたスペリオル?先ほどからずっとソワソワしているが?」
「ソツソソナ事ナイヨ!」

「・・・なんでカタコトなのよ・・・なんか怪しいわね?」

「キツ気ノセイダヨ!チョットマイクノ調子ガオカシイノサ!」

「いやどこの世界に調子がおかしくて

マスコットみたいな声になるマイクがあるんだよ・・・」

「ス〜ペ〜リ〜オ〜ル〜?」

「なんか隠してるのなら今の内に白状した方がいいわよ?」

「・・・おつ男同士なら話してもいいです」

「?」

スペリオルはクロムとカナデを連れてギルドハウスを出ると

そこから更に急いで離れてフィールドまでやって来て

尾行されていないかの確認までする徹底ぶりだった

「なんでそこまでして隠してるんだい?」

「そりゃあ知られたら殺されかねないからだよ!」

「一体どんなアイテムを手に入れたんだ?」

「これだ・・・」

そう言ってスペリオルはインベントリから例のアイテムを取り出した

【ぐんぐんミルク】

女性アバター専用アイテム

飲むとアバターのバストサイズを変更する事ができる

(大ききの振り幅は個人差があります)

「・・・これは・・・」

「確かにこれをあいつらに見せたらヤバいな・・・」

「だろ?でもこれっきりのアイテムだろうから捨てられなくて・・・」

「とりあえずは持っているだけ持つておこうぜ?」

もしかしたら何かの役に立つかもしれないしな!」

「そうだな!それと・・・絶対に内緒だぞ?」

喋ったら・・・俺達、仲良く殺られる・・・!」

「ゴクリ・・・!」

一方その頃、運営側では

「いや〜!悪魔がメイプルに倒されちゃったな〜!」

「目の焦点があつてないですよ？」

「そういえば俺達が作った例のバターアイテムはどうなった？」

「あれなら全部、スペリオルの元にいったよ」

「マジか？・・・あれって女性専用だろ？」

「そうだよな？・・・使われないのも寂しいよな？・・・」

「いやでも・・・逆に面白い展開になりそうだしいいんじゃないか？」

「！！！！そうだな！！！！」

第三層と聖機兵の進化

第三回イベントが終わり色々と問題は起こったが

とりあえず乗り切れたスペリオル達は

いよいよ追加された第三層に向かう為にボスを倒しに来ていたのだが・・・

「・・・そうか・・・いよいよメイプルは人間を辞めたのか」

『酷い！私はちゃんとした人間だよ!!』

「せめてそれは人間に戻ってから言ってくれないか？」

「本当・・・メイプルちゃんが味方で良かったわく・・・」

メイプルは新しいスキルである『暴虐』で怪物の姿に変わっており

それを見ていた全員がとうとう人間を辞めたのだと遠い目をしていた

「てかスペリオル・・・アンタも人の事言えないでしょ

どうしたらそんなロボットみたいなのを手に入れるのよ？」

少しは世界観を守って欲しいんだけど？」

「それは運営に言ってくれ・・・それにメイプルのスキルと違って

俺は自分になってるんじゃないやなくて乗り込んでるんだよ」

しかしサリーからしてみればスペリオルも異常の部類だった

何故ならばメイプルと一緒にスペリオルもガンレックスを召喚し

第三層のボスが可哀想になってしまうほどの一方的な戦いだっ

「何にしてもこれで三層に行けるしまあいいか」

『行こうよ！私すごいワクワクが止まらないよ！』

「その前に元の姿に戻れよ」

こうしてスペリオル達は三層に着くとそこは機械の世界であり

エアバイクやボードのような物で人が飛んでいる姿が見えた

「へえく……この世界は空を飛ぶのが普通になっている世界なんだな？」

「これでスペリオルも異常から普通に戻れるわね？」

「……確かに空を飛べたのって俺だけだったもんなく……」

スペリオルはスキルの天翼で空を飛ぶ事が出来たのだが

実は空を飛べる装備はこれだけであり他に誰もいなかったのだ

(メイプルが空を飛ぶのは予定外)

しかしこの層が追加された事によりもう空が飛べても特別にはならないだろう

「とりあえずは色々と探索してみるか？」

「そうね！……でもメイプルとスペリオルは自重しなさいよ？」

「ちよっ!? サリー! それってどういう意味!？」

「俺もメイプルと一緒にされるのは不本意なんだが……」

「スペリオルまで!? もういいもん! 好きに冒険するから!」

「……くれぐれも運営が泣きそうになる事はやめておけよ?」

こうしてスペリオル達はそれぞれに第三層を回ってみる事にした

そんな中でスペリオルはこの第三層に来た時点でとあるクエストが発生していた

『クエスト・白金の盾を開始しますか?』

第三層に来た瞬間にクエストが受注出来るようになったという事は

おそらくは自分の取得しているスキル絡みなのだと思いつぐにはいのボタンを押して

このクエストを受けるとスペリオルはとある場所へと足を運んでいた

「……なんか……随分と似ているんだな……王家の谷に」

そこはかつてスペリオルがガンレックスを手に入れた王家の谷に似ており

懐かしいと思いつながら同時にあの後の出来事を思い出して頭を抱えていた

「……どうか今回も同じ事が起きませんように……!」

「あら? そこにいるのは勇者様じゃありませんか!？」

「だから俺の脳内フラグの回収が早すぎるんだよ!!」

スペリオルが同じ事が起こらないように祈った瞬間

その願いを聞き届けたように例のお姫様が現れた

「あゝ……お姫様はどうしてここに？」

「実は……あの後で城の書物を調べたのですが」

「どうやらあのガンレックスはまだ覚醒した状態ではないのです」

「ガンレックスがまだ覚醒していない？」

「はい……どうやらガンレックスにはあらゆる攻撃を弾く盾を持っていたそうなのです」

そしてそれはガンレックスが封印されると同時に聖獣がその盾を封印したと……

「ここにはその手掛かりがあるかもしれないとここへ来たのです」

「なるほど……それが白金の盾というわけか……」

スペリオルはようやくクエストの内容を理解してお姫様と一緒に谷の中に入ろうと

思った時だった

「!?!」

突如として爆発が起きてその方を見ると大型の機兵が暴れ回っていた

しかもその機兵は間違いなくこちらの方へと向かってきていた

「あいつの目的は……ここか!?! 姫様はここにいてください! ガンレックス!」

スペリオルはガンレックスを召喚して暴れている騎兵の元へと向かう

『よくぞ来たな勇者よ！我が名は幽騎士！』

貴様に滅ぼされた魔物達の怨念が具現化した存在なり！』

「俺の？なるほどな・・・そういう設定か・・・！」

『貴様に倒された恨みをここで晴らしてくれよう!!』

幽騎士の乗っている騎兵から電撃が放たれてスペリオルはそれを防ぐが

攻撃力が高すぎてガンレックスの装備している盾では防ぎ切れなかった

「ぐっ!?!だったらこっちから攻撃するだけだ!!」

『温い！その程度の攻撃ではこの魔機兵を超える事は出来ん!!』

しかしその一撃は受け止められてしまい

ガンレックスはボロボロになって吹き飛ばされる

「クッソ・・・！こんなところで負けられるか・・・！」

それでもスペリオルは絶対に負けられないと再び立ち上がる

するとそんなスペリオルの前に文字が浮かぶ上がった

「これは!?!もしかして・・・これを読めって事か？」

スペリオルはこの状況がどうにかなるというのならばと思いその文字を読んでいく

『こいつでトドメだ!』

「カレーヘエ！目覚めろ！ガンレックス!!」

最後の呪文を読み終わると天空に聖獣であるジークリフが現れて

三枚の銅板の力をガンレックスに注ぎ込んだ

そして煙が晴れていくとそこには白金の盾を装備した本来のガンレックスが立っていた

「これが・・・！ガンレックスの本当の姿か！」

『何だ?! ええい！ 忌々しい勇者め！ 今度こそ滅びろ!!』

「白金の盾よ！ その力を示せ!!」

魔機兵は魔法でガンレックスを攻撃してくるが

白金の盾はその攻撃を弾き返して逆にダメージを与えた

『馬鹿な!? こんな事がああああ!!?!』

そしてその隙を突いてガンレックスはライトスピアを取り出し

弾かれた魔法と共に突撃して魔機兵を貫いた

「もう一度・・・闇の中で眠るがいい」

その言葉と共にガンレックスは槍を引き抜き

魔機兵は地面に倒れそのまま爆発四散した

「はあく・・・疲れたく・・・」

「勇者様!!」

戦いを終えてガンレックスから降りたスペリオル

そこへ姫様がやってきてそのままスペリオルに抱きついた

スペリオルは彼女が自分を助けたのだとすぐに確信した

「姫様……姫様が見つつけてくれたのですね？」

「本当に……よかったです」

こうしてスペリオルのクエストは終了し

真の姿を取り戻したガンレックスという心強い味方を手に入れたのだった

「……一体何をしてるのかな……スペリオルは……」

「oh……」

そしてその瞬間を機械神の手に入れてその練習をしていたメイプルに見つかり色々と尋問される事になったのは言うまでもなかった

第四回イベントの発表と新しい仲間

第三層に来てから色々探索を終えたスペリオル達だったが

そこへ新しく第四回イベントの情報が舞い込んできてその作戦会議を行っていた
「第四回イベントはギルド対抗戦かゝ．．．」

しかもこの期間でデスペナルティがあるって．．．

ウチみたいな弱小ギルドには厳しい条件だよなゝ．．．」

「．．．弱小かどうかは置いておくとして

確かにスペリオルの言う通り人数の少ないウチは厳しいと思う

そこで新しくメンバーを追加するべきだと思っただがどうだ？」

「異議はないけど．．．どうやって勧誘するんだ？」

申し訳ないが俺はメイプルほどのコミュ力はないぞ？」

「確かに．．．スペリオルってリアルな友達少なそうだしね？」

「．．．その機会を潰した二人に言われたくないんだが．．．」

「[?]」

実際にスペリオルが友達のない理由は他でもない二人の存在だった

ただでさえ友達がいないのにクラスでも指折りの美少女である二人と一緒に居れば
おのずとスペリオルに対してどんな視線が向けられるのか……言うまでもないだろ
う

(と言っても……この二人にその自覚はないんだろうな……)

「はい！それじゃあ新メンバーの勧誘やりたいです！」

「確かにメイプルがギルドマスターだからな

「こう言うのは長にやってもらうのが一番いいだろう」

「それじゃあ勧誘はメイプルとサリーに任せて

「僕達はいつも通りに素材の収集かな？」

「それが一番妥当だろうな……それじゃあ俺も暇つぶしに探索でもするか」

「あっ！それならスペリオルは私と一緒に来て欲しいんだけどいいかしら？」

「イズさんですか？別に構いませんが護衛ですか？」

「そういう事！それにもう一つの理由もあるんだけど……今はまだ内緒ね？」

「？」

スペリオルはよく分からなかったがとりあえずは彼女と一緒に行動する事にした
そしてイズに連れられてとある洞窟までやってくるそこには大きな扉があった
「実はこの扉が前から気になってたのよね……でもどうしても開かなくて」

「龍の紋章……これはもしかして……換装！龍帝！」

その紋章を見てスペリオルはもしかしてと思い装備を龍帝シリーズに変えて

龍帝剣をその扉の前に翳すと剣が光り出しそのまま扉の龍の紋章へと当てられて扉が開く

「なるほど……これは龍帝剣関連の洞窟だったというわけか」

「へえ……やっぱりスペリオルを連れてきて正解だったわね！」

「そうですね。俺も連れてきてもらってよかったです」

スペリオルとイズは開いた扉から中へと入っていくとそこには

再び龍の紋章が刻まれた石碑がありスペリオルはそこに書かれている文字を読み上げる

「えつと……」地に伏した龍は輝ける龍の光に導かれてその力を振るうだろう

地に伏した龍？なんかどこかで聞いたような覚えがあるような……

「とにかくまた光に案内してもらえばいいって事じゃないかしら？」

龍帝剣だったかしら？それは出しておいた方がいいかもしれないわね？」

「そうですね……まだ一本道みたいですし先に進みましょうか」

二人は石碑に書かれていた事を覚えておきながら先に進むと

分かれ道があり二人はその場で立ち止まってどちらにいけないのだろうと思って

いると

「おっ？龍帝剣が光ってる？．．．もしかして光が強くなる方に進めばいいのか？」

そう思つてスペリオルは試しに龍帝剣を撃すと片方の道にだけ強い光を放つていた

「正解みたいね？それじゃあこつちの道を進みましょう！」

二人は龍帝剣の光に導かれてそのまま道を進んでいくと

一つの屋敷を見つけたがその前にはとある看板が置かれていた

「開発途中」？もしかして入っちゃいけない場所でしたかね？」

「でもそれならこの洞窟自体が入れなくなっているはずじゃない？」

それなのにここだけ入れないって言うのはどうみても．．．」

イズの言う通り運営がこんな風にミスをするとはとても思えず

もしかしてこれ自体が嘘ではないのかと思つている時にスペリオルは思い出した

「ああああああ!!思い出した!そうだ伏龍だ!!」

「伏龍？」

「諸葛孔明と呼ばれていた中国で有名な軍師の異名ですよ!!」

地に伏した龍で伏龍!あの石碑はそれを表していたんです!」

「えつと．．．つまりどういう事？」

「つまりこの屋敷は開発途中なんじゃなくてその諸葛孔明を模したイベント!」

確か三顧の礼！劉備が三度、孔明の元に出向いて懇願する話です！」
「なるほどね・・・つまり一回だけじゃダメだから

あと二回はここへもう一度、来なくちゃ行けないと言うわけね」

二人は昔のお話通りに一度、洞窟を出てから屋敷へとやってくるのを二度続けて行なった

すると三度目の屋敷の前には開発途中の看板はなく屋敷に入れるようになっていた

そして屋敷の中に入るとそこには扇が置かれていた

「あれがイベントの報酬ですかね？イズさんがどうぞ」

「えっ？でも私は何もしてないんだけど・・・」

「でもこのイベントを見つけたのはイズさんでしょ？」

だからあの扇を受け取る資格があるのはイズさんですよ」

「・・・スペリオルがそう言うのならありがたく受け取るわね？」

そう言っつてイズが扇を手にするとその姿が変わり始めた

爆風扇

DEX+200

「破壊不可」「龍凰翼」「爆風烈羽」

伏龍の帽子

VIT+50 DEX+100

「破壊不可」「星見」

伏龍の衣

VIT+100 DEX+150

「破壊不可」「伏龍の兵法」

伏龍の靴

AGI+50 DEX+50

「破壊不可」

『龍凰翼

能力・爆風扇を外す代わりに背中に装備して飛行できるようになる』

『爆風烈羽

能力・龍凰翼を発動している時に使用可能

背中から羽根を射出し爆発させる』

『星見

能力・星空を見る事で範囲内のプレイヤーやモンスターの動きを見る事が出来る

発動出来るのは一日に一回で夜の間のみ』

『伏龍の兵法

能力・兵法書が作成可能になる

兵法書を使用するとそれに書かれた効果を発動する』

その姿はまるで中国の貴族を思わせるような姿をしており

自然とイズの綺麗さを際立たせているような気がしていた

「とても素敵な装備ですね！イズさんにピッタリです！」

「そうかしら？／＼でもありがとうね？」

こうしてイズは新しい装備を手に入れて二人はギルドに戻ると
メイプルとサリーが期待の新人を連れてきたようだった

神秘の泉とサリーの決闘

あれからマイとユイは順調にレベルアップしスキルも獲得していった
そして今日は休憩しにとある海があるステージまで向かったらしく
それにメイプルとサリーまで同行したらしいのだが

スペリオルも誘われてそれを全力で拒否したのは言うまでもない

(なんで可愛い女子四人の水着に囲まれなくちゃならないんだ……)

ぶっちゃけ直視なんて絶対に出来ないから絶対に行かない……！)

そんなアホみたいな事を誓っている時

スペリオルの前に小さな妖精が姿を現した

『勇者様！どうか私達を助けてください!!』

『クエスト・神秘の泉を受けますか?』

「……このタイミングでクエストか……

まあとりあえず暇だし受けるとしよう」

スペリオルはYESのボタンを押すと妖精は嬉しそうな顔をしていた

『ありがとうございます!』

実は私達の里にある川が黒く濁ってしまっているのです！

もしかしたら元である泉に問題があるのかもしれない！』

「なるほどな．．．ならそっちに行くのが早そうだな」

スペリオルはその妖精に案内されて泉へと向かう

「これ．．．随分と酷いな．．．」

泉についてみるとそこは本来ならば綺麗なはずの泉が

まるで邪悪な何かを取り憑いたような邪気を放ち黒く濁っていた

「何か原因があるべきだと思うが．．．理由はなんだ？」

とにかくスペリオルは濁った原因を調べる為に泉の中に入るが特になく

それ以上に潜ろうとしても潜水スキルがないので奥まで調べられなかった

「うくん．．．濁った原因は更に奥の方にありそうだけど．．．」

これ以上は潜れないし．．．何か方法でもあればいいんだけど．．．」

『それなら渴きの草を使うのはどうでしょうか!』

「渴きの草？」

『はい!この先にある荒地に生えている草でどんな量の水も吸収してしまうんです!』

「なるほど．．．それでまずは水抜きをするってわけだな?よし!」

スペリオルはすぐに渴きの草を探しに荒地へ向かうと

そこには明らかに危険そうな草が生えていた

「おおう・・・調べなくてもすぐにこれだってわかるわ・・・」

『早速、取って泉に入れましょう!』

その草を取りすぐに泉へと戻ったスペリオルはその草を泉に投げた

するとみるみる泉の中の水は草に吸収されていきたった数分で泉は空になった

「マジでか・・・ゲームの中での設定とはいえ便利だな・・・」

つて・・・なんか中央から頭を出してる奴がいるんだけど・・・」

すると水が溢れていた泉の穴から顔を出している存在があった

特に敵意は感じなかったのスペリオルは近づいていく

『人間か・・・まさかここで見つかってしまうとはのう・・・』

「あんたが泉を汚していたのか?」

『ん? いや・・・泉を汚していたわけではないのだがのう・・・』

「えっ?」

『もしかして・・・あなたは泉の精霊様ですか?』

『いかにも・・・しかしそうか・・・泉が汚れていたのか・・・』

それはすまなかつたのう・・・体がここまで汚れていると泉にも影響が出てしまうのか』

「なるほど・・・体が汚れてたから泉も汚れてたのか

だったらその体の汚れを落とせば良さそうだな？それじゃ早速！」

スペリオルはインベントリの中にあつた石鹸などを使ってその精霊を綺麗に洗つたするとまるで仙人のような姿へと変わつていた

『いや〜！おかげで綺麗になった・・・感謝するぞ』

「別に構わないよ」

『これは例代わりだ・・・好きに使うが良い』

【神秘のお湯】

ギルドホーム専用アイテム

使用するとホームに神秘のお湯へ繋がる扉が出現する

入浴すると一時間の間、経験値を+5%する

効果は一日に一回だけ

「へえ〜！経験値アップボーナスが付与される温泉か！いいな！」

『ではさらばだ・・・勇者よ』

精霊は再び穴の中へと戻っていきそこから綺麗な水が再び流れ出したのだった

「・・・あん？思えばこれってギルドホームにお風呂が出来るって事だよな？」

スペリオルは自分のギルドが女性人数の方が多し事を今になって思い出す

「……あれ?もしかして俺……また碌でもないアイテムを入手した?」

一方その頃、海へとやってきていたメイプル達は
集う聖剣のメンバーであるフレデリカと会っており

サリーは彼女と炎帝ノ国の情報を賭けて勝負をする事になった
(どうせだしスペリオルにもらったアレを試してみようつと)

「ここからは本気で行くわよ!爆熱武者!」

サリーがスキルを発動すると炎が彼女を包み込み

その炎が晴れるとそこには炎の刺繍が施された白い和服を纏ったサリーが現れた
「嘘?!いきなり装備が変わった!」

「それだけじゃないわよ!爆熱の陣!」

更にサリーは爆熱の陣を使うと背中に光の輪が出現しステータスが上昇する

「ええ……もうそこまでいくと反則なんじゃ……」

「ちゃんとしたスキルだしメイプルに比べたら大した事ないわよ?」

「いや十分大した事あるから!」

「それよりも覚悟はいい?熱火爆輪斬!!」

「ちよっ!?!それは流石に無理いいいい!?!」

フレデリカは爆発によりHPを0にされて勝負はサリーの勝ちとなった
「ううゝ・・・あんなの反則でしょゝ・・・」

「だからメイプルのよりは普通だつて」

「・・・逆に何を持つて普通つて判断してるのよ・・・」

こうしてサリー達は炎帝ノ国の情報を手にいれる事が出来たのだつた

第四回イベント始まりの時

「はあゝ．．．本当にスペリオルはいいアイテムを手に入れてくれたわゝ．．．
気持ちよくお風呂に入りながらサリーはそう呟いていた

何故ならば今、彼女が入っているのは他でもないスペリオルが
クエストをクリアして手に入れたお風呂だったからだ

「もう今日はこのお風呂の効果を使ってしまったが．．．

それでも入りたくなってしまう魅力があるな．．．」

実は既に全員がこのお風呂の効果を使ってしまったているのだが

メイプル達は今一度だけこのお風呂に入っておきたかったのだ

その理由はもちろん．．．明日に控えている第四回イベントの為である

「いよいよねゝ．．．マイちゃんとユイちゃんのレベルも順調に上がったし

装備も充実．．．まさに万全の状態でイベントを迎えられるってわけね！

「はい！これもメイプルさんのおかげです！」

「いやゝ／／二人が一生懸命頑張ってくれたおかげだよ／／／」

「だからといって毒竜の洞窟をタイムアタックはおかしいけどね？」

もはや毒竜からしてみれば涙を流して命乞いをしていてもおかしくはないだろう
実際に運営側はその光景を見て恐怖を覚えていたのは言うまでも無い

「イベントは全員が毎日参加出来るとして・・・」

やっぱり現実でのお風呂とかご飯とかも考えないとダメよね？」

今回のイベントは休憩なしのギルド対抗戦なので

現実的な用事に関しては交代で作業を分担しなければならなかった

「あつ！でもスペリオルはずっと参加してるって話してたよ？」

「はあ!?そんなもん親が許さないでしょ!?」って・・・あいつ一人暮らしたたわね」

実はスペリオルは一人暮らしをしておりいくらゲームをしようと怒る相手がいない
のだ

つまり今回のイベントに関してはまさしくうってつけの人物だとも言える

「だとしても何も食べないでゲームし続けるのはどうかと思うぞ？」

「そうよね・・・下手に現実で倒れられても困るし・・・」

「心配です・・・」

「・・・そうだ！私とサリーでスペリオルの家に泊まればいいんじゃない!？」

「ちよっ!?!／／何言ってるのよメイプル!?!／／」

「へっ?ダメなの?」

「あつ当たり前でしようが!!／／／」

「・・・相変わらずメイプルは天然だな・・・」

「なんか普通に和んじや無いそうになるわよね・・・」

そんなこんなの話し合いをしている中で

実を言うところの会話・・・ホールにいるスペリオル達にも丸聞こえだった

「・・・なんか凄まじく危険な事を言われた気がするんだが・・・気のせいかな？」

「気のせいじゃないけど・・・流石はメイプルかな？予想の斜め上をいくね」

「ああ・・・今の発言を聞いて羨ましいじゃなくて同情したくなったよ」

「まあ話は流れたみたいだしとりあえずは良かったと思っておこう・・・」

なんて話し合いを男同士でしている中で再び風呂場から声が聞こえてくる

『それにしてもカスミの胸って大きいわよね・・・現実でもこれくらい?』

『まあな・・・だがいい事だけでもない・・・』

『着物を着る時には邪魔になるし肩凝りはひどいしな』

『・・・それ・・・持っている人だけが言える事よね?』

ええい!そんな事を言う奴はこうしてやる!!』

『なっ!!／／／何をする!!／／／あつ／／／そこは／／／』

『・・・そういえばイズさんの胸も大きいですよ・・・』

『えっ？えつとメイプルちゃん？』

なんでそんなに手をわきわきしながら近づいてくるのかな？』

『それはもちろん・・・こうする為です！』

『あぁ～ん／／／』

『ほほう？ゲームでも感触はリアルなのですな？』

『はわわわわわ／／／』

(（一体何してんの!!?）)

扉越しに聞こえてくる艶やかな声に男三人はなんとも言えない空気になってしまっ
た

こうしてイベント前日を終えていよいよ第四回イベント当日を迎える事になった
『ガオ～！それではこれより第四回イベントを開催するするドラ～！』

ルールはもうみんなも知っているとは思うけど改めて説明するよ～！

今回はギルド対抗戦でギルド一つにつきオーブを一つ所有しているドラ～！

そして自軍のオーブを拠点に置いて六時間経過したらポイントゲット！

更に！相手のオーブを奪い取って拠点に置いて三時間経過してもポイントゲットド

ラ～！

でも〜！回収したオーブは三時間が経ってしまおうと相手の拠点に戻ってしまおうし相手は奪われたオーブの場所を確認する事が出来るので注意してね〜？

そしてそして！今回のイベントにはデスペナルティがあるドラ〜！

一回死亡することにステータスが減少し五回目でリタイアになってしまおうドラ〜！全滅したギルドはそのまま終わりになってしまうので死なないようにね？

それじゃあイベントフィールドに転送するよ〜！頑張つてね〜！ガオ〜！』

ドラぞうからのイベント説明が終わると同時にイベントは始まり拠点がある場所へと転送される

楓の木の拠点となる場所は防衛にも最適な洞窟の中だった

「なるほど・・・小規模なギルドには防衛に有利な場所が選択されているのか」

「運営としては絶対に大規模ギルドと同じようにしたかったと思うけどな・・・」

「それじゃあみんな！目指せ上位入賞！頑張るぞ〜！」

『おお!!』

突撃！楓の木

イベントが始まり楓の木のメンバーはそれぞれに動き出していた

サリーとスペリオルは単独でオーブを奪いながら地形の把握

クロムとカスミはペアで行動して近場のオーブを奪いに行動

残ったメンバーは自軍のオーブの防衛を担当してもらおう事になっていた

「さてと・・・それじゃあ私達もここで解散ね・・・くれぐれも目立たないですよ？」

「それを今言うかね？てかどう考えても遅いと思うんだけど・・・」

生憎というべきなのかスペリオルのスキルに目立たないものはなく

どんなに頑張ったとしてもバレてしまうのは時間の問題だろう

(むしろバレた方が襲われない可能性が高いと思うんだけど・・・)

しかし逆にクロムとカスミはバレた方が安全なのではないかと考えていた

もはやスペリオルはペインに並ぶほどのプレイヤーとして有名であり

まず戦いを挑もうとするような人達がいらないのではないかと

「とりあえず俺もぼちぼちと回収するからよろしく・・・ケンタウロス！」

スペリオルは人馬状態となって森の中へと消えていき

サリー達もそれぞれの役目を果たす為に急いで解散した

そして森の中を突き進んでいたスペリオルはプレイヤーを発見する

(おっ?二人で行動しながら周囲の警戒か・・・)

って事はこの近くに拠点があるってことかな?)

「まずは二人」

「スツスペリオルだああああ?!?!」

まるで通り過ぎる車のようにスペリオルは二人の間を抜けて

その隙にダメージを与えて二人のプレイヤーを倒し先にあるオーブを目指す

(うゝん・・・どうせ後々で楽になるんだし全キルさせた方が早いよな)

拠点を見つけたスペリオルはオーブだけを取るのには面倒だと思い

それならばどうせ全キルさせる事にもなるのだし先にやっってしまうと考えた

「召喚!サイコゴレム!」

『ウオオオン!』

「なっ?!こいつはスペリオルのきよじ」

プレイヤーの一人がサイコゴレムの存在に気がつくが

時すでに遅くその巨人の足に踏み潰されて他のメンバーも次々に倒されていく

「・・・自分でやっっておいてなんだけど・・・これはもう第一回イベントと一緒にやね?」

スペリオルは自分のやっている行動に少しだけ呆れていると

どうやらサイコゴーステムが全てのプレイヤーを倒し終えたようで

なんの脅威もない中、スペリオルはゆっくりとオーブを回収するのだった

「さてと・・・それじゃあ次の場所に向かうとするか」

こうして初日にも関わらず全キルを受けるギルドが多数続出し

運営側が初日でイベントが終わるのではないかと恐怖したとかなしいとか

「ただいま～！オーブ回収してきたよ～！」

「わあ！こんなにいっぱい！すごいよサリーー！」

「へへ～ん！それより他のみんなは？」

「カスミとクロムはさつきオーブを持ってきたよ

スペリオルはまだ帰ってきてないんだ」

「ただいま～・・・おっ？サリーも帰ってきてたのか」

「まあね～！・・・って・・・あんた初日から取り過ぎでしょ・・・」

「そうか？とりあえず全キルさせてから奪ってたから結構時間も掛かったんだが」

「全キルさせてからオーブ取ってたの!?あんたは鬼か!？」

サリーはやはりスペリオルに行動させるべきではなかったと思いが

ら

とりあえず回収してきてもらった数十個にも及ぶオーブを貰い受けた

「それじゃあ俺も続きを」

「ちよつと待った! あんたはここで待機してなさい!」

「ええ〜・・・」

「あなたの所為で間違いなく大勢のプレイヤーが押し寄せるから言ってるの!」

少しは加減つてものを覚えなさい!」

「あい・・・すいません・・・」

今日はこれ以上、スペリオルに暴れてもらっては困ると思ひ拠点の防衛を任せる事に
した

「しょうがない・・・それじゃあ俺はここで待機してるとするか・・・換装! 武者!」

スペリオルは仕方ないと洩々ながらサリーの言う通りにして

装備を武者シリーズに変更し拠点で待機する事にした

そしてサリーが去ってからすぐにスペリオルが奪ってきたオーブを取り返しに

プレイヤーが大勢やってきたのだが・・・

「武化舞可の大砲! ぶっ飛ばせ!!」

狭い洞窟ではスペリオルの攻撃を回避する事など出来ずなす術もなく全滅させられ
ていく

おそらくはもうすでに二度目なのでデスペナルティも相当なものになっただろう

「なんとというか・・・見ていて悲惨な気持ちになってくるわね・・・」

「そうだね・・・取りこぼしてもマイちゃんとユイちゃんの投擲で落とされるし

最後の最後にはまさしく無敵のボスキャラ、メイプルが待つてるもんね・・・」

そして一方的に蹂躪されている姿を見てイズとカナデは可哀想な気持ちになり

「・・・私の出番・・・ない気がする・・・」

メイプルも身捧ぐ慈愛を使う以外、自分の出番はないのではないかと嘆いていた

一方その頃、運営側では・・・

「・・・これ本当に大丈夫か？初日で終わらないよな？」

「流石に大丈夫だろ・・・多分・・・きつと・・・」

「お二人共・・・現実を見ましよう・・・」

事実として予定していた開催期間が大幅に短縮されそうです・・・」

「おお・・・まさかこんな結果になるとはな・・・」

「本当はポイントを貯めるのが目的のイベントだったはずなのに・・・」

スペリオールとメイプルが出てくると殲滅戦に早変わりするんだよね・・・」

「とりあえずまだ全滅したギルドはないので大丈夫だとは思いますが・・・

どうします? やっぱり日程を変更しますか?」

「いや・・・とりあえずは様子をみよう・・・」

結果が完全に決まったらその時にイベントは終了しようか

・・・でも覚悟はしておいてね?」

「「「はあ・・・」」」

スペリオルとメイプルの二人の所為で更に心労が溜まる運営陣だったとさ

炎帝との遭遇

イベント初日はスペリオルの活躍もあり

楓の木は多くのポイントを獲得した

しかしだからと言って油断出来るような状況ではなかった

「やっぱり大規模なギルドの方が得点は上か・・・」

特に炎帝ノ国と集う聖剣は凄いな・・・一二独占かよ・・・」

そう・・・ポイントを多く獲得していたとしても

人数の差が出ているのか大規模ギルドである炎帝ノ国と集う聖剣の方が

ポイントは上でありこのままでは他のギルドにも抜かされる可能性があるだろう

「てかみんな初日から飛ばすな・・・」

「これはもうやりすぎなのは俺だけじゃないんじゃないか？」

「そうね・・・正直ここまでなのは予想外だった・・・」

「これは本格的にスペリオルにも働いてもらわないといけなくなっちゃうね」

「そこら辺は大丈夫だけど・・・問題は・・・」

「うん・・・この二つがウチに対してどう行動してくるか・・・だね」

スペリオルとサリーが警戒していたのはこの二つのギルドがどう行動するかだった

このまま周りのギルドを倒してくれるのならば特に問題はないのだが

もしも楓の木に攻めてきたら・・・不利なのはこっちで間違いないだろう

しかもこちらは小規模ギルドなのでペナルティはかなり痛手になってしまう

「とにかくここからはスペリオルにも活躍してもらおうからね！」

私はその間に二つのギルドの情報を集めておくから！」

「了解・・・！それじゃあもう一回大暴れと行きますか・・・！」

「・・・頼むから少しは自重してよね？」

「・・・いやだからさ・・・ここまで来たら今更だろ・・・」

そう言いながらスペリオルは洞窟を後にした他のギルドへと向かった

もちろんこの前のように全キルしてオーブを奪うという事を繰り返している

何やら自分が戦っているところとは別の方で戦闘音が聞こえてきた

（別のギルドがどこかを攻めてみるみたいだな・・・）

どうせならどっちも全キルした方がいいだろうな・・・）

スペリオルは全キルを目指して次のギルドに向かうと

そこでは炎帝と呼ばれているトッププレイヤー・ミイの姿があった

（おおう・・・まさかミイがいるとは・・・流星に驚いたな・・・）

彼女がここにいてるって事はもしかして炎帝ノ国の拠点はこの近くにあるって事か？

いずれにしてもここで彼女とやり合うのは・・・不味いんだろうな・・・」

おそらくミイと戦えば激戦となり全力で戦わなくてはいけなくなるだろう

そうなってしまうえばスペリオルの情報は全て晒される事になってしまう

そうなれば後でサリーがどんな風に怒るかなど分かりきっていたのだが・・・

(それでも・・・やっぱり相手したいと思うのが普通だよな・・・！)

「換装！武者シリーズ！武化舞可の號刀！」

「!?」

突然の斬撃にミイは驚きながらもちやんと躲しており

そしてゆっくりと姿を現したスペリオルの姿を見て驚いていた

「・・・まさかお前と出会うとはな・・・スペリオル・・・！」

「俺もだ・・・でもやっぱり相手してもらいたいと思うのが普通だろう？」

「始めようぜ・・・！炎帝のミイ！」

「いいだろう・・・相手をしてやる！勇者のスペリオル!!」

「・・・えつと・・・ちよつと待ってもらっていい？」

「?どうかしたのか？」

「さっきの・・・勇者とかって何？」

「知らないのか？お前の異名なのだが・・・」

「いや全然知らないけど!?なに勇者って!?俺一度も名乗った事ないけど!」

「しかしお前と戦った相手はまるで勇者みたいな相手だったと言っていたぞ?」

「マジか・・・俺の異名・・・勇者で確定しちゃったの・・・」

まさかのミイと戦う前からスペリオルの心はダメージを負っており

しかも肝心のダメージを与えた張本人は心の中でこんな風に思っていた

(やばいやばいやばい!本当にスペリオルが目の前にいるよ!)

カツコいいな・・・勇者って異名も納得だし・・・

はあ・・・私もあんな騎士様が仲間になつてくれたらなく・・・／／／

実を言うとミイはプレイを始めた時からスペリオルのファンになっており

彼女のカツコいい言動なども彼を真似して始めた事だった

もはや今の彼女にはスペリオルに対して勝手にフィルターが掛かっている状態なの

で

実際に目の前で頭を抱えているスペリオルもカツコよく見えていた

「はあ・・・まあ考えるのは後にして・・・そろそろ始めようか?」

「ああ・・・!」

二人はお互いに武器を構えてゆつくりと間合いを詰めていき

そしていよいよ武器を振るおうとしたまさにその時だった

「ミイ様……ここは我らに任せてお逃げください！」

「ええ!？」

まさかの邪魔が入ってしまいスペリオルは炎帝ノ国のメンバーに足止めされ
ミイの方は後ろを押されるように自分の拠点に連れて行かれてしまう

「はあ……今回はお預けか……爆鳳覇！」

『ギヤアアアアア!?!?』

スペリオルはミイの逃げていった方向を見ながら

次こそはちゃんと勝負をしてみたいと思うのだった

そして肝心のミイはと言うと……

(うう……もつとスペリオルとお話したかったのに……)

……今度、おつお茶に誘ってみるかどうかな?／／／

後で帰ったらミザリーにどうやって誘えばいいのか相談しよう!／／／

何やらルンルン気分で帰る姿を部下に見られており

一体どうしたのだろうかと心配されていた事を本人は知らない

サリー救出作戦!

あれからある程度のオーブを獲得したスベリオルは一度、拠点まで戻ってきていた

「ただいま〜!オーブ取ってきたぞ〜!」

「おお〜!これまた大量だね〜!!」

「だろ?でもここからは量を取るのも厳しくなりそうだ」

「どうして?もしかして守りが固くなってきたの?」

「いや・・・むしろ全滅するギルドが出てきたんだよ」

「あゝ・・・なるほど」

今回のルールはギルドのメンバーが全員失格となった場合

その拠点にあるオーブも消失し残っているギルドにも不利に働く

つまりスベリオルはこれ以上、取れないと言った理由は

そもそも襲うギルドが無くなってきたという事だった

「そうね・・・確かに全滅するギルドも増えてきたけど・・・」

「問題は僕達もまだポイント的には厳しいって事だよね」

「今回のギルド対抗戦はそもそも数々の勝負だからな」

どんなに頑張っても俺が一日掛けて集めるオーブの数よりも大規模ギルドの集めている量の方が上だからな」

いくら少数精鋭の楓の木出会っても今回のイベントはかなり不利な状況でありこればかりはどうしても覆る事はないと考えていた

「仕方ない・・・みんなが集まってこれからの事を話すか・・・」

外の三人はまだ戻ってこないのか？」

「ちよつと待ってね？」

イズは外に出てスキル『星見』を使い索敵出来る範囲内を探す

「カスミとクロムはこっちに向かってきているわ

でもサリーちゃんはまだ姿を確認出来ないわね・・・」

「つて事はまだギルドの調査をしてるってわけか・・・」

無茶してなければ良いんだが・・・」

そんな事を考えていると案の定と言うべきなのかメイプルにメッセージが届いた

それは他ならぬサリーからのもので内容はもしかしたら死ぬかもしれないというものだった

「やっぱりか・・・メイプルと俺で向かいますから

イズさん達はここで待機しててください！」

「分かったわ! 気をつけてね!」

メイプルは機械神、スペリオルは地上から人馬状態でサリーを探す

すると遠くの方から戦闘音が聞こえてきて二人はすぐにそちらに向かう

「はあ……はあ……」

(やばいな……完全にドジちゃった……)

「ふふくん! 流石のサリーちゃんもここで終わりかな?」

「みたいね……でも最後の最後まで足掻くから……!」

「いいね! そっちの方が倒し甲斐があるよ!」

フレデリカは部下に指示を出して一斉に魔法を放とうとした時だった

何かの影が現れて攻撃されそうなサリーを救出したのだ

「全く……大丈夫か? お姫様?」

「嘘……なんでスペリオルがここに……」

その影とは他でもないスペリオルであり間一髪で彼を助け出したのだ

しかしサリーは彼がここに来た事に驚くと同時に今の自分の状況に気がついた

(わっ私///スペリオルにお姫様抱っこされてるううううう!!?///)

あまりの事に顔を真っ赤にして恥ずかしがっているサリーだったが

そんな事を気にしている感じもなくスペリオルとフレデリカは睨み合っていた

「まさかスペリオルが来るなんてねく．．．完全に想定外かな．．．」
「残念だが．．．ここに来たのは俺だけじゃないぜ？」

スペリオルの言葉が聞こえた次の瞬間、上空から無数の弾丸が降り注いだ
「メイプル！」

「お待たせサリー！もう大丈夫だよ！」

「嘘でしょ．．．スペリオルだけじゃなくメイプルまで．．．」

楓の木で最大の戦力である二人が現れて一気に形勢は逆転

フレデリカも流石に勝てないと悟ったのか迂闊に攻めてこようとはしなかった
「さて．．．メイプルはサリーを連れて拠点に戻ってくれ

俺はここで．．．少し暴れていくとしよう．．．！」

スペリオルの言葉を聞いた瞬間に集う聖剣のメンバーは恐怖を覚えた

今の彼は完全に獲物を見つけてしまった獰猛な獣に見えたからだ

「分かった！スペリオルも気をつけてね！」

「誰に言ってるんだ？それよりも早くいけ！」

「うん．．．チョットサリーニハ話シタイ事モアルシネ？」

「えっえつと．．．メイプル？なんか怖いんだけど．．．」

「そんな事ないよ？それじゃあゆつくり．．．オハナシしようね？」

「ひいひいひい!??!」

この時のサリーはお化け屋敷よりも恐怖した事は言うまでもない

「行かせるか!みんな魔法攻撃!」

『ハ!』

メイプルはサリーを預かってその場から脱出しようとする

フレデリカ達はそれを撃ち落とそうとするが

「召喚!サイコゴレム!ガンレックス!」

『ウオオオオン!!』

『ギヤアアアア!!』

スペリオルが召喚したガンレックスによって攻撃は阻まれて

更に召喚されたサイコゴレムによって何人かが倒されてしまった

「さあ・・・ここからはウチのメンバーを虐めてくれた・・・お返しの時間だ・・・!」

(ヒエエエエ!!これだけお膳立てしたんだからちゃんとしてよドレッド!!)

一方その頃、楓の木の拠点ではマイとユイの二人がドレッドと対決していた

「やれやれ・・・小さい女の子を虐めるのは俺の趣味じゃないんだけど・・・」

まあこれもお仕事だしちゃんとやらないとフレデリカがうるさいからな」
「はあ．．．はあ．．．まだ．．．まだです．．．!」

「その根性は見事．．．だが実力の差は見えてるぜ？」

そう言つてドレッドがまさにトドメを誘うと近づいた瞬間だった

『爆裂!・大雷蛇!!』

!？」

突如、自分の頭上に蛇の姿をした雷は落ちてこようとしてきており

ドレッドはなんとかそれを避ける事には成功したがそれは罨であった

『鬼牙百烈撃!!』

「グアアアアアア!?!」

逃げた先には更にとある人物が待つており

ドレッドはモロにその攻撃を喰らってしまう

「クツツ．．．まさかこつちにも伏兵がいるとは．．．まいったなこりや．．．」

ドレッドは文句を言いながら消滅しマイとユイはそれを見て喜んでいた

「ありがとうございました!・張飛さん!・関羽さん!」

マイとユイの前に姿を見せたのは張飛と関羽の二人だった

彼らはスペリオルのスキル『義兄弟の絆』で呼び出されており万が一に備えていたの

だ

『良いつて事よ！仲間を助けるのは当然の事だぜ！』

『左様・・・それにお主達が注意を引いてくれたからこそその勝利だ』

「はい!!」

『む？そろそろ時間のようだ・・・それでは後を頼む』

そして時間が来てしまった二人は消えてしまったが

彼らのおかげでなんとか最悪の状況を回避する事が出来たのだった

出撃メイプル！

無事に（？）集う聖剣を全キルしてきたスベリオルは

ようやく拠点に戻ってきていた

「ただいま〜！いや〜！

手強いのがいっぱいだったからつい盛り上がっちゃた！

ってあれ？サリーは？」

「流石に限界が来たみたいで奥で寝てるわ」

「それと作戦も教えてくれたぞ

「ここからはメイプルを動かして殲滅戦に切り替えるそうだ」

「だろ？うな・・・俺も一通り見てきたけどもうギルドの数も少ない

俺らも順位的にも上位に入るのは間違いないし

「ここからはオーブを奪う事よりも襲ってくる敵を減らす方が得策だろうな」

「それでなんだが・・・まずはどこを狙うのがいいと思う？」

「そうだな・・・出来れば全滅しそうなギルドを狙いたいところだが・・・

状況も分からないし近場から狙った方がいいだろうな

あつー!あとこことこのギルドは消しておいていいぞ」

「どうしてだ?」

「俺が全滅させた」

「……」

まさかの発言にクロムは驚きながらもとりあえずサリーの地図を見て作戦を考える

確かにスペリオルの言う通り全滅を狙うのが理想なのだ

どこがどうなっているのかは分からない

なのでまずは一通り回ってもらわなければならないだろう

「……よし!メイプル達には悪いがまずはオーブ奪取の目的でギルドを回ってもらおう

スペリオルはサリーがいなくなった分のオーブを回収してくれ」

「了解!それじゃあ本格的に作戦を開始するのは明日からだな」

翌朝になりサリーは大事をとって今日の夜まで休む事にし

メイプルはマイとユイの二人を連れて各ギルドを回る事にしたのだが

「ヒヤッホー!気持ちいい!!」

「ギャアアアアア!!轢かれるうううう!!」

「助けてくれえええええ!!」

どちらかというところオーキスで各ギルドを潰しに向かっているように見えた

「・・・あのスキルの所為でここら辺の地形が変わりそうだな・・・」

それを上空から見ていたスペリオルはオーキスに轢かれるプレイヤーを可哀想に思
いながらも

これも勝負だと割り切り切りながらメイプル達とは別の方向に向かいオーブを回収しに
向かうのだった

そしてメイプル達は最初の地図に書かれていた炎帝ノ国へと向かっていった

「はあく・・・なんかメイプルがこつちに向かつてきてるらしいよ・・・」

しかも偵察隊の話じゃ戦車に乗ってるってさ・・・最悪だよ・・・」

「まあまあマルクス・・・ミイが戻ってくるまで持ち堪えされるのが私達の役目

彼女が戻ってくればきつとなんとかしてくれるはずですから」

「そうだね・・・それじゃあ少しだけお仕事頑張ろうかな・・・」

炎帝ノ国でトラッパーの異名を持つマルクスはなんとかやる気を出した瞬間だった

「イヤッホゥ！最初のギルドにとうちやくく！」

「・・・やっぱり逃げてもいいかな？」

自分の仕掛けた罠を戦車で悉く破壊しながらやってきたメイプル達を見て
マルクスは一気にやる気を無くし逃げたくなったのは言うまでもなかった

「これ・・・ミイが帰ってくるまで持ち堪えるなんて無理じゃないの？」

「かもしれないですね．．．ですがそれでも．．．一矢は報いませんと．．．!」

マルクスとミザリーはそれでもメイプルを止めなくてはならないと思った時だった
「すまない!二人共待たせた!」

「「ミイ!」」

二人にとつてはまさに救世主であるミイが現れて形勢は互角に戻ったかのように見え
えた

しかし彼らは知らない．．．目の前にいるのは予測不能のメイプルだという事を．．．
痛い!?!もしかして貫通攻撃!?!でも大丈夫!

スペリオルから貫つたこれのお陰で体力回復!

「くっ!貫通攻撃のダメージではビクともしないか．．．!」

ミイは貫通攻撃を使ってメイプルを攻撃するのだが

ダメージを与えてもすぐに不死鳥のティアラに付いているスキルで回復してしまい
全くと言っていいほどメイプルを倒せるような感じではなかった

「こうなれば．．．!アレを使う!時間を稼いでくれ!」

「分かった!」

マルクスはミイの言葉を聞いて時間を稼ぐ為に罫を張る

その間にミイは呪文を唱えていき大技の準備へと入っていく

「よし！準備が出来た！喰らえ！炎牢！！」

そして呪文を唱え終えるとミイはメイプルの上空に向かって飛び

三人の炎で出来た牢獄の中へと閉じ込めた

「ふえええ!!?炎上でHPが徐々に減っていく!!?」

しかも不死鳥のテイアラでも回復が追いついてない!!?」

どうやらその牢獄は炎上のダメージが継続的に入るようで

しかもそのダメージは不死鳥のテイアラで回復するよりも上だった

流石のミイもこれで勝ったと思ったまさにもその時だった

「こっぴなつたら・・・不死鳥の炎！」

「何っ!!?」

なんとメイプルは炎で出来た不死鳥に乗って無理矢理に炎の牢獄を脱出した

「更にく！不死鳥の羽！」

「グア！」

「キャア！」

「マルクス！ミザリー！」

そして脱出してすぐに今度は炎の翼を使って

ミイの後ろにいたマルクスとミザリーを倒してしまった

もはや自分に勝ちはないと悟ったミイは最後の手に出る

「こうなったら・・・せめて道連れになってもらうぞ!メイプル!」

「ええ!?!ちよちよちよ!」

ミイは最後の手として自爆技を使ったのだが

「ふう〜・・・即死技じゃなくてよかった〜!」

残念ながら結果はメイプルの完全勝利だった

「ふええ〜ん!メイプルのバカ〜!」

次に会った時は絶対に燃やしてやる〜!」

その事実を知ったミイは森の中で一人泣いていたのだが

「・・・えつと・・・見なかった事にしよ・・・」

それをスペリオルに見られていた事は本人も知らないのだった

楓の木VS集う聖剣

メイプル達が炎帝ノ国と戦う少し前の事

「悪い……まさか伏兵がいるとは思ってなくてな」

「私も……まさかスペリオル一人に全滅させられるとは……」

「問題はないさ……」

スペリオルの実力もそれくらいはあると思っていたしね」

「でもどうするんだペイン？」

流石にドレッドとフレデリカのデスペナはキツイぞ？」

「そうだね……」

二人の損害も考えて……仕掛けるのなら今夜しかない」

それを聞いて他の三人は嬉しそうに笑っていた

しかしそれ以上に嬉しそうにしていたのは間違いないくペインだった

「もしかして……そんなにスペリオルと戦うのが嬉しいのか？」

「ああ……いつもはお互いにスキル無しでの決闘しかしてないからね……」

だからずっと思っていたんだ……全力の彼と戦ってみたいって……！」

「やれやれ・・・こいつも歴としたゲームマ―って事か・・・

でも残念だが今回はちゃんと仕事を守ってくれよ?」

「分かつてるさ・・・今回、僕が戦うのはスペリオルじゃない」

そしてその日の夜、メイプル達はローラー作戦を終えて拠点に帰ってきていた

「ただいま〜!ごめんね〜・・・炎帝ノ国のオーブは取れなかったよ・・・

でもでも他のところからたくさんオーブは取ってきたから大丈夫だよ!」

「お疲れ様!まあ炎帝ノ国は大規模なギルドだからしょうがないって

それにこれだけの収穫があれば十分なお釣りになるよ!」

「えへへ／／あつ!そういえば地図に書かれてたギルドなんだけどいくつか無くなっ

てたよ?」

「本当?もしかしてどこかのギルドが動いて倒しちゃったのかな?」

サリーは地図の修正が必要になるとメイプルの教えていく場所を消していたが

実際は彼女がオーキスでプレイヤーを轢いた事により

メンバーが全滅して消えたという事は誰も知らなかったのだった

「ただいま〜・・・はあ・・・やっぱりオーブを取るの難しくなってきたな〜・・・

ほとんどの小規模ギルドは消えてるし

中規模のギルドもだいたい数が減って守り優先って感じだ」

「お疲れ様々……それでも十個以上のオーブを取つてくるところは流石だわ……」
「そうか？……それよりも全員戦闘準備をしておいた方がいいぞ」

「……もしかして……集う聖剣？」

「ああ……ここに帰つてくる途中で見かけたよ

数は四人……全員がトッププレイヤーだ」

「数はこつちが有利だけど……スペリオル的には勝算はどれくらい？」

「まあウチが勝つのは間違いないだろうけど……」

最悪の場合は何人かのデスペナも考えておいた方がいいだろうな」

「勝つても無傷つてわけにはいかないって事か……とにかくまずは準備！」

サリーに言われてイズとカナデは罠を設置し

スペリオルも武化舞可の大砲を装備して待ち構える

そして足音が聞こえた瞬間にスペリオルはその大砲を放った

他の罠と共に大爆発を引き起こし普通ならばこれで倒せているはずだが
生憎とそんな甘い相手ではない事は知っているので

全員が警戒体制を敷いたままであつた

「おいおい……洞窟に入った瞬間にやってくれるじゃねえか？」

「ケホケホ！本当だよね……おかげで服が煤まみれだよ」

「しかもこの攻撃……スペリオルも戻ってきてたのか」

「嬉しい誤算だよ……彼とも戦えるんだからね」

予想通りと言うべきなのか集う聖剣のトッププレイヤー

ペイン、ドレッド、ドラグ、フレデリカの四人は無傷であり

この後の戦闘には全くと言っていいほど問題がないように見えた

「やつぱりあれくらいじゃ倒れないか……!」

「換装!・龍帝!・からの義兄弟の絆!」

『おっしゃ!再び俺様参上だぜ!!』

『鬼髭の関羽!いざ参る!!』

スペリオルは四人の姿を見てすぐさま装備を変更し

スキルを使って張飛と関羽の二人を呼び出した

「げっ……それってスペリオルのスキルだったのかよ……」

「嫌そうな顔してるがあいつの相手をするのはお前なんだぜ?」

「分かってるよ」

そう言つてドレッドは神速に違わないスピードでスペリオルの懐に入り込んできた

しかしそれを読んでいたスペリオルは見事にドレッドの一撃を受け止める

「嘘だろ?これでも本気の一撃だったんだけどな……」

「相手が早いのなら相手の先を読めばいい

なんて言っている武術の達人に感謝しないとな」

「それを実現出来てお前も普通じゃないのな!？」

そんな軽口を言いながらも二人は凄まじい攻防を繰り広げており

その横ではドラグをクロムと張飛、関羽の三人で抑えており

フレデリカの相手をサリーとカスミの二人が

そして最後のペインの相手をしていたのはメイプルを先頭に他のメンバーで援護していた

(流石にこっちの方が部が悪いな・・・特にペインの方・・・)

いくらメイプルが鉄壁の持ち主でもペインの攻撃はその上をいく・・・

(ここからどう動いたもんか・・・)

「考え事してるなんて随分と余裕じゃないの!」

「むしろ余裕がないから色々と考えてるんだけど?」

まさにそんな事を言った瞬間にメイプルがペインに斬られてしまいHPが一になってしまった

しかしメイプルは暴虐を発動し自らを異形の怪物に変えてペインを撃退した

「マジか!?ペインがやられたのかよ!？」

「よそ見していいの？三位一体!!」

『おう!!』

俺は義兄弟の絆を使っている間に発動出来るスキル『三位一体』を発動

それにより張飛と関羽の鎧が飛んできて俺に装備され体が黄金に輝いていく

「おいおい・・・そんなパワーアップありかよ・・・」

「こいつで終わりだ!三位一体!星龍斬!!」

パワーアップした俺の一撃を受けてドレッドと隣にいたドラグは消滅

残っていたフレデリカもメイプルによってキルされ

この戦いの勝者となったのは楓の木となった

・・・ジブリで見たな・・・

なんとか集う聖剣に勝利した楓の木だった

辛勝という事もあり一度、作戦を見直す事にした

「はあく・・・やっぱり暴虐を使わされちゃったか・・・」

『ごめんね』

「いやメイプルが悪いわけじゃなくて」

「それだけペインが強かったって事だな」

俺も三位一体を使わされたし・・・奥の手はもうないな」

スペリオルもほぼ全ての手札を曝け出してしまったのでもはや出す物はなく

次の戦闘が始まってしまったら間違はなく対策をされてしまうだろう

「となると・・・やっぱり当初の予定通りに動いた方がいいかな？」

「だな・・・俺達の順位もいよいよ決まってきたし」

今回の報酬は一位から十位までは同じ報酬だからな

それを考えたら・・・あの作戦を実行した方がいいだろ

・・・運営には申し訳ないけど・・・」

それを遠くから見ていた楓の木のメンバー全員がこんな事を思っていた
(・・・二人だけで十分だったかも・・・)

一方その頃、炎帝ノ国は他の中規模ギルドからの襲撃を受けており
ほとんどのメンバーがいないという苦しい状況に追い込まれていた

「諦めるな！必ず勝機はある！私に続け!!」

『おお!!』

なんとかミイの存在により気力を保つ事は出来ているが

もはや状況は絶望的でありミイも全滅するのは時間の問題だと思っていた

(このままではどちらにしても・・・!!)

「ミイー!」

「っ!」

そして中規模ギルドの攻撃がミイを襲おうとしたまさにその時だった

『ふうく・・・危ねえ危ねえ・・・』

「スッスペリオル!」

その攻撃を直前に現れたスペリオルが全て防ぎミイを助けたのだ

敵であるスペリオルがどうして自分を助けてくれたのか

なんて事を考える事もなく今のミイの頭にあつたのはたった一つだけだった

(はあく／＼／やっぱりスペリオルは王子様みたい／＼／)

『あのく大丈夫ですか?』

「えっ?」

そんな事を考えているといつの間にか後ろに怪物の姿をしたメイプルの姿があり
ミイは目の前に突然それが現れてしまい完全に思考が停止してしまった
するとメイプルも攻撃を受け過ぎてしまったのか怪物の姿が解けてしまう

「ありや!?!あゝ . . . もうダメージが溜まっちゃったかゝ . . .」

「メツメイプル!?!」

『おいおいどうするんだよこの後の作戦』

「大丈夫!もう一つとっておきの変身があるから!」

『 . . . なんか凄まじく嫌な予感がするんだが . . . 』

「いっくよゝゝ!機動武神天鎧王!」

メイプルがそのスキルを叫んだ瞬間

彼女の後ろには山と同等の大きさをした巨大な顔岩が姿を現した

そして彼女がその中に入ると巨大な顔岩は変形していき

雲を突き抜けるほどの巨大な巨人の姿へと変貌した

『 . . . マジかよ . . . 』

『へっへくん! どうどう!? スペリオルよりも大きくなったよ!』

『いや問題はそこじゃねえんだけど・・・』

「えっと・・・あれの数を増やすのかい?」

「正直要らない気もするけど・・・臙! 分身!」

「フアントムワールド!」

そこへ更にサリーのパートナーである臙とカナデの魔法でその数を七体に増やす

その光景を見ていたスペリオルは先ほどの自分達よりも酷いのではないかと思った

『それじゃあいつくよ! 輝道天鎧砲!』

胸と両腕の光球からとんでもないエネルギーが放出され

メイプルの前方が一気に焦土と化した

その光景を見ていた全ての人間がこう思っていた

(・・・この光景・・・なんかジブリで見たな・・・)

まさにあの地獄のような火の七日間の再来かと思うほどの暴れっぷりであり

実際は十分程度しかあの姿になる事は出来ないらしいのだが

あの姿を目の前にしたプレイヤー達はその十分すらも長く感じたのだった

「・・・あれもう反則なんて言葉じゃ収まらないでしょ・・・」

「全くだ・・・ていうかあれはもうプレイヤーとかボスとか超えてるだろ?」

「ああ . . . あれはもう神とか名乗った方が納得がいくぜ . . .」
「すごいなメイプルは . . . 俺ももつと頑張らないとな . . . !」
こうして第四回イベントは予定よりも大幅に早く終わってしまったが
無事に楓の木は第三位にランクインする事が出来たのだった

一方その頃、運営側の方では . . .

「 . . . やっぱり早く終わりましたね . . . 」

「ああ . . . それにしてもメイプルは本当にやってくれるな . . .

イベントだけのフィールドとはいえもう使い物にならないぞ?」

「てか誰だよ . . . メイプルに機動武神天鎧王のスキルを渡したの . . . 」

「いや自力で獲得されただけだよ . . . 」

「もう今度からメイプルは別枠でイベントに参加させるか?」

「 . . . それも視野に入れた方がいいかもしれないな . . . 」

「まあ . . . 何にしても . . . 」

『今日は残業決定だ . . . 』

打ち上げと忘れていたアレ

第四回イベントが終わりを迎え楓の木は無事に第三位となる事が出来た

「三位か・・・奇しくも第一回イベントのメイプルと同じ順位になったな」

「えへへ／＼／」

「今回は十位から上は同じ景品らしいし無理に一位を狙う必要はなかったからね

それに・・・なるべく今後の事を考えて手の内は隠しておきたいし」

「・・・何というか・・・サリーって意外とズル賢いよな？」

「意外とって何!?てかズル賢くないし!!」

「それを勉強で生かしてくれたらなく・・・」

「あくあく聞こえない聞こえない!」

「子供か・・・」

『あははは!』

思った以上にいい順位を取れたからなのかみんなは大いに盛り上がりつつあり

そんな中でメイプルが今回の打ち上げをしようとしてきた

「いいんじゃないか?それなら俺は知り合いに料理でも頼むか」

「いいの!?! てかスペリオルにそんな知り合いがいるの?」

「まあな? 基本的に頼めば『あるよ』って何でも出してくれる店長だ」

「・・・それ・・・なんかドラマで見た事ある気がするわ・・・」

「気のせいじゃないか?」

「それなら私はケーキの方を注文しておくわね」

「うう〜ん! なんか盛り上がりすぎてきた〜!」

「イベント終わった後なのにかよ・・・」

『あははは!』

〜こうしてそれぞれが打ち上げの料理や飾り付けなどをしていき

いよいよ打ち上げを始めようとしていたのだが肝心のメイプルがまだ来てなかった

「おいおい・・・主役が遅刻ってどうなってんだよ・・・」

「ごめ〜ん! お待たせ〜!」

「・・・色々と文句を言いたいところだけど・・・後ろの行列は何?」

サリーが指を刺した方にはメイプルが連れてきたであろう

炎帝ノ国と集う聖剣のトッププレイヤー達の姿があった

「えへへ〜! 街にいたら見かけたからどうせだと思つて声を掛けました!」

「相変わらずメイプルのコミュ力高えな・・・」

「どうせだと誘われてね・・・邪魔だったかな?」

「そんな事はないけど・・・スペリオル! イスとテール持つてきて!」

「いや俺だけにやらせるなよ!?! クロムとかも手伝え!」

こうしてメイプルが連れてきたみんなを含めて打ち上げが始まった

「そういえばもうそろそろ第四回イベントの映像が流れる頃じゃないかしら?」

そんな中で第四回イベントの様子を編集した映像が流れる時間となり

みんなでその様子を見ようと自分の画面に映し出した

最初に映し出されたのはスペリオルでその映像は初日のサイコゴレムで無双して

いる瞬間だった

「・・・前から思ってたけど・・・あの巨人って反則でしょ?」

「それでもないぞ? ぶっちゃけステータスはここにいる全員より下だし」

「だとしてもあんな巨人を前にしたら誰だって怯えるっての・・・」

「それに本人がそれ以上の強さって言うのを納得出来ないよね・・・」

「また俺と手合わせをしてもらいたいくらいだ」

「そうだな・・・しばらくはまたスキルを集めたいし遠慮するかな」

『えっ? まだ強くなるの?』

「おい・・・俺からゲームの楽しみを奪う気か・・・」

なんて事を話していると次に映し出されたのは拠点での防衛で

映し出された映像はまさしく阿鼻叫喚の一言だった

「洞窟の入り口で大砲ぶちかますってえげつな……」

「あれじゃあどう頑張っても入って来れないじゃん……」

「いやおたくらは入ってきたよね!？」

「あれは私が多重障壁で攻撃を防いだからねん！」

「……一発で壊れたのは釈然としないけど……」

次に映し出されたのはミイとスペリオルの邂逅シーンであり

みんなが思わず声を上げながら戦う瞬間を待ち望んでいたのだが

「(ズッコッ!) 戦わないのかよ!？」

「いや俺も戦おうと思ったんだけどまさかの邪魔されちゃって……」

「あの時はオーブを集める事を最優先にしていたからな

わざわざスペリオルと勝負する危険を避けたかったんだ」

「でも次は勝負してもらえるとありがたいかな?」

「っ!?! / / あっああ……考えとく……! / /」

(どうしようどうしよう! / / スペリオルに誘われちゃったく!! / /)

「?」

そして場面は変わり次に映し出されたのは問題のシーンである

サリー救出シーンでありそれが流れた瞬間にその場が凍りついた

「スペリオルクくん？ちよつとオハナシがあるんだけど」

「えつと・・・ナンデシヨウカ？」

「サリーちゃんを助けたのは褒めてあげるところなんだけど・・・」

どうしてお姫様抱っこしてるのかな？」

「そつそれはですね・・・マジですんませんでしたー」

下手に言い訳をしても無駄だと判断したスペリオルは見事な土下座を披露

それを見た男性陣は何だか慣れているなど少しだけ憐れみの視線を送っていた

「うくん・・・どうしようかしら・・・メイプルちゃんはどう思う？」

「はい！前にクロムさんとカナデに話していた事を私達に教えてくれるでどうでしょう

!？」

「何!？」

それはスペリオルですらも忘れていた最凶にして最悪のアイテム・【ぐんぐんミルク】の事だった

「えつと・・・それ以外じゃダメですか？」

「ダメです♡」

(助けて!クロム!カナデ!)

(ごめん)

(ペイン!ドレッド!ドラグ!)

(巻き込まないでくれ!)

(マルクス!シン!つてなんかやられてる!?)

どこに視線をやつても助けてくれる手はなく結局スペリオルは話す事にした

「・・・ねえ・・・スペリオル・・・」

「・・・はい・・・なんでしょう・・・」

『それ使わせて!』

「・・・マジ?」

アイテムの悲劇と神秘機兵

あの後、メイプル達はスペリオルから受け取ったアイテムを使った
するとメイプルは前のカスミやイズくらの大きさを手に入れ

マイとユイはメイプルには及ばないもののそれなりの大きさを手に入れていた
ミイも三人より元が大きかったからなのかメイプルよりも大きくなっていた
そして・・・元から胸の大きかった三人・・・

まずはイズとカスミなのだが完全に巨乳を超えて爆乳に成長していた
もう動くだけで胸が揺れており男性陣は目のやり場に困っていたのだが
上には上がいた・・・そう・・・ミザリーと言う名の上がいたのだ

彼女の胸はもはや凶器になるのではないかと言うほどの大きさを手に入れており
実際にマルクスの話では自分が後ろにいるとか気づかずに振り返られて

胸が顔面にぶつかりそのまま壁に激突したそうだ

羨ましいと思うよりも二重の意味で凶器になってしまったのかと男性陣は恐怖した

とか

しかし・・・スペリオルにとって一番の問題はそこではなかった

そう・・・まだ名前が上がっていない女性が二人・・・存在しているのだ

「・・・なんで・・・なんで・・・」

「なんで私達だけ1サイズしか大きくならないのよ!!?」

サリーとフレデリカも同じようにあのアイテムを試したのだが

他のみんなが明らかに2サイズ以上、大きくなっているにも関わらず

二人はどんなに頑張っても1サイズしか大きくならなかったのだ

おそらくその理由はぐんぐんミルクに書かれていたアレだろう

【ぐんぐんミルク】

女性アバター専用アイテム

飲むとアバターのバストサイズを変更する事ができる

(大ききの振り幅は個人差があります)

つまり・・・コンピューターが彼女達の胸はこれ以上大きくならないと判断したのだ
ろう

おかげでアイテムを渡したスペリオルはしばらくの間、二人に睨まれる事になったとか

そんな二人から逃げるようにスペリオルは新しいスキルを求めて色々と探索に出ていた

「と言つてもめばしいスキルはあらかた見つかつてるからな〜・・・

なんか他に見つかつてないようなスキルはないもんか・・・」

そんな事をしながら歩いているといつの間にか夜になつており

スペリオルはこのまま切り上げた方がいいかとログアウトのボタンを押そうとした時だった

「ん？なんかやけに光が眩しいような・・・って・・・なんか俺・・・浮いてね？」

何やらいつもよりも月の光が眩しいと思つていと

いつの間にか自分が宙に浮いている事に気がつき

スペリオルはそのまま月の光に包み込まれて何か別の空間へと跳ばされてしまう

「おいおい・・・急に跳ばされるとか勘弁してくれよ・・・おまけに・・・」

『クエスト・機甲神が受注されました』

「なんか強制的にクエスト始まつたし・・・なんなんだよ・・・」

『ほう？まさかこの場所に人が現れるとは・・・珍しい事もあるな？』

「ん?」

声が聞こえてスペリオルは後ろを振り返ってみると

そこに居たのは薔薇の仮面を付けた騎士だった

「・・・随分と奇抜な格好してるけど・・・あなたは何者だ?」

『私の名は薔薇騎士・・・ローズナイトと名乗っておこうかな?』

「ローズナイトって・・・運営のセンスを疑うんだけど・・・」

『それよりも・・・君に見せたいものがある・・・私についてきてくれるかな?』

「まあ暇だからいいけど・・・」

スペリオルはローズナイトと呼ばれるその騎士に連れられて神殿のような場所を進んでいく

するとその奥にはガンレックスに似ている真紅の騎兵が眠るように鎮座していた

「こいつは・・・!」

『エルガイヤー・・・この月で作られた機兵の一つだ・・・と言っても完全ではない』

「コレですか?」

『このエルガイヤーの他に五体の機兵が存在している・・・』

そしてエルガイヤーを含めた六体の機兵が合体した時・・・最強の機兵・・・機甲神が目覚めるんだ』

「機甲神・・・なるほどなそれが今回のクエストの正体ってわけか」

『君にはその資格がある・・・よってこのエルガイヤーを君に預けるとしよう・・・』

そして他の五体を見つけ出し・・・君の手で機甲神を蘇らせてくれ・・・！』

「・・・分かった・・・！それじゃあ有り難くこいつは受け取らせてもらおうよ」

そう告げるとエルガイヤーは真紅の光に包まれ

小さな光の玉になるとスペリオルの中に吸収された

『神秘機兵エルガイヤーを入手しました。スキル・聖機兵に統合されます』

「ん？神秘機兵？機甲神じゃないのか？」

『おそらくまだエルガイヤーが完全に目覚めていないからだろう』

他の五体を見つけ出せば目覚める事ができるはずだ』

「なるほどな・・・それじゃあおのんびりとその五体を探し出すとしますか」

『いや・・・実はすでに五体の居場所は突き止めている・・・』

問題は君一人ではその試練を突破する事が出来ないと言う事だ』

「ん？それはどういう事だ？」

『行ってみれば分かるはずだ・・・場所は君の地図に記しておいた・・・さあ行きたまえ』

ローズナイトが手を翳すとスペリオルは再び光に包まれて気がつけば元の場所に戻

されていた

「俺一人じゃクリア出来ないか・・・」

「どう言う意味なのかやっぱり自分で確かめるしかないんだろうな・・・」

スペリオルは渋々ながらもとりあえず他のクエストを発見しながら地図に記された場所に向かうのだった

『・・・行ったか・・・次に彼がここへ来るとしたら五体の機甲神と共に戻ってくるだろうな・・・』

それまでにはコイツを直しておかなくては・・・』

そう告げるローズナイトの前には大破してしまっているエルガイヤーによく似た白い機兵の姿があった

赤い卵と破異武立闘

翌日になりスペリオルはローズナイトの話していた

機甲神がいると言われている場所に向かおうと思つたのだが

「……あり？こんな場所、この層にあつたか？」

どうやら機甲神のいる場所は今出ている層にはないようで

おそらくは次に追加される層にあるのだとスペリオルは考えていた

「つて事は……もしかしくなくても俺つて暇になつた？」

まさかの事態にスペリオルはどうしようかと考えていると

そこへ何やら面白そうな情報が耳に飛び込んできた

なんでも近くの洞窟らしき場所に赤い卵のような物を発見したものがいたそうだ

「卵……もしかしてメイプルのシロップみたいなタイムモンスターのお卵か？」

だとしたら確かめに行つた方がいいかもしれないな……どうせ暇だし」

暇にだつたからという事もありスペリオルはその卵のある洞窟へと向かう事にした
出てくるモンスターは確かに強いのだがスペリオルの敵ではなく

楽々と奥に進んでいくとそこには情報通り赤い卵のような物が置かれていた

「確かに卵だけど……アイテムの表示が出ないし

タイムモンスターって訳でもないみたいだな？」

もしかしてただのオブジェクトなのではないかとスペリオルが卵を戻そうとした時だった

何かが作動するような音が聞こえて下を見てみるといつの間にか穴が空いていた

「……えつと……マジでかああああ!!?!!……」

完全に油断していたスペリオルはそのまま地下深くまで落ちてしまい

ダメージ自体はなかったがかなり深くまで落とされてしまった

「クッソ……完全にしてやられたな……さてどうしたもんか……」

スペリオルはどうやって地上に戻ろうか考えているとそこへモンスターの群れが現れた

しかしコレくらいで動じるようなスペリオルではなく冷静に対処しようとした時だった

「ん?あれ!?なんか武器が装備出来ないんだけど!?どういう事!」

なんと先ほどまで装備していた筈の武器が全て外されてしまっており

しかも再び装備する事すらも出来なくなっていたのだ

「……もしかしてこの洞窟……武装解除の罫付きなのかよ!」

まさかの罠に掛かってしまったスペリオルだったが目の前にモンスターが迫って来ているので

まずはそちらに対処しようと自分の現状を把握する事にした

「武器は装備出来ないけど防具まで外される訳じゃないみたいだな・・・！」

「ならば騎士シリーズの鎧よりも！換装！武者！」

スペリオルは防御力が高く攻撃力アップのスキルもついている武者シリーズの防具に装備を変更し

向かってきたモンスターを全て素手による攻撃で対処する事に成功した

「あつぶねく・・・素手での戦い方も覚えておいてよかつたろ・・・」

『お前すげえな！流石は武者つてところか？』

「うお!?急に卵から声が・・・えつと・・・お前は誰だ？」

『オイラの名前はバツキー！こう見えても破異武立闘のプリンスだ！』

「破異武立闘？なんだそれ？」

『いわゆる機械と生物の融合した超生物とでも考えておいてくれ』

それよりも・・・奥からもつとやばいのが出てくるぞ・・・！』

その言葉を聞いて後ろを振り返るとそこには確かに機械と生物が融合したようななんとアンバランスなモンスターが待ち構えていた

「もしかしてあれがお前の言っている……」

『ああ……破異武立闘って奴だ……!』

『目標ヲ確認……コレヨリ卵ノ奪還ヲ開始スル……!』

そのモンスターはスペリオルが卵を持っていると確認した瞬間に攻撃を仕掛けてきた

しかも攻撃は全て遠距離からのものであり

武器を持つていないスペリオルは躲す以外の選択肢がなかった

「クツソ!このままだとジリ貧になりそうだな……!」

『おい!なんで俺をアイツに渡さねえんだ!?アイツが欲しがってるのは俺だぞ!』

「だったら尚更、渡せねえな!だってお前はアイツとは違う感じがする!」

『ふざけるな!俺は破異武立闘のプリンス!アイツの同族だぞ!』

「だとしても!お前にはアイツと違って心がある!それが大きな違いだ!」

俺の言葉を聞いてバツキーは驚くと同時にまるで誰かを思い出しているようだった

いや……正確にいうのなら俺の中にある何かを感じ取ったようだ

『……そうか……それがお前の武者魂ってやつか……!』

いいぜ!そこまで言うのなら俺の力をお前にくれてやる!』

バツキーの卵が当然、輝きを放つと次の瞬間には卵は消えており

代わりにスペリオルの鎧がこれまでと違うものに変化していた
「コレは・・・!?!」

ユニーク装備・破牙シリーズ

破牙の兜

STR+50 AGI+20

「破壊不可」「破牙無礼怒」

破牙の鎧

STR+30 VIT+40

「破壊不可」「獣王武神」「破牙丸戦術」

破牙の籠手

STR+40

「破壊不可」「無手の心得」

破牙の脚甲

STR+20 AGI+30

「破壊不可」

破牙無礼怒

STR+30

武器としてではなく防具として召喚可能な装備

獣王武神

五分間、獣の様な姿となりSTRが二倍になる

破牙丸戦術

獣王武神を発動している間のみ使用可能

相手の攻撃を吸収して自分の攻撃に変換して様々な技を放つ

無手の心得

武器を装備していない状態だとSTRが二倍になる

「・・・おいおい・・・STR四倍とかあの二人だけで十分だと思うんだけど・・・」

実際は何も装備していないのでマイとユイの双子よりは劣るだろうが

それでもこの装備とSTR四倍はとんでも無いステータスだと言ってもいいだろう

「なんにしてもここから反撃開始だ！獣王武神！」

スペリオルがスキルを発動するとその体がまるで獣のような姿へと変貌する

「こいつで終わりだ！破牙苦羅手!!」

スペリオルの体が水晶の様な輝きを放ちながらモンスターに突撃し

モンスターもそれを迎え撃とうとするがその攻撃は全て吸収されてしまい

最後はその攻撃すらも吸収した大技で体を切り裂かれて消滅した

「ふうく……なんとか勝ったく……」

一方その頃、運営側では……

「あくあく……せつかくメイプルのために用意したクエストだったのに

スペリオルにクリアされちゃいましたよ……」

「まあアイツは武器なんかなくてもどうにかしちゃうだろうからなく……

もうなんか……今更って感じだよな？」

「でもその代わりに機甲神のクエストは意地悪に設計したもんね！」

絶対にスペリオル一人ではクリアできない仕様になっているし

ボスモンスターも最強に面倒なのを用意したぜ！

クリアしたければメイプルだけじゃなくペインやミイにも協力してもらおうんだな！」

「……それももうフラグにしか聞こえないぞ？」

四層にフライングして玉璽を手にする

四層が追加されてメイプル達は急いでボスモンスターを倒しに向かった
しかしその中には何故かスペリオルの姿がなかった

「・・・あの男・・・まさかフライングするなんて・・・！」

「ねえ・・・どうせならみんなと一緒に行きかけたのに・・・」

実はスペリオルは例のクエストがあるかもしれないと考えていたので

四層が追加されると同時にボスモンスターを秒殺して四層へ最初に乗り込んだのだ
因みにボスモンスターが瞬殺された時に運営陣の魂が抜けたのは言うまでもない

「これで何も収穫ないなんて言った日にはあの男をぶっ飛ばしてやる・・・！」

「サリー・・・目が怖いよ・・・」

そんなこんなありながらメイプル達も四層へと辿り着き

先に来ているはずのスペリオルと合流しようと思ったのだが

何故か連絡が付かず合流する事が出来なかった

一方その頃のスペリオルはと言うと・・・

『ガハハハ！ワシの望み通りにならぬものなど全て破壊してくれるわ！』

「おかしくね!?董卓ってこんな感じの人だったっけ!？」

何故か三国志の中で最悪の暴君と言われている董卓と戦っていた

時間は少し前に遡りスペリオルが四層に来たばかりの時の事だった

「さてと・・・まずは色々と回ってマップを把握しないとな

出ないとこの地図に書かれた場所に辿り着くなんて無理だろうし」

スペリオルは機甲神のクエストを探す為にまずは四層を巡ってマップを把握する事にした

そう思いながら天翼を呼び出して空を飛んで凄まじい速度でマップを埋めていた時だった

「ん?どおおおおお!?」

突如、下から大量の矢が飛んできてスペリオルはなんとか避ける事が出来たのだが完全に体勢を崩してしまい地上に落下してしまった

「あつぶねく・・・今の攻撃・・・プレイヤーじゃねえな

って事はおそらく・・・モンスターか・・・!」

『おのれえええええ!!あの鬼如きがワシの言う事を聞かぬとは!』

忌々しい！奴の領土に向けて弩弓乱射砲を撃ちまくれ!!」

「おいおいおいおい!!そんな撃つとかこころ辺を全部、ぶっ壊すつもりか!」

『ぬ?貴様!この董卓に意見すると言うのか!小童如きが!!』

いいだろう!まずは貴様らか葬ってくれ!滅殺爆煉弾!!』

「ちよおおおおお!!少しは話を聞けよおおお!!」

そして現在、スペリオルは龍帝装備に変えて無数の弓矢を切り落としていたのだが

あまりにも数が多く反撃するには明らかに数が足りなかった

(くう!こんな数が多くちや張飛や関羽を呼び出しても意味がないし

せめて一瞬でもいいから隙を作れば・・・!ん?)

スペリオルは董卓を観察していると彼から邪悪なオーラが出ていたのだが

彼の手に持っている物からもそれと同等のオーラが放出されていた

(もしかしてあれが董卓を強くしている道具なのか?)

だったらまずはあれをどうにかしないと!)

「行くぜ!真龍斬!!」

『ぐおおおおお!!貴様ああああああ!!』

よくもこのワシに傷をおおおおお!!』

「それだけじゃねえぜ?自分の手を見てみるよ?」

『何っ!?しまった!?ワシの玉璽がどこにもない!』

「どうだ!こいつがなければお前は何も出来ないだろ!!」

『貴様ああああ!!傷を付けただけではなく玉璽まで!』

返せ!それはワシのワシだけのものじゃああああああ!!』

董卓は玉璽を奪い返そうとスペリオルに突っ込んできたまさにその瞬間だった

「ちよっ!?まぶっ!」

『この光!?まさか貴様が玉璽に選ばれたと言うのか!』

光が晴れていくとスペリオルは天玉鎧・蒼龍に乗っていた

「・・・えつと・・・ええええええええ!!?」

全く状況が飲み込めていないスペリオルは戸惑っているが

そんな事を考える暇もなく董卓が突っ込んできたのでこれを迎え撃つ

「そんな事言ってる場合じゃねえ!星龍斬!!」

『があああああ!!?』

ワシが天を統べるはずのワシがこんなところでえええええ!!?』

スペリオルはコレまでと変わらない星龍斬を放ったつもりなのだが

威力が桁違いに上がっており董卓を消し去るだけではなく

その後ろの山すらも切り飛ばしてしまった

「・・・マジか・・・」

『スキル・玉璽を取得しました』

玉璽（未完全）

天玉鎧を呼び出し全てのパラメーターを二倍にする

効果時間は三十秒 使用回数はランダム

「・・・おい・・・なんだこの宝くじみたいなきスキル・・・」

つて言ってもこの威力じゃ仕方ねえのか・・・おまけに未完全って書いてあるし」

スペリオルはその手に握られていた玉璽を見ると

再び玉璽は輝きを放ってスペリオルの手から離れてしまった

「なるほど・・・まだ主って認めてくれたわけじゃないって事か・・・」

まあなんにしても強いスキルは手に入れたしコレはコレで収穫かな？」

そう思いながらスペリオルは疲れたのでログアウトしようとメニューを開いた時
だった

「・・・ヤベエ・・・なんかサリーとメイプルからアホみたいにメッセージが・・・」

ようやく二人のメッセージに気がついてスペリオルはみんなと合流したのだが

遅れてきた事によりみんなから罰ゲームとしてこの日一日中

みんなの言う事を聞かなくてはいけなくなつたのは言うまでもなかった

熱血と華麗

あれからかなりメイプルとサリーに怒られて一日中二人に付き合つたスペリオル
今度はお詫びの意味も含めてカスミの金集めに付き合う事になった

「それにしてもカスミが金欠になるなんて珍しいな？」

「すまぬ……／＼／＼どうしても骨董品には目がなくて……」

カスミはこの層に来てから骨董品を買いまくつたようで

その所為で金欠になつてしまつたらしいのだが

「なんと言うか……意外と完璧美人なカスミでも意外な弱点があるんだな」

「びつ美人!?!／＼／＼そつそんな事を言つても何も出んぞ……／＼／＼」

「いや別にそう思つただけなんだけどな……」

てかウチのギルドだけじゃなくて俺の周りつて美人とか多すぎね？

正直、クロムが一番俺の味方な気がするよ」

「……素顔を見た事もない私にそれを言われてもな……」

スペリオルの言う通り彼の知り合いは九割が美形だ

クラスメイトでもあるメイプルやサリーは言わずもがな

マイとユイも可愛い系でありおそらくは学校でも人気だろう

隣にいるカスミとイズズに関してはまさにお姉さん系であり

誰とも付き合っていないのが不思議なくらいだ

カナデも美少年であり女子に大人気だろう

それ以外にもミイにミザリー

他にもペインやフレデリカなど

「……因みに聞くんだが……スペリオルは誰が好き……とかあるのか？／＼／」

「……むしろ選べないだろ？どうやってあんな豪華な面子で選べって言うんだよ……

俺ですら自分の顔に自信が持てないって言うのに……」

確かにスペリオルの言う通りあの面々の中で誰が好きかなど選べるわけもない

と言うかむしろ自分の方があそこに居てもいいのかと不安になってしまいうレベルだ

「ふふ……確かにゲームで素顔を見せられないのが何よりの証拠か

だが私は別にお前がどんな顔であろうとも気にはしないがな」

「そう言ってもらえるだけでも十分だよ……それよりも着いたぜ？」

そんな話をしているとようやく二人は目的の道場に辿り着いた

この場所はスペリオルが見つけた場所であり何かのボスがいるらしいのだが

何故かスペリオルはそのクエストを受ける事が出来ずカスミにお勧めしたのだ

「ここが……確かに道場だが……こんな場所でお金儲けなど出来るのか？」
「いやここは単純にカスミが興味があるかと思つて案内しただけで」

本命の洞窟はこの先……そこで宝石を落としまくるゴーレムが出るんだよ」
「なるほど……ならばスペリオルの厚意に甘える事にしよう」

カスミはせつかく教えてもらったのだからこの道場に入る事にした
扉に手を伸ばすと勝手に開かれてしまい

しかもスペリオルまで道場の中に入れられてしまった

「痛てて……なんで俺まで……」

「分からね……む？あれは……黒い木刀にサーベルか？」

道場の奥にはまるで対峙するかのよう黒の木刀と白く美しいサーベルが置かれて
いた

カスミがゆつくりとそれに近づいていくとスペリオルが急に動けなくなった

「はい!?なんかこの前から俺、こんな扱いばかりじゃね!？」

「スペリオル!?一体何がどうなっているんだ!？」

『そりゃあお前さん俺達の力でそいつを縛り付けたんだよ! 試練の為にな!』

「試練だ?! 一体どう言う事だ!？」

『僕達の力を君が受け取るに値するかどうか……それを確かめる為だよ』

そんな言葉を告げると同時にカスミの前にあつた黒い木刀から龍が飛び出し
白いサーベルからは鳳が姿を現した

『こいつは言うならば俺達の化身だ……！こいつらからお前の大切な人を守ってみせろ
！』

お前の中にあるダチを思う心を俺達に見せてみな!!』

『僕としても美しき勝利を望むよ……それじゃあ……始め!』

二人の声と共に龍と鳳はスベリオルへ突撃するが

カスミはなんと二匹を受け止めて攻撃を弾き飛ばすが

問題はどうかやってあの二匹を倒せばいいのかだった

(こやつら……一匹一匹の強さは尋常ではない……!)

しかし……全然連携だけは取らないな……)

むしろ互いが互いに足を引っ張っておりカスミも思わず苦笑いしてしまう

だが同時に好機であると判断したのか二匹が揉めている間に一刀両断と切り伏せて

しまった

『白鳳!!やつぱりテメエは俺の邪魔をしてんじゃねえか!!』

『心外だな……むしろ僕の邪魔をしているのは君じゃないのか?』

『なんだと!?!』

『やる気かい?』

「あのく……すまないがその前に早くこの拘束を解いてくれよ……」

ようやく拘束を解除されたスペリオルは体を起こして起き上がったのだが二人はまだ言い争いをしておりどうしようかと思っていた時だった

「……お前達……喧嘩もそこまでしないと……帰るぞ……!」

『ちよつ!?悪かったよ!!ごほん……お前は俺達の試練を見事に突破した

その証としてお前には俺達の力を渡してやる……!受け取りな!』

黒い木刀がカスミの手に収まるとカスミの姿が変わっていく

ユニーク装備・黒龍シリーズ

黒龍の学帽

VIT+50 STR+20

「破壊不可」「燦雷頭」

黒龍のサラシ

VIT+50 STR+30

「破壊不可」「熱血回路」

黒龍の学ラン

VIT+100 STR+50

「破壊不可」「筋肉番長」

龍閃甲

VIT+50 STR+50

「破壊不可」「龍戦頭」

燦雷頭

頭を帯電させて頭突きする事で相手を麻痺させる技

熱血回路

味方が状態異常になっている時、ステータスが30%上昇する

筋肉番長

五分間の間、STRを50%上昇する

龍戦頭

両手の龍閃甲を頭に装備して思い切り頭突きを当てる技

当てた相手の防御力を低下させる事がある

こうしてカスミはユニーク装備を手に入れたのだが

スペリオルはそれを直視する事がどうしても出来なかつた

その理由は間違いなくカスミの格好にあつた

「みっ見るなよ!?!?!?!絶対に見るなよ!?!?!?!」

「分かってるよ!!／＼／＼」

今のカスミは胸に晒しを巻いているだけであり

しかもヘソ出し状態で動くだけで胸が思い切り揺れている

本人は恥ずかしくて胸を隠そうとするのだが逆にそれが扇情感を高める

『やれやれ・・・それじゃあ僕も渡すとするかな』

今度は白鳳シリーズのユニーク装備を身に付けるのだが

こちらはこちらで十分な問題が起こっていた

「・・・これはこれで問題が・・・」

今度も服はちゃんと前が閉まっているのだが

カスミの胸が大き過ぎて逆にエロく思っていた

「・・・実戦の時以外は着ないようにしよう・・・」

第五回イベントで腹いせそして再び事件が!?

12月に入ってすぐに第五回イベントが開催される事になった

今回はフィールド探索型のイベントで四種類のモンスターを倒し

ポイントを稼がなくてはいけないそうだ

更にはレアモンスターも存在しており

それからはクリスマスプレゼントの様な箱がドロップするそうで

クリスマスの間から少しの期間しか開ける事が出来ないそうだ

しかしそれに見合うだけのスキルの巻き物が入っているそうで

それを求めて色んなプレイヤーがモンスターを倒しているのだが

たった一人だけ・・・そう・・・スペリオルだけはモンスターを倒す理由が違つてい

た

「運営の馬鹿野郎おおおお!!なんてクエストを用意してくれやがったんだあああああ

あ!!

こうなったらこのフィールドにいるモンスター全部、ぶつ倒してやるうううううう

!!

「・・・何があつたんだ・・・スペリオルは・・・」

「あはは・・・なんかクエストで手詰まっちゃったみたいで

しかもそのすぐにこのイベントが始まっちゃったから・・・」

メイプルは事情を聞いていたので

スペリオルがどうしてあそこまで荒れているのかその理由を知っていた

しかしそれでもあそこまで荒れるとは思っていなかったので流石に苦笑いしていた

そんなみんなの事すらも気にしないほどにスペリオルは暴れ回っていた

サイコゴレムを召喚しエルガイヤーまで投入するなど

外から見たらもはや怪獣大戦争のような感じなのだろう

「・・・私達は巻き込まれないように離れてモンスターを探しましょうか」

「そうね・・・スペリオルには申し訳ないけど離れましょう」

みんなは暴れ回るスペリオルを放っておいて他のフィールドへと向かってしまった

しかしスペリオルはそんな事にすら気づかないですつと暴れており

そのまま気づいたらイベントは終了していてスペリオルは微妙にスッキリとした顔

をしていた

それから数日の時が過ぎてクリスマスになりみんなでパーティーをする事になった

のだが

何故か前回の打ち上げの様に炎帝ノ国と集う聖剣のメンバーもいた

「・・・メイプル・・・お前は少しでいいから遠慮というのを覚えたらどうだ？」

「えっ?でもミイもペインさんもいいって言ってくれたよ?」

「そういう事を言ってるんじゃないやありません〜!」

「いひやいいひやい」

メイプルの頬を引つ張つて反省するようにスペリオルは怒っている

そんな事をしている場合ではないとサリーが二人を宥めてパーティーを始めた

「さてと・・・それじゃあこの前のイベントアイテムを開けましょうか!」

『おう!』

流星はトッププレイヤーというべきなのかイベント限定アイテムを全員手に入れて
おり

パーティーのメインイベントとしてみんなで一氣に開けてみる事にした

「う〜ん・・・いいアイテムだけど」

あれだけ戦った後で手に入れたスキルとしては微妙かな〜・・・

「そう?私はそれなりにいいスキルが出たよ!」

「ん?どうしたんだスペリオル?完全に固まっているみたいだが・・・」

みんなが色々と喜んだりしている中でスペリオルだけは何故か動きを停止させてい

た

「一体何が起こつたのだろうと思つていたがすぐに再起動するとスペリオルから黒いオーラが溢れ出る」

「運営共・・・!どうやら俺と戦争がしたいようだな・・・!!」

「ちよつ!?なんかよく分からなけれど止めなさいって!」

「スペリオルがここまで我を忘れるとは・・・何があつたんだ?」

「・・・男子は集合してくれ・・・女子には教えないでおく・・・」

「また?てかなんであんたは毎回そんなアイテムしか出ないのよ?」

「そんなもんは俺が聞きたいわ!?とにかく男性陣は集まれ!!」

「こうして男性陣だけがスペリオルに言われて集められて

一体どんなものが出たのかを教えてもらう事になつた

「それで?今回はどんなやばいアイテムが出たんだ?」

「流石にこの前ほどヤバいアイテムじゃないと俺は思いたい・・・」

「えつと・・・とりあえずアイテムを確認しようか?」

「ああ・・・これがそのアイテムだ」

【ドキドキ!?ウエディング体験!!】

とあるイベントフィールドで使用可能なチケット

男女のペアで特別なクエストをクリアすると特別な装備が手に入る

『……これは不味い……』

男性陣はそのアイテムを見た瞬間にどうなるのか目に見えていた

しかし幸いなのはこのチケットが女性陣の人数分ある事だろう

もしもバレた場合は全員で一緒にこのチケットを使えばいいだけなのだが

「なんか……ゲームの中で着々と逃げ場を失ってないか？」

「もはや運営が楽しんでいるとしか思えないとね……これは……」

「まあなんとというか……覚悟を決めな」

「他人事だと思つて見捨てるんじゃないやねえよ!？」

「でもどうするんだい？女性陣にバレルのは時間の問題だと思ふよ？」

「そこは冷静に分析している場合じゃないと思うぞ？ペイン」

「……なんか別の話題で話を逸らす事にするか……」

ギルドハウスに戻ってきたスペリオル達は女性陣に疑いの眼差しを向けられたが

そこへ珍しくメイプルが助け舟を出してくれた

「そうだ！スペリオル！例のクエストなんだけどミイやペインさんにも頼むのはどうか

な!？」

「クエスト? スペリオルでも苦戦するほどなのか?」

「というよりも・・・俺一人じゃ絶対にクリア出来ないんだよ・・・」

「どういう事?」

スペリオルは例の機甲神クエストについてをみんなに話した

そして彼らのいる神殿の場所をついに突き止める事が出来たのだが

問題はそこからだったのだ

「その神殿の中には五つの部屋があつてな・・・」

特に巨大な扉には何かしらの仕掛けがあつて中には入れなかった

それでまずは他の部屋から入ろうとして赤い扉に入ったらボスマンスターが待ち構

えていた

なんとか激戦の末に倒したんだが倒して部屋の外に出ると巨大な扉の模様が光つて

いたんだ

しかも俺が入った赤い扉の模様だったから

おそらくは全ての部屋もボスを倒さなくちゃいけないんだと思って今度は青の扉に

入ったんだが・・・」

「まさか負けたの?」

「いや……ボスは倒したんだが……何故か赤い模様の光が消えて青い模様が光っていたんだ……」

「もしかして……四つの部屋にいるボスを同時に攻略しないといけないという事なのか？」

「なるほど……それなら流石のスペリオルも一人でクリアするのは不可能だな」

そう……今回のクエストは最低でも四つのパーティーで攻略しなくてはいけないのだ

それが分かったからこそスペリオルはあんな風に悔しがっていた

「面白そうだな……！是非とも協力させてもらおう！」

「私達もこの前のイベントで助けてもらった借りがあるからな」

「二人共……！このお礼は俺が持っている情報で支払わせてもらおうよ」

それじゃあ早速だがその四つある部屋のボスについて教えておこう」

「えっ?!もしかして全部のボスと戦ったの!?!」

「当たり前だろ?情報はいつだって必要だしな」

スペリオルは自分が戦った四体のボスについてをみんなに教えた

赤い扉の部屋に居たのはマグマゴーレムであり炎上ダメージを与えてくるのが特徴

しかも相手の攻撃だけではなく自分が近接攻撃をしても炎上する可能性があった

青い扉の部屋に居たのはアクアゴーレムであらゆる物理的ダメージを無効にするダメージを与えるには属性を付与した攻撃か魔法のどちらかで攻撃するしかなかった

白い扉の部屋に居たのはクリスタルゴーレムでありこちらは逆に魔法を反射するので物理的な攻撃しか通用せず魔法使いにとつては厄介な相手

最後、緑の扉の部屋に居たのはウッドゴーレムで高いHPと自己回復スキルがあった倒すには一撃で相手のHPを半分以上削る以外に選択肢はないだろう

「なんとというか・・・よくこんなボスと戦ったわね？」

「六時間も戦闘してた・・・流石に疲れた・・・」

「だがそれだけの情報があれば勝ったも同然だな？」

「そうね・・・マグマゴーレムは私とメイプルとカナデとイズさんが担当かな？」

「ならば私達、炎帝ノ国はアクアゴーレムを担当しよう」

「あれ？でも水と火つて相性が悪いんじゃない？」

「むしろ相手を蒸発させるだけの火力を出せばいい」

「クリスタルゴーレムはマイとユイの双子が適任だな

「護衛で俺とカスミが一緒になるってところか」

「なら僕達はウッドゴーレムかな？メイプル対策にも良さそうだな」

「それを聞いたらこのモンスターを作った運営が泣くぞ？」

こうして史上最強のパーティーが結成されて

いよいよ機甲神クエストがクリアに動き出すのだった

一方、運営側では……

『やめてええええええ!!』

そんなヤバいパーティー組まないでえええええ!!』

「あんな悪戯アイテムを作っている場合ではありませんでしたね？」

史上最強パーティーVS四体のゴーレム

あれから入念な打ち合わせを終えてスペリオル達は例の神殿へとやって来た

「ここがスペリオルの話していた神殿か……」

確かに神秘的な感じがする建物だね」

「ああ……だからこそ強者の匂いがする……!」

「それじゃあ皆さん打ち合わせ通りに頑張ろう〜!」

『おう!』

メイプル達は打ち合わせで話していた通り四つのパーティーに別れて

それぞれ担当のゴーレムがいる部屋へと入っていった

しかしそんな中でスペリオルだけは巨大な扉の前で待たされていた

その理由は巨大な扉の奥にもボスが待っている可能性があるからだった

いくらメイプル達が強くても1日にボスと連戦するほどの体力はないし

そもそもスペリオルが苦戦するほどの相手ならばスキルを出し惜しみも出来ないだ

ろう

だからこそ彼だけには余力を残してもらい最後のボスに挑んでもらおうと考えたの

だ

（・・・つつても・・・待ってるのも十分に暇なんだよな・・・）

一人で寂しく扉の前で待ちながらスペリオルはその時を待つのだった

一方その頃、赤の扉に入ったメイプル達は早速、マグマゴーレムと戦闘を開始していった

「大海！」

「アイスウォール！」

マグマゴーレムは溶岩の拳を放って攻撃して来ており

それをサリーのスキルとカナデの魔法で防いでいた

「スペリオルの言う通り遠距離攻撃まであるとか厄介な相手よね〜」

「でもこれくらいはの攻撃なら十分に防げるし直線的だからかわすのも簡単だと思う

それよりも・・・問題はこっちがどうやって攻撃するかってところかな？」

「大丈夫！こう言った時は・・・機動武神天鎧王！」

メイプルはスキルと発動して天鎧王となった

その大きさはマグマゴーレムよりも上でありそして彼女が拳を振り下ろすと

マグマゴーレムは粉々に砕け散ってしまいなんともあつけない幕切れとなった

『わ〜い！勝ったよ〜！』

「・・・相変わらず出鱈目なスキルよね・・・」

「いや・・・むしろ本人を含めてなんじゃない？」

「味方ならいいのよ？味方なら」

一方その頃、ミイ達が担当している青の扉の奥では苦戦を強いられている様子だった。「こいつは思った以上の強敵だな・・・！てか今回の俺って防御しかしてないんじゃないかね？」
「相手に物理的な攻撃が効かないんだったら仕方ないって

僕も今回は属性系のトラップしか使えないからかなり厳しいし」

「どうしますかミイ？このままでも勝てなくはないですが・・・」

「ああ・・・時間が掛かってしまうな・・・三人共！時間を稼いでくれ！」

『了解！』

ミイは己の手にとつてもないほどの炎を溜め始める

そしてそれは徐々に大きさを増していき遂にはアクアゴーレムを超える大きさに
なった

「これで終わりだ！炎帝！」

巨大な炎を受けたアクアゴーレムは水蒸気爆発を引き起こし跡形もなく消滅した

「あつぶね・・・下手したら俺達までやられるぞ・・・！」

「随分と思いい切った事をしましたね？」

「あれくらいしないと倒せないと思ったからな」

（スペリオルさんに褒めてもらいたいし！／／／）

「なんにしてもこれで僕達の役目は終わりだね」

ミイ達があくアゴーレムと戦闘している頃

白の扉へと入ったクロム達もクリスタルゴーレムと戦闘を始めていたのだが

「・・・カスミ・・・その格好はなんだ？」

「カスミさん・・・凄いです・・・！」

「三人共あまり見るな！／／／それに私の事を気にしている場合ではないだろうが！／

／／

クリスタルゴーレムが強敵だと聞いて

カスミは封印して置きたかった黒龍装備を装備を身に纏って戦いに挑んでおり

それを見た事がなかったクロム達は驚き過ぎて完全に動きが止まっていた

「それにしても・・・魔法攻撃の反射か・・・」

俺達は魔法が使えないからいいとしても魔法使いからしてみれば天敵だよな・・・」

「ああ・・・だがそんなクリスタルゴーレムに天敵がいる・・・それがあの二人だ」

「ダブルスタンプ!!」

マイとユイは持ち前のSTRでクリスタルゴーレムの体を叩きまくっており

その攻撃を受けて水晶で出来た体は徐々に罅が入りボロボロと崩れていく
しかしたただでは終わらせないとしたのかクリスタルゴーレムは腕を飛ばしてマイと
ユイを拘束する

「くっ……！動けない……！」

「大丈夫か!?すぐに助けてやるからな!!」

「クロム!二人を頼む!私が奴の相手をする!」

「おう!」

クロムに救出を任せてカスミは一人でクリスタルゴーレムに挑んだ
クリスタルゴーレムの誤算はカスミの強さを見誤っていた事だった

今の彼女は物理的な攻撃に関して最大級のダメージを出せるようになっており
クリスタルゴーレムにとつてはまさにもう一人の天敵だったのだ

「これで終わりだ!龍戦頭!!」

カスミは腕に着けられていた龍閃甲を合体させ頭に装着し

そのままクリスタルゴーレムに対して頭突きを当てる

するとまるでハンマーでも打ち付けられたかのように

クリスタルゴーレムの体は粉々に粉砕されそのまま消滅してしまった

(……今度からカスミを揶揄うのはやめよう……自分の命が惜しい)

その様子を見ていたクロムは今後は絶対にカスミを怒らせないようにしようと誓うのだった

最後の緑の部屋では集う聖剣の四人がウッドゴーレムと戦っていたのだが

思っていた以上の自己回復力の所為で中々に倒せないでいた

「もう！さつきからどれだけ炎弾を当てたと思ってるのよ！」

「そりゃあ俺も同じだっての・・・半端じゃない自己回復力だな・・・」

ペインの通常攻撃ですら数秒で全快・・・攻撃を当て続けたとしても」

「例の回復スキルで半分近くまで強制的に回復されるか・・・中々に厄介だな」

「・・・ならその半分のHPも一気に削るだけさ・・・！」

「あれを使うのか？まあ確かにそれ以外に倒せる手段はないか」

「ああ・・・三人共！援護を頼む！」

『おう！』

ドレッドとドラグがウッドゴーレムの腕を切り飛ばしてフレデリカが多重障壁でペインを守護する

ペインはその防御を信じて伸びてくる蔦の中を突っ込んでいきウッドゴーレムの頭上へと飛ぶ

「断罪ノ聖剣!!」

ペイン渾身の一撃はウッドゴーレムの半分ほどあったHPを削り切り消滅させた

「いやゝゝゝ。本当にメイプル並みのHPと自己回復力だったねゝゝゝ」

「ああゝゝゝ。だがあの防御力が無い分はメイプルよりはマシだな」

「けどおかげさまでいい特訓になったよ」

「運営もそんな事を考えて作ったわけではないと思うけどなゝゝゝ」

一方その頃、運営側ではゝゝゝゝ

『ギヤアアアアア!! たった数分で四体のゴーレムが倒されたああああ!!??』

「どうするんですか!?! 残っているのは奥にいるジャイアントゴーレムだけですよ!?!」

「しかも相手はあのスペリオルってゝゝゝもう勝ち目はないんじやゝゝゝ」

「って事は機甲神はゝゝゝ」

「間違いなくスペリオルの手に渡ってしまうなゝゝゝ」

「ゝゝゝ。今すぐに点検作業に入るぞおおおお!!」

スペリオルに渡るとしてもバグだけは引き起こさせるなああああ!!」

『ラジャー!!』

巨大なゴーレムと合体は男のロマン

メイプル達がボスを倒してくれたおかげで全ての紋章が光ると
いよいよ本命である巨大な扉が大きな音と共に開き始めた

「この先にスペリオルが倒さなくちゃいけないボスがいるのね」

「だなく・・・先にペイン達に報酬でも渡しておくか」

「いいのか？別にこちらは最後まで手伝っても大丈夫なんだが」

「流石によそのギルドにそこまでしてもらおうわけにはいかねえよ」

それじゃあこれが俺の知っている俺も受けた事のないクエストの一覧だ」

「・・・スペリオルも受けた事ないって・・・もらう意味あるの？」

「別に俺がクリア出来なかったってわけじゃないぞ？」

何故かクエストの名前は表示されているのにクエストが発生しなかったものだ

おそらくは何かの基準を満たしていなかったって事なんだろう？」

「それなら俺達が行って受けられるかどうかの確認もしないとな」

「確かにそうんだけど・・・ちゃんと全員分用意できてるって・・・」

スペリオルがどれだけこのゲームをやり込んでるのかよく理解出来るわく・・・」

フレデリカはまさかここまでの情報を持っているとは思っていなかったようで改めてスペリオルは脅威と言うよりも恐怖の大王だと感じるのだった

「それじゃ報酬は貰うけど・・・せめてクリアまでは見守らせてもらおうよ

スペリオルがどんな風に戦うのかを見せてもらいたいしね？」

「うつつむ！私もスペリオルがどんな風に戦うのか興味がある・・・！」

（チャンス！スペリオルさんの勇姿をこの目に焼き付けるチャンス!!／／／）

「それくらいは好きにしてもらって構わないぜ？」

でも・・・参考にはだけはないって事だけは言っておくよ」

スペリオルはメイプルだけじゃなくミイヤやペインも連れて最後の部屋へと進んでい

く

部屋には先ほどまで彼らが戦っていた四体のゴーレムよりも

二回りは大きい巨大なゴーレムが鎮座していた

そして侵入者であるスペリオル達を感じしたのかゆつくりとその体を動かしていく

「ジャイアントゴーレムか・・・！お誂え向きだな！エルガイヤー！」

スペリオルはエルガイヤーを呼び出して乗り込みジャイアントゴーレムと対峙する

ジャイアントゴーレムが動きが遅いのだが防御力が桁違いでありHPが全く削れな

かった

「……このモンスター……明らかにメイプルを意識して作られてないか？」

あまりの防御力にスペリオルはこのモンスターの参考になっているのはメイプルではないのかと思っていた

そしてその予測は正解でありこのジャイアントゴーレムはメイプルを参考にしていた

スピードを犠牲にしてほとんど無敵を誇る防御力と同時にそれと攻撃に転換した破壊力

まさにゴーレムの名前に相応しい実力だと言つてもいいだろう

「しかしどうしたもんか……防御貫通系のスキルはあるけど時間が掛かりそうだし……」

こうなつたらアレを試してみるか……！」

スペリオルは空高く上昇すると炎を噴出させながら回転してジャイアントゴーレムに突っ込んでいく

その攻撃はただでさえ高い攻撃力を持っているエルガイヤーのパワーを更に上げており

ジャイアントゴーレムの装甲を貫通しそのHPを削り取った

「ふう……これでようやくクリアか……ん？」

スペリオルはようやくクエストクリアかと思つてしていると突如、エルガイヤーから降ろ

されてしまった

すると五つの光が飛んできてそれが先ほどのゴーレムとは違う巨人の姿へと変わっていく

そして五体の巨人は再び光へと変わっていきエルガイヤーの中に入っていく

『神秘機兵エルガイヤーは機甲神エルガイヤーに進化しました』

『機甲神エルガイヤーはスキル『輝光合身』を取得しました』

輝光合身

ボスモンスター専用スキル

五体の機甲神と合体しガンジエネシスとなる

「・・・アレだけ苦労してボスにしか使えないのかよ!？」

いやまあいいけどき・・・ってなんでみんなそんなびっくりしてるんだよ?」

「いや・・・あんたの前・・・」

「ん?・・・おおう・・・」

どうしてみんながここまで驚いているのかスペリオルはすぐに理解した

何故ならば自分の目の前には天鎧王となっている時のメイプルよりも

巨大な巨人の姿がそこにはあつたからだ

「これがガンジエネシスか・・・確かにボス戦でしか使えないな・・・これは・・・」

こうしてスペリオルの機甲神クエストはとりあえずの終わりを迎えるのだった

一方その頃、運営側では……

『いや〜……やっぱり合体は男のロマンだよね!』

「……現実逃避している場合ですか？」

ガンジエネシスが入手されてしまいましたよ?」

「……やっぱり深夜テンションで作ったのは間違いだつたかな?」

「でも修正でボス戦でしか使えないようにしたからそこまでの被害は出ないでしょ?

ボスモンスターだってこれから強くすればいいだけの話だし」

「おまけにスペリオルがペインやミィにクエストの情報を渡してくれたみたいだし

自分でライバルを強くしてくれたんだからNW Oも盛り上がってくれそうだよ」

「……それなのですが……」

先ほどスペリオルが彼らに渡していたクエストをピックアップしました」

「ん〜どれどれ?……え?」

『……ヤベエエエエエ!!』

「お前らあ!今すぐに修正作業だ!

あいつらがこのスキルや装備を入手して戦ったりなんてしたら・ ・ ・！」

『間違いなくNWのフィールドが壊れされるううううう!!』

ミイの理想

機甲神のクエストを終えてから数日が過ぎた頃

ミイは一人でスペリオルから教えられたクエストに挑んでみる事にした
「確か……ここだったと思うんだけど……なんか怖い……」

ミイの目の前に会ったのは巨大な城であり亡霊が住むというよりは

まるで列国の覇者が住んでいるような圧倒的なオーラが発せられていた
「怖いけど……スペリオルさんから教えられたクエストだもん！」

頑張つてクリアしなくちゃ……そしてスペリオルさんに褒めてもらおうだ／＼／＼
何やらミイの瞳にハートマークが浮かんでいるような気がするが

彼女は取り敢えず城の中に入ると何やら足軽のような兵士がたくさん姿を現した

「まずはこれを倒さなくちゃいけないのか……炎帝！」

『ギャアアアアアアアアアア!!?!!』

ミイの攻撃によつて足軽の兵士はみんな灰と変わった

そしてそのまま奥まで進んでいくとそこには圧倒的な強者の姿があつた

『……まさか……ここまでやって来るとは……流石だと言うべきか……』

だが・・・貴様の理想が本物かどうか・・・教えてもらおうか!』

「ボスモンスターというわけか・・・!」

『余の名は曹操! 乱世の世を治める將軍として貴様の力を見せてもらおう!』

「曹操!?! 三国志に出てくる英雄の一人!?!」

しかし驚いている場合ではなく曹操は炎骨刃を抜いてミイの元に飛び込んでいく

ミイは炎帝で迎撃しようとするがその全てを切り裂かれて懐に入り込まれてしまう

『どうした!?! 貴様の理想はそんなものか!?! 大紅蓮斬!!』

「キヤアアアア!!」

曹操の一撃を受けてミイのHPは一気に削られてしまいそのまま壁に激突する

しかも向こうのHPは全くと言っていいほど削れてはいなかった

(強い・・・! 曹操の名前は伊達ではないほどに・・・!)

だけど負けられない・・・! 私は・・・私は・・・!)

「私は・・・強くなる! スペリオルさんに近づく為に!!」

『ほう? それが貴様の理想と言うわけか・・・面白い! 今度こそ見せてもらおうぞ!』

「これが・・・私の全力だああああ!! 爆炎!!」

ミイの一撃は見事に曹操を捉えていたがHPを一割ほど削るだけに留まっており

目の前にはそれ程堪えている様子のない曹操の姿があった

「これでも……ダメなの……!?!」

『……いや……その方の覚悟……見せてもらった!』

曹操の言葉と共に兜の一部が欠けており嬉しそうにしていた

おそらくはミイの覚悟を認めたというところなのだろう

『ついて来るがいい……貴様に渡しておくべき物がある』

曹操に言われるがままにミイは彼の後を付いていくと

何やらかなり物々しい扉の前に辿り着いてしまった

その扉が開けられるとその奥には二振りの剣が突き刺さっていた

『あれは三侯の一人、雀瞬の魂が宿っていると言われている剣

威天剣と星凰剣だ……これをお前に託してやろう』

「いいのですか!?!これってもしかして……」

『ああ……かつては余もこの剣を使って戦っていた

そんな中でも色々な間違いを犯し……時には友と呼べるべき漢とも戦った……

だが……奴との戦い経て余は真の理想に気づく事が出来た……

貴様にも理想はあるだろうが……おそらくそれはまだ真の理想ではない』

「真の理想……」

『そうだ……貴様がこれから先、どんな困難な道を歩んでいくかは分からぬが

必ず真の理想に辿り着けると信じている・・・だからこそこの剣を託すのだ』

「・・・ありがとうございます・・・！大事に使わせていただきます！」

『うむ！貴様の理想が叶う時を見守っているぞ！』

その言葉と共に曹操は消えてしまい、ミイはゆっくりと威天剣と星凰剣を引き抜いた

威天剣

INT+250

炎上ダメージ+30%

「破壊不可」「大紅蓮斬」「炎鳳獄焰燐」「大獄焰斬」

星凰剣

INT+250

炎上ダメージ+30%

「破壊不可」「大紅蓮斬」「炎鳳獄焰燐」「大獄焰斬」

大紅蓮斬

相手に炎上ダメージを付与した斬撃を放つ

炎鳳獄焰燐

鳳凰のオーラを飛ばして相手を炎上させる

大獄焰斬

相手に二倍の炎上ダメージを加えた斬撃を放つ

「これが・・・威天剣と星凰剣・・・!」

ミイはその二振りの剣が持っている力に驚いていると急に剣が光り始めて

その光が収まるとミイの装備が変わっていた

ユニーク装備・紅蓮シリーズ

紅蓮の冠

VIT+50 DEX+50

「破壊不可」

紅蓮の鎧

VIT+150 INT+30

「破壊不可」

紅蓮の籠手

VIT+50 INT+20

「破壊不可」

紅蓮の脚甲

AGI+50 DEX+30

「破壊不可」

覇凰翼

VIT+50 DEX+50

「破壊不可」

近接攻撃してきた相手を炎上状態にする

その見た目はまるで先ほどまで戦っていた曹操のような姿になっており

まさに軍を率いる將軍と言ったような感じだった

(見ていてください！スペリオルさん！私はもっと強くなってみせます！)

一方その頃、運営陣は・・・

『いや～・・・やっぱり美少女の武将姿はいいね～・・・』

「現実逃避している場合ですか？彼女がああな装備を持ってしまったら

今後のイベントでは必ず森林などのフィールドを燃やし尽くされますよ？」

『・・・(ガクガクブルブル)』

(寒くないのに体が震える事って本当にあるんだな～・・・)

ペインと剣豪

ミイが曹操に挑んでいる頃

ペインも同じくスペリオルから教えられたクエストに向かっていた

「確かここに七本の刀が突き刺さっているんだったな」

そしてスペリオルはそこでクエストの名前を見たと・・・

果たしてスペリオルが受けられなかったクエストがどれほどのものなのか・・・

ペインは教えられた情報通りに七本の刀が刺さっている場所へと向かった

するとそこには確かに形の違う七本の刀が突き刺さっていた

「ここがスペリオルの話していた場所か・・・」

しかしクエストらしいクエストは何も起きないが・・・

『・・・汝・・・資格を得るものよ・・・！その力を試すか!?!』

「これは・・・!?!」

声が聞こえると同時にペインの画面にはクエストが表示された

すぐさまそのクエストを受託するとペインの目の前に一人の侍が姿を現した

『我が名は豪剣頑駄無！汝がどれほどの器なのか・・・確かめさせてもらおう!』

「これがクエストというわけか．．．！面白い．．．！」

豪劍頑駄無と名乗った侍は槍のような刀・壱番刀を構える

それを見てペインはまず懐に入り込まなければいけないと考える

それ故に壱番刀の攻撃を受け止めながら進んでいった

「破壊ノ聖劍！」

『なんの！七番刀！』

懐に入り込むことが出来たペインは渾身の一撃を当てようとしたのだが

その瞬間、豪劍頑駄無は刀を変えてその一撃を簡単に受け止めてしまった

「．．．まさか今の一撃を受け止められるとは．．．」

『七番刀は守りに秀でている刀．．．どんな攻撃も受け止める事が出来る

そして．．．次は速度に秀でた二振りの刀！三番刀！六番刀！』

「くっ!？」（なんて怒涛の攻撃なんだ！まさに達人の連撃！）

流石のペインも豪劍頑駄無の攻撃速度が早すぎて受け止めるだけしか出来なかつた

それでも徐々に動きを見切り始めており何とか反撃しようとしていると

『どうやらこれも見切られてきたようだな．．．』

ならば次は魔法に秀でた刀！四番刀！伍番刀！』

（まだ刀を変えるのか．．．！ここまで熱くなれる戦いはスペリオル以来だ！）

ペインも根っからのゲーマーのようでこんな危機的な状況なのにその表情は笑っていた

それを見ていた豪剣頑駄無も同じく面白い小僧が現れたとばかりに笑みを浮かべる

『ほう？この状況でも笑みが消える事はないか・・・面白い・・・！』

「俺もだ・・・！ここまで剣でやり合える相手と巡り会えた事はない・・・！」

『だが・・・！決着はつけさせてもらおう！式番刀！』

豪剣頑駄無は己の持っている刀の中で最も攻撃力の高いものを取り出し力を溜めていく

その姿を見て次の一撃が勝負だとペインも判断し同じように剣を構える

『行くぞ・・・！！ハアアアアアアア！！』

「うおおおおお！！断罪ノ聖剣！！」

二人の一撃がぶつかった瞬間、凄まじい衝撃破が周辺を包み込み

地面がびびり割れていく中でそれでもぶつかり合いは止まらず

最後に勝利したのは・・・ペインだった

『・・・見事・・・！』

「・・・いや・・・俺もまさかここまで追い詰められるとは思ってなかったよ

スペリオルに教えてもらって本当に良かったと思っている」

『そうか・・・ならばお主に託すでしょう・・・！我が剣！』

豪剣頑駄無は自身の持つていた七本の刀をペインに渡した
するとペインの装備が剣刃シリーズへと変化し

更に新しいスキルまで会得していた

『スキル・豪鉄剣刃を取得しました』

『スキル・怒涛閃光斬を取得しました』

『スキル・真空爆烈破を取得しました』

豪鉄剣刃

一分間・豪鉄剣刃形態となりステータスが三倍になる

そして輝羅星刃を使えるようになる

使用回数は一日一回

怒涛閃光斬

豪鉄剣刃形態の状態でのみ使用可能

輝羅星刃から防御貫通でダメージが二倍の斬撃を放つ

真空爆烈破

豪鉄剣刃形態の状態でのみ使用可能

豪鉄剣刃の効果時間を消費する代わりにダメージが三倍の爆発を引き起こす

「これは凄いな……これならいずれメイプルやスペリオルにも勝てそうだ」

『お主の武運を祈っておる……』

豪剣頑駄無はそのまま姿を消してしまったがペインは感謝の意味で頭を下げながらゆつくりとその場所を後にするのだった

一方その頃、運営側では……

「いや〜！ようやくペインも新しいスキルと装備を手に入れたし

いよいよメイプル打倒も近付いてきたな！」

「そうだな〜……」

やっぱりメイプルを倒せる可能性があるのはペインだけか……」

「残るはスペリオルだけど……あいつは倒す方法があるのか？」

「あの……その前に二人が戦う事になったらフィールドが壊れませんか？」

ペインが豪鉄剣刃形態になってからおそらくメイプルは天鎧王を使うはずなので……」

『……オロロロロ』

「ギヤアアアアアア?!?!?!あまりのストレスに耐えきれなくなって吐いたああああ!!!」

今日もやっぱり休めない運営だった

五層と風邪と実家

あれからそれなりの日にちが経ちNWOに第五層が追加される事になった

もちろんほとんどのメンバーはすぐにボスマンスターを倒しに向かったのだが

その中には何故かメイプルとスペリオルの姿がなかった

「それにしても・・・メイプルは残念だったな」

「メイプルはこの時期になると必ず風邪を引いちゃんだよね・・・」

サリーの話ではどうやらメイプルは風邪によるお休みのようで

治るにはしばらく時間が掛かるらしく五層に来るのは先になるそうだと

「そうなのか？　そういえばスペリオルの姿も見えないみたいだが？」

一方でスペリオルの姿も見えない事をクロムが気にしており

それについてもサリーは本人から連絡を受けていた

「あいつは実家に呼び出されて今日はゲームに参加出来ないんだって

明日になったら直ぐにボスを倒して合流するんじゃない？」

「アイツが実家に呼ばれるって・・・何かあったのか？」

「さあ？　本人もなんで急に呼ばれたのか理由は聞いてないみたい」

実は実家に呼び出された理由はスベリオル本人も聞いてはおらず

とにかく学校を終えて直ぐに彼は実家に向かう事にしたのだが

この時に行かなければよかったと後で後悔する事になるとは思ってもみなかった

「いや帰って来いって言うのは別にいいんだけどさ・・・これなに?」

「そんなのクリスマスプレゼントに決まってるじゃない?」

「プレゼントは別に良いんだよ・・・」

問題は・・・なんでこんな大量のぬいぐるみがあるのかって事なんだよ!」

実家に帰って来た真斗を待っていたのは大量のぬいぐるみを持つている両親だった

どうやら二人はクリスマスに真斗にも内緒で旅行に行っていたようで

そのお土産としてこの大量のぬいぐるみを買ってきたらしい

「母さん・・・俺がそんなので喜ぶような年に見えるの?」

「えく? だってこれは有名な遊園地のマスコットキャラクターなのよ?」

とても人気で全種類のぬいぐるみを集めるの大変だったんだからなく」

「それは明らかに母さんが喜んでるよね! 明らかに俺へのお土産じゃないよね!」

「バレた? それじゃあ本命のお土産をあげるわね?」

「最初からそつちを渡してくれよ・・・」

なんとも良い加減な両親にスベリオルはため息を吐きながら

とりあえずは本命のお土産を受け取りそして固まってしまった

「・・・母さん? どうして俺にこんな可愛いネックレスを渡すのかな? しかも三つ・・・」
「聞いているわよ? なんでも最近、特に仲良くしている女の子が二人もいるらしいわね
?」

この母親はいつたどこから聞きつけてきたのだと思つたが

言つても無駄だろうと判断し素直に認めてその事情を話す事にした
「なるほど・・・ゲームでその女の子と知り合つたのね?」

しかも他にも知り合いがいると・・・我が子ながら天然のタラシね
「誰がタラシだよ!? みんなで楽しくゲームをしてるだけだよ!!」

「本当に? 母さんはそんな風に思えないんだけどな」

「マジで勘弁してくれよ・・・というか父さんもなんか言つてくれよ」

「ちゃんと全員と責任を取ると言うのなら俺からは何も言う事はない!」
「ダメだこの両親!!」

本当になんでこんな両親を持つてしまったのだと真斗は思うが

それでも良い親なものには変わりなく感謝している部分も大きい

「それにしても困つたわね・・・そんなに可愛い娘が多いとは思わなかつたから
聞いてた二人だけのお土産だけで数が足りないわよね」

「大丈夫じゃないか？他の人達には真斗自身が買ってプレゼントさせればいいわけだし」

「それってもしかして左手の薬指に嵌めるものかしら？キャッ！♡」

「むしろそれはあんたらが止める側でしょうが！」

それに二人以外とは現実で会った事もまだないっての！」

色々と誤解はあつたがとりあえずは二人を納得させて真斗は色々と疲れてしまった実家から帰る途中で真斗は仕方なく貰ったプレゼントと理沙と楓に渡しに向かった

最初に向かったのは理沙の家であり丁度よく彼女本人が出たので事情を説明しプレゼントを渡した

「・・・何というか・・・あんたも随分と苦労してるのね・・・」

「本当に凄い両親だと思ってるよ・・・おかげでこつちが疲れる・・・」

「あはは・・・ご愁傷様・・・そうだ！楓のところに行くならこれも渡してもらえる？」

本当は私も行こうかと思っただけ楓本人から風邪をうつしたら困るって言われちゃって」

「了解。それじゃあまた明日、NWOでな」

真斗は理沙からお見舞いの品を受け取り自分もコンビニで色々買ってから楓の家に向かった

家に着くと楓の母親が出てくれたのだが何故か興奮した様子で出迎えてくれて
これは明らかに勘違いしているそうだなと思いつつも家に上げてもらった

「……本条さくん、お見舞いに来たんだけど……本条さん?……失礼します」

扉を叩いても返事がなかったので真斗は楓の部屋に入ると

どうやら彼女が眠っていたようで流石に起こしてはまずいと

お見舞いの品だけを置いて部屋を後にしようとしたのだが

お土産を置いた瞬間にその手を握られてしまった

「うくん……理沙く助けて……」

「どんな夢を見てるんだよ……全く……」

真斗は楓を安心させるように手を握り締めて彼女の頭を優しく撫でる

すると彼女は安心したのか頬が緩んだような顔になっており

それを見て真斗も笑いながら彼女が目を覚ますまでそこにいる事にした

「……んん……よく寝た……あれ?私何か握って……ふえ?」

「大丈夫か?随分とうなされてたみたいだけど

……って大丈夫か!?顔が真っ赤だぞ!」

「まっままままましましやとくん!」

「ちよ!?本条さん!」

こうしてメイプルの風邪が長引いてしまった事は言うまでもなかった

「えっ？これって俺のせいなの？」

守護天使の試練

実家での用事も終わらせたスペリオルは早速、五層へとやって来ていた

残念ながらみんなとは予定が合わなかったので今回は一人で探索する事になった

「五層は天界みたいな世界なんだな．．．天翼で空を飛べるから関係ないけど

マイとかユイに関しては苦戦しそうだよな．．．」

スペリオルは色々と探索をしていると一つだけ思った事があった

「そう言えばここって天界みたいなんだから天使とか居てもおかしくないよな？

．．．少しだけ探してみてもいいかもしれないな」

スペリオルはとりあえずの目標を決めてまずは天使を探す事にした

しかしどこを探しても天使と呼べるような存在は見当たらなかった

「流石に天使はいないのか？でも居てもおかしくはないと思うんだけど．．．

いや待てよ．．．天使は居ないんじゃないやなくて隠れているのか？

だとしたら何か天使を探し出す方法があるのかもしれないな」

天使の手掛かりがないかとスペリオルは急いで色んな場所を探し回る

するとやはりと言うべきなのか天使がいたと言う痕跡は残されており

そしてどうやら天使の秘宝が眠っている神殿があるという情報を手に入れた

「ここが天使の神殿か．．．ここに天使がいる．．．わけはなさそうだな」

残念ながらここまで来ても天使がいるような気配はなく

むしろ生物の気配すら感じられないと言った方がいいだろう

「でもここまで来たんだし天使の秘宝って言うのを見に行くとするか」

スペリオルは神殿の中に入ると勝手に扉が閉じて声が頭に響いてきた

『よくぞ来た．．．ここは守護天使の試練をする神殿』

汝にその資格と覚悟があるのなら先に進むがいい．．．』

「．．．なら遠慮なく．．．先に進ませてもらおう．．．!」

ゆつくりと奥へと進んでいくとおそらく最初の試練がありそうな場所へとやって来た

そしてそこには石像が二体並んで待ち構えていた

『ここでは力を示してもらおう．．．まずはその二体の石像を倒せ』

「．．．えっと．．．もう倒した場合はどうすればいいですかね？」

スペリオルは入ってすぐに石像を倒してしまっており

どうすればいいのかと思っていると

『倒したか．．．ならば先に進むといい』

「・・・あい・・・」

心なしか頭の中に響いて来た声が冷たく感じたがスペリオルは気にせず先に進んでいく

その後も続く技の試練と心の試練をクリアしたスペリオルは神殿の最奥までやって来た

「ここが神殿の終わりにみたいだな・・・って事はあれが天使の秘宝か」

神殿の奥に刺さっていたのは巨大な一本の剣だった

これまでの情報が真実だとするのならば

これこそが天使の秘宝なのだと思えばスペリオルはそれを引き抜く

聖剣バスターソード

STR+300 AGI+150

『破壊不可』『ソウルアツプ』

ソウルアツプ

鎧闘神へと巨大変身しステータスが二倍となる

五分の制限時間を超えると混乱状態になる

使用回数は一日一回

「聖剣バスターソード・・・なんでだろう・・・」

俺はこの剣・・・知っているような気がする・・・」

『それこそが神が与えたと言われる我ら天使の秘宝』

その力を持つてこの世界を守る・・・それこそが守護天使の使命だ』

「守護天使の使命ねえ・・・」

『任せたぞ・・・当代の守護天使よ・・・！』

頭の中に響いて来た声が聞こえなくなると

スペリオルの装備がいつの間にか変わっていた

ユニーク装備・守護天使シリーズ

守護天使の兜

VIT+50 AGI+30 DEX+20

『破壊不可』『守護天使の加護』

守護天使の鎧

VIT+150 INT+50 AGI+50

『破壊不可』『守護天使の翼』

守護天使の籠手

STR+70 INT+50

『破壊不可』

守護天使の脚甲

VIT+50 AGI+70

『破壊不可』

守護天使の加護

ステータスがダウンする効果を無効にする

バッドステータスの効果を半分にする

守護天使の翼

発動すると背中に翼が生えて飛行出来るようになる

「おお〜！随分と速さに特化した装備だな

しかも空中戦が得意とは・・・正直、助かるな」

スペリオルの装備の中で空を飛べるようになるのは天翼だけであり

しかもこれは装備品なのでこれを装備している間

他の武化舞可を装備出来ないと言うデメリットもある

それを考えるのならばこの守護天使装備は対空戦に最も有効だと言えるだろう

「問題は・・・このソウルアップってスキルだよな〜・・・」

なんで制限時間があつてしかも混乱付きなんだよ・・・

もしかしてこれも玉璽と一緒に何か強化するクエストがあるのか？」

そんな事を考えながらスペリオルはとりあえず神殿を出る事にした
するとクエスト欄に新しいクエストが追加されているのを見つけた
しかし・・・スペリオルはそのクエストを見て絶望する事になった
「・・・なんでこのクエスト・・・受注不可なんですかね・・・」

一方その頃、運営側では・・・

「やっぱり五層に来てスペリオルはすぐに守護天使の装備を手に入れたか
最初からデメリットなしにしておかなかつたのは正解だったな」

「でもいいんですか？あのクエストの情報をスペリオルに渡してしまつて」

「本人が受けれないから大丈夫だろ？受けたら楓の木のメンバーだけだ」

「だな！誰がどの装備を手に入れるのか。オラワクワクすつぞ！」

「・・・みんなメイプルが居ないから安心してるな・・・」

勇気なんだけど・・・なんか違くない？

スペリオルが守護天使シリーズの装備を手に入れてから数日

ようやくメイプルも風邪から復活を果たして五層にやって来た

そこでマイとユイの二人と出会い色々と冒険をする中で

スペリオルからメッセージが来ていた事を思い出した

「えっと・・・五層の緑溢れる大地で白い虎を目撃したって話を聞いた

もしかしたら何かのクエストかもしれないから行ってみるといいだつて！」

「白い虎・・・なんかカッコいいですね！」

「早速、見に行きましょう！その白い虎！」

「うん！それじゃあ地図に書かれてる場所までレッツゴー！」

三人はスペリオルに教えられた場所まで向かうと

確かにそこまで先ほどまでの光景と違い水や緑の溢れる地上の楽園みたいなんだつた

ここに白い虎が居るのだと聞いて三人はワクワクしながら周りを探していると

「ん？メイプルさん！あそこに何かあります！」

「何々？あれは・・・本当だ！まるで神殿みたいだね！」

「しかもその上・・・あれって間違いなく虎ですよね？」

「じゃあこの先に虎さんが居るんだ！早速、行ってみよう！」

『おお！』

神殿の扉を開けて三人は奥へと進んでいくとそこには確かに白い虎がいた

それを見て三人が喜んでいるとその虎は人の姿へと変わっていった

『初めまして・・・僕の名は孫権・・・君達に試練を与える者だ』

『試練？それってもしかしてクエストって事？』

「えつと・・・試練ってどんな事をすればいいんですか？」

『試練の内容はズバリ・・・君達の勇気を試させてもらおう・・・！』

孫権がそう告げると三人の前に二人の武将がその姿を表した

『俺の名は江東強襲水軍の呂蒙！』

『同じく江東強襲水軍の甘寧！』

『試練の内容は彼らを倒さずにその勇気を持って従わせる事！』

果たして君達にそれが出来るのか・・・試させてもらおう！』

「ええ!?!倒しちゃダメなの!?!そんなのどうすれば・・・」

『来ないのか!?!だつたらこつちから行くぜ!!鯨牙蒼影斬!!』

甘寧は自慢の必殺技を使って三人に向かって攻撃を繰り出すのだが

「……あれ？全然痛くないですね？」

「……もしかして……私の防御力の方が上だったり……しちゃう？」

そう……このクエストの最大の誤算とこの言うべきはメイプルの馬鹿みたいに高いVITだった

元々、このクエストは攻撃力などを高くしているプレイヤーに厳しくする為のクエストであり

攻撃力に関してはそこまで高くないように設定されていた

なので攻撃力がなく逆に防御力の高いメイプルはまさに天敵だったのだ

『何をしている甘寧……こうなったら俺がやる！碧衝烈破!!』

続く呂蒙も攻撃を繰り返してダメージを与えるのだが

この五層へやって来た時に獲得していた天王の玉座と不死鳥のティアラであったという間に回復

まさに今のメイプルはそこに鎮座しているだけで無敵のモンスターへと変わっていった

その後も呂蒙と甘寧は攻撃を繰り返すのだがメイプルのHPを一割しか減らせず

しかもその一割もあつという間に回復されてしまうので焼石に水だった

『まっまいった……!!』

『・・・まさか本当にこの試練を超えるとは・・・見事だよ』

「えつと・・・なんかズルしたみたいでごめんなさい」

「あはは・・・」

『さてと・・・それじゃあ勇気の試練をクリアした君には褒美を与えよう』

孫権はメイプルの前まで降りてくると一振りの剣を差し出した

虎錠刀

STR+VITの数値

「破壊不可」「猛虎獣烈覇」

猛虎獣烈覇

ダメージを与えると同時に相手のVITを半分にする

『これは虎錠刀と呼ばれている剣。神話に語られる三侯の一人「虎暁」の魂が宿ると言われるんだ』

「三侯？それって確かスペリオルの持っていた龍帝剣と一緒にだ」

『でもこの剣はまだ真の力を発揮しているわけじゃない』

いずれ君に真の勇気が宿った時・・・君は虎錠刀の持つ真の力を引き出せるようになるはずだよ

どうかその力で・・・みんなを照らす月になってくれ』

そう言つて孫権の姿が消えるとメイプルの装備が変わつていた
蒼朧楯

VIT+300

〔破壊不可〕〔蒼朧壁〕

ユニーク装備・猛虎シリーズ

猛虎の兜

VIT+80 DEX+20

〔破壊不可〕

猛虎の鎧

VIT+150

〔破壊不可〕

猛虎の籠手

VIT+30 STR+15

〔破壊不可〕

猛虎の脚甲

VIT+40 AGI+10

〔破壊不可〕

蒼朧壁

十秒間だけあらゆる攻撃から身を守る事が出来る

メイプルはまるで虎をイメージしたような白い鎧に変わっており

その姿は先ほどの孫権のようだった

しかも強力なスキルも付与されていた

「おお！時間制限があるけど無敵になれるスキルがある！」

「流石ですメイプルさん！」

「しかもこの虎錠刀ってVITの数値分だけ攻撃力に変わるんだ！

私にピッタリだよ！孫権さんありがとう！！」

一方その頃、運営側では・・・

『ギヤアアアアアアアアアア!!??』

「メイプル対策に用意していた装備やスキルをメイプルに取られたああああ!!」

「なんでだよ!?!なんであいつはいつも予想と違う方向に進んでいくんだ!!」

「しかも虎錠刀がメイプルの手に渡ったって事は・・・」

「オリハルコン級のボスがオリハルコンの武器を手入れたようなもんですね」

「おまけにメイプル対策用だったVIT半減するスキルも一緒に」

「畜生！なんで帰ってきてきて早々にこんな仕事を増やすんだメイプルは!!」

「平和だったのは・・・ほんの一瞬だけでしたね・・・」

こうして運営は再びメイプル対策を考えなくてはいけなくなるのだった

アルガス騎士団

メイプルがNW Oに復帰して来てから少し経った頃

スペリオルは自分の受けられないクエストをどうしようかと考えていた

「う〜ん．．．やっぱりメイプル達に教えた方がいいんだろが．．．」

問題は誰に教えるべきなのか．．．だよな．．．」

下手に特別な装備やスキルを入手しても

自分と相性が悪ければ使い物にならないだろう

しかしクエストの名前からでは判断する事は出来ず

どうするべきなのかと悩んでいた時だった

「ん？どうしたんだスペリオル？なんか随分と悩んでいるみたいだが」

「クロムか．．．実は俺の受けられないクエストを見つけてな

それで誰にこの情報を渡せばいいんだろうつて悩んでさ〜」

「あ〜．．．確かにウチのギルドは基本的に特化型しかないからな

そうだ！それなら人選は俺に任せてもらってもいいか？」

「それは別に構わないが．．．いいのか？」

「俺もスペリオルがそんなに頭を悩ますようなクエストが気になるからな
こうしてクロムの呼びかけに答えて集合したのは

サリー、カナデ、マイ、ユイの四人だった

「クエストと聞いたら黙っていられないわよね!」

「僕も少しは強くななくちやいけないって

思ってたところだから丁度よかったよ」

「私達はスペリオルさんの持つてきたクエストがどんな物なのか気になりました!」
「と言うわけでメンバーはこの五人になったわけだ

早速で悪いんだがクエストの情報を教えてもらってもいいか?」

クロムに言われてスペリオルは自分が受けられないクエストの名前と発生する方法
を教えた

クエストの名前は・・・『アルガス騎士団と四つ神器』

「確かここら辺に喋る大樹が居るってスペリオルは話してたよな?」

「そうね・・・あつ!もしかしてあの木じゃない!」

サリーが指を刺した方向には確かに他とか違う巨大な木が生えていた

『・・・お主達・・・もしや例の四つの神器を探しに来たのか?』

「その通りよ。どうすれば手に入れる事が出来るの?」

『残念じゃが神器はとある者達に奪われてしまった・・・』

そしてそれぞれ一つずつを持って彼らはバラバラに去っていった

最後の一つだけは封印されておるが

それを解く為には三つの奪われた神器が必要なのじゃ』

「なるほど・・・つまりここからは別れて探した方がいってわけね」

木の精霊から話を聞いてサリー達はそれぞれ別れて神器を奪った者を探しに向かった

一番最初に奪われた神器と奪った犯人を見つけたのはクロムだった

「お前が神器を奪った犯人だな？大人しくそれを返してもらおうおうか！」

『へっ！そんなに欲しいのならこの闘士ドライセンから奪い返してみろ!!』

闘士ドライセンは持ち前のパワーでクロムを攻撃し

逆に攻撃を精霊から奪った竜の盾で防いでいたが

数分の攻防でクロムは闘士ドライセンの弱点に気がついた

「お前・・・盾を持って戦うのに慣れてないな？」

『っ!』

「悪いがお前とは盾を使っている年季が違うんだよ!!」

盾使いとして格はクロムの方が上であり

闘士ドライセンは盾の扱いの差で負けていたのだ

結果としてしばらくの攻防の末にクロムは闘士ドライセンを打ち倒した
「なんとか勝ったか・・・！さてとこれが神器って呼ばれるやつだな？」

竜の盾

VIT+200

「破壊不可」「咬機兵」

咬機兵

咬機兵ナタツクを呼び出して乗り込む事が出来る

使用回数は一日に一回

「・・・随分と凄い盾を拾ったな・・・」

『なるほど・・・君が新しい所有者だね？』

「うお!？」

声が届いてクロムが上を向くとそこには透明な剣士が立っていた
『初めまして。僕の名前は剣士ゼータ』

その竜の盾を所有していたアルガス騎士団の一人だ』

「アルガス騎士団・・・それってクエストの名前に出ていたヤツだな」

『竜の盾を取り返してくれた事、まずは深く礼を言おう』

もしよければその盾は今後も君が所有してくれと助かる』

「いいのか!?! こんなに強い盾を貰えるなんてそれりゃあ嬉しいけど……」

『構わないよ……君達ならば我らの意思を継いでくれそうだからね』

そう言つてゼータの姿が消えると

クロムの装備がいつの間にかユニーク装備・飛龍シリーズに変わつており

しかも新しいスキルまでも会得していた

ゼータの加護

VITを50%上昇させる

「おお! 前の死神みたいな装備と違つてこつちの方がかつこいいな!」

一方その頃、森の奥ではカナデも同じく神器を持つていた騎士パウと戦つていた

「フレアアクセル!」

『チイ! まさか馬の足に追いついてくるとは!』

だがこの梟の杖がある限り貴様の攻撃は俺に通用せんぞ!』

「それはどうかな? パラライズレーザー!」

『何?!』

確かに梟の杖によつてカナデの魔法は全て無効化されていたが

それはあくまでも騎士パウに放つていた魔法だけで

彼の乗っている馬にまではその効果が及んでいなかった

それにより馬はカナデの攻撃を受けて麻痺してしまい

騎士バウは落とされてしまいその際に梟の杖も手放してしまう

『しまっ！』

「逃がさないよ！ファイアボール！」

『ギャアアアアアア!!』

最後はカナデの魔法が直撃し騎士バウは消滅した

戦闘が終わるとカナデは騎士バウの落とした梟の杖を拾った

梟の杖

INT+200

「破壊不可」「冥機兵」

冥機兵

冥機兵デスサイザーを呼び出して乗り込む事が出来る

使用回数は一日に一回

「へえ・・・かなり強い装備みたいだね？」

しかもこの冥機兵ってスキル・・・もしかしてスペリオルの聖機兵みたいなものかな

？」

『ほう？魔法だけではなく知識もちゃんと備えているようだな』

「ん？君は一体？」

『私の名はニユー。君の持っている梟の杖を所有していた者だ』

君が勝利した褒美としてその梟の杖と私の加護を与えよう』

そう言つてニユーが消えるとカナデの装備がユニーク装備・冥府シリーズに変わつて
おり

新しいスキルも取得していた

ニユーの加護

INTが50%上昇する

「黒ずくめでしかも名前が冥府シリーズか・・・」

あまり僕の趣味じゃないけどこれはこれで強いからいいかな？」

そして最後の一人である呪術師キュベレイとマイとユイの二人も同じように戦つて
いたのだが

その戦い方は二人とは違いなんともギャグのような戦闘になつていた

『ちよっ!?!私の魔法を物理で叩くとかどんだけですの!?!』

そう・・・二人はキュベレイの放つ魔法を全て叩き落としており

もはや相性とかそう言った話では終わらない戦闘になつていたので

「ダブルスタンプ!!」

『ちよつまっ!ギャアアアアア!?!』

こうして呪術師キュベレイは真の姿を晒す事もなく撃破されてしまった

『・・・素直に賞賛はするが・・・この戦闘は酷かったな・・・』

「あの・・・どちら様ですか?」

『ああ悪い。俺の名前はダブルゼータ!お前らの持つている獅子の斧の元所有者だ!』

今回は特例でお前ら二人に獅子の斧を託してやろう!ついでに俺の加護もな!』

そう言ってダブルゼータが消えると獅子の斧は二つに分身し

そして二人の装備もユニーク装備・闘士シリーズに変化して新しいスキルも取得して

いた

獅子の斧

STR+200

「破壊不可」「豪機兵」

轟機兵

轟機兵マグナムを呼び出して乗り込む事が出来る

(二人で発動し一緒に乗り込む必要がある)

使用回数は一日に一回

ダブルゼータの加護

STRが50%上昇する

「やったねお姉ちゃん！」

「うん！それよりも早くみんなに知らせないと！」

こうして全ての神器を揃えたサリー達は再び木の精霊がいる場所に戻ってきた
『まさか本当に神器を取り戻してくれるとは……！』

よかろう……。約束通り最後の神器をお前達に託すでしょう……。！』

木の精霊が呪文を唱えるとクロム達の持っていた三つの神器が光り出し
中央に綺麗な豎琴が姿を現しゆっくりとサリーの元に降りていった

導きの豎琴

全てのステータス+100

ステータスの20%を周囲の味方に付与する

「破壊不可」「斬機兵」

斬機兵

斬機兵サンドレオンを呼び出して乗り込む事が出来る

使用回数は一日に一回

『……君が新しい所有者だね？』

「えっと・・・貴方は？」

『私はアルガス騎士団長アレックス。それは導きの豎琴と呼ばれており

いずれ勇者を決戦の場へと連れていく為の道具・・・どうか大切にしてほしい』

そう言い残してアレックスが消えると

サリーの装備がユニーク装備・砂漠シリーズに変わっており

新しいスキルも取得していた

アレックスの加護

全てのステータスを25%上昇させる

『これで全ての神器は揃った・・・』

それはつまり勇者と魔王の決戦が近い事も意味している・・・』

「勇者ってスペリオルの事よね？魔王って確かあいつが最初に倒したんじゃ・・・」

『いや・・・魔王は生きておる・・・』

そしてその魔王を生き返らせた強大な闇の存在もいる・・・

彼らといずれ戦う事になるだろう・・・その時は・・・どうか力になるのじゃぞ・・・』

木の精霊はそう言って眠るように目を閉じてしまい

サリー達の画面にはクエストクリアの文字が書かれていた

六層に潜む恐怖

五層を一通り回ったところで運営から第六層の追加が発表された
そしてスペリオル達はボスモンスターを倒して

無事に六層までやって来たのだが・・・

「・・・まさかホラーマップとはなく・・・」

天国みたいな五層から一気に転落した気分だ」

「まあ・・・約一名はそれどころじゃないみたいだけだな」

「大丈夫？ やつぱりサリーはギルドハウスに戻った方がいいんじゃない？」

「だつ大丈夫じゃないけど少しは見ておかないと」

「そう思うのなら俺の後ろで目を瞑らないでもらえますかね？」

六層はサリーが苦手とするお化けなどがモチーフになったステージで

流石のスペリオルもこのギャップには色々と思うところがあつたようだ

しかしこのままこの状態のサリーと一緒にいるわけにはいかず

一旦、五層のギルドハウスへと向かった

「はあく・・・まさか六層があんな感じだったなんて・・・」

しばらくは五層でレベリングするしかないかな．．．」

「．．．俺は俺でやらなくちゃいけない事もあるし．．．」

悪いけどしばらくの間はみんなのクエストには付き合えないな」

「へっ?もしかしてスペリオルはもうクエストを見つけたの?」

「あゝ．．．と言うよりも向こうから来たって方が正しい」

「?」

実はこの六層に來た瞬間からスペリオルには

三つのクエストが受けられるようになったと運営からメッセージで來たのだ

なので今回はその三つのクエストに専念しようと考えた訳で

ここからは個人での活動を優先する事をみんなに伝えた

「そう言う事か．．．しかし運営から直々の挑戦状とはな

どうやらメイプル以上に目を付けられたんじゃないか?」

「はは．．．お前から聞いた魔王復活の話聞けばそうなるんだろうな．．．」

ぶっちゃけあの魔王ともう一度、戦えとか俺的には無理があるんですけど．．．」

アルガス騎士団のクエストから帰ってきたクロム達から魔王復活の話を聞いて

スペリオルは再びあの激戦をしなくてはいけないのかと内心では憂鬱だった

それほどまでにかの魔王は強く三種の神器を使ってやつと勝てた相手

それが復活し更に強くなっていると聞けば流石に嫌にもなるだろう

「だからこそ！今回のクエストできつちりパワーアップしないと！」

「おう！頑張れよ！」

こうしてスペリオルはみんなと別れて最初に向かったのはとある幽霊城だった

なんでもここには彷徨う騎士の姿があつたようで今回のクエストはその討伐である

ゆつくりと注意をしながら先に進んでいくと奥で真つ赤な騎士が待ち構えていた

『我が名は騎士サザビー……！ジークジオン様の命により貴様の首を貫き受ける……』

！』

「あんたが俺の相手ってわけか……！面白い！」

サザビーとスペリオルはお互いに剣を抜いて一気に詰め寄り激しい攻防を繰り広げる

（こいつ……！剣技だけなら俺と互角かよ……！）

おそらくは俺の動きをトレースしたってわけね……！

だつたら……今までに見せた事のない動きをするだけだ！

なんとサザビーの強さはあのスペリオルと同様の技量を持つているようで

流石のスペリオルも苦戦を強いられる事になったが

「精神集中……火炎斬り！」

『ギヤアアアアア!!』

そこはもはや生身の戦闘技能がチート並みの能力を活かしてどうにか勝利を収める
するところからともなく邪悪な声が響いてきた

『・・・サザビーよ・・・! 汝が負けるなど我が許さぬ・・・!』

「なんだ? もしかしてこの声の主がジークジオンか?」

『我が力の一端を貸し与えてやろう・・・! その者の命を奪い取れ・・・!』

その言葉と同時にサザビーの体が邪悪に発光し始めて

その体がどんどんモンスターのように変化していった

「マジかよ!」

『ピッギヤアアアア!!』

「ぐっ?! 盾で防いでもダメージがあるとか卑怯だろ!」

こうなったら! オーノホ・ティムサコ・タラーキイ!!」

スペリオルはこの状況をどうにか打破しようと三種の神器を纏った状態で勝負を挑むが

なんとモンスターへと姿を変えたサザビーの強さは

三種の神器を身に纏ったスペリオルと互角だったのだ

(嘘だろ! こっちには時間制限があるのに卑怯すぎるだろ!)

強さが互角では時間制限のあるスペルオルが圧倒的に不利だろう

しかもその焦りが徐々にスペルオルの動きから鋭さを失わせていく

そして残り時間とHPが少なくなってきたもはや絶体絶命の状況になったが

「でも・・・諦めるわけにはいかねえんだよ!!」

うおおおおお!!」

『ギャオオオオオオオ!!?!?!!』

スペルオルは相手が攻撃してきたその瞬間にカウンターを当てて

最後の残り時間を全て攻撃に費やす事でどうにかサザビーを倒す事が出来た

「はあ・・・はあ・・・残りのHP・・・3つて・・・ヤバすぎだろ・・・」

もはや雑魚の一撃ですらやられてしまうようなHPになってしまったが

それでもどうにか倒せたという幸福感がスペルオルの中にはあった

そしてその幸福感に包まれている中でスペルオルの纏っていた騎士シリーズの装備

が進化を果たした

ユニーク装備・バーサル騎士シリーズ

宝剣バーサルソード

STR+150 AGI+75

「破壊不可」「猛炎斬り」「烈風斬り」

電磁ランス

STR+125 AGI+100

「破壊不可」「激流突き」「紫電突き」

バーサル騎士の兜

VIT+100 DEX+50

「破壊不可」「騎士道精神」

バーサル騎士の鎧

VIT+200 INT+75

「破壊不可」「マウント装備」「ケンタウロス」「肩装甲」

バーサル騎士の籠手

STR+50 VIT+30

「破壊不可」「二刀流」

騎士道精神

相手が異形系モンスターの場合、与えるダメージが二倍となる

肩装甲

盾を装備していなくても盾のスキルを使える

二刀流

両手に装備を持っていると武器のSTRが二倍となる

「・・・なんかめっちゃ進化してるけど・・・もう気にしてられないわ・・・」

一方その頃、運営側では・・・

「・・・やっぱりサザビーじゃ倒せなかつたか・・・」

「まあ・・・ぶつちやけ予測はしてましたよね・・・」

「スペリオルと同じステータスと技量なら或いはと思ったんだけどね・・・」
「向こうの方が一枚上手でしたね」

「こうなったらなんとんでも最強の魔王で迎え撃つぞ！」

『おお!!』

魂が震える戦い

サザビーと戦いかなり体力を消耗したスペリオルはギルドハウスで休んでいた

「まさかスペリオルがそこまで苦戦するような相手だったなんて・・・」

運営もいよいよスペリオル対策をしてきたって感じかな？」

「その言い方だと今まではしてこなかったみたいに関こえるぞ？」

「まあ実際はしてなかったんじゃないかと」

どうすればいいのかわからなかったって感じだけだね？」

「流石です！スペリオルさん！」

「・・・お前ら・・・」

他人事だと思ってるけどその内に自分達を目をつけられるからな？」

「そうなの!? うへえ〜これ以上、弱体化されても困るよ〜」

(メイプルの場合は弱体どころか強化されてるんだよね・・・)

なんて事を考えながらスペリオルはこれからどうするかを考えていた

おそらく残りあの二つの試練に関しても先ほどと同じような何度になっているだろ

う

しかし正直な話をするのならばいくらスペリオルでも

あの難易度クラスのクエストを攻略するにはそれ相応の体力を必要とする
(・・・とりあえず明日、もう一度だけこなしてから色々と考えるか・・・)

こうしてスペリオルは翌日になってもう一つのクエストをこなす事にした
クエストの内容はとある戦場にいる阿修羅を倒す事

それを聞いて阿修羅の姿をしたモンスターを倒すのだとスペリオルは簡単に考えて
いたのだが

なんとスペリオルの前に立ち塞がったのは他ならぬ三国志の世界で最強と言われて
いる男

『さあ・・・俺の魂を震わせてみる!!』

呂布だった

「・・・これは流石に・・・無理に決まってるだろおおおおお!!?」

明らかにこの前のファントムサザビーよりも危険な敵が現れたとスペリオルは思っ
ており

こんな相手にどうやって勝てばいいのだと思いつながら呂布と刃を交えていく

『どうした!? そんな事では俺の血が滾る事はないぞ!!』

「こつちも必死で戦ってるつての!? てか強すぎるだろ!?」

呂布の強さはもはや達人の域を遙かに超えており鬼と言われても信用できたあのスペリオルですらも技では拮抗されて力では向こうの方が上手だった

(このままだつたら間違ひなく負ける・・・!)

かと言つてどうやってこんな化け物に勝つて言うんだよ!?)

『どうやらここまでのようだな! 旋風大烈斬!!』

「グウ!? ノワアアアアアアアア!?!」

初めてスペリオルは自分が負けるかもしれないと考えていた

しかしここまで来て負けるわけにはいかなかった

それは自分をここまで追ひ詰めるほどの相手と戦いたかつたからだ

「アンタは凄いな・・・! こんな経験は生身じゃ絶対に出来ない・・・!」

だからこそ・・・俺はもう一度立ち上がる! そしてアンタを超えてみせる!」

『面白い・・・! 来るがいい!』

「行くぜ! 義兄弟の絆! そして三位一体!」

スペリオルは張飛と関羽の二人を呼び出して二人の鎧を装着

金色に輝き始めるとそのまま呂布と再び刃を交える

『いいぞ！もつと俺の血を滾らせろ！魂を震わせろ！！暴風激烈斬！！』

「うおおおおお！！三位一体！星龍斬！！」

両者の一撃はお互いに拮抗して凄まじいまでの衝撃波がフィールドを破壊していく

しかしやはり呂布の一撃の方が威力が高いようで徐々に劉備の方が押されていた

「ぐっ……！まだだ……！もつと力を……うおおおおお！！」

『なんだ!?天が……こいつに力を与えているのか!?』

「！もしかして！来い！玉璽よ！」

スペリオルは玉璽を呼び出すと光り輝き天玉鎧・蒼龍が姿を現す

「うおおおおお!!真龍斬!!」

『ぐおおおおお!!見事……なり……!!』

天玉鎧の力を借りたスペリオルの一撃は見事、呂布の一撃を上回り

彼はその一撃を受けて消滅する間際に自分の敗北を認めスペリオルの勝利を讃えた

「はあ……はあ……もう……無理……」

しかしスペリオルも体力を使い切ってしまったよう倒れるように地面に寝っ転がった

その所為もあつてなのか自分の装備が進化していた事にも気づいていなかった

ユニーク装備・真龍帝シリーズ

真爪龍刀

STR+150 AGI+75

〔破壊不可〕

真牙龍刀

STR+150 AGI+75

〔破壊不可〕

真龍帝劍

STR+250 AGI+100

〔破壊不可〕〔真龍帝の魂〕

真龍帝の兜

VIT+10 DEX+150

〔破壊不可〕〔正義の心〕

真龍帝の鎧

VIT+75 AGI+100

〔破壊不可〕〔マウント装備〕〔真義兄弟の絆〕〔真三位一体〕

真龍帝の籠手

VIT+50 STR+50 AGI+50

〔破壊不可〕

真龍帝の脚甲

VIT+50 AGI+150

〔破壊不可〕

真龍帝の魂

龍帝の魂が完全に解放されてSTRが二倍となる

効果時間は三十分

真義兄弟の絆

自分と同じステータスの鬼牙装 関羽と雷装 張飛を召喚する

効果時間は三十分

真三位一体

真義兄弟の絆を発動している間のみ使用可能

関羽と張飛のステータスの半分を自分に加える

効果時間は十分

こうしてスペリオールは新しく進化を遂げたのだった

一方その頃、運営側では……

「まさか呂布まで倒すとは……」

スペリオルは中国の乱世でも生きていけたんじゃないか？」

「だな……ぶつちやけあの強さの再現に関しては俺達の間でも問題になったのに……」

「それを超えるとか……スペリオルも人外だったか……」

「いやそんな事よりも早く二人の戦いで壊れたフィールドの修復作業をしましょうよ」

サリーと雷の將軍

呂布との戦いを終えてしばらくの間、スペリオルはのんびり過ごそうと考えていた。それほどまでに彼との激戦が響いたのだと言つてもいいだろう。

しかしのんびりと言つても何をして過ごそうかと考えているとサリーからメッセーヂが届いていた。

「レベリングを手伝ってほしい？サリーがそんな事を言うなんて珍しいな？」

スペリオルはあまりにも珍しいメッセーヂに少しだけ驚いていたが

もしかしたら六層でみんなと遊べないのを寂しく思っているのかもしれないと思い

あえて事情は聞かないでサリーのレベリングを手伝おうと考え彼女の待つて五層に向かった

「あつ！スペリオル！こつちこつち！」

「そんなに急がなくても別にレベルは逃げたりしないだろ・・・」

「そうじゃなくてあの大量のモンスター達が逃げちゃうかもしれないのよ！」

「大量のモンスター？」

どうやらサリーの話ではこの五層に空を飛ぶ大量のモンスターを発見し

一匹を倒すと今までより得られた経験値よりも上だったのだから、どうしてもその群れを倒したいと考えていたようだ

「なるほどな……それで空を飛べる俺を呼んだってわけか……」

ん？空を飛べるのって別に俺だけじゃないよな？メイプルはどうしたんだ？」

「それなんだけど……なんかクエストで忙しいみたいで」

ちようど暇してそうだったのはスペリオルだけだったんだよね……」

「暇って……まあ実際にそんな感じだったから別にいいけど……」

それじゃあ早速、そのモンスター達を倒しに向かうとするか」

スペリオルは早速、サリーに案内してもらってそのモンスター達のいる場所へと向かった

するとその場所に居たのは羽が生えたまるで天使のようなモンスターだった

しかし天使と呼ぶにはあまりにも凶暴でありこちらを見つけるとすぐに襲ってきた

「見た目とは違って本当に凶暴なモンスターだな……換装！守護天使！」

空を飛べる守護天使へと変身したスペリオルはバスターソードで翼を切り落とす

そして地上に落ちたところをサリーがトドメを刺して経験値を稼いでいく

「思ったよりも数が多いなもしかして何かのボスでもいるのか？」

『ほう？思ったよりも賢い戦士がいたようだな……』

そこへ姿を現したのは同じく羽が生えて仮面を付けた白い騎士の姿だった

『我が名は電光の騎士ゼクス！守護天使よ！私と決闘して貰おう！』

「マジか．．．ボス戦は出来るだけしたくなかったんだけどな．．．」

『問答無用！いざ尋常に勝負！』

スペリオルが受けるかどうかを言う前にゼクスは襲い掛かってきて

それを迎撃する形でスペリオルは仕方なく彼との決闘を受け入れる

彼の持っている長いランスはバスターソードと同じくらい長く

お互いに致命打を与えるほどの攻撃を当てられなかった

『どうやら生身での戦いは互角といったところか．．．！』

ならば私はとっておきの切り札を出すとしよう！来い！ツールギス！』

なんとここでゼクスは機兵を呼び出してそれに乗り込んで攻撃を繰り返してきたの

だ

「おいおい!?流石にそれは卑怯なんじゃないのか!？」

『何を言う！全力で相手をしてこそその決闘だ！』

これが私の全力であり決闘に対しての信念だと思ってくれて構わない!』

「すごい理屈．．．」

「こうなったら．．．来い！ガンレックス!」

スペリオルも同じく機兵を呼び出して対抗しようとガンレックスの名前を叫んだのだが

「・・・あり？なんで発動しないんだ？」

『このフィールドは召喚禁止エリアです』

「なっ何だとおおおお?!?!」

何とスペリオルが戦っていたエリアは召喚を禁止されたエリアだったようで

機兵に対抗できるガンレックスやサイコゴレムを呼び出す事が出来なかったかといってこのままでは彼にやられるだけになってしまおうので

スペリオルは危険な賭けではあるがとあるスキルを使う事にした

「仕方ねえ・・・！こうなったらソウルアップ！」

スペリオルがそのスキルの名前を叫ぶと巨大化してその姿を鎧闘神へと変える

「この姿での制限時間は決まっている・・・！一氣に片を付けるぞ！」

『面白い・・・！貴様の力を見せてみるがいい！』

ソウルアップは強力ではあるが同時に制限時間があり

それを超えて仕舞えば自分に混乱が付与されてしまう

だからこそ速攻で決着をつけなければならぬとスペリオルは渾身の一撃を繰り出

す

これには流石のツールギスでも攻撃を受け止める事は出来なかったようで片腕を失ってしまふ

『ぐっ!?まさかこれほどは．．．!だが今回で決着というわけではない!』

必ずや再び君の前に姿を見せる事になるだろう!その時まで楽しみに待っておきたまえ!』

そう言い残してゼクスは消えてしまいスベリオルは地上に降りて変身を解除した
「はあ．．．はあ．．．くっそ．．．このソウルアップは制限時間もあるのに

攻撃を繰り返す度にHPを失うのもキツイ．．．」
「随分と厄介なスキルを与えられたみたいね?」

「だな．．．早くこれを完全にするクエストでも受けないとなく．．．」

そんな事を言っているとスベリオルの前に一つの建物が姿を現した

それはとても神秘的なものであり女性であれば誰でも憧れる物の一つだろう
しかしスベリオルにとっては忘れていた悪夢を思い出す建物だった

「．．．まさか．．．ここが例の教会．．．なんて言わないよな?」

新郎一人に新婦多数!?

電光の騎士ゼクスを退けたスペリオルだったが

今、彼は新しい危機を前にしていた

それはスペリオル本人すらも忙しくて忘れていた例の悪戯グッズ

【ドキドキ! ウエディング体験!!】

とあるイベントフィールドで使用可能なチケット

男女のペアで特別なクエストをクリアすると特別な装備が手に入る

そしてスペリオルは見つけてしまったのだ

おそらくはこれを使用するであろう場所を・・・

「へえ〜五層にこんな綺麗な教会があるなんて知らなかった

もしかして何かのクエストでもあるのかな?」

「そそそそそうなんじゃないですかね!？」

「・・・スペリオル?なんで急にそんな取り乱してるのかな?」

「とととと取り乱してなんておりません!？」

ええー俺はいつでもどこでも冷静ですとも!!」

明らかに動揺しているスペリオルを見て

サリーはおそらく前のようなアイテムを持っているのではないかと考えていた問題は前回のアイテムでもそうだったのだが

自分だけ不幸な目に遭うかもしれないと言う危険性がある事だった

なので正直な話、彼から話を聞くかどうかを悩んでいた

しかしやはり他に先を越されるわけにはいかないとスペリオルに確認する事を決意する

「スペリオル．．．素直に答えればまだ罪を軽くしてあげてもいいわ．．．

だから．．．今すぐに知っている事を全て話しなさい．．．！」

「．．．あい．．．」

サリーのあまりの迫力に負けてしまったスペリオルは例のアイテムの事を話した

それを聞いたサリーはそのクエストを受けるべきかどうかを悩んでいた

運営が用意してくれた悪戯とは言ってもどんなアイテムが手に入るのか気になるのがゲーマーの性

故にサリーはみんなには申し訳ないと思いつながらスペリオルを連れてそのクエストに向かう事にした

『おお！よくぞ参りました真実に愛を求める者達よ

私はここの教会の神父をしている者なのですが実は・・・困った事がありましたもうじきとある王家の結婚式が執り行われる事になっているのですが

それに必要は聖なるタキシードとドレスを魔物に奪われてしまったのです・・・どうかこれを取り返してはもらえないでしょうか!？」

「・・・意外と普通のクエストで逆に安心してしまふな・・・」

「そうだね・・・おまけにモンスターの討伐だから都合がいいかも」

レベリングをしているサリーからしてみてもこのクエストは都合が良くて

スペリオルもクエストの内容が普通だったのもありこのクエストを受ける事にした

そしてクエストは意外にも簡単にタキシードとドレスを盗んだモンスターもすぐに

討伐出来た

その後、二人は神父にタキシードとドレスを返しに教会へと戻った

『おお!まさか本当に取り返していただけるとは!本当にありがとう!』

よければお二人もこのタキシードとドレスを着てみてはどうですか?』

「それは遠慮しておく!」

『そんな事言わずに!さあさあ新郎はこちらへ!新婦はシスターがご案内します!』

「誰が新郎(新婦)だ!?!」

二人は文句を言いながらも結局はNPCの二人に流されてしまい

あれよあれよと言う間に純白のタキシードとドレスを着せられてしまった

「くっそ……後で覚えてろよあの神父……!!」

「本当よね……てかスペリオルの素顔を久しぶりに見たわね？」

「いや学校で見てるだろうが……てかサリーは普通に似合ってるな？」

写真でも撮ってメイプル達に送ろうか？」

「それは後が怖いからやめて!!でっでも褒めてくれてありがとう……//」

『お二人ともよく似合っていますよ！それでは結婚式を始めましょうか！』

「「なんでそうなる!？」」

『えっ？お二人は結婚式を行う為にこの教会に来たのではないのですか？』

どうやら神父は最初から二人が結婚式の為に来たのだと思っていたようだ

ようやくスペリオルはこのクエストの本当の意味に気がついた

「もしかして……この結婚式を行うのもクエストの一環なのか？」

「嘘でしょ!？スススススペリオルと結婚!？//」

「何を想像したかは知らないけどとりあえずは落ち着け」

『まあ誤解でしたのなら申し訳ない……』

では代わりにこの指輪をお二人に授けましょう』

永遠の繋がり(???)

登録したプレイヤーが持っているスキルを一日一回だけ使う事が出来る

「マジで!?普通にめちやくちや強い装備じゃん!」

「私としてはあんまりスperiオルのスキルは使いたくないんだけど・・・

絶対に目立つだろうし・・・」

「それ・・・本人を前にして言う事か?」

『それでは指輪の登録方法についてをお教えしましょう!」

その方法とは・・・ズバリ口づけです!』

「ブウ〜!?!」

あまりの言葉に二人は吹き出してしまいがこれが悪戯アイテムだった事を思い出し

これこそが最大の目的だったのだとスperiオルは運営に対して怒りを露わにしてい

た

「ほほほほ本当に口づけじゃないと駄目なの!」

『別に口でなくても構いませんよ?頬でもおでこでも』

「おでこなら・・・出来そうか?」

「なんであんたはやる気になってるの!?まずはやられる私の事を考えなさい!」

「よし!サリ!動くなよ!!」

「ちよっ!?!／／マジでやるの!?!／／／」

どうせやらねばいけないのだとスペリオルは悟りの目をしており

サリーの方を掴んでゆつくりのそのおでこにキスを交わした

『おめでとうございます！これでご契約は完了となりました！』

「みたいだな？えつと・・・大丈夫か？サリー」

「・・・・・・・・きゅ／＼／＼」

「やつぱりダメだった〜!？」

こうしてサリーは最大の恥ずかしさから翌日はゲームにログインすらせず

理由を聞いてきたメイプル達に対して復讐のつもりでクエストの内容を教え

自分と同じ恥ずかしさを味合わせた事は言うまでもなかった

「・・・・・・・・いやあの・・・全員分をやった俺が一番恥ずかしかったんだけど？」

おまけ・悪戯アイテムの影響？

とある日、メイプルの誘いで炎帝ノ国のミイとミザリーが楓の木にやってきて温泉に浸かっていた

「まさか楓の木のギルドハウスには温泉まであるとはな・・・」

「羨ましいわね〜私達のギルドでも置けないかしら？ねえミイ」

「そうだな・・・今度はそういったクエストを探してみるのもいいかもしれない・・・」

「・・・あんたらしいわよね・・・ゲームの世界で胸が大きくなってさ・・・」

「・・・えつとねサリー・・・実は私・・・現実でもちよつと胸が大きくなって・・・」

「なん・・・だと・・・!?!」

「メイプルもか!?!実は私も最近になって大きくなってきてな・・・」

また新しい下着を買わなくてはいけなくなってしまう・・・」

「何気に下着って値段がするから大変なのよね?」

「私達は身長も伸びました!」

「もしかしてゲームの影響が現実世界にまで出ているのだろうか?」

「そうかもしれないね? 因みにこの中で大きくなった人は何人なのですか?」

ミザリーの問いに対してサリー以外の全員が手を挙げていた

「・・・クツソォー!フレデリカに慰めてもらってくるんだから!!」

七回イベント

あれから少しだけ時が経ち新しいイベントの予告が出されていた

今回のイベントは塔の攻略で一階層事にボスが用意されているようだ

しかも難易度まで選べるようになっていてという事だった

「今回は塔の攻略か・・・」

階層ごとにボスモンスターが居てしかもギミック付き・・・」

「なんとも意地悪な設計になってるな・・・」

でもその分・・・報酬は豪華になってるみたいだな」

「それで？みんなはもちろん最高難易度を選ぶんでしょ？」

「もちろんだ。メイプルとサリーはどうするんだ？」

「私達は今回、二人で塔の攻略に挑もうかなって考えてるんだ！」

「最近メイプルと一緒に遊べてなかったから今回はって話になってね

それで本当はスペリオルも誘おうと思っただけど・・・」

そう言いながらサリーはスペリオルの方を見ると

彼も何やらなんとも言えないような顔をしていた

「・・・まさか運営から直接こんなのを送られてくるとはな・・・」

『本日のイベントで貴方にだけ最高難易度を超える e x t r a ステージを用意しました

ご興味があれば是非とも参加してはもらえないでしょうか？

(注意・報酬は最高難易度をクリアした場合と変わりません)』

なんと運営はスペリオルにだけ特別な最高難易度を超えるステージを用意していたのだ

本当ならば最高難易度をクリアするのもトッププレイヤーはキツイと予想されているのに

スペリオルは更にその上のステージをソロで挑戦しないかと言われてしまったが

「まあ・・・もちろんゲーマーのスペリオルはそれを受けないわけがないよね・・・」

「どんな敵が待ち構えているのかめちやくちや楽しみで待ち遠しいぜ・・・!」

「なんかいつも以上に盛り上がってるわね」

「スペリオルがここまで嬉しそうな顔をしているのは珍しいな？」

それほどまでにスペリオルがあそこまで笑っている顔は珍しく

思わず女性陣が見つめてしまうほどだった

「・・・はっ!そっそういえばカスミ達は どうするの?」

「わっ私達は全員で最高難易度の挑戦するつもりだ」

「おそらくはミイやペインも同じく最高難易度に挑戦するだろうし……

そうなつてくると誰が最初にクリアするか勝負になりそうね?」

「いやあの……明らかに難易度も人も違う俺が不利だよね?それ」

そんなこんなを話しながらイベントに備えてそれぞれに準備をし

いよいよ第七回イベントが始まりみんなはそれぞれの塔へと転送される

「……」が俺だけに用意されたextraステージか……

気のせいかな?なんかすんごい禍々しいんだけど!」

他の塔を見ていないのでなんとも言えなかったが明らかに塔の様子がおかしく

スペリオルは本当にこんな塔を上らなくてはいけないのかと思っていた

しかし先に進まないわけには行かなかつたので塔の中に入り先へと進んでいく

するとスペリオルの前に現れたのは巨大な怪物・モンスタージャイアントジオングの

姿があつた

「随分とデカいモンスターが姿を現したもんだな……!」

だがこれくらいのもンスターじゃ俺を満足させるには足りないぜ!

確かに普通に比べたら遥かに強いモンスターではあるが

フロントムサザビー、呂布を倒したスペリオルにとつて

もはやこの程度の相手は普通のモンスターとそこまで変わらなかつた

映像に映されていたのは自分達が与えたクエストをクリアし

更に強化された技を放つメイプル達の姿が映し出されていた

((((・・・もしかして・・・こいつらもスペリオルと同じステージで良かったんじゃないかな

いか?)))

それを見て今更ながらに彼らもスペリオルと同じく

extraステージを用意するべきだったのではないかと思うのだった

extra 難易度は伊達じゃない！

無事に一階を突破したスペリオルは続く二階にやってきていた

するとそこは一寸先すらも見えない闇の空間であり

スペリオルはすぐに畏だと気づいて武器を構えた

(この暗闇・・・そして畳の床か・・・)

俺の予想が正しければこの階のボスは・・・忍者だ！)

そしてその予想が正しいと言わんばかりに何かがスペリオルを襲う

どうにかその一撃を受け流したスペリオルだったが

このままでは一方的に攻撃されるのは目に見えているだろう

「あんまりこう言った事はしたくないんだけど・・・！烈火一閃！」

なんとスペリオルは灯りを確保する為に部屋そのものを燃やした

通常ならば自分の逃げ場がなくなるのでやったりはしないのだが

今の場合は暗闇にいる事の方が問題なので思い切って行動してみたのだ

その結果、スペリオルはようやくやく敵の姿を捉える事が出来た

「お前がこの階層のボスカ・・・！」

『いかにも……！我が名は武者忍！剣舞風荒！いざ尋常に勝負！』

剣舞風荒は凄まじい速度で部屋を縦横無尽に動きながら

鬼爪や紅蓮盾などでスペリオルに攻撃を仕掛けてくる

しかし早いだけならば特に脅威ではなくスペリオルは攻撃を受け流しカウンターまで当てる

するとHPが半分まで削れた剣舞風荒は急にその動きを止める

『まさかここまで追い詰められるとは……！』

どうやらこれを抜くに相応しい相手のようだな……！』

そう言つて剣舞風荒は自分の腰に装着していた刀を引き抜いた

スペリオルはその行動を警戒していると剣舞風荒が突っ込んできた

そしてスペリオルはその攻撃を受け止めようと考えたのだが

(?!:受けたらまずい!!)

直感で受け止めるのはダメだと判断し間一髪でその攻撃を避けると

なんと先ほどまで自分が居た地面が粉々に砕け散つたのだ

『ほう？まさかこの撃砕剣の威力を見抜いたか？』

この一撃はどんな硬い装甲を持つ相手であつても破砕する刀

たとえば貴様であつても当たつて仕舞えばひとたまりもないだろうな……！』

「防衛不可能の刀つてわけか．．．！なら対応策は決まっている．．．！
行くぜ！武化舞可の俊脚!!」

そう相手の攻撃に当たってはいけないのなら相手の攻撃が当たらない速度で動けばいいだけ

そう考えたスペリオルは武化舞可の俊脚を発動し剣舞風荒以上の速度で翻弄し怒涛の連撃を当て続けて剣舞風荒のHPを見事に削り切った

『見事．．．!』

剣舞風荒はそう言い残してそのまま姿を消した

「どうにか二階を突破か．．．めっちゃ時間掛かったな．．．」

急いで巻き返さなくてはいけないと思いつつながら

スペリオルは足取り早く次の階へと向かった

一方その頃、最高難易度を挑戦する他のメンバー達は．．．

「．．．もはやメイプルは破壊神になりつつあるな．．．」

虎錠刀を手にしたメイプルの一撃は全てを破壊しつつあり

サリーはもうどんな相手でも一撃で粉碎出来るのではないかと思っていた

「・・・なんか・・・私達の出番は無さそうね?」

「だな・・・せっかくの新装備のお披露目だったんだがな」

『『ええくいい!!』』

クロムチームもほとんどの敵をマイとユイの二人が機兵で粉碎しており
もはや自分達が必要なのかと思っていた

「はあああああ!!大紅蓮斬!!」

「ミイはすごい気合が入っていますね?」

「それはいいんだけど・・・そのミザリーの格好は凄すぎると思う・・・」

今のミザリーの格好は普段以上に露出が多い踊り子のような服をしていた

それはスペリオルから情報をもたらったクエストで手に入れた

ユニーク装備・胡蝶シリーズ(モチーフは貂蟬キュベレイ)で性能もかなりいいもの
だった

胡蝶扇

INT+200

相手にバッドステータスを与える

「破壊不可」「胡蝶乱舞」

胡蝶

INT+150

バッドステータスを受けた相手に与えるダメージが二倍

胡蝶乱舞

相手を幻覚状態にする

「そういうマルクスも新しい装備似合っていますよ?」

「そう?ありがとうございます」

マルクスもミザリーと同じくユニーク装備・氷毒シリーズ（モチーフは郭嘉ヴァサーゴ）を手に入れており

その新しい装備を駆使してミイの手伝いをしていた

極光扇

INT+150

「破壊不可」

氷麗剣

STR+150

「破壊不可」

「でも……ミイの次に目立ってるのって……」

「ええ……間違いなく……」

そうやって二人が見ていたのは自分達と同じく新しい装備を手に入れた男
「隼鋼二重閃!!」

実はシンも新しい装備を手に入れており

そのユニーク装備は隼鋼シリーズ（モチーフは夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス）と呼ばれているものだった

蛇骨剛剣

STR+200

VIT+50

「破壊不可」「蛇流絞斬」

獄羅丸

INT+200

AGI+50

「破壊不可」「獄羅丸」

蛇流絞斬

攻の技で相手に複数回のダメージを与え

防の技で周囲からの攻撃を防ぐ事が出来る

獄羅丸

鉄球が飛んでいき相手に貫通ダメージを与える技

隼鋼二重閃

蛇骨剛剣、剛鋭砲を同時に装備している時にのみ使用可能
相手に複数回の貫通ダメージを当たる技

「おっしーやっぱりこの装備は俺と相性がいいな！」

そしてその装備はシンと相性がかなり良かったらしく

新しい装備を手に入れた炎帝ノ国の主力メンバーの中では

ミイに次ぐ派手さを持つているのは間違いないかった

「これは僕が手に入れた他のスキルを使うまでもないかも・・・」

「でも楽が出来ると考えればこれほど頼もしい存在もいませんよ？」

「それもそうだね」

マルクスとミザリーの二人はミイとシン存在を頼もしく思いながら後をついて
行った

最後に残ったのは最強の敵

あれからスペリオルは色々なモンスターと戦いながら塔を順調に攻略していった
そしてお互いの近況を報告する為に一度、ギルドハウスへと戻る事にした

「それで？みんなはどれくらいまで攻略したんだ？」

「こっちはもう最後の階層までやってきたな」

「こっちはまだ七階を越えたくらいかな？」

「そうだね．．．で？肝心のスペリオルはどれくらいまで進んだの？」

「俺も最終階層までやって来たくらいだな」

正直な話、ここまで来るのにだいぶ苦戦したぞ．．．」

特に途中にあつた毒の嵐や防御貫通の雷に関しては本当に苦労していた

それでもこれだけのペースで進めたのはスペリオルだからと言えるだろう

「．．．アンタ．．．私らより難易度が高いイベントに挑戦して

しかもソロでその速度って．．．もはやペインよりも化け物でしょ」

「酷くね？それ言ったらメイプルだって同じだろ？」

「ちよっ!?私だってそこまで酷くないよ!!」

(「いや……どっちもどっちだと思う……」)

そんなこんなで少しだけ話が脱線してしまったが

とにかくみんな最後まで最後のもう一踏ん張りをする事になった

「さてと……最後はどんな敵が待っているのか楽しみだな……!」

スペリオルは少しだけワクワクしながら最後の塔を登っていくと

そこで待ち構えていたのはなんとかつてスペリオルが手に入れたガンジエネシスと同じような存在

そして闇に堕ちてしまった機甲神・ガンジエノサイダーが待ち構えていた

「マジかよ……! だったらこっちもこれで対抗するしかないな!」

エルガイヤー!そして輝光合身!」

スペリオルはエルガイヤーを呼び出すと同じく輝光合身しガンジエネシスとなる

そしてそれが終わると両者はまるで睨み合うかのように近づいていき

顔がぶつかる直前まで向かうとそこで殴り合いを始める

しかしその衝撃は殴り合いというにはあまりにも凄まじく

一発一発の威力に塔がドンドンとひび割れ崩れてしまうほどだった

「ヤッベエ!? なんかノリで作ったガンジエノサイダーとガンジエネシスの戦いに

フィールドの耐久値が追い付かなくてぶっ壊れそうなんだけど!」

「だからあんな化け物を化け物にぶつけるなって言ったんだ!!」

「どうするんだよ!?!このままだと確実にサーバーがダウンするぞ!?!」

「何とかして処理を他のサーバーに分散させるんだ!」

「そしてお前らはもう今後、ノリで動かないと誓え!!」

その戦いのせいで運営側が阿鼻叫喚の絵面になってしまっていたが

まあ明らかに自業自得なので特に気にしなくてもいいだろう

一方で話はスペリオル側に戻り彼らの対決は苛烈を極めていた

(まずいな……このままだと確実に塔の方が先に壊れそうだ……!)

スペリオルもそろそろ塔の方が限界を迎えてしまうと考えたようにで

どうにか早めに決着をつけなければならぬと考えていた

「こうなったら……ジェネシスブレード!!」

ガンジエネシスは巨大な剣を召喚するとガンジエノサイダーも同じように剣を呼び

出す

「マジかよ……!本当にこいつを同等の能力を持っているのか……!」

「だけど……同じ能力だからそれで勝てるわけでもねえんだよ!!」

スペリオルの言う通り最後はガンジエネシスが技でガンジエノサイダーを圧倒し

どうにか勝利する事は出来たのだがここで問題が起こってしまった

「・・・完全に塔が崩れたけど・・・これってどうなるんだ？」

それは肝心の塔が崩れてしまいイベントはクリアした事になるのかどうかだったこれに関して運営側は自分達の失敗もあるのももちろんクリア扱いとし

同時に耐久テストなどの実験にもなったので

そのお礼としてスキルが手に入るクエストの情報も教えてもらった

「まさかスペリオルはそれほどまでに強くなっているとはね・・・」

「だな・・・俺らも強くなっただけど浮かれてはいられないなさそうだ」

「そういえばドレット・・・派手なのが嫌いなお前が随分と真っ赤な格好になったな？」

実はドレットもスペリオルに教えられたクエストをクリアし

新しいユニーク装備・烈風シリーズ（モチーフは烈風頑駄無）を手に入れているのだ

風手裏剣

AGI+300

DEX+100

「破壊不可」「風覇激風弾」「風の舞」

スキル説明

風覇激風弾

AGIに比例したダメージを与える

風の舞

三分間、AGIを三倍にする

「そういうドラグだって随分と派手な衣装じゃないの？」

「だろ!?でもこつちの方が性能はいいからな〜・・・」

そしてドレッドと同じようにドラグも新しいユニーク装備である

竜巻シリーズ（モチーフは列龍頑駄無）を手に入れていた

龍神の鉞

STR + 200

「破壊不可」

四閃爪の槍

STR + 150

AGI + 50

「破壊不可」

怒龍大天斬

龍神の鉞と四閃爪の槍を合体した状態

STR + 400

「破壊不可」 「竜巻怒龍斬」

スキル

竜巻怒龍斬

STRを三倍したダメージを与える

「ふっふっふっ！確かに二人も凄いけど私だって凄いなだよ！」

「確かに・・・お前が一番スペリオルからもらった情報で進化したよな」

フレデリカはユニーク装備・召喚士シリーズを手に入れており

その召喚札から様々な召喚獣を呼び出せるようになった

スピリットガイスト

業火を操る精霊を召喚し相手に炎上ダメージを与える

フラッシュストーク

光を操る精霊を召喚しバッドステータスを回復する

クラウドバスター

天候を操る精霊を召喚し飛行している敵に二倍のダメージを与える

ルードラゴン

自分のHPの半分とMPを全て消費して召喚する精霊

HPとMPを消費した分だけダメージを与える

「まあスペリオルにはその分、感謝しているけど・・・」

「ああ・・・それとこれとは話が別だな」

「このイベントでは直接的に対決する事は出来なかったが

次こそはリベンジさせてもらいたいもんだ」

「ああ・・・次は必ず俺達が勝つ・・・楓の木・・・！」

しかしこの時の彼らは思っても見なかつただろう

彼らが既に自分達よりも更に強くなっているという事を・・・

烈火の鉄人

第七回イベントを終えて一つの落ち着きをみせるNW O

しかしこの男、スペリオルだけはまだやるべき事が残っていた

「……やつぱり最後のクエストをやらないとダメだよな……」

そう……スペリオルにはまだやらなくてはいけないクエストが残っていたのだ
おそらくは最後に残されている武者シリーズの強化をするクエストなのだろうが
問題はそれに出てくる敵がどれほどの強さを持っているのかという事だった

「前の二体みたい強さだったら流石にやりたくはないな……」

「でもそれをやらないと武者シリーズを強く出来ないでしょ？」

「お前な……他人事だと思つて簡単に言うけどめっちゃ強かつたんだぞ？」

ぶちやけ心が折れるかと思うレベルの敵しか出てこないし……」

確かにゲーマーであるスペリオルならば攻略自体は出来るだろうが

別に彼自身はそこまで難しいクエストを好んでいるというわけでもなく

おまけにイベントを終えたばかりなので出来れば楽に攻略したいと考えていた

「それじゃあ私も一緒に行つていいかな？」

「メイプルが？別にいいけど・・・」

(・・・なんかとんでもない事が起きそうな予感・・・)

その二人を見てギルドの仲間達が絶対に何かをやらかすと思ったのは言うまでもない

そして二人は最後のクエストが待っている場所に向かっていたのだが

その道中では名前も何もないのであろう兵士達が待ち構えていた

「うゝん・・・強くはないけど・・・普通に邪魔だな」

「それなら一気に突破しちゃおう？召喚！オーキス！」

メイプルはオーキスを召喚しそのままスペリオルを乗せて突っ込んでいく

もちろん兵士達にオーキスを止めるだけの力はなく簡単に散っていく

その光景を見ながらスペリオルはまるで儂く散る桜のようだと思っていた

(・・・いや・・・そんな風流みたいな光景じゃねえな)

そんなこんなしている内に二人はようやくやくクエストに書かれている場所へとやってきた

そしてそこに待ち構えていたのは機兵のような像だった

「・・・特に動き出すような気配はないな？特に関係のないオブジェなのか？」

「うゝん・・・でもなんかこれって私の天鎧王に似てる気がする」

「つて事は動くつて事か？だとしたらどうすれば動くんだ？これ」

二人はどうすればこの像が動き出すのだろうと色々と探し回る

するとそこへ何者かが攻撃を仕掛けてきてメイプルが盾でそれを防いだ

『ほう？今の一撃を防ぐとは流石だな・・・！あの闇皇帝を倒しただけはある』

「そういうお前は一体何者なんだ？」

『我が名は紅拳闘士 勢羅！貴様を倒しカピターン様の手土産にしてくれよう！』

どうやら向こうは完全にやる気のように問答無用で襲い掛かってきた

もちろんそれ対応出来ない二人ではなくメイプルは身捧ぐ慈愛を発動し

スペルオルは突撃してきた勢羅の相手を自ら引き受ける

「どうやら呂布とかみたいに強い相手つてわけでもないみたいだな？」

これなら楽に倒す事だつて出来そうだ」

『それはどうかな？魏呂須！蝦流！』

なんと勢羅は仲間を二体も召喚し更には雑魚敵までも召喚させてしまう

つまり今回の敵は単体としての強さを持っているのではなく

大量の敵を召喚して戦わせる集団としての強さを持っていたのだ

「なるほどな・・・！確かにこれは厄介な相手だ・・・！」

「でもこれくらいじゃ私もスペリオルも負けないよ〜！」

メイプルはオーキスを再び召喚して現れた雑魚敵の相手をしてくれていた

そしてスペリオルは残った勢羅を含む三人の幹部と戦う事になった

「いくぜ！武化舞可の俊脚！」

まずは武化舞可の俊脚を装備しスペリオルはその速度で三人を圧倒

そしてそのまま蝦流を一刀両断した

「次は！武化舞可の大砲！」

次は武化舞可の大砲を召喚し発射すると勢羅を守るように魏呂須が前に立ち塞がり

大砲の直撃を受けて消滅し残ったのは勢羅ただ一人となった

『まさかここまで強いとは．．．！だがこの程度で負けるわけにはいかぬ！』

「なら俺もこいつで最後にさせて．．．!?!」

スペリオルは新しい武化舞可装備を召喚しようとするといつの間にかその体が光に

包まれていた

一体何が起こっているのだと思ったがその光に引つ張られて

スペルオルは先ほどまで見ていた像の中に吸い込まれてしまう

そしてスペリオルを吸い込んだその像はその巨大な体を変形させて

巨大な武者・機動武者 烈火大鋼へと進化を果たした

『マジかよ．．．これなら全員纏めてぶった斬れそうだ！武化舞可の號刀！』

どうやらこの状態からでも武化舞可を呼び出せる事は出来るようで
スペリオルは武化舞可の號刀を装備し全ての敵を焼き払った

『これで終わりだな・・・ん？』

戦闘が終わるとスペリオルの装備が輝き出してユニーク装備が

烈火武者シリーズへと進化を果たしていた

烈火武者シリーズ

烈火刀・焰

STR+150

〔破壊不可〕〔烈火一閃・極〕

閃光の薙刀・輝

STR+120 AGI+80

〔破壊不可〕〔閃光の円舞〕

新タネガシマ・鬼

STR+200 リロード時間10分

〔破壊不可〕

烈火武者の兜

VIT+200 DEX+50

「破壊不可」 「烈火の魂・極」

烈火武者の鎧

VIT+250

「破壊不可」 「マウント装備」 「烈火の旗・焰」

烈火武者の籠手

STR+50 DEX+50

「破壊不可」

烈火武者の脚甲

VIT+50 AGI+50

「破壊不可」

烈火大鋼

烈火大鋼を呼び出してそれに融合する事が出来る（この状態でもスキルは使用可能）
使用回数は一日に一回

「おお!今まで黒い感じの鎧だったけど一気に赤くなった!」

「進化したって事だろうか?これで全部のクエストもようやくクリアだ」

一方その頃、運営側は……

「……やっぱり数で押すくらいじゃスペリオルは倒せないか」

「まあそれに関しては第一回イベントで分かってたけどね」

「どちらにしてもこれでスペリオルのデータは完全に取れたし」

「次こそは必ずスペルオルに敗北を与えるぞ！」

『おぉ!!』

「……この人達……自分でスペリオルを強くした事実を忘れてる……」

火の鳥

スペリオルが運営から渡された三つのクエストを終えて少しした頃

彼はメイプルから頼まれてとある人物と一緒に経験値狩りを行なっていた

「ふう……それにしてもやっぱりミイがいると集団戦は楽だな」

「そうだね、私もミイが居てくれると助かるよ」

「私も二人と戦えてとても心強い」

（やばいやばいやばい！スペリオルに褒められた！／＼／＼）

そう……今回は珍しくメイプルからのお誘いでミイと一緒に狩りに出かける事になったのだ

しかし流石のスペリオルもこの二人が仲良しだとは全く気がついていなかったよう
で

メイプルからミイと三人だけの狩りを言われた時は本当に驚いていた

「それにしても……この辺はもうほとんど狩り尽くしてしまっただけだ」

「どうする？この先にもモンスターは居るみたいだけど……」

「そうだね……もう少しミイと一緒に居たいしいかな？」

「もちろんだ。と言うよりも私から誘ったんだから逆に私からお願いする」
(出来ればもつとスペリオルと一緒に居たいし!)

何やら邪な感じがしないわけでもなかったがとりあえず三人は奥に向かった
するとそこで炎と水が吹き出してそこから二体の機兵が姿を現した

そしてその後、激しい雷と共にスペリオルが見た事のある機兵も姿を見せる

『ハハハ！再びあい見える事になったな！守護天使よ！』

「げっ……また厄介な奴が現れたもんだ……しかもパワーアップしてるし」

『その通り！今日こそは貴様に引導を渡す為！新しい部下と共に貴様を倒そう！』

そう言ってゼクスは部下が乗っているヴァイエイトとメリクリウスを襲わせる

しかし二体がスペリオルに攻撃する直前、メイプルとミイがその攻撃を受け止める

「これもイベントのようだな！加勢させてもらおう！」

「私も久々に暴れるよ〜！」

ミイがメリクリウスを担当しメイプルがヴァイエイトと闘い始めた

メリクリウスは防御力が高くヴァイエイトは攻撃力がとても高かった

「ハアアアア!!大獄焔斬！」

「蒼晝壁！まだまだそんなんじや私の防御は抜けないよ〜？」

しかし相性がかなり悪くメリクリウスは防御の上からどんどんダメージを受け

ヴァイエイトはメイプルの防御力を全く抜けず逆にダメージを受けていく
そしてスペリオルの方も前のように召喚封じを受けていないので

普通にエルガイヤーを召喚し圧倒していた

『ぐっ!?まさかこの私がかここまで追い詰められるとは……!』

だが!伊達にパワーアップを果たしてはいない!来い!我が手足よ!』

ゼクスはメリクリウスとヴァイエイトを呼び寄せる

『見るがいい!これぞ我が本当の力!ギガトールギスだ!』

そしてなんと三体で合体を果たし

その大きさはガンジエネシスにも匹敵しようとしていた

それを見てスペリオルは輝光合身を行おうとしたのだが

『無駄だ!このギガトールギスの前ではあらゆるスキルは無効となる!』

「マジかよ!?今度はスキルすら使えなくなるのか!」

なんと今度はスキルそのものが使えなくされてしまい

召喚して乗っていたはずのエルガイヤーすらも消えてしまった

「マジかよ……!本当にとんでもないなこりや……」

こんな相手にどうやって勝てばいいのだろうか

呂布以来の敗北の危機をスペリオルは感じていた

しかしそんな中でスキルのたった一つだけが使用可能な表示が出ていた

この状況で使えるのならおそろくこれだけがこの状況を挽回出来るのだと

スペリオルはそう考えてそのスキルに全てを賭ける事にした

「ソウルアツプ！うおおおおお!!」

『ほう？例のあの姿を見せるか！』

だがたとえどんな姿になろうともこのギガトールギスの方が上だ!」

ゼクスの言う通りギガトールギスは速度、力、防御力の全てにおいて鎧闘神を上回っており

しかもスペリオルの方は時間制限とは別に攻撃をする度にHPを削られしまう

つまりこのまま戦ったとしてもスペリオルの負けは決まっているようなものなのだ

(クツソ……！徐々に意識が遠のいていく……！)

このままだとメイプル達まで攻撃してしまう……！)

スペリオルはもうダメだと思っていたその時、ギガトールギスを攻撃する二つの影があった

「スペリオルだけだと思って油断しちゃダメだよ!」

「ああ……！私達も忘れてもらっては困る!」

その影とは他でもないメイプルとミイの二人であり

苦しんでいるスペリオルを見かねて加勢してくれたようだ

「・・・情けねえな・・・あの二人があんなに頑張ってるって言うのに

俺がこんなところで・・・終わるわけにはいかなえよな!!」

その瞬間、鎧闘神は炎に包み込まれてその姿が変わっていった

「これは!?!もしかしてデメリットも無くなったのか?」

どうやら本当の意味でスペリオルは鎧闘神になれたようで

デメリットは全てなくなり完全に制御出来るようになった

そしてそれと同時に鎧闘神の眠っていた力も分かった

「モードチェンジ! ストライクバード!」

なんと鎧闘神はその姿を鳥の形態へと変化させて炎を纏いながら天高く登っていく

「これで終わりだああああああ!!」

最後はその状態でスペリオルはギガツールギスを貫いた

『そんなバカな・・・!!?この私が・・・二度も負けるとは・・・!!』

爆発の中でゼクスはどうやら脱出してしまったようだが

それでも勝利出来た事に変わりはなくスペリオルは安心したように倒れるのだった

『ハア・・・ハア・・・なんなのだ？一体、私の体に・・・何が起こっているのだ!?!』

『どうやら洗脳が解けようとしているみたいだね・・・さっきの攻撃の影響かな?』

『なっ!?! 貴様は!!!』

『私の事は気にしなくてもいいさ・・・さあもう一度・・・私の共になつてもらおう・・・』

今度は電光騎士ゼクスとしてではなく・・・最強の騎士・・・エピオンとしてね・・・

!..』

赤き獅子、青き狼

とある日、カスミは四層まで買い物に来ていた

それが終わって散歩をしていると見た事のない社の前にやってきた

「こんなところにこんな場所があったのか・・・」

今までに見た事がなかったたのでおそらくはアツプデートで追加されたのだと思い

カスミは一体何があるのだろうかとうと周りを確認すると社の前に赤い狛犬が建っていた
そしてそれと対になるように石柱があるのだが上には何もなかった

「もしかしてこの上にも狛犬がいたのか？ん？」

『クエスト・赤と青の狛犬を受諾しますか？』

カスミがその狛犬の像を見ているとクエストが画面に表示された

「どうせ今日はやる事もないし受けてみるか」

今日は買い物以外にやる事もなかったカスミはクエストを受ける事にした

「とはいえどこから探せばいいのか・・・」

確か今日はカナデがいたはずだから何か知らないか聞いてみるとするか」

と言っても流石に何の手掛かりもない状態から探すのは無理なので

図書館を調べ尽くしたであろうカナデに何か情報がないか確認する事にした

「社の前にある赤い狛犬か・・・確かにそんな情報を見た事はあるよ」

「本当か!？」

「うん。確かそれに書かれていた内容は・・・」

カナデの話ではどうやらその社には狛犬の兄弟が祀られており

弟が赤い狛犬で兄の方は青い狛犬で土地を守っていたらしいのだが

とある日、兄の方が戦いの最中で守るべき人を傷つけてしまったらしく

それから兄は己の力を封印する為に何処か遠い地へと旅立ってしまったそうだ

「なるほど・・・しかしそれではどこにいるか分からないんじゃないか?」

「それでもないよ?その伝承の続きでは弟がその兄を探した事があるらしくて

最後に兄の動向を知ったのは北の方だって書かれていたからね」

「なるほど・・・つまりは四層の北を探せばその兄と出会えるわけか・・・情報感謝する」

「気にしなくていいよ。その代わり帰ってきたらクエストで何を得られたのか見せてね

?」

「もちろんだ!」

こうしてカスミはカナデから得た情報を頼りに四層の北を探しに向かった

そして雪が降り積もり場所ですれらしい祠のようなものを発見した

「どうやらここに居そうだな．．!?」

カスミがその祠の中を見ようとした時、何かが襲い掛かってきた

その攻撃を躲してカスミは相手がどこにいるのかを探すがその姿は全く見えなかった

(もしま．．あのイベントで出てきたボスと同じように透明の能力を持っているのか？

だとしたら今回は一撃が勝負を決める事になりそうだ．．!ならば!)

カスミは装備をユニーク装備である白鳳シリーズへと変えた

ユニーク装備・白鳳

白鳳の長髪

VIT+30 AGI+40

「破壊不可」 「風流爆」

白鳳の長ラン

VIT+100 AGI+60

「破壊不可」 「鳳凰の羽撃き」 「熱血回路」

白鳳のズボン

VIT+20 AGI+50

「破壊不可」

鳳流爆

長髪をオールバックの形にして突撃する技

相手の防御を貫通してダメージを与える

鳳凰の羽撃き

白鳳の長髪を腕に装備し相手に複数回のダメージを与える技

「これならばどんな相手だろうと勝てる！」

カスミは神経を研ぎ澄ませて自分に近づいてくる音に集中すると

その音が徐々に近づいてきて音が最大になると同時にサーベルを抜いた

するとその一撃は見事に敵に命中しその姿を露わにする

「なるほど・・・白い狼か・・・とても綺麗で神秘的ではあるが

私の邪魔をするというのなら容赦はせん・・・！」

『ウオオオオオン!!』

「ハアアアアア！鳳流爆!!」

最後は白鳳の長髪をオールバックにした一撃で白い狼を貫通しカスミは勝利を収める

そして先ほど見ようとしていた祠の中を開けるとそこには青い狛犬の石像があった

「これで間違いないな。後はこれを元の場所に戻すだけだな」

カスミはその狒犬の像を持って社に戻り石柱の上へと戻す

すると二体の像は光を放ちカスミの前に二体の獣が姿を現した

『俺の名前は赤獅子頑駄無！よろしくな！』

『我が名は青狼頑駄無・・・類稀なる強者よ・・・よくぞ試練を超えた

しかし・・・汝は何故、我ら兄弟を元に戻したのだ？』

「理由か・・・特にないな。兄弟が離れ離れなのは少しだけ悲しいと思ったただけだ」

『悲しいか・・・随分と甘いのだな・・・』

『だけどお前はまるで太陽みたいな心の持ち主じゃねえか！気に入ったぜ！』

よっしや！兄者！俺はこいつと一緒に戦う事にしたぜ！』

『・・・そうだな・・・お前の言う通り我らも世話になった身だ

我らの力を存分に振るわせて貰う事にしよう・・・！』

そう言って二人は再び光となると同時にカスミの中へと入っていった

赤獅子招来

三十分間、赤獅子頑駄無を召喚する

青狼招来

三十分間、青狼頑駄無を召喚する

「これは・・・！スペリオルの義兄弟の絆と同じような召喚系のスキルか

先ほどの二人と一緒に戦えるのは光栄な事だな．．．！」

こうしてカスミは新しい仲間を得て今回の成果をみんなに話す為、ギルドハウスに戻っていった

一方その頃、運営側では．．．．

「おおう．．．赤獅子と青狼をカスミに取られちまったよ．．．」

「あれって一定の実力がないとアイテムを貰えるだけなんだけどなく．．．」

「カスミほどの実力があればあの二体を手に入れても不思議じゃねえよ．．．」

「もう楓の木って少人数のギルドとは違う気がしてきた．．．」

いやプレイヤーは少ないんだけど．．．召喚出来るスキルが多いからさ」

「もう大規模ギルドと大差ないよな？」

若き鬼

とある日の事、メイプルは前に戦った事のある四層の主の元にやってきていた
そしていつものように勝負をした後で宴をしている時の事だった

『そういえばお主・・・赤鬼の鎧というものに興味はあるか?』

「赤鬼?それって私が召喚する赤い鬼の鎧って事?」

『いいや・・・赤鬼の鎧って言うのは

かつてこの国を仕切っていた將軍の持っていた鎧でな・・・

その將軍というのが何とも変わった御仁だった・・・』

主の話ではその將軍と呼ばれる人は

どんな悪人の心すらも洗い流してしまうほどの優しい慈悲の心を持った人であり

同時に相手が自分の大切なものを傷つけた時にはまさに鬼となって戦ったそうだ

赤鬼の鎧はその鬼になった瞬間に將軍が身につけていた伝説の意思を持った鎧らし

い

『実はその赤鬼の鎧が封印されている場所を最近になって発見してのう

ワシを倒したお主ならば或いはと思つてな・・・どうじゃ?』

「うん！興味ある！どこにいけばその鎧を手に入れられるの!?」
『かつかつ！それでこそじゃ！』

この地図にその在処が書かれておる！持っていくがいい！』

メイプルは主から赤鬼の鎧が封印されている場所を記した地図をもらい

それを頼りにその場所へと向かうとそこには嚴重に何かを封印された蔵のような物があつた

「おお・・・ここに赤鬼の鎧があるんだね！」

『そうはさせるか！』

蔵を見つけたメイプルはそのまま封印を解こうとすると

何者かが後ろから攻撃を仕掛けてきてメイプルは咄嗟に盾で防御する

「ううう・・・せつかく見つけたのに邪魔をするのは誰く？」

『俺の名は叛多亜・烈號！叛多亜武者の中で最も強い男だ！』

赤鬼の鎧は俺が貰い受ける！貴様こそ俺の邪魔をするな！』

「そうはいかないよ！赤鬼の鎧は私がもらうんだから！」

こうしてメイプルと烈號の戦闘が始まったのだが思った以上にメイプルは苦戦を強いられていた

というのも別にダメージ自体はそこまで食うわけではなく自動回復で補えるのだが

問題は烈號の速度が早すぎてこちらのダメージが全く与えられない事だった

「ううく・・・早すぎて全然、追いつけないよく・・・」

『クハハハ！どうしたどうした!?この程度なのか!』

ならば赤鬼の鎧はこの俺の物になりそうだな!!』

「それならこれはどうだ!?ブレイク・コア!」

直線的な攻撃ではダメージを与えられないと思つたメイプルは

今まで使つた事のなかつた自爆技を使う事で範囲ダメージを与える事にした

この作戦は見事に成功し始めて烈號にダメージを与える事が出来たのだが

『おのれ・・・!この俺がダメージを受けるだど!?貴様ああああ!!』

「うへく・・・なんかすごい怒ってるよく・・・!どうしようく!」

『食らうがいい!我が最強の奥義!自・焰怒!!』

「そつ蒼眺壁!!」

『何っ!?!』

烈號は自らの放つた最強の一撃を完璧に防がれてしまい驚いていた

その結果、先ほどまで素早く動いていたのに動きを完全に止めてしまい隙が出来てし

まった

「今だ!全武装展開!発射!!」

『しまっ！グアアアアアア!!』

その隙をついたメイプルの最大砲撃の前に烈號はなす術もなくやられてしまい消滅した

そしてメイプルは何とか勝つたと一安心しながら蔵を開ける
すると中には確かに鬼の顔のような赤い鎧が置かれていた

『・・・汝、力を求めるものよ・・・我が力を欲するか?』

『うん！私と一緒に色んな場所を冒険しよう!』

『よかろう・・・汝の矛となり盾となる事を誓おう・・・!』

赤鬼の鎧は光を放つとそのままメイプルに装備された

ユニーク装備・赤鬼シリーズ

砕巖頑

STR+150 VIT+100

「破壊不可」

赤鬼の兜

VIT+100 DEX+50

「破壊不可」「慈悲の輝き」

赤鬼の鎧

VIT+200

「破壊不可」「災鬼動」

赤鬼の籠手

STR+50 VIT+100

「破壊不可」

赤鬼の脚甲

VIT+100 AGI+50

「破壊不可」

慈悲の輝き

相手の戦意を失わせて戦う意志を無くさせる

プレイヤーには効かない

災鬼動

赤鬼の鎧を左手に集中させて巨大な手とするスキル

この巨大な左手によって相手を握る潰す技『消握滅力腕』と、

巨大な左手を握り拳にして対象を殴り飛ばす技『拳骨滅法拳』が使用可能となる

「おお〜！なんか凄いカッコいい！棍棒も凄い強そう！やった〜！」

新しく手に入れた装備にメイプルは大喜びしていたが

実際に本人以外から見るとその格好はまさしく鬼であり

もはやモンスターに間違われても仕方のないような格好だった

本人がそれを知る事になったのはギルドハウスに戻り

みんなに言われてからだったとか・・・

「せっかくカッコいい装備を手に入れたのに・・・！」

みんなしてモンスター見たいなんて酷いよ！」

「そうだな・・・」

そんな装備じゃなくてもメイプルはモンスターみたいだもんな」

「それはそれで嬉しくないよ!？」

『これで智と豪の魂は目覚めた・・・残るは勇の武者のみか・・・

どうやら・・・私の役目も・・・近づいてきているようだな・・・』

七層と色んなモンスター

七層が実装されてNWOに新しい機能が追加される事になった

『ガオ〜！この七層からはティムモンスターが実装されたよ〜！』

ここからは色んなモンスターを自分の仲間にする事が出来るドラ〜！

中にはクエストで手に入るようなレアなモンスターもいるし

他の階層にも情報が転がっているから色々と探してみてね！

そして！ここからが重要でこれからやる八回イベントをやるドラ〜！

ティムモンスターを持っていての方が有利に進むから頑張つてね〜！ガオ〜！』

マスコットキャラであるドラぞうからの説明を終えて

楓の木のメンバーは何やら難しい顔をしていた

その中でも最も険しい表情をしていたのは他でもないスペリオルだろう

「ティムモンスターか・・・まずは探すところから始まりそうだな」

「私達はもうシロップ達もいるしみんなのサポートだね〜！」

「そうだね〜・・・で？スペリオルさんは大丈夫なの？」

「・・・正直・・・この中で一番大丈夫じゃないかも・・・」

「……一体何があつたんだ？」

実はスペリオルがこの七層に来てから情報を集めていたのだが

何故かその中にモンスター系の情報は一つとして存在しなかったのだ

それだけではなく少しだけ探索しようと思えば外に出るとモンスターが何故か逃げた

おそらくはスペリオルの強さの所為なのだろうが

これには流石のみんなも可哀想だと苦笑いしていた

「まっまあとりあえず色々と探索しながらタイムモンスターを探すとしようか！」

「……全く出会える気がしないけどな……！」

こうして楓の木のメンバーはバラバラに七層を回ってみる事になった

そんな中でやはりスペリオルだけは全くモンスターが寄ってこなかった

「……何？俺からモンスターが逃げるオーラか匂いでも出てるの？」

まさかここまで酷いとは思っておらず流石のスペリオルも完全にお手上げだったかと言つてこのまま帰るわけにはいかなないのでしばらくの間、七層を回っていたするとそんな中でスペリオルは森を回って何やら神秘的な神殿を発見した

「おぉー！もしかしてここにタイムモンスターの情報があるのか？だとしたらラッキーだな！」

スペリオルは神殿の中に入るとそこには不思議が壁画が描かれていた

とりあえずは写真に収めながら奥まで進んでいくとそこには巨大な扉があった

「これは・・・デカすぎて首が痛くなりそうだな・・・」

この先にモンスターがいるとなるとかなり期待できそうだけど・・・

今の所、わかる部分なんて一つもないし帰ってカナデに相談するか」

壁画の写真を収めたスペリオルは情報を得る為にギルドハウスへと戻った
するとそこでは既にマイとユイにカスミがクエストに挑戦しているらしく

色々とポロポロになりながらも頑張っている様子だった

そんな中でスペリオルも自分の目的である壁画をカナデに見せる

「なるほど・・・これは昔の王家に伝わる伝承の一つだね」

「伝承？って事はもしかしてモンスターと関係ないのか？」

「そうとも言えないかな？確か伝承では神獣と呼ばれる存在も出てくるし」

カナデの話では王国に危機が訪れた時、双子の二人の皇子が立ち上がったそうで

一人はとても努力家でもう一人は天才と呼ばれ高いカリスマ性を持っていた

それぞれが仲間と協力し王国に平和を取り戻したらしく

それがあの壁画に描かれていた伝承らしい

「扉を開けるにはその双子の皇子が持っていた証が必要になるらしいけど

その証が今どこにあるのかまでは僕も分からないかな？」

「そうなのか・・・せめてその二人の皇子の動向を知ればいいんだけど・・・」

「確か国を納めたのは弟の方で兄の方は仲間と一緒に外の世界に旅立ったそうだよ？」

「マジか・・・とりあえずは弟が居たであろう城を探すか・・・」

カナデから情報を聞いたスペリオルは弟の城を目指そうと

ギルドハウスから出ようとした時だった

「たっだいまゝ！イズさゝん！素材集めてきたよ！」

「・・・その前にその腕がどうなっているのかを説明しろ触手娘」

「触手娘!？」

まさかのメイプルの変貌に思わず何かを言わずにはいられなかったスペリオルだった

一方その頃、運営側では・・・

「ああ・・・やっぱりスペリオルは例の神獣クエストに挑むのか・・・」

「大丈夫だよな!?! あんだけボスマンスタも強くしたんだから大丈夫だよな!?!」

「いやもう諦めてくださいよ・・・」

スペリオルに目をつけられたらクリア出来ないクエストはないです……」

「ああ……」

俺達がシークレットレアとして作ったモンスターはこうして奪われるのか……」

「まっまあ……使われないうりかは誰かに使われた方がモンスターも嬉しいでしょうし

とにかく今は八回イベントの会議を行いましょう」

「そうだな……色々と対策をしないといけないもんな」

「とりあえず今度からはモンスターに胃袋を作らないようにしよう

毎度の如くメイプルに内側から食い破られるから……」

「……俺……あれ見てエイリアン映画を思い出しましたよ……」

「あれで本人に悪気がないのが一番の悪だよ……」

『はあ……』

空と海と神獣

カナデの情報を元に弟が居たと言われている城の情報を集めていたスペリオル
その中でようやくその城が空の上にあるという事が判明し

空の上という事は第五層にあるのではないかと予想

スペリオルは第五層までその城を探しに来ていた

「さてと・・・一体どこら辺にその城があるんだか・・・」

てかそう言った城みたいな建物はいっぱいあるから

どの建物が正解なのか全然、分からないんだけど・・・」

そんな事を考えながら守護天使の鎧を身に纏い空を飛んでいると

何やら見覚えのない巨大な城がスペリオルの前に現れた

「もしかしてこれが例の城か？」

確かにこんな場所に城なんて見た事ないし・・・ん？」

本当にこの城で合っているのかスペリオルが近づこうとした瞬間

何かが高速で急接近してくると同時に問答無用で攻撃を仕掛けてきた

ギリギリでなんとか攻撃を躲したスペリオルは直ぐにその姿を確認する

「あれは・・・グリフォンか？めっちゃくちゃ大きいけど・・・」

あれがこの城の門番って感じなのか？とりあえずソウルアツプ！」

攻撃を仕掛けてきたグリフォンは城の門番だと判断し

スペリオルはソウルアツプで鎧闘神となつて戦闘を開始するのだが

「・・・いや早すぎませんかね!?なんかとある二人を思い出すんですけど!」

問題はグリフォンの動きが早すぎてとてもその背中に追いつく事が出来ない事だった

その戦い方を見てスペリオルは自分のギルドにいるとある二人の姿を想像した

「クシユン!!」

「あれ？サリーもカスミも風邪？この時期は多いから気をつけてね？」

何やら想像した二人がくしやみをしてそうな感じもしたが

そんな事を気にしていられるような状況ではなくスペリオルは少しだけ本気を出す事にした

「モードチェンジ！ストライクバード！」

自らの体を鳥の形へと変形させたスペリオルはそのまま突っ込んでいく

この形態ならばグリフォンの動きにも追いつく事ができ逃げられないと判断したのか

こちらに反転してくると同時に凄まじい勢いで突っ込んできたが
スペリオルも己の体に炎を纏って突撃しグリフオンの胴体を貫いた

「はあく．．．なんかどつと疲れた．．．！」

戦闘したつていうよりもなんか鬼ごっこしたつて感じだな．．．」

どうにか門番を倒して城の中へと入る事が出来たスペリオル

そして奥の玉座まで進むとそこには鞘の形をした赤い宝石が置かれていた

「これが鍵の一つなのか？ 何にしてもこれで一つ目か．．．」

後はこの城に兄の動向について書かれた何かが見つかればいいんだけど．．．」

スペリオルはしばらくの間、城の中を探索して回ると

ここであろうやく兄の動向について書かれた書物を発見した

どうやらそれによると兄は弟よりも前に王となつたらしいのだが

やはり外の世界に憧れて王位を弟に譲り自分は公爵となつて海に出たらしい

そしてそんな兄の仲間として一緒に旅をしたのが赤き海賊団という名前だつたそう
だ

「赤き海賊団．．．どうやらこれが手掛かりになりそうだな」

スペリオルはこの名前を頼りに色々な情報を集めていった

するとNPCの漁師がその海賊団が縄張りにしていた島を知っているとその場所を

教えてくれた

すぐさまスペリオルはその島へと向かったのだがそこにもやはり宝を守る番人がいた

「えつと・・・エビ? いやシャコか?」

その島で宝を守っていたのはエビ・・・ではなくシャコだった

しかもシャコの方は完全にやる気満々であり鋭い一撃をスペリオルに向けて放った
しかしグリフォンの攻撃よりは遅いので楽々と躲す事が出来たのだが

「・・・え?」

なんとその拳の一撃で後ろの岩礁が壊れ海が割れてしまった

「・・・いやどんな威力してんだよ!? 完全にSTRがぶっ壊れてるだろ!」

そのあまりの破壊力に思わずスペリオルは叫び声を上げてしまったが

同時にこんな馬鹿みたいな威力を出せる双子の姉妹がいた事も思い出していた

「ヘクチ!」

「ええ!? マイちゃんにユイちゃんも風邪!? もしかして流行ってるの!」

話は戻りスペリオルは攻撃自体を簡単に躲す事が出来るのだが

当たつたら間違いなく一撃で倒される危険性があつたんで無闇に近づく事が出来な
かった

「こうなったらここは一か八かだ！換装！破牙シリーズ！」

スペリオルはあえてなんの武器も持っていない破牙シリーズに装備を変更相手の攻撃を躲すのではなく受け流しながらゆつくりと近づいていった

そして十分に近づき終えると獣王武神を発動しその口でシャコに噛み付く

「ふあふいまふふあーふーふあひふらふと!!（破牙丸戦術！破牙武終!!）」

ゼロ距離から放たれた火球をシャコは避ける事が出来ずに炎上

地面に倒れると同時にその体は消滅した

「あゝ・・・顎がイテエ・・・さてと・・・鍵を手に入れるか」

スペリオルは顎を押さえながら先ほどまでシャコが守っていた場所へと向かうと

そこには一つの宝箱がありそれを開けるとその中には剣の形をした青い宝石が入っていた

「これで無事に鍵は二つとも手に入れたな！後はあの扉を開くだけだ！」

無事に二つの宝石を手に入れたスペリオルはいよいよだとワクワクしながら例の扉に向かった

扉の前に着くと二つの宝石は光り出して合体し一つの白い宝石となって扉に吸い込まれた

それと同時に巨大な扉はゆつくりと開いていきその奥には巨大な白い宝石が浮遊し

ていた

「・・・これが扉に封印されていたものか・・・随分と神秘的だな？」

そんな事を思いながらスペリオルが宝石に触れると急に光を放ち始めて

その光が晴れていくと宝石は巨大でも神秘的なドラゴンの姿に変わっていた

「・・・綺麗だな・・・こんなモンスターがいるなんて・・・」

あまりの綺麗さにスペリオルが見惚れていると

た
いつの間にかその手にはタイムモンスターを得た証である絆の架け橋が握られてい

た
「えつと種族は・・・アークエンジェルドラゴン・・・大天使の竜か・・・

それなら名前はミカエルからとってミカって名前でもいいか？」

『キユオオオオン！』

た
こうしてスペリオルは念願であるタイムモンスターを手に入れる事が出来たのだつ

一方その頃、運営側では・・・

「うーん・・・楓の木のメンバーを参考したボスモンスターを創作

そしてそれをスペリオルに当てるまでは良かったんだけど……」

「苦戦はしてましたけど普通に倒されましたね？」

「だな……しかも苦戦つつてもHP二割も削れてねえし……」

「いつその事、楓の木のメンバー全員の長所を組み合わせたモンスターでも作るか？」

「……それ……自分達が負けた感じがして悔しくない？」

『分かる！』

（……この人達……これまで自分達が負けてないとも思っているのか？）

雷龍劍の伝承者

スペリオルはようやく自分のパートナーであるミカを手に入れたすぐ後の事

ミカが宝石となつて眠っていた部屋に興味深い壁画が描かれていたのだ

それはまるで雷のような剣を持った剣士が戦う姿だった

（これは……もしかしてミカと何か関係があるのか？」

『キユオ？』

スペリオルはもつと詳しく書かれた壁画はないかと調べていくと

その先にミカにも負けない龍の姿が描かれており

しかもそれは先ほどの剣士によって召喚され彼が乗り込む事で機兵となつていた

「なるほど……これは新しい機兵の情報だったのか！」

だとしたら機兵のスキルを持つている俺が見つけたのも偶然じゃないな

問題は……この剣士が一体何者なのかって事だろうな……」

とりあえずスペリオルはギルドに帰つてミカをみんなに紹介すると同時に

カナデに先ほどの剣士に関して何か情報はないのかを聞いてみる事にした

「へ〜これがスペリオルのパートナーなんだ！綺麗なドラゴンだね!!」

「いや・・・どっちかっていうとデカきの方も気にしなよ・・・」

「確かに大きいな・・・私のハクが霞んでしまっそうだ・・・」

「そんな事、言ったら俺らのパートナー全員が霞そうだぞ？」

みんなはスペリオルが手に入れたミカに対して色々な感情を口にしていた

しかしその中で最もみんなの気持ちが一緒になったのはたった一つだろう

((((・・・どっちにしてもスペリオルのモンスターだから予想外の強さなんだろうな

))))))

それはまだ戦う瞬間を見てすらもないのにミカが暴れ回る姿を想像しながら

それに襲われるであろうこれからのライバル達に少しだけ同情するのだった

一方でスペリオルはカナデに例の壁画の映像を見せて何か情報がないかを聞いてい

た

「うくん・・・確かにこの壁画に描かれたような剣士は存在するんだけど・・・

彼の一族はかつての大戦でほとんど戦死してしまっ残っていた伝承者はたった一

人だけなんだ

そしてその彼もかつて父の仇をとってその姿を消してしまったらしいんだ・・・

でもその時に自分の持っていた剣・・・雷龍剣と呼ばれるものを親しい人間に託した

そうだ」

「なるほど……つまりはその人を探し出さなくちゃいけないのか……」

なんか随分と面倒なクエストに手を出した感じがするな……」

これまでのクエストと違って今回は本当の意味でなんの情報もなかった

カナデの情報も確かに有意義ではあったがアイテムの所在自体は分からないものだった

つまりここからは先ほどのアイテムの名前などを頼りにして探し出すしかなかった
そんな事を考えているとそういえばとメイプルが一つだけ心当たりについてを話していた

「前にマップを探索していた時にやたらと雷が落ちる山があつたんだよね」

何かあるかな？ってその山を探してみただけど雷は落ちるし足場は悪いしで

結局、何にも見つけずにそのまま帰ってきちゃったんだよね」

「……因みに聞くけど……その雷に当たったりしたのか？」

「うん！でも痛くはなかったよ？でもうやっぱり大きい音はするし

一瞬だけ真っ白になって何も見えなくなるからびっくりするね！」

「……うん……もうメイプルの防御力には何も驚かない……」

こうしてスペリオルはメイプルの情報を頼りに雷の鳴り響く山へと向かった

すると確かにそこは休みなく雷が落ち続けており通常のプレイヤーは絶対に近づか

ない場所になっていた

問題はスペリオルがどうやってこの雷の中を駆け抜けるかだった

いくらスペリオルと言ってもメイプルほどの防御力は持っていない

「となると・・・やっぱりこれ以外に選択肢はないか。来い！ガンレックス!!」

なんとここでスペリオルはガンレックスを呼び出して乗り込んだ

一体、何の意味があるのだろうか

実はガンレックスを呼び出したのにはちゃんとした理由があった

ガンレックスの装備している白金の盾はあらゆる魔法を弾くのだが

何とこの効果は魔法だけではなく自然現象でのダメージにも効果があるらしい

これを使えばこの雷の中でも歩いていけると判断しスペリオルはガンレックスを召

喚したのだ

「さてと・・・とりあえずは分かりやすい山頂を目指して歩いていくとするか」

探すとすればまずは山頂からだろうとスペリオルは山頂を目指して歩いていく

そして時間は掛かってしまったがようやく山頂に辿り着く事が出来た

「・・・どうやら山頂で正解だったみたいだな・・・！あれが雷龍剣か・・・！」

山頂に辿り着くとそこにはカナデの話に出ていた雷龍剣が突き刺さっていた

スペリオルはガンレックスを降りて雷龍剣を引き抜くと彼の鎧が変わっていく

ユニーク装備・魔竜シリーズ

雷龍劍

STR+200 INT+120 DEX+150

〔破壊不可〕〔雷龍劍技〕

魔竜の兜

VIT+75 INT+30 DEX+50

〔雷龍劍の伝承者〕〔魔竜劍士〕

魔竜の鎧

VIT+85 INT+25 DEX+75

〔破壊不可〕〔雷竜体系〕

魔竜の籠手

STR+30 INT+30 DEX+45

〔破壊不可〕

魔竜の脚甲

AGI+40 INT+25 DEX+30

〔破壊不可〕

雷龍劍技

雷を纏ったあらゆる剣技を使いこなすスキル

雷龍劍の伝承者

雷龍劍技で放つスキルを20%上昇させる

魔竜劍士

五分間だけリミッターを外しステータスを50%上昇させる

(機兵搭乗時には機兵のステータスを50%上昇させる)

雷竜体系

機兵を操縦する時に雷龍劍技のスキルを使えるようになる

「なるほど……これは機兵を乗りこなす為の装備なのか……」

そしてこれが例の機兵……何だけど……」

スペリオルの前には壁画に描かれていた機兵が立っていたのだが

明らかに壁画とは何かが違うししかも呼び出す機兵の欄にも名前がなかった

「……あつ！そうか！この機兵には武器がないのか!!」

壁画にはこの機兵が白金のハルバードを持って戦っていたのだが

目の前にいる機兵は何故かそのハルバードを持ってはいなかった

「……もしかして……それも探さなくちゃいけないのか?」

こうしてスペリオルはまさかのクエスト延長を強いられたのだった

白金のハルバード

急遽、機兵の持っていた武器を探す事になったスペリオルは情報を集める事にした。おそらくは例の装備を手に入れた事で何かしらのイベントが発生するだろうと思っ
ていると

案の定と言うべきか森でNPCらしき女性が機兵に襲われているのを発見した

「どうやらあれはイベントってわけだな・・・！ガンレックス！」

スペリオルはガンレックスを召喚して女性を襲っていた二体の機兵を簡単に撃破す
る

そしてガンレックスを降りて先ほどの女性に近づいていくとかなりの大怪我を負っ
ていた

「大丈夫か!?今、手当をしてやるからな！」

急いで治療を施したスペリオルは彼女からどうして襲われていたのか事情を聞く事
にした

『助けてくれてありがとう！私はこの先にある街の大会に出場しようとしていたんだ

さっきの奴らもその大会に出るらしくてその邪魔の為に私を襲ってきたんだ！』

「そうだったのか……でもその怪我じゃ……」

『ああ……残念だけど大会に参加するのは難しそうだ……』

「そうだ！代わりにあんたが大会に出場してくれないかい!? 私の機兵でさ!」

その女性は自分が大会に出場出来ない代わりに自分の機兵で出場してほしいと提案する

スペリオルはそういうイベントなのかと思いき喜んで引き受ける事にした

そしてその彼女を連れて街まで向かいますは機兵を取りに向かった

『これが私の機兵さ。型は古いけどいい機体だよ』

大抵の奴には勝てるかと保証してやるけど……問題は……』

「さつき君を襲っていた奴らか……あれくらいならば問題はないと思うが?」

『いや……あいつらは単なる雑魚だ……!』

大会に出場するのはあいつらの首領……!ゲモンって男だ……!』

どうやら大会に出場する事になっているのはゲモンと言う男のようで

その男の持っている機兵は他の機兵よりも巨大で並大抵の機兵では絶対に勝てないらしい

それを聞いてスペリオルは確かにこの機兵では絶対に勝てないと考えていた

「……仕方ねえ……イズさんに協力してもらうとするか……」

スペリオルはゲモンに勝つ為にはこの機兵を改造しなければならぬと考え

これは生産職であるイズを頼るしかないと彼女にメッセージを送ってきてもらった
「なるほどね．．．確かにこれを改造する事自体は出来るけど．．．

そこまでスペックを上げる事は出来ないし下手をすれば自壊する可能性があるわよ
？」

「そこら辺はちゃんと自分で調節するから大丈夫だよ

こいつの性能がついてきてくれればそれで問題ないからさ」

「了解！それじゃあ一気に仕上げちゃうからスペリオルも手伝ってね！」

こうしてイズによる機兵の改造が行われてスペリオルはその機体で大会に出場する
大会会場に向かうと確かに顔の悪そうな人物がたくさんおり悪役と分かりやすい感
じだった

そして偉い人が現れると同時にその人の後ろには巨大なハルバードが飾られていた
(間違いない．．．！あれが壁画で描かれていた機兵の持ってきた武器だ．．．！)

あれが大会の優勝商品なら絶対に勝って手に入れないとな．．．！
大会が始まるとスペリオルは順調に勝ち進んでいく

これもイズに改造してもらった機兵のおかげだと言えるだろう

そしていよいよ決勝戦となりスペリオルの前に立っていた機兵は

他の機兵よりも一回りは大きいであろう巨大な機兵だった

『ガツハツハツハ！このヘルアクシズ団の首領であるゲモン様の前に立ち塞がるとは！

お前もつくづくついていないな！この勝負はこの俺の機兵！ザメロードがもらったわい！』

「・・・勝負が始まる前から随分と余裕じゃないか？俺はそんなに甘くはないぞ・・・！」
『うるさい！貴様はこのザメロードに踏み潰されるゴミでしかない！』

そんなゴミがワシに楯突こうとするでないわ!!』

試合が始まる前からゲモンは攻撃を仕掛けてきたがスペリオルは簡単に攻撃を躲す確かにザメロードは体が巨大で攻撃力も高く当たったらひとたまりもないだろうがその反面でスピードは大した事はなく攻撃が当たる事はない

つまりこの程度の相手ならばスペリオルの敵ではないというわけだ

『この！ちよろちよろと逃げ回りおって！ゴミはゴミらしくワシに潰される!!』
「あいにくと俺は別にゴミじゃないんでな・・・！」

それに・・・この勝負は俺の勝ちだ！」

スペリオルは剣を天に掲げさせると何やら空に雷雲が集まってきて雷が落ちるその雷は先ほど掲げた剣に当たりまるで龍の形をしながら剣に集まる

「これで終わりだ・・・！雷鳴斬!!」

『ギャアアアアアアア!!?!?』

雷鳴の一撃を受けたザメロードは丸焦げになり

乗っっていたゲモンも煙を吹き出しながら排出される

これにより優勝はスペリオルに決まり見事に白金のハルバードを手に入れる事が出来た

すると同時に突如として召喚していないのに例の機兵が姿を現して白金のハルバードを握り締める

『スキル・聖機兵に龍機ドラグーンが追加されました』

「これでようやくクエストもクリアしたか・・・長かったら・・・!」

一方その頃、運営側では・・・

「うくん・・・順調にスペリオルは機兵とかを手に入れてるけど・・・

何か機兵絡みでのクエストとかでも追加した方がいいかな?」

「いや・・・これ以上、スペリオルを強くするのは止めよう」

「それにこれからイベントがあるんだぜ? そんな余裕なんてねえよ」

「とにかくまずは目の前の事に集中だ! 後の事は後で考えるぞ!」

「ただでさえ今回は団体イベントになるから要注意だしな・・・」
「うう・・・！胃が痛い・・・！！」

みんなのパートナー

もうそろそろ八回イベントが始まるという事もあり

スペリオルはパートナーのミカを連れて

進化したメイプルの相棒であるシロップと修行を行っていた

「シロップ！精霊砲！」

「ミカ！クリスタルウォール！」

進化したシロップの一撃をミカは水晶のようなバリアを使って防御した

するとスペリオルは何かの気配を感じたのか武器を構えており

メイプルは一体、何をしているのだろうと思っていると茂みから人が姿を現した

「悪い悪い！本当は覗くつもりじゃなかったんだけど」

「狩りをしていたら大きな音がして様子を見にきたんだ」

「別に怒っているわけではないから問題はない・・・」

それよりも・・・なんか3人とも装備が変わってないか？」

スペリオルは別に特訓を見られた事に対してあまり怒ってはいなかったが

それ以上に気になっていたのは明らかに前と姿が変わっている3人の装備だった

「そういえばまだこの姿を見せた事はなかったな！」

前にスペリオルから教えてもらったクエストをクリアして手に入れたユニーク装備だ！」

「ああ・・・そういえばそんな事もあったな・・・」

いやでもまあ・・・流石にミザリーさんの格好は・・・」

「分かるよ・・・男としてはもつと自重してつて思うよね？」

「？私の装備は何か変なのでしょうか？」

「いやまあ何というか・・・ありがとうございます」

「？」

シンやマルクスの装備はカッコいいと言うイメージが強く

確かにユニーク装備で間違いないと思うような感じなのだが

問題はミザリーであり彼女だけは明らかに系列が違っているように感じた

そう・・・彼女だけは完全にエロいと言う単語が当てはまりそうなのだ

そして男としてそんな誘惑にスペリオルが勝てるわけもなく

チラチラとはあるがミザリーのとある部分に目がいつてしまう

「スペリオル？一体、何を見ているのかな？」

(・・・なんでだろう・・・今、振り返ったら絶対に殺されそうな気がする・・・！)

もちろんそれを見逃すようなメイプルではなく

完全に目からハイライトの消えた笑顔でスペリオルを後ろから見つめていた
何やら後ろに般若のようなオーラも見えて

思わず新しいスキルでも得たのかとシン達も恐怖していた

「そつそういえばスペリオルのパートナーって綺麗なドラゴンだな!？」

一体なんていう種族のモンスターなんだ?」

「あつああ。こいつはアークエンジェルドラゴンって名前なんだけど

説明文にはどうやらこいつ一体しか存在しない希少なモンスターらしい」

「そんなのをパートナーにするなんて流石、スペリオルですね」

「だね・・・流石は伝説の勇者と言われているスペリオルだよ」

「ちよつと待て!?!マジでその名前で定着されてるの!?!」

改めて自分の異名が勇者になっているのかと知り

スペリオルは何だか穴に入りたいほど恥ずかしいと思っていた

「なんか意外な弱点を発見しちゃったかな?」

「でもこれを戦闘で使えるかって言ったら微妙なところだろうけどな・・・」

それよりもパートナーを見ちゃったお詫びに俺達も紹介してやるよ!」

「それ・・・単純に自分が見せびらかしたいだけでしょ?」

こうしてシン、マルクス、ミザリーの3人がパートナーを呼び出した

シンは鷹、マルクスはカメレオン、そしてミザリーが猫だった

「うわあ〜！みんな可愛いモンスターばかり！」

「だろ!?俺の相棒はウエンって言うんだ」

「僕はクリア・・・あんまり人には懐かないから」

「私のベルもあんまり人に懐いたりはしない方ですね」

「あれ?どうしたのスペリオル？」

みんなのパートナーが一通り紹介が終わると

明らかにスペリオルの様子がおかしくてメイプルは何があつたのか尋ねると

「いや・・・実は俺・・・猫が苦手なんだよね・・・」

「「ええええええええ!!?」」

まさかの意外過ぎる弱点にメイプルを含めた全員が驚いていた

「いやいやいや!?どう考えても猫が苦手って面じゃないだろ!」

「いや正確には猫アレルギーで猫に会うとくしゃみやみが止まらなくて死にそうになるだけだ」

「物理的な弱点でもあるんだ・・・意外過ぎてもう驚けないよ・・・」

「そのくせ、何故か知らないけどやたらと猫に懐かれるから嫌なんだよ・・・」

「ああ・・・動物って嫌がる人のところに寄るって言うよね・・・」

どうやらスペリオルは猫に対して相当な警戒心を持つているようでいくらゲームの中の偽物だと言っても近づこうとはとても思えなかった

しかしそれでも運営は限りなく本物に近い思考を持たせているので

スペリオルの話していた事実はベルにも有効でありジリジリと近づいていた

「・・・なんかスペリオルが蛇に睨まれた蛙みたいになってるぞ?」

「こんなスペリオル初めて見たかも・・・」

「ここらこらベル?あまりスペリオルを困らせてはいけませんよ?」

自分の主人であるミザリーの言葉を聞いてベルは渋々と戻っていった

それによりようやく助かったと思うスペリオルだったが何やらどつと疲れた様子だった

「なんかいい情報を得たはずなんだけど・・・」

「ああ・・・あんまりこれを利用していう気持ちになれないな・・・」

「それじゃあ私達はこれでお邪魔しますね?イベントを楽しみにしています」

「うん!私達も負けないからね〜!」

「出来る事ならもう二度とそいつは連れてこないでくれ」

((本当に苦手なんだ・・・猫・・・))

八回イベント

いよいよ第八回イベントが始まる当日

スペリオル達はドラぞうからイベントの内容を聞いていた

『がおくーそれじゃあ第八回イベント予選の説明をするね！』

予選は撃破数と生き残り時間がポイントとして計算されるドラ！

そのポイントによって本選の難易度と報酬が変わってくるから注意してね？

そしてここからが重要！

今回のイベントは敵を倒す以外にもプレイヤーを倒すのも許可されているドラ！

つまりランキングで上位になる為には時にプレイヤーと戦うのも視野に入れてね！』

「・・・運営はバカなのか？

PVPをありにしたら結果がどうなるかなんてわかっているだろ・・・」

「あはは・・・正直な話、本選が無事に出来るか不安になるよね」

PVPもイベントの醍醐味としてあると聞いてスペリオルは頭を抑える

何故ならばこの楓の木のメンバーも相当に危険な人が多いが

それ以外のギルドでも警戒するべきメンバーが多い

簡単な話、複数のレイドボスを野に解き放つようなものなのだ

『それと忘れてたけど今回のイベントには特殊なギミックもあるドラ

どんなものなのかはイベントが始まってからのお楽しみだから頑張ってね!』

「・・・なんか色々嫌な予感がするけど・・・まあ大丈夫だと思いたい・・・」

「とにかく目指すはランキング上位!そして本選最高難易度の挑戦だよ!

みんな〜!頑張ろう〜!」

「「「「おう!」」」」

『それじゃみんな〜!いつてくるドラ〜!』

「転送終了つと・・・さてと・・・それじゃあモンスターを倒していくか」

転送を終えたスペリオルはその場で襲ってきたモンスターを次々と倒していく

すると徐々にモンスターがスペリオルから離れていくようになっていった

「?もしかしてさっきドラぞうが言ってた例のギミックってやつか?」

スペリオルは自分のステータス画面を表示してみるとそこには様々なデバフが付与

されていた

しかもその中には敵が自分から逃げていくデバフが付与されていたのだ

「あく……なるほどなく……倒しまくれれば良いってわけじゃないか

まあ俺は別に関係なんてないけど……召喚！サイコゴレム！ミカ覚醒！」

スペリオルはサイコゴレムとアークエンジェルドラゴンのミカを召喚して戦わせる

デバフをつけられているのはあくまでもスペリオルなので二人には効果がなかったのだ

なのでこの二体の怪物はやりたい放題で逃げ惑うモンスター達を蹴散らしていく
「……暇だな……俺は俺でプレイヤーを倒しに行くか

換装！魔竜シリーズ！召喚！ドラグリーン！」

そして暇になったスペリオルはプレイヤーを倒しに向かおうと

装備を変えてドラグリーンに乗りプレイヤー狩りに向かう

その光景を見ていたプレイヤー達は全員が運営に対してこう言ったそうである

ボスが三体もいたら勝てるわけなんてないだろうが……と……

しかし残念ながらと言うべきなのか

スペリオルのいる場所以外でもなんとも言えないような

酷い蹂躪劇が繰り広げられていた

「赤獅子招来！青狼招来！」

『おうおうおう！モンスターだろうとプレイヤーだろうとぶっ潰してやるぜ！』

『我らの前には立たない方がいいぞ・・・死にたくなければな・・・！』

「「「「いいやあああああ!!」」」」

一つの場所ではカスミが自分のパートナーであるハクだけではなく

召喚出来る赤獅子と青狼を呼び出して戦わせていたり

「行くわよ〜！白馬陣！」

『ウオオオオオ!!』

「「「「ギヤアアアア!!馬に轢かれるうううう!!」」」」

「あつ！因みにそつちにはたくさん罾があるから気をつけてね〜！」

「「「「ほぎやあああああ!!」」」」

もう一つの場所ではイズが兵法と罾を駆使して大量のプレイヤーとモンスターを倒していくのだ

そのエリアでは無類の強さを誇っておりその扱いは

もはやエリアボスすらも生温いと感じるほどボスらしい振る舞いをしていた他の場所でもみんなが思い思いに戦っており

もはやフィールドが壊れるのではないかと思うほどの暴れっぷりだった

「……みんな楽しんでるな……こりゃあ本戦出場も確定だろうし偵察するかな？」

そんなみんなの様子を見ていたサリーはフィールドの偵察を行う事にした

その中で一際、目立っていたのはメイプルであり彼女はデバフをつけられていたがモンスターを呼び寄せるギミックを逆に利用してモンスター狩りを行っていたのだその絵面はまさに地獄と言って良いほどの光景が広がっていた

モンスターを地面に飲み込むと同時に動けないところをオーキスで轢いており

しかもそれをモンスター相手だけではなくプレイヤーにも行っていた

「……もうあれはトラウマになってもおかしくないレベルだわ……」

その光景を見ていたサリーは散っていたモンスター達とプレイヤーに手を合わせるのだった

一方その頃、運営側では……

「……おかしいな……」

俺らって別にボスモンスターとか配置してないんだけどな……」

「このまま行くと……どれくらいのパレイヤーが本戦に残ってくれるかな……」

「いやそれ以前に最高難易度以外のステージが確実に無駄になるぞ？」

「もう予選を終わらせちゃう？というか今更だけど楓の木とかに關しては予選なんて必要なく」

最高難易度で本選に挑んでもらった方が良かったんじゃないの？」

「本当に今更な事を言うなよ……俺らだつてそう思つてるんだから……」

「果たして本選……どうなっちゃうのかな……」

「……もう……俺は何も考えない事にした……」

「先輩しつかりしてください！悟りを開いている場合じゃないですつて!!」

本選の始まり

予選は想定されていたよりもかなり早い時間で終了を迎え

楓の木、集う聖剣、炎帝ノ国のメンバーは

無事に本選の最高難易度に挑戦出来る事になった

「……そりゃあねえ……PVPを解禁したらそうなるでしょ……」

「……自分で言うのもなんだが

俺らを相手にするのは普通のプレイヤーじゃ絶対無理だろ」

「そうね……特にスペリオルやメイプルなんてラスボスどころか

その後で出てくるような隠しボスって言われた方が納得出来るもんね」

「自分的には納得したくないんだけどな……!」

そして現在、スペリオル達は明らかに運営の対応の理由が自分達にあると考え

少しだけ申し訳ない気持ちになりながらも本選の説明をドラぞうから聞いていた

『ガオ……それじゃあ本選のルール説明を行うね〜!』

本選も予選と同じフィールドでのモンスター討伐がメインになっているドラ!

この本選で生き残った場合、その難易度によって得られるメダルが変わってくるドラ

「今回は最初からバラバラってわけじゃないみたいだな．．．って危ない!」

しかし転送されてすぐにモンスターに襲われるという事態に見舞われる

これくらいのもので動じるようなメンバーは誰一人としておらず簡単に撃退は出来たのだが

やはり最高難易度という事もあり普通の雑魚モンスターですらもかなりの強さを持つていた

「マイとユイの一撃で倒れないのか．．．」

こりやあメダルを持つてるボスモンスターはかなり苦戦する事になりそうだな

「だな．．．とりあえずはまだ日も登っているし探索したいところだけど．．．」

「それなら少しだけ私の話を聞いてもらえないかな?」

実はこんな事もあろうかと予選の時にこちら辺のマップを作っておいたんだよね

特徴的な所をマークしておいたからそこを中心に回るのはどうかな?」

「いいんじゃないか?とりあえず二組に分かれて行動するか!」

「いや．．．それなんだけど俺は空を飛んでマップを見てこようかと思うんだ

ドラぞうの話していた他のギミックについても確認しておきたいしな」

「確かにそれも確認した方がいいかもね．．．」

「スペリオルなら一人でも大丈夫そうだし」

こうしてメイプル、サリー、マイ、ユイト

クロム、イズ、カスミ、カナデの二つのパーティーに分かれてみんなはメダルを探しに向かい

スペリオルは単独でマップの隠されたギミックというのを調べる事になった
「さてと・・・メダルはメイプル達に任せておけば大丈夫だろうけど・・・」

問題はドラゾウの話していたギミックだよな・・・予選ではデバフとかだったけど
本選はもつと大掛かりな仕掛けとかがあってもおかしくはないからな」

スペリオルは上空からマップを徘徊しギミックなどを調べていく

すると下の方で既に拠点と作っているパーティーなどの姿を発見していく

「なるほど・・・先に拠点を作ってからマップを徘徊するつもりなのか

確かに人数が少ないとどっちもやるってわけにはいかないからな・・・ん？」

そんな中でスペリオルは空を飛んでいる時に少しだけ違和感を感じた

それは明らかに自分の飛んでいるフィールドが小さすぎるといったものだった

「そういうえばこのフィールド・・・随分と閉鎖的な空間だよな・・・」

なんかまるで鳥籠みたいっていうか・・・まさかギミックって・・・」

スペリオルは頭の中で起こるかもしれないギミックの内、一つだけ思い当たってしまっ

そしてその可能性を考えると

空を飛んでいるスペリオルに向かって大量のモンスターが飛んできた

しかもそれだけではなく天候までも変更されて雷がスペリオルに襲い掛かってきた

「おいおい……明らかにこれって俺対策に用意されたもんだろ……」

でも……別にこれくらいいじや俺を止めるなんて不可能だぜ……ソウルアップ!!」

スペリオルはソウルアップで鎧闘神へと姿を変え雷を避けながらモンスターを倒していく

その姿を偶然にも目撃していたプレイヤーは

まるで自由に動く流星がモンスターを倒しているようだったと話していた

一方その頃、運営陣は……

「……嘘だろ……雷を簡単に避けながらモンスターを倒してんだけど……」

「いやスペリオルだぞ?それくらいは普通に出来るだろ?」

「俺らの中でスペリオルがもう完全に化け物扱いされている件について」

「それにしても……上空を飛び回るプレイヤー対策に思っただけの変更やら

空を巡回するモンスターなんてものを用意したけどさ……」

「ああ・・・スペリオルに全部、攻略されちやいそうだな・・・」

「いいやまだだ！まだ俺達には夜に発生する強敵モンスターイベントが待ち構えている！」

「そうだな！そこら辺のボスモンスターと同じだけの実力を身に付けさせた上で

大量に発生するようにしてあるしこれなら絶対に勝てるよな!？」

「そうだそうだ！今回こそはメイプル達にギャフンと言わせてやるんだ!!」

だくはっはっはっ・・・はあく・・・」

（この人達・・・毎度、同じようなセリフを言ってやり返されてるって自覚があるんだな・・・）

いつの間にか忘れられた男

スペリオルがマップの探索をしている頃

メイプル達はメダルを持つモンスターを討伐を終えて

時間が遅くなってきた事もあり拠点を作ろうとしていた

「あれ？　そういえばスペリオルにこの場所の事を言わなくてもいいのかな？」

「大丈夫でしょ？　それにさっき連絡を貰ったけどしばらくは外に居るって

なんでもあと少しでギミックの事が分かるって言ってたしね？」

「へえ〜！　流石はスペリオルだね！　それじゃあ遠慮なく罠を仕掛けよう！」

『おお！』

この罠によってメイプル達は平和に今日を乗り切るのだった

一方その頃、夜も活動を続けるスペリオルは

ようやくマップのギミックについて見当がついた頃だった

「やつぱり……このフィールドは言うならばバトルロワイヤル用に作られた物……」

おそらくは明日ら辺にでも徐々に狭まっていくと考えた方がいいな……
だとしたら拠点は出来るだけ中心に作らせていた方が効果的か……」

するとスペリオルの画面にメッセージが届いた表示が出た

差出人はサリーであり内容は拠点の場所に関してだった

「……これ……俺が言うまでもなかったな……」

その場所はスペリオルが考えていたようなまさに中心地であり

これに関しては言うだけ無駄だったとスペリオルはかなり遠い目をしていた

しかしそんな遠い目をしている場合ではなくその時間は迫ってきてきた

「あつ……そう言えばもうそろそろ例の時間だった」

そう……もうすぐ例の強敵が出現する時間となるのだ

本当ならばこの時間にはもう拠点に向かっていようと思っていたスペリオルだった

が

ギミックの解明に時間を取られて帰るに帰れなくなってしまうようだ

そしてとうとう……強敵が出現する時間となってしまう

「おおう……なんかゲートから蜂の巣を突いたみたいに出てきてんぞ……」

その数は思わずスペリオルが引いてしまうほどに多く

今回ばかりは運営も本気になっているのだという事が窺われる

(別に今回だけじゃなくていつも本気と言う事は言っではいけない)

するとモンスター達はスペリオルを発見した瞬間に攻撃を開始する

しかしスペリオルはそれを難なく躲しながらとある事を考えていた

「最近はスキルも試していないのが多いからな〜・・・」

「ここは運営の策を利用して試し撃ちをさせてもらおうとするか・・・!」

そう言っつてスペリオルは地上に降りると自分の持つているスキルなどを確認する

「まずは進化したスキルを試していくか! 換装! 真龍帝シリーズ!」

「そんでもって〜・・・真義兄弟の絆!」

『おっしやあああああ! 久々の出番だぜええええ!!』

『更に強くなった我らの力! とくと味合わせてやろう!』

スキルを発動すると現れたのは鬼牙装 関羽と雷装 張飛だった

『ばあああくれつううう・・・! 超・雷・蛟!!』

『鬼牙・・・百烈撃いいいい!!』

「星・龍・斬!!」

召喚された関羽と張飛はこれまで以上の威力を持った一撃を放っており

強敵として設定されたはずのモンスターを次々と倒していく

スペリオルも倒しているのでたった一分ほどで千体ほどのモンスターが倒された

すると今度は巨大なモンスター達が次々と姿を現した

「今度は巨大な敵か？なら次はこいつを試す番だな！

換装！烈火武者シリーズ！更に！烈火大鋼！！」

次にスペリオルは烈火武者シリーズに装備を変えると

大鋼を呼び出して融合し巨大な武者へとその姿を変える

『はあああああ！大烈火拳！！』

スペリオルはロケットパンチの如く拳を飛ばすと

それだけで十体以上のモンスターを倒し今度はもう片方の腕についている大砲

大烈弩銃を放つとありえないほどのモンスター達が次々と倒れていく

『次は近接戦だ！大烈刃剣！旋風の大刀！』

次にスペリオルは剣と刀を取り出すとそれでモンスターに突撃していき

ありえないほどのモンスターがどんどんとマップ上から消えていった

こうしてこの日はただひたすらに暴れて一日を乗り切ると言う無茶苦茶をしたスぺ

リオルだった

そして翌日、メイプル達は転移の罫が発動しみんなバラバラになってしまふ

メイプルの自爆花火によって合流する事が出来たのだが

何故かその時に集う聖剣や炎帝ノ国と拠点で一緒に生活する事になっていた

「……そう言えばスペリオルの姿は見えないが……一緒にやないのか？」

「……あつ……転移の事があつてすっかり忘れてた……」

「まつまあスペリオルなら余程の事がない限り大丈夫でしょ！」

「それ……明らかに信用とは別のところから出てる言葉だよな？」

「なんかスペリオルが可哀想に思えてきた……」

一方その頃、みんなに存在を忘れていたスペリオルはと言うと……

「ん……まさか転移のギミックまであるとは……」

しかもメツセージにマップまで使えないとはな……これじゃあ合流は難しいか？

メイプルが使うって言つてた自爆花火も見えなくなつたし……あり？」

「……もしかして俺……みんなに忘れられてね？」

一方その頃、運営側では……

「……おい……強敵として出してるはずのモンスターが次々と倒されているぞ?」

「甘いわ! 無限リポップだから何度、倒しても復活するのだ!」

「いやだから……そのリポップが追い付いてないんだって……」

「……」

「先輩……この人、気絶しました」

「こりゃあ残ったギミックも簡単に攻略されそうだな……」

「もうやめてええええ!! 俺達の胃はもう限界なのよおおお!!」

果たして本選が終わるまで運営の人達の胃は持つのだろうか?

我ら夏侯兄弟！

以前、スペリオルから貰った情報を元に

シンとはあるクエストを受けようと考えていた

流石にスペリオルが受けられなかったクエストなので

報酬がどんな物なのかまでは分からないが

それ以上にシンにはこのクエストを受けたい理由があった

「なんでもこのクエストには

歴史上の有名な武将が出るって話だからな・・・！」

やっぱり男としては戦いたいと思うのは当然でしょ！」

シンがこのクエストを受けた理由はむしろその中身である

有名な武将と手合わせをしたいと考えていたからなのだ

そこら辺に関しては彼も男だったという事なのだろうが

この時の彼はまだ知らなかったのだ・・・

この後でどんな相手と戦う事になるのかを・・・

「おっ？この戦場でクエストが発生するみたいだな・・・！」

それでこれがそのクエストで間違いないんだよな?」

目的の場所に到着したシンは自分の画面に表示されたクエスト名を見る

そこには『鋼と隼の武将』と書かれておりすぐさまシンはクエストを受けた

するところから共なく無数の矢が飛んできてシンを攻撃する

「あつぶねく……クエストを受けた瞬間にこれかよ……!」

そしてアレが……俺が戦わなくちゃいけない相手か……!」

『我が名は鋼の猛将!夏侯惇!!』

『我が名は隼の闘将!夏侯淵!!』

『我ら夏侯兄弟!命が惜しくない者だけ掛かってくるがいい!』

なんとシンの前に現れたのはあの夏侯兄弟だった

彼らは間違いなく中国の歴史にその名を刻んだ武将であり

その強さはおそらく上から数えた方が早い方だと言ってもいいだろう

しかもそんな相手が二人同時など今のシンから見れば最悪と言っても過言ではない

「マジかよ……!確かに夏侯兄弟とか会ってみたい人物ではあるけど……

実際に戦いたいとは思うような相手じゃないっての……!崩剣!」

『甘いわ!蛇流絞斬・防!』

「なっ!?!俺の崩剣をあんな簡単に!?!」

『確かにお前の一撃は強力だが．．．我らは幼き頃から戦場を渡り歩いてきた．．．！今更、そんな小細工混じりの攻撃程度で怯む我らではないわ!!』

そう．．．夏侯兄弟の強さは力や技ではなく

幼き日から戦場を生きてきたその圧倒的なまでの経験なのだ

それ故にどんな事であろうとも冷静な判断を下す事ができ

どんなに卑劣な相手であろうとも真正面からたたき伏せる事が出来た

その経験差を真正面から想い知られたシンはどうやって攻めるかを考えていた

しかし彼は忘れていた．．．彼らは兄弟だと言う事を．．．！

『兄者だけを見ていいのか!?俺も居るんだぜ!』

「っ!?!しまっ」

『獄羅丸!!』

「ぐああああ!!」

完全に油断していたシンは後ろから現れた夏侯淵の一撃を躲し切れず

一気にHPが半分近くまで減らされてしまう

「くっ．．．!一撃ももらっただけでこんだけの威力があるのかよ．．．!」

『ほう?淵の一撃を受けてまだ立ち上がれるとはな．．．我らに挑むだけの事はあるか』

『だが!我らは貴様程度の実力者とも戦ってきた!これくらいでは揺るがぬ!』

確かに夏侯淵の言う通りこのまま戦っていてはシンの負けは確実だ

しかし二人共、お互いをカバーするように戦っており引き離すのは困難
残された選択肢は今のようにながらどちらかを倒すしかない

(となれば・・・まず狙うは俺の攻撃を防御出来ない夏侯淵の方からだ・・・!)

「行くぜ! 崩剣!」

『ほう? 兄者ではなく今度は俺の方に狙いを変えてきたか・・・!』

確かに俺は兄者と違って防御に優れた技を持っているわけではない・・・

だが・・・! この程度の攻撃で崩れるような夏侯淵だと思ったか!? 爆鋭突!!』

夏侯淵は飛んでくるシンの崩剣を衝撃で弾きながらシンに突っ込んでいく

しかしその瞬間にまるで狙っていたとばかりにシンの顔には笑みが浮かぶ

「待ってたぜ! この瞬間をな! シールドバツシュ!!」

『面白い! 俺と力比べをしようと言うわけか!』

「いや? あんたと力比べして勝てるわけがねえからな・・・!」

だから力じゃなくて・・・小手先で勝負するんだよ! 崩剣!」

『何?!』

なんとシンの狙いは夏侯淵との真正面からのぶつかり合いではなく

その瞬間を狙って崩剣を当てる事だったのだ

しかし次の瞬間、シンの崩剣が当たったのは夏侯淵ではなく

『グアアアア!!』

『あつ兄者!!』

なんとその兄である夏侯惇の方が攻撃を受けたのだ

それにより彼の片眼が傷付いてしまうがダメージはそんなになかった

「マジかよ……渾身の一撃だと思つたのに……」

『……いや……見事だった……よくぞ我ら二人の攻撃を防ぎ切つた』

『全くだぜ……まさか兄者が個人での決闘で片眼を失う事になるとはな……』

「ここまで俺達が驚く事なんてないと思つてたんだけどな……」

『ああ……我らをここまで追い詰めたのはあの漢……張飛くらいだろう』

「そんなすごい相手と比べられてもな……俺はボロボロだし……」

『確かにな……あの時の奴は我らだけじゃなく他にも三人の武将があり』

それら全てを相手にして生き残つたとんでもない漢だからな……!』

『でもお前だつてすごい方だぜ? さてと……これ以上の話は無粋だな』

それじゃあ俺達からお前に技とこれまで使つてきた相棒を託してやるよ』

そう言つて二人が消えていくとシンはユニーク装備・隼鋼シリーズを身に纏っていた

シンはその装備の性能を確認してとても驚いている様子だった

「おお!流石にアレだけ苦労して手に入れただけの事はあるな!

・ ・ ・ てか ・ ・ ・ スペリオルって毎回、こんなクエストをクリアしてるのか?
だとしたらアイツの場合は装備やスキルじゃなくて本人が化け物だな ・ ・ ・
今回のクエストでシンが一番学んだ事はたった一つ ・ ・ ・
それはスペリオルがやはり化け物だという事だった

蝶は妖艶に舞う

シンがスペリオルに教えてもらったクエストをクリアし

新しい装備を手に入れて皆に見せびらかしていた頃

ミザリーもスペリオルに教えてもらったクエストをやりに向かっていた

その中でもクエストの名前が気になり

簡単だと思ったクエストの場所まで向かうと

そこでは何やら困っている老人の姿を発見した

『困った困った・・・一体どうすればいいのか・・・』

「あのく・・・一体どうされたのですか？」

『おお！これはまた凄い別嬪さんが・・・』

そうじゃ！お主！ワシのお願いを聞いてもらえぬか!？」

「えつと・・・とりあえずはお話を聞かせてもらえませんか？」

ミザリーはその老人から話を聞く事にした

どうやら王様から最も美しい女性を連れてきて

自分の前で舞を踊らせて欲しいと指示を受けたそうなのだが

生憎とその女性は足を怪我してしまったようで舞えなくなってしまったのだ
そこで老人は偶然ではあるが

自分に話しかけてきたミザリーに舞を踊って欲しいとお願ひしてきた

「舞ですか・・・私はそう言うのはあまり覚えがないのですが・・・」

『それなら足を怪我した彼女に聞いて練習すれば大丈夫じゃ

問題は衣装の方じゃろう・・・

どうせならばお前さんに合わせた衣装を仕立てたいが・・・そうじゃ!』

老人は何かを思いついたようで突如として店の中に戻ると

何か地図のような物を持ってきてそれをミザリーに見せる

『これにはかつて最も美しいと言われた伝説の舞姫が使っていた屋敷が記されておる

もしかしたらそこにならばお前さんに合う衣装もあるかもしれん』

「なるほど・・・では舞の練習をしてからそのお屋敷に向かつてみますね?」

それからミザリーは一時間ほど舞の練習で完璧に踊りをマスターすると

先ほどの老人が話していた伝説の舞姫が使っていた屋敷へと向かう事にした

幸いな事にそこはモンスターが発生するような場所ではなく

屋敷の中に入っても特に何かしらのイベントが発生する事はなかった

「もしかして衣装を手に入れるだけのイベントなのでしょう?」

ですがそれにしても特にこれといった物はないような気が……」

『……ほう？まさかこの私の屋敷に来る物好きがいるとはな……』

突如として声が聞こえてきてミザリーはその声のする方を見ると

そこにはあの老人が絶賛するだけの美貌を持った踊り子のような格好をした女性が立っていた

『私の名は貂蟬……其方も私が使っていた衣装が欲しくて来たのか？』

「貂蟬!?それって中国の四大美女じゃ!？」

なるほど……確かにそれならばこれほどの美貌にも納得ですね……」

ミザリーは貂蟬に事情を説明してどうか衣装を貸してもらえないかと交渉するすると話を聞いた貂蟬はまるで何かを考えるように顎に手を当てていた

『……其方……その舞に代理で参加すると言っていたな?』

「はい?えっええ、代理なのは申し訳ないとは思っていますが……」

『面白い……!ならば私に其方の舞を見せてもらおうではないか……!』
「もしも私がそれに納得出来たのならば衣装を其方にやろう』

「ええ!？」

まさか貂蟬がこんな事を言ってくるとは思っていなかったミザリーだが

おそらくはこれもクエストの内容の内なのだろうと思ひ

先ほど教えてもらった舞を見せる事にした

ミザリーの舞を見ている貂蟬は表情を一切変えずにただじっと見つめていた
そして舞が終わり彼女が発した答えはたった一つだった

『・・・残念だが・・・失格だな・・・』

「失格・・・ですか・・・」

失格と言う事はクエスト失敗なのだともミザリーは思っていたが

おかしな事にクエスト失敗のメッセージが来ていなかった

一体何故だろうと思っているとそのまま貂蟬が話を続ける

『確かに其方の舞は基本に忠実で美しく舞えていた・・・だが中身がないのだ』

「中身・・・ですか？」

『我ら舞を踊る踊り子は言うならば相手に自分の姿を見せるだけの高嶺の花・・・』

しかしその心には常にその舞を一番に見て欲しいと思う人を思い浮かべなくては
いけないのだ

其方は……一体誰を思い浮かべる？誰に一番、自分の舞を見て欲しいと思う？』
「……一番……見て欲しい人……」

ミザリーの頭にはたった一人の人物が想像されるが

それと同時に思い浮かぶのは自分にとって親友とも言える存在

そんな彼女との関係も崩したくはないと考えていると

ミザリーの考えを見透かしたかのように貂蟬が口を開く

『先に言っておくが……誰が誰の事を想ったとしてもそれは自由だ……』

それを胸に秘めておくのも晒し出すのも其方の自由だが……心までは偽るな

心まで偽ってしまえば……それは自分への枷になる……』

「自分への……枷……」

『それに其方が考えているもう一人の人物は』

自分がその人を好きになっただけで怒るような心の狭い人物なのか？』

「そつそんな事はありません！ミイはそんな！」

『ならば何の心配もいらぬのではないか？』

其方は其方の心が従うままに……己の舞を披露してみよ』

「自分の……心に……」

ミザリーはその言葉を聞いてもう一度だけ貂蟬の前で舞を披露する

それは先ほどとは違い美しさだけでなく妖艶さや可憐さも備えており

何よりも違ったのは自分を見て欲しいという意思だった

それを見届けた貂蟬はとても満足そうな笑みを浮かべていた

『そうだ．．．我らの舞は誰かを思う心からくるもの．．．それを忘れてはならない

私にも一番に自分を見て欲しいと思う者がいた．．．最もその男は戦いに明け暮れて
いて

とても私の事を見てくれていたわけではないが．．．一緒にいられた事はとても幸せ
だった』

「貂蟬様．．．」

『高嶺の花は見られて美しくなるが．．．見てもらえるだけでは駄目なのだ．．．

どうか其方は見てもらうだけではなく．．．愛でられるような花になるのだな．．．

約束の衣装はあの箱の中だ．．．それでは私は行くとするよ．．．あの漢の元へな』

貂蟬はミザリーに出会えた事を幸福に思っていたのか

優しい慈悲に満ちた顔を見せながら消えてしまった

ミザリーはその姿を最後まで見届けてから

彼女の残してくれた衣装の箱を開けてそれを身に付ける

最後は王宮で彼女が認めてくれた舞を披露しクエストをクリア

そして彼女はギルドに戻るとそこにはミイの姿もあつた

「ほう？それがミザリーの新しい装備か・・・凄いな」

「そうですか？そういえばミイ・・・貴女に報告したい事がありました」

「私にか？一体何だ？」

ミザリーは他のみんなには聞こえないようにミイの耳元で囁いた

「私も本気で狙わせてもらいますね？スペリオルの事」

「!?・・・なるほど・・・何があつたかは分からないが・・・」

先に言っておく・・・ライバルは私だけではないからな？」

「ええ・・・誰にも負けるつもりはありませんよ？」

「・・・それに忘れていると思うが一番の敵は本人だぞ？」

「・・・あの鉄壁と言つてもいい理性の壁が凄いですよね・・・」

策士とは常に美しくあるべき

シン、ミザリーのクエストクリアの報告を受けて

普段は臆病であまり一人で行動しようと思わないマルクスも

今回ばかりは自分も装備が欲しいと思えばスペリオルのクエストを受ける事にした
彼が選んだのはとある軍師のクエストであり戦闘向きではなかったが

策を考えたり罠を作ったりするのに特化した装備が手に入りそうなので

マルクスはそのクエストが行われている場所へと向かう

「ここが・・・例のクエストがある屋敷か・・・」

マルクスの前にあるのは古びてはいるがかなり大きな屋敷であり

この中に自分の求めている装備があるのだと思つて屋敷の扉に手を当てると

画面の中にクエストが表示された

「これがクエストか・・・えっと『司徒と司空の罠』？」

確かこの名前つて中国の位を表していたような・・・」

この名前が出た瞬間、マルクスは何やら嫌な予感がしたが

行かなくてはここまでやってきた意味がないので

クエストを受諾し現れた鍵を使って屋敷の中に入る

「・・・誰もいないみたいだね・・・でも・・・」

それはトラップの異名を持つマルクスだからこそ気がついた

この屋敷にはありとあらゆる罠が仕掛けられており

少しでも間違えば即座に死亡して転移させられてしまうと言う事を

(しかもこの数・・・どう考えても初見殺しにしか見えない・・・)

僕でも流石にこんな数は仕掛けないよ・・・解除も面倒だなく・・・)

マルクスは罠を避けたり解除しながらゆっくりと前へ進んでいく

しかし問題は自動で発動するものではなく相手に発動される罠だった

そしてその考えを相手が見抜いたかのように次々と罠が発動されていく

「ちよっ!?!この数は明らかに個人に使っていいものじゃないでしょ!?!」

明らかにとんでもない量の罠が発動されて流石のマルクスも対処出来ず

死亡してしまいそのまま街まで転移させられてしまう

『やれやれ・・・最初はかなり優雅だったのに・・・死に方はダサいね』

『仕方ありませんよ・・・それよりも彼はまた来ますかね?』

『うーん．．．まあ来るんじゃないかな？彼はめんどくさがりに見えるけどそれと同時に．．．負けず嫌いそうな顔もしていたからね？』

「．．．あれは流石に反則だよ．．．どう考えても無理ゲーだよ．．．」

街に戻ってきたマルクスは不貞腐れておりどう考えても理不尽だとぼやいていた確かに百本は超えるであろう矢の雨に後ろから迫ってくる針の壁

そして前方からは大岩が転がってくるなど普通に考えれば無理ゲーだろう

もしもそんなのに耐えられる人間がいるとするのならあの最終兵器少女だけだろう

「へっくツション!!」

「今度はメイプルさんが風邪ですか!?!私達のを移してしまいましたか!?!」

何にしてもあれほどまでに難しいクエストはマルクス一人でやった事はなかったしかしだからと言ってこれで諦める事だけはなんか負けたつもりで嫌だった

「．．．やっぱりもう一回、挑戦しようかな?」

マルクスは諦めずに再び例の屋敷の中へと入っていった

再び様々な罠が発動されてしまうが今度はスキルを使って罠を躲していく

『へえ?ちゃんとさっきの事を反省して罠を防御出来るみたいだな』

『だけど・・・本当に彼が試されるのはこれからだよ・・・!』

何かしらのスイッチが押されるとマルクスのいた天井が徐々に落ちてきていたこのままでは確実に潰されると感じたが逃げるにしても出口がなく残された選択肢はどうにかして落ちてくる天井をやり過ごす事だった

(と言つても僕の手持ちのスキルじゃこれを止める事なんて・・・!)

・・・いや・・・僕のスキルで止められないなら止めなければいい・・・!

マルクスは自分の周囲に対して罨を発動し自分の床を抜いた

これによりマルクスは壁下へと避難を成功させて

落ちてきた天井は先ほどまでマルクスがいた床を埋め尽くして止まり

しばらくするとまるで役目を終えたかのように元へと戻っていった

「これでクエストはクリアって事でいいのかな？」

『まさかあの罨を突破するとはね・・・流石にやるじゃん』

声の聞こえた方を見るとそこに居たのは何やら怪しげな男の姿だった

『僕の名前は賈コウ・・・この罨を仕掛けた人間の一人だよ

さてと・・・それじゃあ君をこの屋敷のゴールまで案内するよ』

賈コウに案内されながらマルクスは屋敷の中を進んでいき

彼の言っているゴールまで辿り着いたマルクスを待っていたのは美形な少年だった

『初めまして……僕は郭嘉……君と同じ策士だよ』

しかし君……何とかあまり美しくはなかったね

まさか床を破壊してあの罟を突破するとは思えなかったよ』

「悪かったね……あれ以外に方法が思いつかなかったんだよ……！」

『ふふっ……でも本当に凄いとっては思っているよ？』

さてと……それじゃあ君に報酬を渡さないとね？』

ユニーク装備・氷毒シリーズ

極光扇

INT+150

「破壊不可」

氷麗剣

STR+150

「破壊不可」

極星・氷嵐剣

極光扇と氷麗剣が合体した状態

STR+ 200

INT+ 200

相手を凍結状態にする事がある

「破壊不可」「極星緋咲斬」

氷毒爪鞭

INT+400

相手を毒状態にする事がある

「破壊不可」「極氷暗剣爪」

極星緋咲斬

相手を出血状態にする技

極氷暗剣爪

氷毒爪鞭の毒で相手を拘束し突撃する技

相手にバッドステータスを付与する

『これが僕から渡せる報酬かな？ 賈☒はどうするんだい？』

『まあ頑張ったし・・・使用制限はあるけどこれくらいかな？』

震星杖

賈☒アシユタロンを呼び出して必ず当たる砲撃をする事が出来る

使用回数は一日に三回

「新しいスキル……でもあんまり使う機会はないかも……」

『そりゃあ君は軍師なんだから力を使う事なんて滅多にないよ

でも……いざとなればそれを使いなよ？卑怯だろうと何だろうと

勝てなかつたら全てが無駄になるんだからね……』

『まあ僕達が反面教師だと思つて欲しいかな？』

それじゃあ……もう会う事はないだろうけど頑張りなよ？』

二人はそう言い残して消えてしま

マルクスはこうして新しい装備とスキルを手に入れたのだった

「まあ確かにもう会いたくはないよ……」

というかこんなにキツイクエスト自体をもう受けたくないよ……」

烈風の鬼ごっこ

それはとある日の事、ドレッドは前にスペリオルから貰った情報から

自分の興味あるクエストを選びそれが発生する忍者の里へと向かっていた

「忍者の里か．．．確かにAGIに特化した装備やスキルがありそうだが．．．

よくもまあこんな分かりづらい場所にあるものを見つけたな．．．」

その忍者の里はマップにすらも描かれていない秘境に存在し

おそらくはスペリオルに情報を貰えなかったら絶対に見つけられなかっただろう
なのでこの貰った情報を大切にしてクエストを受ける事にした

「おっ？（こ）みたいだな．．．しかし．．．スゲエデカいな．．．」

屋敷の前に着くとその手前でクエストの名前は表示された

「『烈風忍者との鬼ごっこ』か．．．忍者との鬼ごっことは面白そうだな」

ドレッドはYESのボタンを押してクエストを受諾をすると

先ほどまで閉じていた屋敷の扉がゆっくりと開かれた

中へと入って歩いていくと大きな広間を発見しそこに一人の人物が立っていた

『よくぞ来た．．．！我が名は烈風頑駄無！』

お主に我が家に伝わる秘伝の奥義と武器を授けてやろう……
但し！汝が本当にその資格があるかを試させてもらおうぞ！

試練は単純明快！制限時間内に我を捕まえてみるといい！」

「随分と自信ありげだな？俺の異名は神速だぜ？超加速！」

ドレッドは速度を上げるスキルを使って烈風頑駄無を捕まえようとするが

手が届きそうになったその瞬間に烈風頑駄無は一瞬で姿を消してしまう

「マジかよ……！今のを一瞬で躲せるって事はまだまだ早くなりそうだな」

『左様……！拙者の風の舞は三倍の速度で動く事が出来る移動術……！』

果たして拙者に追いつく事は出来るかな？」

そこからドレッドと烈風頑駄無の長い鬼ごっこが始まった

範囲はこの屋敷の中だけだったがとにかく烈風頑駄無が早かった

ドレッドも自分より早い相手に会うのは初めての事であり

とても追いつけるような感じではなく作戦を変える事にした

(どうやら直線のスピードは俺の方が上みたいだな……)

となるとどうあっても逃げられないように工夫しないとダメだな……！)

先ほどの追いかけてここでドレッドは自分と烈風頑駄無の長所を確認した

直線での速度に関してはドレッドの方が少しではあるが早いみたいなのが

ここは屋敷であり縦横無尽に逃げ回れる烈風頑駄無の方が有利であり作戦としてはまず縦横無尽に動けるこの屋敷をどうにかしなくてはいけなかった

「こうなつたら・・・少し罰当たりにはなるが勘弁してもらおうぜ？」

ドレッドは烈風頑駄無を追いかけながら屋敷の中を破壊していく

それを見ていた烈風頑駄無もドレッドの狙いに気がついたが

あえて真つ向から受けて立つ事を選び突っ込んでいく

「・・・今だ！」

真つ向勝負を挑むドレッドだったが

烈風頑駄無はそれすらも読んでドレッドの頭の上を飛び越えようとする

しかしその瞬間、彼が予想していなかったものが視界に飛び込んできた

『なっ?! 畳だど?!』

「お前は俺しか見ていないみたいだったからな

だから逆にそれを利用させてもらった・・・！」

そう・・・ドレッドは敢えて畳を括り付ける事で

遅れて畳が飛んでくるようにしていたのだ

そして見事に烈風頑駄無はその作戦に引っかけたてしま

畳が命中した烈風頑駄無は体勢を崩してその間にドレッドに捕まってしまう

『……お見事……！どうやら天界最速の名前は返上する事になりそうだ

では我が家に伝わる奥義が書かれた巻物と武器を其方に授けよう』

そう言つて烈風頑駄無は巻物をドレッドに巻き付けると

彼の装備はユニーク装備。烈風シリーズへと変わつていた

「おいおい……これは流石に派手すぎるだろ……まあいいけどさ……」

その装備はドレッドの趣味とは違う真つ赤な装備となつており

とても隠密が得意な忍者の装備とは思えないものだった

しかし性能自体はとても高いのでなんとも否定しきいていない思いがあり

仕方なくドレッドはこの装備を受け取る事にしたのだった

荒れくれ者の大岩

ドレッドが新しい装備を手に入れていた頃

ドラグもスペリオルから貰った情報を元にクエストのある場所にやってきた
そして彼の前に現れたのは一本の剣が刺さった巨大な大岩だった

『よくぞ来た！俺の名前は烈龍頑駄無！天界でも最も力の強い武者だ！』

そしてお前の目の前にある大岩に刺さっているのは天承神刀

俺が使っている武器の一つ・・・お前に与える試練はたった一つ！

この大岩に刺さっている天承神刀を見事、手にして見せよ!!』

「つて事はこの大岩から剣を抜けばいいだけなのか？」

だとしたらあまりにも簡単過ぎるな・・・試してみるか」

あまりにもクエストの内容が簡単過ぎたので

ドラグは怪しみながらもとりあえず試しに抜こうとしてみると

「ぐっ!!」このおとおお!!

はあ・・・はあ・・・やっぱ普通じゃ抜けねえのか・・・!」

『当然だ！何を隠そうこの剣を大岩に突き刺したのは他でもない俺だからな！』

俺ぐらいの力がなければ引き抜く事が出来ないから絶対に不可能！

悔しければ早く天承神刀を己の手に納めてみせるのだな!!」

「なんかすげえドヤ顔だな．．．腹が立ってくるぜ．．．！おっしや！」

どんなに力を込めても抜けるどころかびくともしなかつた

しかしこれはドラグも普通に予想していた事であり

今度は色々なスキルを使ってSTRを上げて再び挑戦してみる

「ふんぐーんのおおおお．．．!!はあ．．．はあ．．．」

マジで抜けねえな．．．！何かアイテムが必要なのか？」

やはり普通に抜く事は不可能だとドラグは判断し

何かしらのアイテムが必要になるのではないかと街で情報を集める

しかしそれらしい情報は一つとしてなく珍しくドラグは頭を抱える

「まいったぜ．．．まさかこんなに頭を使うクエストになるとは．．．」

しかしどうしたもんか．．．全くと言っていいほど情報がねえよ．．．ん？」

ドラグが珍しく図書館で色々調べているとある文献を発見した

それはあのクエストに出てきていた烈龍頑駄無の名前が記されていたのだ

「もしかしてこれにクエストのヒントが書かれていたりするのか？」

ドラグはその本を取って中身を見たがそれらしい情報は一つとしてなかった

烈龍頑駄無は天界武者と呼ばれている存在でかつてはそこで大暴れしていたという事

それに怒った天界の王であり天帝によつて烈龍頑駄無はとある剣にその体を封印された

しかし別に彼は純粹に悪い存在だったというわけではなく

むしろ正義の為に戦える正義の武者だった

それ故に目覚めてからは正義の為にその力を振るい

多くの人々を助けていた事がその本には書かれていた

「なるほどな．．．あんな風に見えてあいつはいい奴だったのか．．．

しかし随分と型破りな男だな．．．正義の武者なはずなのに

暴れ過ぎて剣に封印されるとか．．．何やってるんだよ．．．」

あまりにも型破りな烈龍頑駄無という存在にドラグは苦笑いしている

ここでようやく彼はクエストをクリアする為の方法を思いついた

「もしかして俺は．．．とんでもない勘違いをしていたのか？」

『おっ？また試しに来たのか？どうやら今回はかなり自信があるみたいだな？』

「ああ……！お前の本を読ませてもらってようやく理解したぜ……
どうすれば良かったのかをな!!地割れ!!」

何を考えているのかドラグはこれまでとは違い剣を引き抜くのではなく
武器を構えて大岩に突っ込んでいき大きく振りかぶってスキルを放った
その一撃を受けて大岩は真つ二つに裂けてドラグは剣をその手に取った

『見事なり！よくぞ俺の試練を突破した！』

「ああ……お前は最初からこの大岩から剣を引き抜けなんて言っていなかったからな
要は力づくで大岩を壊せばそれで良かったなんて……脳筋の俺が考えないとは……」
『その通り！我らのような力で圧倒するような武者は難しい事を考えるな！』

たとえどんな罫であろうと壁であろうと力で乗り越せてみせればいいのだ！

それを改めて理解したお主ならばきつと我が武器を使い熟す事が出来るだろう！』

そう言つて烈龍頑駄無が手を翳すとドラグの手には龍神の鉞と四閃爪の槍が握られ
ていた

そして装備もユニーク装備・烈龍シリーズへと変わっていた

『その鉞と槍は我が最も使っていた最強の武器である！』

しかもそれだけではなくその二つを合わせる事で全てを断つ力となる！

お主がそれを使いこなせるかどうか……天から見守っているぞ！』

「ああ・・・！見てもらおうじゃねえか・・・！俺の力ってやつをな・・・！」
こうしてドラグは見事にクエストをクリアし新しい装備を手に入れたのだった

精霊

ドレッド、ドラグに倣うかのようにフレデリカも

スペリオルから受け取ったクエストの情報を元にその場所へと向かっていた
最初は彼女も渋っていた様子だったが

彼等の新しい装備を見て羨ましいと思っただのか

険しいのは承知でクエストに挑んでみる事にしたのだ

「さてと・・・スペリオルが話していたのはここね？」

フレデリカの前には巨大な扉が建っており

その扉には何かを入れるであろう三つの窪みがあった

「まずはこの謎を解かないとね・・・」

扉には三つの窪みだけではなく文字が刻まれていた

その文面を読み解いていくとどうやら炎、空、光の鍵が必要らしい

そしてその三つの鍵を貰うには

精霊からの試練に合格する必要があるとも書いてあった

「うへっ・・・やっぱり難しそうだな・・・」

でもこの三つをクリアすればこの扉の奥にある報酬は私の物かゝ・
・まっまあとりあえず受けてみるだけで受けてみよつと!」

フレデリカはまず炎の試練があると書かれていた火山へと向かった
火山には洞窟が存在しそこから中に入る事が出来た

そして大きな広場のような場所に到着するとマグマが吹き出し

そこから一匹の精霊が姿を現した

『我が名はスピリットガイスト!炎を司る精霊なり!』

我が与える試練はこれなり!』

「これ・・・随分と古いけど灯台かしら?」

『左様!我が試練はこの灯台に火を灯す事なり!!』

「それなら簡単そうじゃん!ファイアーボール!」

試練の内容を聞いて簡単そうだと判断したフレデリカだったが

ファイアーボールを放った瞬間にその考えは覆される事になる

「えっ!?なんか一瞬で消えたんですけど!?

だったら・・・!多重炎弾!!」

ファイアーボール一発では足りないと感じたフレデリカは

次に五発同時に灯台に向かって放ったがそれでも火は付かなかった

それを足場にして空中を登っていた

本来の使い方は異なつてはいるがそれでも結果は成功であり
見事に空中にあつた鍵を入手する事が出来たのだつた

『見事……！我が試練を突破した其方は空の鍵を入手した

残る鍵は光のみ……！精進せよ……！』

「はあく……なんか私もメイプルに毒されてる気がする……」

結果的に鍵を入手する事は出来たのだが

その方法に使つた多重障壁に対してフレデリカは

自分もメイプルに毒されてしまったと何やら落ち込んでいた

「ええい……とにかく今は気にしない！」

さあ！最後の光の鍵を入手しにいくわよー！」

どうにか気を持ち直してフレデリカは最後の鍵がある洞窟へと向かつた
洞窟の入り口には大きな祭壇のような場所がありそこで精霊が出現した

『我が名はフラッシュストーク……！光を司る精霊なり……！』

我が試練はこの暗闇の迷路を潜り抜けて見事、出口まで辿り着く事……

出口で我は待っている……さらば！』

「最後は迷路か……また苦手な感じのやつがきた……」

しかしこれまでの試練に比べたらかなり平和的であり

フレデリカは覚悟を決めて迷路の中に入ったのだが

迷路の中はあまりにも真つ暗でほとんど何も見えなかった

「本当にこれじゃ何も見えない……」

それに目が慣れてくる様子もないし……

！もしかしてここって特殊なステージなの!?」

そう……フレデリカの考えている通り

この洞窟はトラップステージとなっており常に暗闇の状態になっている

この中では光の魔法も使えないし目が慣れてしまう事もない

つまり自力で洞窟を抜ける以外の選択肢はないという事だった

その事にフレデリカはうんざりという顔をしながらもとにかく進んでいく

しかしどれだけ進んでも同じような場所をグルグルと回っているだけであり

とても出口に迎えているようは思えない状況だった

「もう……なんで私ばかりこんな目に遭うのよ……」

こうなったらこの迷路ごと壊してやる……多重炎弾!!」

ヤケクソになったフレデリカは迷路を破壊しようを炎を放つが

もちろんここはステージなのでそんなのが通用するわけもなく

壁にぶつかる何事もなかったかのよう炎は消えてしまった

しかしこのヤケクソの行動が彼女を救う結果となった

「・・・あれ？もしかして・・・これを使えば光魔法が使えなくても

洞窟を照らす事が出来るんじゃない？」

そう・・・このステージで使えないのはあくまでも光魔法だけであり

それに属していない火魔法は普通に使えてしまうのだ

つまり光魔法の代わりに火魔法で道を照らせれば出口にも辿り着けるといふ事

それに気がついたフレデリカは炎を放って迷路を照らしていき

見事に洞窟を抜けて出口の祭壇に辿り着く事が出来た

「やったああああ!! ようやくゴールだああああ!!」

『見事なり・・・我が試練を突破した証としてこの光の鍵を渡そう・・・!!』

「これで三つの試練をクリアしたし・・・あの扉に戻るだけね・・・!」

フレデリカは元の扉があった場所に向かい三つの鍵を使って扉を開く

扉の奥にあったのは巨大な水晶玉でありその中には一匹のドラゴンが眠っていた

「これが報酬？確かに凄そうなドラゴンだけど・・・眠ってるんじゃないか・・・」

そう言っって大きな水晶に触れるとフレデリカの見た目が変わり

ユニーク装備・召喚士シリーズと新しいスキルを手に入れていた

「これって・・・あの時の精霊達を呼び出すスキル・・・

そしてこれがさっきの精霊を呼び出すスキルかく・・・

わあく・・・HP半分にMP全部消費って・・・

あんまり使いたくないな・・・

ってか・・・疲れたああああ・・・」

こうしてフレデリカも新しい装備とスキルを手に入れて

運営側が思わず泣いてしまうほど強くなった上位プレイヤー達だった

『いいいいやああああ!!もうこれ以上は強くないでえええええ!!』

みんなで楽しくボス戦（一人を除いて）

完全に忘れられているスペリオルを放っておいて

メイプル達はメダルを稼ぐべくそれぞれのギルドのメンバーと共に

サリーが見つけたダンジョンへと足を運んでいた

そんな中で一番最初にダンジョンを見つけたのは

ドレッド、マイ、ユイ、マルクスのパーティーだった

「なるほど……ここにボスがいるのは間違いなさそうだな」

「はい……でも流石にこの数を相手にするのは……」

「どう考えても労力的に無理だろうね」

そんな四人の前に立ち塞がったのは大量の魚型モンスター

これらを相手にするのは流石の四人でもキツイので

ドレッドの相棒であるシャドウの力を使い突破

そしてそのままモンスターに気づかれる事なくボス部屋にたどり着いた

そこで待っていたのは巨大なナマズのようなモンスターだった

「いくよお姉ちゃんー！」

「任せてー！」

「轟機兵!!」

マイとユイの二人は轟機兵を召喚すると

そのまま巨大なナマズへと向かっていき

強烈な一発を当てて地上へと引き摺り下ろしていた

「……これ……本当に僕らの出番あるの?」

「ないならないで楽が出来るからいいんじゃないのか?」

確かに二人の言う通り出番がないほどにマイとユイが活躍しているのだが
そんな簡単に倒せるようなボスではなく抵抗するかのように電撃を放った

「キヤアアアア!!」

機兵はパワーと防御力に秀でてはいるがスピードはメイプルと同じくらい遅く

今の攻撃に反応する事が出来てもそれを躲せるほどの動きは出来なかった

「どうやら出番が来たみたいだな? 超加速! 風の舞!」

「僕も援護しないとダメか……震星杖」

ドレッドはAGIを上げるスキルを使ってその場から消えると

マルクスはそれを援護するように賈☒を呼び出し砲台に変形させ

そこから特大のレーザーを放ち巨大ナマズを撃ち貫く

「神速！こいつでも喰らいな！風霸激嵐弾!!」

そしてその怯んだ隙にドレッドは最高速でナマズの上に飛び

強烈な風の弾丸を放って巨大ナマズを再び地上に叩き落とした

「ええい！トリプルパイル!!」

最後はマイとユイの轟機兵が三発同時発射のパイルドライバーを放ち

巨大ナマズを見事、貫いて無事に勝利を収めた

「やった〜！やりました〜!!」

「・・・あれをやってあんな笑顔を浮かべられるとか怖いんだけど・・・」

「だな・・・流石は楓の木ってところか・・・なんにしてもお疲れ様」

「・・・うん・・・お疲れ様／＼」

一方その頃、他の場所へと向かっていた

ペイン、ミザリー、カナデ、イズのパーティーもダンジョンを発見

そしてその奥にいたボスモンスターとの戦闘を開始していた

「すごい攻撃だね・・・これじゃあ防ぐのだけで精一杯だよ」

「おまけに攻撃すればするほど敵が増えていくとはな」

「どうしますか？どちらにしてもこのままではカナデさんが持ちませんよ？」

「ふふん！こう言う時はお姉さんに任せなさい！龍鳳翼！」

「フェイ！アイテム強化！からのく爆鳳烈羽!!」

イズが放つ爆鳳烈羽の羽根も飛んでいく際にはアイテム扱いとなるので彼女のパートトナーであるフェイのアイテム強化が付与される

それにより爆発の威力が上がった爆鳳烈羽は相手の陣形を見事に崩した

「今です！胡蝶乱舞！」

その隙にミザリーは胡蝶乱舞を使い相手に蝶の幻覚を見せる

なんとか体勢を立て直した四人はここから一気に攻めに転じる

「冥機兵！そしてハイパージャマー！」

カナデは冥機兵を呼び出して乗り込むとハイパージャマーを発動し瞬く間にその姿を消してしまい味方にすらもその姿は見えなくなる

しかし彼が味方の邪魔をしないのは分かっているのだ

その間にペインは敵のボスへと突っ込んでいく

「参番刀！六番刀！」

自身の持っている刀の中で最もスピードに特化した二振りを装備し

ペインは怒涛の連続攻撃で瞬く間にボスのHPを削っていく

しかし流石にボスもそれだけの攻撃をされて距離を開かないわけもなく

上空へと逃げたのだがその瞬間、何者かの攻撃によって真つ二つに切り裂かれた
「残念だけど・・・君の逃げる先で待たせてもらったよ」

その正体とは他でもない先ほど姿を消したカナデであり

その一撃を受けたボスはそのまま消滅するのだった

「ふう・・・最初はどうなる事かと思っただけど案外、バランスがいいね」

「そうですね。イズさんも見事な援護でした」

「それほどでもくこれでメダルもゲットしたけど、どうする？」

「まだ時間もあるし他の場所も回ってみよう」

一方、カスミ、クロム、シン、ドラグのパーティーもボスと戦闘しており

しかもこのチームのボスはなんと二体も相手にしていたのだが

「咬機兵！ネクロ！アーマード・堅牢！」

「赤獅子招来！青狼招来！行くぞ！」

『おつしやああああ!!俺様に任せろおおおお!!』

『雑魚は俺の砲撃で吹き飛ばしてやろう・・・!!』

「おおおおお!! 蛇流絞斬・攻!!」

「オラオラオラ!」

どうやら彼らには数の有利や不利などは関係ないようで

雑魚を含めてボスモンスター達のHPを凄まじい勢いで削っていく四人
その甲斐もあつてあつという間に残ったのはボスの二体だけだった

「とつておきもくれてやる! 龍神の鉞! 四閃爪の槍!」

合体! 怒龍大天斬!」

ドラグは自分の持っていた鉞と槍を合体させて巨大な斧を作り出すと
それを持って大きく振り上げて強烈な一撃を放つ

「うおおおお!! 竜巻怒龍斬!!」

まさに竜巻と見間違うほどの一撃は一気にボスのHPを削りきり
残ったボスモンスターはこれで一匹だけとなった

「これは私も負けていられないな．．．! 武者の腕! 筋肉番長!」

カスミは巨大な腕を召喚すると同時に自分の腕も巨大化させる
そしてその巨大な四本の拳から放たれた一撃は強烈で

残された最後のボスモンスターは跡形もなく粉碎された

((．．．あいつだけは絶対に怒らせたらダメだ．．．))

その光景を見ていた三人はカスミに恐怖を覚えるのだった

最後はメイプル、サリー、ミイ、フレデリカのパーティーで

彼女らが戦っていたのは暴虐状態のメイプルとよく似たモンスターだった

「メイプルは暴虐を温存しておいて！」

「ここは私が正面から相手する！斬機兵！」

「援護は任せて！召喚！スピリットガイスト！」

サリーは斬機兵を召喚して乗り込みそのままボスマンスターへと突っ込んでいく

その間にフレデリカはスピリットガイストを召喚し炎上ダメージを与えるが

すぐに振り払われてしまい思った以上のダメージは与えられなかった

そしてそのまま反撃してくるが四人はそれを躲しミイとメイプルが突っ込んでいく

「私がいる事も忘れるな！大紅蓮斬!!」

「私も行くよ〜！災鬼動！からの〜！拳骨滅法拳!!」

二人からの強烈な一撃を受けたボスマンスターは大きく地面に倒れ込む

そしてもちろんそんな隙を逃すわけもなくサリーがボスマンスターに向かって飛ん

でいく

「ハアアアアア!! クロススラツシュ!!」

シヨーテルから放たれた一撃はボスモンスターをX状に切り裂き見事に倒し切った
「ふう・・・最初はメイプルに似てたから警戒してたけどそこまで強くなかったね？」

「そうだね！これなら他の卵に入っているのも倒してもいいかも！」

「いやいや・・・どう考えても二人が異常なほどに強くなってるだけだからね？」
「それを言うなら私達もだと思いがな・・・」

なんにしてもメダルはゲットしたし長居は無用・・・早く脱出するぞで」

「・・・なんか・・・みんな俺を忘れてとても楽しそうにしてるな・・・
別にいいんだけどさ・・・この暇な状況をどうしろって言うんだよ・・・」

最後は大盤振る舞い

メイプル達がメダルを獲得し拠点へと帰ってくる

その入り口の前でスペリオルが完全に不貞腐れながらみんなを待っていた
「別に忘れられてたからっていいじゃない？」

自分だっていつの間にかボス倒してメダルゲットしてましたし？

みんな楽しそうだなとか思ってたないし？」

「ごめんって！私らが全面的に悪かったから良い加減に機嫌直してよ〜！」
「てかいつの間にかボス倒してたって・・・俺らの苦労は一体・・・」

「それ以前にとうとうスペリオルは

普通のモンスターとボスの区別すら付かなくなっちゃったんだ・・・」

確かにサリーの言う通り

ここにいた全員が苦戦するほどのボスモンスターを

スペリオルはいくら強敵と戦ってきたからといって

それに気づかないまま倒してしまっており完全に区別などついていなかった

言うならば目に付いたモンスターは全て適当に倒してメダルを獲得していたのだ

これには運営も思わず目を背けてしまいそうになっていたがどうか耐えてはいた
それもこれも全て最終日に出てくる例の最強モンスターがいるからだつた

「なんにしても明日でイベントも最終日だ

おそらくは運営も何か仕掛けてくるのは間違いないだろうな」

「だな・・・ぶっちゃけ俺は特に他のイベントと変わらなかつたけど」

「そりゃあアンタはずつと外で暴れてただけだからね!？」

普通はあんな強敵モンスターを相手に暴れていられる集中力なんて無いの!!」

「それ・・・もう俺が明らかに異常だつて言ってるよね?」

「アンタは最初から最後まで異常よ!メイプルと一緒にでね!!」

「なんか知らない間に私も巻き込まれた!？」

そんなこんな馬鹿騒ぎをしている間に夜が過ぎてしまい

いよいよ最終日となった瞬間、イベント最後のギミックが発動した

「なっ!?!あれつて偽メイプル!?!あれが大量に出てきたの!?!」

「うわあく・・・もはや地獄絵図の再来じゃん・・・」

「なんか前のギルド對抗戦が余程、印象に残っているみたいだな?」

「そんな呑気な事、言ってる場合じゃないわよ?アレと戦ったけどかなり強いし

あんな大量に相手をしていたらそれこそ全滅すらあり得るかも・・・」

「そうか？俺は意外となんとかかなりそうな気がするんだけど・・・」
『そりゃあアンタはどうにかしちゃうでしょうよ!?』

「・・・何故か怒られた・・・解せぬ・・・」

流石のスペリオルも全員にこんな事を言われるとは思っていなかったようで
少しだけ悲しい思いをしていたが

とりあえずはあんな量に攻められるわけにはいかなかったので

拠点の洞窟を捨ててスペリオル達は見晴らしのいい高台へと移動した

「さてと・・・ここからならよく見えるな・・・」

「っておいおい・・・なんだありゃ？」

高台まで移動すると何やら巨大な穴が出現しそこから巨大偽メイプルが現れた

しかも出現した直後に咆哮を上げて上空から隕石を降らせる

「イージス！」

「ミカ！クリスタルウォール！」

上空から降ってきた隕石はメイプルとミカの防御によってノーダメージで乗り切っ
たが

問題は肝心の隕石を降らせた張本人である巨大偽メイプルだった

「アレの相手をするにしても小さいのが邪魔だな・・・どうするか・・・」

「それなら雑魚の相手は我々、炎帝ノ国に任せてもらおう！」

「集う聖剣も協力させてもらおう！楓の木はあのデカイのを！」

「うん！それじゃあみんないっくよ〜！」

楓の木は巨大偽メイプルの元へと向かい戦闘を開始する

「サイコゴレム！ガンレックス！」

スペリオルはサイコゴレムとガンレックスを呼び出して

巨大偽メイプルの足止めをしようとするが

向こうのほうが大ききの上でありパワーで押し切られそうになる

「私も手助けするよ！暴虐！」

「影分身！」

「フアントムワールド！」

メイプルも怪物に姿を変えサリーとカナデに数を増やしてもらい巨大偽メイプルに突撃していく

そして他のみんなも巨大偽メイプルに攻撃を開始すると一定のダメージを受けた瞬間に反撃を喰らい

それと同時に再び隕石がメイプル達を襲おうとしていた

「させるかよ！換装！守護天使！ソウルアップ！」

スペリオルは守護天使装備に切り替えるとそのまま隕石へと突っ込んでいく
「モードチェンジ！ストライクバード!!」

そしてその姿を火の鳥へと変えるとその勢いで隕石を破壊する

その間に巨大偽メイプルは翼を生やしてどこかに逃げようとするが

今のスペリオルに追いつけないはずもなくすごい勢いで後を追いかける

するとどうやらメイプルがひっついていたよう都合流したミイとペインが二人を助ける

「どうやら二人共無事みたいだな．．．！それじゃあ最後は大盤振る舞いに行くぜ！

換装！真龍帝！義兄弟の絆！三位一体！星・龍・ざあああああん!!」

「はああああ!!大獄焰斬!!」

「猛虎獣烈覇ああああ!!」

スペリオル、ミイ、メイプルの強烈な一撃を受けた巨大偽メイプルはその翼を失い

地上へと撃ち落とされるとそこからみんなは追撃を仕掛ける

「換装！烈火武者！烈火大鋼！武化舞可の號刀!」

「豪鉄劍刃!」

「機動武神天鎧王!」

スペリオル、ペイン、メイプルの三人は巨大化するスキルと使って

巨大偽メイプルと同等の大きさになるとそれぞれが大技の構えを取る

『爆鳳覇!!』

『真空爆烈破!!』

『輝道天鎧砲!!』

三つの強烈な一撃を受けた巨大偽メイプルのHPは一気に減っていくが

残りミリの時点で止まってしまいそこから再び暴れ出してしまふ

それによりメイプル達の変身が解けてしまふがそこにスペリオルの姿が無かった

「換装!・魔竜!・来い!・ドラグーン!」

声が聞こえた方を見るとそこには上空に飛んでいたスペリオルの姿があり

ドラグーンを呼び出したスペリオルは

そのまま落下して巨大偽メイプルの頭にハルバードを突き刺した

「こいつで……!・終わりだああああ!!」

そしてそのハルバードから凄まじい電撃が放たれて

巨大偽メイプルのHPを見事に削り切り勝利を収めるのだった

「ふう……第八回イベント……これで終わりだああああ!!」

一方その頃、運営側では……

「……あんな必殺技のオンパレード耐えられるわけねえだろうがああああ!!」

「一応はイベント発生するように一定値までHPが残るようにしてたんですけど……」

「もはや焼石に水って感じだったよな……そのイベントも余裕でクリアしてるし……」

「……なんかもう……真つ白に燃え尽きちまつたぜ……!」

「死ぬなあああ!!まだ俺らには修正作業が残ってるんだぞおおおお!!?!」

「これ……次のイベントはしばらく開催出来ない……」

金色の神

第八回イベントが終わってしばらくした頃

スペリオルに一通のメッセージが届いていた

その差出人は他でもない魔王であり内容はこうだった

『闇の世界にて貴様との決着を付ける．．．！』

お前のその意思があるのならば我が元までやって来い！』

「．．．マジで魔王との再戦イベント来ちやったよ．．．」

「おお．．．スペリオルが珍しく落ち込んでるな

これは嵐とかが来てもおかしくないんじゃないか？」

クロムは落ち込んでいるスペリオルを見て珍しいと苦笑いしていたが

彼は分かっていたいなかった．．．

その苦勞をこれから自分もするのだという事を．．．

「．．．他人事みたいに言ってるけど

多分、クロム．．．お前も一緒にいく事になるんだからな？」

「マジで!?!おおう．．．余計な事を言わなきゃよかったな．．．」

「何にしてもイベントはやらなきや損でしょ！」

「それで？その闇の世界にはどうすればいけるの？」

「行く為の道具ならずであるよ」

同じく今回のクエストに参加するサリーはどうすれば闇の世界に行けるのかを尋ねる

それに対してスペリオルはすでに行く方法は持っている事を告げた

そしてその言葉に応えるかのようにサリーの持つている導きの豎琴が鳴り始めた

「なるほどね・・・導きの豎琴って言われてるんだから

何かに導いてくれるのは予想していたけどこういう事だったんだ」

「そういう事だ・・・それじゃあ早速で悪いがそれを奏でてくれ」

「了解」

サリーはゆっくりと優しく豎琴を鳴らしていくと

上空にそれはそれは恐ろしい邪悪な城のようなものが映し出される

そしてスペリオル、サリー、クロム、カナデ、マイ、ユイの六人が

その邪悪な城に向かって飛んでいった

「今回はこの六人でクエストってわけか・・・それにしても魔王か・・・」

懐かしいと思う反面・・・絶対に戦いたくないと思うのが本音だよな・・・」

「そこまで言わせるような魔王って・・・そんなに強かったのか？」

「最初はカナデみたいに魔法を使って瞬間移動とかもするんだけど

変身した後はパワー系でたった一発の波動でHP九割は持つてかれたよ

「・・・よくそんな怪物をやりたてで倒したな・・・」

「流石はスペリオルってところだね

でも今回は再戦って事だからおそろくだけど・・・」

「ああ・・・めちやくちや強くなってるんだろうな・・・」

「うう・・・怖いです・・・」

「いや実際に戦うのは俺だからね!?怖いのは俺の方よ!？」

そんな事を考えていると城の入り口に到着

中に入るとそこには大量のモンスター姿があった

「流石にこの数を相手にして魔王まで辿り着ける自信はないな・・・」

「ならここは私達が相手をするからスペリオルは先に行つて!」

「分かった・・・!後で必ず追いついてこいよ!」

大量の魔物達の相手はサリー達に任せてスペリオルは階段を登っていく

そして最上階の開けた場所に出るとそこで待っていたのは魔王だった

しかも問題だったのはスペリオルが使っている三種の神器の一つ

炎の剣を彼は持つていた

『よくぞできたな．．．！勇者よ！今度こそ貴様との雌雄を決しようぞ！』

「そうだな．．．！今度こそ復活出来ないように倒してやるよ！」

こうして戦いが始まったのだが勝負はスペリオルの方が若干ではあるが押されていた

その理由は相手が炎の剣を使っている影響なのか三種の神器が使えなくなっていたのだ

そして更にはこの城に来てから装備の変更が出来ずバーサル騎士シリーズしか使えず

それが余計に魔王との戦いを長引かせている原因となっているのだろうか

『．．．いつまで遊んでいるのだ．．．！とつとつその男を始末せぬか．．．！』

『?!』
あまりにも決着の付かない二人だったがその瞬間、突如として声が聞こえてきた
二人はその声が聞こえた方を見るとそこには巨大な怪物の姿があった

「ハハハハ！」

『．．．ジークジオン．．．我は貴様の指図など受けん．．．！』

我は魔王！世界の全てを支配する為に生まれた存在！貴様とて例外ではない！！』

『やはり所詮は出来損ないか．．．！貴様が魔王ならばワシは神だ！』

貴様らのような矮小な存在がワシに勝てると思うな!!』

ジークジオンは口からブレスを放つと俺達はその攻撃をまともに受けてしまっ

しかもそのブレスはHPを削るだけではなくさまざまな状態異常まで付与するものだった

「ぐっ?!状態異常まで付与するとかどんだけチートなんだよ!!てかメイプルか!!」

『ぐっ！これしきの事で我が倒されるわけにはいかぬ．．．!』

『うるさい！どうせならば貴様らが潰し合う姿を見ておきたかったが』

この際、仕方あるまい．．．二人纏めてあの世に送ってやるわ!!』

再びジークジオンがブレスを吐こうとするがその瞬間、何者かが攻撃を仕掛けた

「お待たせ！随分とピンチみたいだから加勢させてもらおうよ！」

「スペリオルがピンチになっている瞬間とか初めて見たな

まあこのデカブツの相手は俺達に任せな！」

どうやらサリー達が下にいた魔物達を全て倒してきたようで

ジークジオンの相手は自分達に任せて欲しいと戦い始める

しかしジークジオンの強さは凄まじくサリー達の攻撃を喰らっても

HPが全くと言っていいほど減っている様子がなかった

それを見てスペリオルはもはや魔王と戦っている場合ではないと確信する

「……魔王よ……ここは一時休戦って事にしないか？」

『……何？』

「確かにお前との決着は俺も付けたいところだが今はあいつが邪魔だ

だから俺らと協力してあいつを先に倒さないか？」

『……よかろう……但し協力はしない……』

我がするのは……お前の体を奪い我が物としてから奴を倒す事だ！』

「なっ!？」

魔王がそう告げた瞬間、魔王とスペリオルは合体し金色の姿をした騎士が誕生した

しかし無理やりの合体だった所為なのか

意識がはつきりとしておらず全く動く気配がなかった

『ふん!どうやら合体は失敗だったようだな!これで終わりだ!』

「しまっ!!」

合体が失敗したのだと判断したジークジオンの攻撃によって

スペリオルは塔から落ちていってしまふ

「スペリオルウウウウ!!」

『グワハハハ!!これでもうワシの邪魔をする者は何もおらん!』

後は目障りな貴様らさえ消してしまえばワシの勝利じゃ!」

「……いいえ……残念だけどあんたの思い通りにはならない……!」

スペリオルはこの程度でやられるような男じゃないから……!」

『ほう?ならばその希望と共にこの世から消え去るがいい!』

ジークジオンはトドメのブレスを吐き出そうとした瞬間

驚きのあまり目を見開きその姿を睨に焼き付ける事となった

そう……金色の神・スペリオルドラゴンの姿を

『聞こえたぜ……サリーの声がな』

「スペリオル……!」

『おのれえええええ!やはりワシの邪魔をするかあああああ!!』

スダドアカワールドの神がああああ!!』

『俺の仲間を傷つけようとした事……俺は絶対に許さない!』

闇よ……!滅びろおとおお!!』

スペリオルドラゴンの一撃がジークジオンの体を貫くと絶叫を上げながら消滅して
いく

そして肝心の一撃を放ったスペリオルは地上に落下し

パワーを使い果たしたのかスペリオルと魔王は再び分裂してしまった

『……私の負けだ……』

「……何言ってるんだ？まだ勝負はついてないだろ？」

『いや……あの女の言葉の力があつたにしろ』

貴様の意識の方が我を上回った……だからこそ目覚める事が出来た……

この勝負……私の完璧な敗北だ……』

「魔王……」

『忘れるな……我はいつだってお前の中にあり続ける……！』

油断していると……今度こそ貴様の意識を奪うからな……！』

そう言い残すと魔王の姿も一つの光となりスペリオルの中に入っていく

『スキル・金色の神を取得しました』

金色の神

魔王と融合してスペリオルドラゴンへと進化する

スペリオルドラゴンになるとダメージを受けず一撃で敵を倒せる

効果は30秒 発動できる回数は一週間に一回

「なんだよ……敗北とか言っておきながら負けを認めてねえじゃねえかよ……

負けず嫌いめ……」

こうしてスペリオルは魔王との戦いに終止符を打ち新しいスキルを獲得したのだっ

た

一方その頃、運営側では……

「はい！見事にスペリオルが神になったよ！よかったね！」

「いや現実を見てください？マジでそれが事実になってますからね？」

「なんでだよ!?!なんであそこから復活出来るんだよ!?!」

「普通は魔王に意識を乗っ取られてバッドエンドになるんですけどね……」

「流石は勇者つてところじゃないですか？もう何も驚かない」

「……とりあえずこれから修正作業でもしますか？」

『……異議なし……』

二体の聖機兵

それはとある日の事、金色の神というスキルを手に入れてから

スペリオルにとあるメツセージが届くようになっていた

その内容とはどこかの遺跡に眠りしもう一体の聖機兵を探せとの事だった

「・・・これってクエストって事で間違い無いんだよね？」

「だと思っけど・・・」

場所が書かれてないんじゃないかどこにいるのか分からないかな？・・・」

「カナデはなんか情報とかないか？ガンレックス以外の聖機兵について」

「残念だけど僕の方でもそう言った情報はなかったかな？・・・」

でも一つだけ気になる本があつただけは覚えてるよ」

「気になる本？それってどこにあつたのか覚えてたりするか？」

「僕も見直してみたい本とかあつたし一緒に行くよ」

こうしてスペリオルは何かしら手がかりがあるかもしれないと

カナデと一緒に図書館へと向かいその本についてを調べる事にした

「これがスペリオルのガンレックスについて書かれてる本だよ

これには聖機兵の成り立ちについて書かれているみたいだ」

「成り立ちか・・・あんまり情報は期待出来ないけど

とりあえずは読んでみるとするか」

そこに書かれていたのは二体の聖機兵についての伝説が書かれていた

『この世には聖機兵と呼ばれる伝説の巨人が二体、存在している

一体は人間の代表として存在しもう一体はモンスターを代表として

いずれは戦う運命にある・・・そしてその勝者によって

この世界の運命が決まる事となる・・・

人間の世界か・・・モンスターの世界か・・・』

「なるほど・・・おそらくはこの人間の代表つてのが

俺の持っているガンレックスで間違いないだろうな」

「だろうね・・・そうなると僕達が探さなくちゃいけないのはこっち

モンスターの代表とされているもう一体の聖機兵だね」

「他に何か情報は・・・うん？これは・・・」

スペリオルが見つけたのはもう一体の聖機兵に関する情報だった

なんでもこの聖機兵はガンレックスのように乗り手を必要としないようで

更にはその眠りを守護する為の存在がいるらしい

そしてその存在に関しての絵がその本には描かれていた

「なるほどね……このモンスターを探せば自ずと出会えそうだね」

「だな……それじゃあまずはこのモンスター……ガンキラーを探すか」

こうして情報を得る事が出来たスペリオルはもう一体の聖騎兵を守護するガンキラーと呼ばれるモンスターを探しに向かうのだった

「うーん……空から探すのは良いけど……ここまで森ばっかりだからな……」

正直、この下とかにあつても木々に邪魔されてとてもじゃないが見えないぞ？」

上空からそのモンスターを探すスペリオルだったが特にその姿は見えず

このまま一日が終わろうかとしていた時、不快な音が耳に響いてきた

「ぐっ!?なんだこの音は……!?向こうからか!!」

突如として聞こえてきた音を頼りにスペリオルはその場所まで向かうと

そこでは何やら採掘作業が行われており

更には前に姫を襲っていた悪い騎士達の姿もあつた

どうやら彼らは先ほどまでスペリオルが探していたガンキラーに襲われているようだった

しかしスペリオルが最も気にしていたのはその掘り出そうとしているもの

そう……それはまさしく彼の探していたもう一体の聖騎兵の姿だった

「まさかアイツらが見つけ出しているとはな……」

正直な話、驚きこそしたが……これはこれで好都合だ！ガンレックス！」

スペリオルはガンレックスを呼び出してもう一体の聖騎兵の前に降り立つと

先ほどまで悪い騎士達を襲っていたガンキラー達はもう一体の聖騎兵の中へと取り込まれていく

そして……遂にガンレックスと対を成す存在……ルーンレックスが復活した

『ウオオオオ!!』

「なんて圧力だ……！おそろくパワーはガンレックスよりも上か……！」

だが……これくらいで怯むような俺じゃねえんだよ!!」

古の時代から語り継がれてきた二体の聖騎兵による激突

その衝撃は凄まじく周りにいた悪い騎士達はその余波でやられてしまい

地面に巨大なクレーターが出来上がる

しかし二体はまるでそんな物は関係ないとばかりの戦いを繰り広げていた

そんな中で優勢に立っているのはルーンレックスの方だった

(ぐっ!!マジでなんてパワーだよ……!!)

白金の盾で攻撃は防げてるのに押されていく……!!)

ルーンレックスの掌から放たれる光線は凄まじい威力があり

ガンレックスが盾で防いでもそのパワーで押されてしまうのだ
そして気がつけばスペリオルは崖つぶちまで押し込まれてしまい

「っ!!しまった!!」

そのままガンレックスの重さに耐えきれず

崖は崩落してしまい深い谷のそこへと落ちてしまった

「いつつ……完全にやられたな……」

しかしどうしたもんか……こんなもん空を飛ばないと……」

ガンレックスには空を飛ぶ能力はないのでスペリオルはどうしようかと考えている
何やらガンレックスが恐怖で震えているのが理解できた

「怖いのか?確かにアイツは強いもんなく……マジで何あれ?」

でもな……忘れてないか?お前に乗ってるのはこの俺なんだぜ?

俺はお前を信じてる……だからお前も俺を信じてくれよ……ガンレックス!」

その瞬間、まるでガンレックスがスペリオルの言葉に應えるかのように光を放ち始める

そしてその光が収まるとガンレックスに空を自由に羽ばたく為の翼が生えた

「行くぞー!ルーンレックス!!」

再びルーンレックスの前に立ち塞がったガンレックスは

先ほどのようにパワー負けをしていなかった

復活したガンレックスは更にパワーアップしていたのだ

「これで……終わりだああああ!!」

最後は空高く飛び上がりルーンレックスの額を貫いてその体を両断し
ガンレックスは見事に勝利を収める事が出来た

「はあ……はあ……俺の……勝ちだ……!」

ルーンレックスに勝利したスベリオル

すると残骸となったルーンレックスの中から光が溢れだし

その光がガンレックスの中に注がれていくとその姿が変わった

『聖機兵ガンレックスは真聖機兵ガンレックスへと進化しました』

「真聖機兵……これがガンレックスの新しい姿か……」

『……ルーンレックスの残骸を回収させる……』

あれにはまだ使い道がある……!』

ド根性侍

それはとある日の事・・・ペインは一人で狩りに出掛けていると
そこで一匹の牛・・・

いや牛と言つていいのかすらも分からないモンスターと出会つた

『ぶお〜…ぶお〜…』

「・・・これは・・・モンスター・・・なのか？」

確かにデフォルメが強過ぎてとてもモンスターには思えず

しかもHPバーも見えていないので本当にモンスターではなかった
しかしどうしてこんなところで泣いているのだろうと思つていると
どうやら罫に引つ掛かつたようでトラバサミに足が挟まれていた

『ぶお〜…ぶおおぶおお〜…』

「そういう事だったのか・・・」

随分と悪い悪戯をするプレイヤーがいるものだな」

ペインはそつとその牛を解放してやると

何やらとても嬉しそうにはしゃいでおりペインも嬉しく思つていた

『ぶお〜♪ぶおお〜♪』

「そんなに喜ぶなんてよほど痛かったんだろうね

それじゃあもうあんな罨には掛からないようにするんだよ?」

そう言つてペインはその場から離れていくと

その牛は何故かは分からなかったが後ろを付いてきた

最初は何回か来ないようにしてはいたのだが

何度言つても付いて来てしまうので彼も途中から言うのをやめた

『ぶお〜♪ぶおお〜♪』

(困つたな・・・これじゃあ今日の狩りは出来なさそうだ・・・)

このままでは狩りは出来ないと判断したペインは予定を変更して

どうしたらこの牛が自分から離れてくれるだろうと考える事にした

するとそんな彼の気持ちを察したかの如く後ろの方で爆発音が聞こえてきた

ペインは何事かと思ひ急いでその場所へと向かうと

そこには何やら悪そうな武者型のモンスター達の姿があり森を破壊していた

「どうやら何かのイベントのようだね・・・! 一気に叩くでしょう!」

武者型のモンスターはペインによって一掃されると

何やらボスらしいモンスターが彼の目の前に現れた

『よもやワシの部下を倒すとはな．．．!?!?どうやらよほどの使い手のようだ．．．
だが．．．!?!?この鎧封じの宝玉を使えば貴様など恐るるに足りぬ!』

「なっ!?!?装備が強制的に外された!?!?これじゃあ．．．!?!?」

なんとボスモンスターは鎧封じの宝玉を使って

ペインの使っていた鎧を封じ込めてしまった

これよりペインは装備とスキルが使えなくなってしまう

完全に劣勢に立たされてしまった

そしてボスモンスターの一撃がペインを襲おうとした瞬間

『ぶお〜!』

「なっ!?!?どうして君が!?!?」

何とペインのピンチを救ったのは後ろを付いて来ていた牛であり

彼はボスモンスターの一撃を受けても全くびくともしていなかった

『バカな!?!?我が一撃を受けて傷の一つすら付かないだ!?!?』

まさか貴様は伝説の鎧の一つだとも言おうつもりか!?!?』

『ブモ〜!』

「(ハッ)これは!?!?」

牛は光を放つと一つの鎧の姿へと変わっており

そのままペインの体へと身につけられていった

ユニーク装備・武王シリーズ

武王の兜

VIT+100

武王の鎧

STR+50 VIT+150

「ド根性魂」

武王の籠手

STR+30 VIT+25

武王の脚甲

VIT+25 AGI+30

ド根性魂

HPが30%を下回った時に発動

五分間だけステータスを二倍にしあらゆるダメージを無効にする

その後、HPは半分となる

「まさか牛の正体が鎧だったとはね……だが……！これで戦える！」

『鎧を纏ったくらいでこのワシに勝てるとても思っているのか!』

それが身の程を知らない事だとその体に教えてやろう!!』

ボスモンスターはその強烈な一撃をペインに当てるが

まるで本人はそんな事は関係ないとばかりに突っ込んでくる

『バツバカな!?!まさかダメージを受けていないとでも言うのか!?!』

「いやダメージは受けているさ・・・だが痛くはない!」

思い込めばどんな事も現実になる!だから痛くなんてない!!」

『なっ何を言っているのだ貴様は!?!』

「お前には一生、分からない事だ!封印解除!絶光超!!」

ペインは宝剣・絶光超を呼び出すとその封印を解除する

それと同時にバーニアが展開されそこから凄まじいまでの炎が噴出される

「見せてやろう・・・!これぞ我が必殺の奥義・・・!武王昇光斬!!」

『バカなああああ!?!このワシがこんな侍如きにいいいい!!?!』

ボスモンスターはペインの一撃で一刀両断されて消滅

見事にペインは勝利を収めて鎧を取り戻す事が出来た

「ふう・・・本当に君には助けられたよ・・・ありがとう」

『ぶおー!』

ペインは武王に感謝の言葉を述べる

そこへ何やら急いでやってくる人影があった

『武王く！お前さんは一体どこまで行ってたんや！』

心配したんやで？それじゃあ早く帰るとしよう？』

『ぶお！ぶおぶお！』

『なっなんやて！？お前さんはこいつに付いていくつて言うんか！』

『ぶおぶお！』

『うん．．．そうかそこまで言うのなら仕方ないのう

兄ちゃん！悪いがこいつの事はよろしく頼むで？仲ようしてな？

それとこれもあげるわ！こいつには赤備えの鎧つていうこいつと同じで

伝説と呼ばれている鎧の在処が書かれてんねん！もらつとき！』

「あつありがとう．．．！何から何まで申し訳ない．．．」

『気にせんとき！気難しい性格のこいつを懐かさせただけでもすごいもんやで！

もしかしたらアンタなら赤備えの鎧も見つけられるかもしれへんな！

それじゃあ頑張るや！応援してんで！！』

こうしてペインは新しく武王の鎧を手に入れて

次に探すは先ほどの人物からもらつた赤備えの鎧にするのだった

『．．．いよいよ伝説の若武者が揃ったか．．．
ならば残るは．．．試練の時を待つのみ．．．
果たして彼らは超えられるだろうか．．．』

不思議の鎧

メイプルの今日、やるべき事は何故か虫取りだった

そしてそれに参加しているのは何故かスペリオルであり

本人はどうして自分はこんな場所に居るんだろうと疑問に思っていた

「・・・なんで俺はここに居るんだろうな・・・」

「なんでってスペリオルが暇そうにしてたから

一緒に虫取りしようって言ったら頷いて着いてきたんじゃん!」

「いやそうじゃなくて・・・虫取りで合ってるよな?」

「そうだよ!」

「・・・じゃあなんで周りには大量の虫型モンスターが倒れてるんだ?」

そう・・・彼が疑問に感じていたのは虫取りに協力している事なのだが

問題は何故か彼らの周りには虫型のモンスターが転がっているという事だった

実はメイプルはここで珍しいカブトムシが現れるという情報を聞いてここまで来たのだが

それ以外の虫型モンスターに襲われて全く前に進めていなかったのだ

「それで現状がこれか・・・本当にそんな虫いるのか?」

「分からないけど・・・その出会った人の話では

かなり珍しいカブトムシだったらしくてそれに襲われたらしいよ?

だから私も見てみたいんだ!協力してよ!」

「俺も見てみたいから別にいいんだけど・・・」

問題はそいつがどこにいますかって事だよな・・・」

問題は二人の探しているその珍しい虫がどこにいるのかという事であり

この大きな森を探していたらとても一日そこらでは足りないだろう

せめて目印でも欲しいなと考えていると何やら音が聞こえてきた

「なんだこの爆発音・・・もしかして何かあるのか!」

「行こう!スペリオル!!」

二人は急いで先ほどの爆発が聞こえた方向に向かうと

そこに居たのはおそらくメイプルの話していた珍しいカブトムシと

凄まじく凶悪な顔をした男・叛多亜號業が戦いを繰り広げていた

「マジかよ!あれ虫じゃなくて機械じゃねえかよ!!」

それにあのメチャクチャ強そうなの誰だよ!」

ああもう!なんか色々ツツコミが追いつかねえけど

とりあえずはあいつを止める！メイプル！援護しろ！！」

「了解！」

スペリオルは破牙の鎧を身に纏い叛多亜號業に突っ込んでいく

しかしその一撃はなんと簡単に叛多亜號業に受け止められてしまった

『ほう？まさかこんな場所で破異武立闘に出会うとはな．．．！』

これも因果というやつなのか．．．だが面白い！』

「こいつ．．．！俺の一撃を平然と受け止めやがった．．．！」

見た目と同じくめちやくちや強いな．．．！」

そこから二人は凄まじい格闘戦を繰り広げるが

叛多亜號業の方が明らかに上手でありスペリオルはかなり押されていた

しかし反撃の術はなくこのまま徐々に押されるのを待つだけだった

「グア!？」

「スペリオル!!」

『どうやらここまでのようだな．．．！その女．．．！』

貴様が庇っているその虫を寄越せ．．．！出なければこの男の命はないぞ?』

叛多亜號業に踏みつけられて身動きの取れないスペリオル

そんな中でメイプルは後ろにいる虫を渡すように言われるが

「・・・いついやだ・・・！」

『ほう？コイツの命がどうなってもいいというのか？』

「違うよ・・・！私はスペリオルを助ける事も・・・この子を助ける事も・・・

私はどつちも諦めたりなんてしない！それが私の・・・覚悟！」

『!!』

その言葉を聞いた瞬間にメイプルの後ろにいたカブトムシは輝き始めて
鎧の姿になるとメイプルの体に装着されていく

「鬼神絶大！」

ユニーク装備・大神武兜シリーズ

七星顎刀

STR+300 VIT+150

〔天地激震 七星流弾爆〕

砕巖頑

STR+200 VIT+300

〔痛印大不運砲〕

大神武兜の兜

VIT+250 DEX+150

大神武兜の鎧

VIT+400

「鬼神の守り」

大神武兜の籠手

STR+150 VIT+150

「衝突然」「挟撃碎」

大神武兜の脚甲

VIT+200 AGI+50

天地激震 七星流弾爆

神武兜認証して星々の力を七星顎刀に取り込み放つ必殺技

痛印大不運砲

碎巖頑より二つの竜巻を発生させて相手に継続ダメージを与える

衝突然

頭の角を腕に装着して相手に貫通ダメージを与える

挟撃碎

両腕に角を装着して相手を挟み込むスキル

相手の動きを封じると同時に継続的なダメージを与える
鬼神の守り

スキルと発動すると五分間だけVITが三倍になる

「これって・・・！もしかして認めてもらったって事なのかな？

大神武兜シリーズの装備を身に纏ったメイプルの体は

いつもの機械神を使うよりも体が大きくなっていた

『バカな!?大神武兜の鎧に認められたというのか!?

認めん!そんな事は決して認めんぞおおおお!!』

叛多亜號業はメイプルが鎧を纏った事が気に入らなかつたようで

凄まじい勢いで突撃していくが鎧の防御力に阻まれており

怒涛の攻撃も一ダメージすらメイプルに与える事は出来なかつた

「今度はこつちの番です!神武兜認証!星々よ!私に力を貸して!!」

メイプルが七星顎刀を空に掲げると星々の光が注がれていく

「これで終わりだよ!天地激震 七星流弾爆!!」

『グオオオオオオ!?!?』

メイプル必殺の一撃を受けた叛多亜號業はその威力に耐えきれず壁に激突

見事に勝利を収める事が出来たのだった

「……疲れたく……」

『……ほっほっほ！見事だったぞ？本来の姿をしたワシが倒されるとはな』

「ええ!?どなたですか!？」

突如として後ろから声をかけられたメイプルだったが

明らかにその人物には見覚えがなく一体、誰なのかを尋ねると

『分からぬか？お主と先ほどまで戦っていた男じゃよ』

「ええ!?だつてあんなに凶悪な顔をしてたじゃないですか!？」

それなのに今はすごい穏やかな顔になってますし……おかしいじゃないですか!？」

『まあそこら辺はあまり気にしなくても別に構わん……』

それよりも見事に試練を突破してその鎧に認められた……

よつて今よりその鎧かお主のものだ……おめでどう』

「あつありがとうございます!……あれ?何か忘れているような……」

「いや思い切り忘れてるぞ……!よくも俺を巻き込んでくれたな……!」

「あつ」

一方その頃、運営側では・・・

「・・・めちやくちや気難しい性格にしたんだけどな・・・」

「あいつ・・・作った俺達にすら牙を剥いたよな・・・」

「それを懐かせるとか・・・どんだけだよメイプル・・・」

「いや皆さん？そろそろ現実を受け入れましょう？」

あの鎧を解き放つたのは皆さんですからね？」

「「あい・・・すいません・・・」」

月下の怪盜

それはとある日の事

スペリオルはサリーからとある情報を聞かされていた

それはとある五体の御神体『ハロ』と呼ばれる物の情報だった

「そんな物があるのか・・・で？その話を俺にしてどうするんだ？」

「実はとあるNPCがそのハロについての情報を持っているらしいの！」

それで・・・出来ればスペリオルにもついでにきて欲しいなって・・・」

「メイプルはどうしたんだ？いつも一緒だろ？」

「それが・・・また風邪引いたらしいのよね・・・」

「ああ・・・なるほどな・・・」

メイプルはまた風邪を引いたのかと思いつながら

スペリオルは予定もなかったのでサリーと一緒に行く事にした

そこは何とも言えない大きな町で現代のような光景だった

「・・・本当にこんな場所にその人がいるのか？」

「私の聞いた話ではね・・・問題はどこにいるかだけだ」

『お嬢さん……探している人とは……もしかして私の事かな?』

「どわあ!?!いつの間に!!」

「全く気が付かなかつた……!」

二人の後ろにはまるで中世の貴族のような姿をした男が立つており

その気配の無さと本人が醸し出す胡散臭さが警戒するのに十分な理由だった

「えつと……とりあえずアナタは?」

『私の名はアルサーヌガンダムX……世界一のトレジャーハンターさ』

「トレジャーハンター……確かにハロの情報を知ってそうね」

『ハロ……この世界に五つしかないと言われている伝説にして究極の秘宝……』

トレジャーハンターとしては是非とも拝みたい物だね……』

「そのハロなんですけど……どこにあるのか知ってますか?」

『それならこの先にある博物館に展示されているよ?』

「嘘でしょ!?!」

まさか二人の探している物がそんな場所にあるとは思っておらず

そんな探す必要なんてなかったじゃないかと何やらすごく疲れた顔をしていた

しかしアルサーヌガンダムXはそんな二人に残念な話をする

『確かに展示されてはいるが別に手に入るわけではない』

だがもしも欲しいというのならば・・・私も協力しよう」

「・・・名前から想像していたんですけど・・・」

もしかしてアルセーヌさんって怪盗なんですか?」

『怪盗ではないよ・・・トレジャーハンターだ!』

(胡散臭い・・・)

「・・・とりあえずはこの人に協力するわよ・・・信用出来ないけど」

とりあえずは彼に協力しようと考えた二人はアルセーヌガンダムXの後をついていく

彼は見事な手際で様々な罫や扉を開けていき

あつという間にハ口のある場所まで辿り着いた

「・・・マジで手際だけは本物だな・・・」

それにしても・・・なんかここに展示されている品って

珍しい物が多いけど・・・それにしても使用されていた形跡があるな?」

『ほう? 気づいたかい? 実はここに展示されている品のほとんどは

元々、持ち主が居ただけで悪どい方法で入手されてしまった物なんだ』

「えっ!? それって普通に犯罪じゃないですか!? 良いんですか!?」

『もちろんダメだ・・・だからこそこの展示物達は皆、涙を流している・・・!』

私はそれが……とても我慢ならないのさ……!』

この瞬間に二人はアルサーヌガンダムXと言う男がどういう人間なのかを理解した。彼は世間からどんな風に思われようと宝と呼ばれる物を大事にしようとする人なのだ。

そしてその宝とは最も輝くべき場所で輝いていて欲しいとも……

『とにかくハロは手に入れたし……ここから脱出しようか』

「いや警報なってますけど!? てかいつの間にとったんですか!?!」

そんな事を考えている間にいつの間にかアルサーヌガンダムXはハロを手にしており

しかも先ほどとは違って無理やり手に入れたのか警報が鳴り響いていた

もちろんそれで警察がやってこないわけもなくすごい勢いで取り囲まれてしまった

「どうするんですか!?! どう考えても絶対絶命じゃないですか!?!」

『問題ない……今宵は月が出ているからね……!』

「それ何の理由にもなっていないけど!?! って……この地震は……!!」

地鳴りが聞こえてくるとなんと先ほどまで博物館に飾られていた巨大な像が動き出し

スペリオル達を助けるかのように手を伸ばしてそのまま三人は博物館から脱出

更には博物館に展示されていた品々を元の場所へと戻してしまった

(スゲエ・・・！これがアルセーナガンダムXか・・・！)

『これで私の仕事は終わりだ・・・ハロは君達に託そう』

「ありがとう！・・・ってこれは!？」

ハロを受け取ったサリーは急に光を放ち始めてその装備が変わっていた

ユニーク装備・怪盗シリーズ

Gコン

STR+150 INT+200 DEX+250

「マルチツール」

怪盗のモノクル

DEX+150

「トレジャーマスター」「トラップマスター」

怪盗の白シルクハット

DEX+200 AGI+150

「万能アイテム袋」

怪盗の白タキシード

VIT+100 DEX+250 AGI+200

「ルナ・リフレクターユニット」

怪盗の白マント

VIT+100 DEX+150 AGI+100

マルチツール

用途に合わせて

『ドリル』『ムチ』『マジックハンド』『ビームライフル』

の四つに形態を変化させる事が出来る

トレジャーマスター

100メートルほどのアイテムや宝箱をミニマップに表示させる

また宝箱の鍵を解除する事も可能

トラップマスター

目視出来る罠を発見し解除する事も出来る

万能アイテム袋

インベントリとは別に百個ほどのアイテムを入れられる

ルナ・リフレクターユニット

展開する事で空を飛ぶ事が可能になる

「……なんか怪盗と言うよりは魔法少女って感じだな？」

「……うるさいわね……／＼／＼」

今のサリーの格好はどこかの女兒向けアニメに出てきそうなヒロインであり

それを本人も自覚しているのかとても恥ずかしそうにしていた

『それは私からの一人前と認めた証拠だ

残りのハロも頑張って探し出してくれ』

「はい！」

一方その頃、運営側では……

「スペリオル達がハロ探しを始めたみたいだな……」

「ああ……あの俺達が考えた地獄の最高難易度クエストか」

「……作っておいて何だけどき……本当にクリア出来るのか？あれ」

「……なんだかんだでアイツらならクリアしそうな気がする……」

「」「」「そうだな……」

もはや胃痛を通り越して悟りを開き始めている運営陣であった

愛の為に

久しぶりに二人で狩りをしようという話になったミイとミザリー

そんな中で彼らはとある存在と巡り会う事になった

それはミイが装備している武具をくれた曹操だった

しかし実際に対面した事のあるミイはその違和感に気がついた

(・・・確か私のあつた曹操さんは

こんな感じではなかったような気が・・・)

「ミイ？あの人に心当たりがあるのですか？」

「あつああ・・・だが私の知っているあの人は

あんな青い鎧は纏っていないかつた・・・」

前に曹操に出会つた時は赤い紅蓮のような色をしていたが

今は青いまるで蒼穹のような色をした装備をしていた

『ほう？どうやら違う時間軸の私と出会つたようだな・・・』

ならば貴様らに一つ・・・我が願いを聞いてもらうとするか』

「違う時間軸？まあ世話にはなつたので

お手伝いはしても良いですが・・・」

「いいのですか？今回は狩りをしにきたはずなのですが・・・」

「この前に色々とお世話になったからな」

それに・・・おそらくこれはクエストのはずだからな」

『それでは頼む・・・』

私はとある男と決着をつけなくてははいけないのでな・・・！』

そう言つて曹操は翼を広げてどこから飛んでいつてしまひ

それを見送つていた二人の前に二人の人物が姿を現した

『ほう？曹操が足止めを任せるからどんな人物かと思つたが・・・』

こんな小娘二人とは・・・どうやら見込み違いだったようだな・・・！』

『ええ・・・！彼は私達の事を甘く見過ぎているわ・・・！』

「あれは!?貂蝉さん!?でも姿が少しだけ違う?」

「おそらくは先ほどの曹操さんと同じように違う時間軸という話なのだろう・・・」

しかし一番の問題は・・・あの赤い鎧を纏つた男・・・強い・・・！」

ミイは戦う前から赤い鎧を纏つた男・・・呂布の強さを感じ取つていた

そう・・・時間軸は違うが

それでもかつてスペリオルすらも追い詰めた最強の強敵

今のミイ達で勝てるかどうかも怪しいほどの実力を秘めていた

『さて……これ以上の問答は無用……!』

後は殺し合いの中で……語ろうではないか……!』

「いいだろう……!お前の相手はこの私がしよう……!」

ミイと呂布が凄まじいバトルを開始する中で

それを援護するようにミザリーと貂蟬がバフなどを付与していく

そして回復なども使うのだが技量の差で徐々にミイが押されていく

(ぐっ!?なんと言う力だ……!私の方が押されている……!)

『クハハハハ!どうした!?曹操に託された者がこの程度の実力しかないのか!』

だったらここで終わらせてやろうではないか……!貂蟬!』

呂布の言葉に応えるかのように貂蟬が飛んでいくと

二人の姿が合体していき呂布の姿が禍々しいものへと変わった

『クハハハハ!これこそが最強の力!これこそが絶対的な恐怖!』

俺こそがこの天下において最強の戦士なのだああああ!!』

「キヤアアアアア!!?」

ただ武器を振り回しただけなのにミイとミザリーは吹き飛ばされてしまい

そのあまりの一撃にそれだけでミイ達は勝てないと悟ってしまった

(どうする……?ここから逃げようにもこの強さ……)

おそらく逃げようとするれば後ろから襲われる……!)

『どうやら諦めたようだな?ならばこれで終わらせてやろう!』

滅我大絶壊!!』

呂布は特大の必殺技を放つとミイ達はその一撃を覚悟する

(くっ……!)

私はまだ……スペリオルさんみたいにはなれないの!?)

(こんな時に……スペリオルが居てくれたら……)

二人が諦めてとある男の顔を思い浮かべた時

何かが飛来してきて呂布の一撃を弾き飛ばした

そして二人の前に舞い降りたのは薄紫色をしたハ口だった

「これは……一体?」

ハ口は急に輝きを放つとミイとミザリーの装備が変わっていく

ミイ・ユニーク装備・シーザーシリーズ

シーザーの剣

STR+150 INT+250

シーザーの兜

VIT+200 INT+150 DEX+150

〔仮面装着〕

シーザーの鎧

VIT+250 INT+200 DEX+100

〔獅子のたてがみ〕

シーザーの籠手

STR+100 INT+150

〔獅子の炎〕

シーザーの脚甲

INT+100 AGI+150

仮面装着

仮面を装着して潜在能力を限界まで引き出すスキル
ステータスを五分間だけ三倍にする

f i a m m a f e r o c e d a m o r e

仮面を装着している状態で使う必殺技

相手の三倍の炎上ダメージを与える

獅子のたてがみ

獅子の形をした炎を相手にぶつける

五分間、継続した炎上ダメージを与える

獅子の炎

獅子の形をした装備から炎を噴出する

ミザリー・ユニーク装備・クレオパトラシリーズ

クレオパトラの杖

INT+250

〔祝福の輝き〕

クレパトラの髪飾り

INT+200 DEX+150

〔未来視〕

クレオパトラのローブ

VIT+150 DEX+200

〔愛の守護結界〕

クレオパトラのブレスレット

INT+100 DEX+150

クレオパトラの靴

AGI+100 DEX+100

祝福の輝き

同じパーティーに対してステータスが倍になるバフを付与する

未来視

相手の次に起こす行動を見る事が出来る

愛の守護結界

相手のあらゆる攻撃を無効にする結界を出す

防げる上限は消費するMPで変化する

ミイはどこぞの皇帝のような装備に変わり

ミザリーは古代エジプトにあった妖艶な衣装を纏っていた

「装備が変わった!?だがこれから戦える!!」

「ええ！行きます！祝福の輝き！」

ミザリーがスキルを使うとミイの体が輝きを放ち始め

そして肝心のミイも仮面を装着すると鎧から炎が噴出される

「これで終わりだあああああ！ f i a m m a f e r o c e d a m o r e !!」

『ぐおおおおお!!?!この俺が二度も負けるなどおおおお!!』

ミイが放った特大の炎にやられて呂布は消滅し
見事にミイとミザリーは勝利を収めるのだった

『二体目のハロが出現したしたか・・・これで残りは三つ・・・
果たして彼らは間に合うのでしょうか・・・』

『あの黒き星が降りてくる前に・・・』

王の剣

それはとある日の事、ペインはドレッドと共に狩りをしていた

するとそこで見た事もない球体のモンスター……ではなく白いハ口と出会った

「なんだこりや？モンスター……ってわけじゃなさそうだな？」

「ああ……HPバーが見えないって事は

おそらくNPCの類なんだろうが……一体これは……」

ペインがその白いハ口に触れようとするとその手を掻い潜り

ハ口はまるでついてこいと言わんばかりに二人を見つめていた

「……どうやら何かのイベントみたいだな……どうする？」

「もちろん行くさ……！どんなイベントなのか気になるしね」

二人は気になったのでハ口について行く事にした

かなり険しい道を走っていくとそこには一本の剣が刺さっていた

「……まるで伝説の聖剣って感じだな？」

「いや……どうやらその通りみたいだぞ

この剣の名前……エクスカリバーと書かれている」

「マジかよ!? ゲームでは必ず出てくる最強武器じゃねえか」

「確かに……だがおそらくこの剣は……」

「ああ……伝説の通りなら簡単には抜けないだろうな……」

そう……エクスカリバーを抜く事は出来たのは伝説のアーサーをただ一人

それを考えればこの剣を簡単に抜くのは不可能だと思っっていると

そこへ複数のゴーレムが現れていつの間にか二人は囲まれていた

「どうやら罠……って感じではなさそうだな」

「おそらくはこれを抜く為に必要なウエーブ戦って感じなんだろうな

それでどうするんだペイン? やっぱり剣を抜くのか?」

「当然だ……こいつらの相手を任せても大丈夫か?」

「まあ任せろよ……! シャドウ!」

ドレッドは動けないペインを守るようにゴーレムとの激戦を繰り広げるが

問題はゴーレムが倒しても倒しても数を減らす事が出来なかった

このままではいずれ守るにも限界が来るだろうと言う考えがドレッドの頭の中を過ぎる

それを見ていたペインもどうにか剣を抜こうとするが完全に突き刺さっており

とてもではないが現状では抜けるようなん気配は一切、なかった

(ダメだ……！必ず俺は……！この剣を抜いてみせる……！
それが仲間に応える……！唯一の方法なんだ!!)

ペインの必死に戦うドレッドの信頼に応えようとする気持ちを感じ取ったのか
先ほどの白いハロが光りを放ち始めて先ほどまでのビクともしない気配から一変
勢いよくエクスカリバーは抜き放たれてペインの姿が光り輝く

ユニーク装備・聖剣王シリーズ

エクスカリバー

STR+400 INT+200

「エクスカリバー」

聖剣王の兜

VIT+200 DEX+150

聖剣王の鎧

VIT+250 DEX+100

「王の力」

聖剣王の籠手

STR+150 VIT+100

聖剣王の脚甲

VIT+150 AGI+100

エクスカリバー

相手の防御力を無視し能力を無効にする攻撃を当てる

王の力を使用して使うと三倍の威力になる

王の力

五分間、全てのステータスを二倍にし

ありとあらゆる状態異常を無効にする

「これがエクスカリバーの力か……！」

待たせたなドレッド！王の力！」

ペインがスキルを発動すると光り輝く王冠が乗り

鎧にとても綺麗な水晶色をした装飾が付与される

「これで終わりにする！エクスカリバアアアア！」

ペインの強力な一撃はゴーレムの再生能力を無効にし

そのまま全てのゴーレムを消滅された

「ふう……随分と遅かったんじゃないの？」

「すまない。思った以上にこれが抜けなくてな

どうやら鍵は……この小さなNPCだったらしい」

「なるほどな……こいつに認められない限りは

あの剣を抜く事は出来なかったってわけだ……先に教えて欲しいもんだぜ」

『それじゃあいくらなんでも試験にならないだろ?』

「おわっ!?!」

ドレッドはいきなり声が聞こえてきて振り返ると

そこには緑色の鳥をしたNPCが木の上にいる

敵かと思つて武器を構えたがどうやら敵ではないようだった

『その聖剣は王にしか所持する事を許されてはいない

だからこそ本当にその資格があるのかを試す必要があつたんだよ

そして……その為の審査役が俺とそのハ口だったってわけさ

まあハ口に認められたお前ならもう大丈夫じゃないのか?

さてと……それじゃあ褒美としてハ口とこいつをやらなとな』

そう言つて鳥が光を放ち始めるとドレッドの装備が変わつていく

ユニーク装備・森狩人シリーズ

エレメントアームズ

INT+250 AGI+200

「クワイエットゲイル」

森狩人の帽子

VIT+100 AGI+150 DEX+150

〔狩鷲ロクサス〕

森狩人の服

VIT+200 AGI+250

森狩人の手袋

INT+100 AGI+200

森狩人の靴

AGI+200 DEX+150

クワイエットゲイル

三本の風を纏った矢が必ず相手に命中する必殺スキル

狩鷲ロクサス

森狩人の装備を鳥型支援メカイグルに合体させ周囲を搜索するスキル

相手に突撃させてダメージを与える事も可能

「弓かよ・・・俺は使った事なんてないんだけどな・・・」

『それが装備を渡してやったやつに言うセリフか!？」

まあいい・・・とにかくそれはお前らに渡したからな!

後は・・・滅びの時までにハ口を集めきっておけよ！」
「滅びの時？」

ペインの疑問に答える事なく緑色の鳥は消えてしまい
残された二人は滅びの時が一体、何なのか・・・
それがどういったイベントなのかを考えるのだった

『信頼のハ口が見つかった・・・残るは勇気と友情・・・
果たして彼らは見つける事が出来るでしょうか・・・
いえその前に・・・私も探さなくてはなりませんね・・・救世主を・・・』

騎士エピオン襲来

メイプル達がハロというNPCを見つけたという話を聞いてそれについての情報を集めていたスペリオル

するとどうやらミイとペインも別々のハロを見つけたらしく残されたハロは二体だけだという情報を得る事が出来た

「問題はその残る二つのハロがどこにあるのかって話なんだよな．．．一つは有名な海賊が盗んでどこかに隠したって事だけは分かったけど

問題なのは最後の一つ．．．これだけ何の情報もないんだよな．．．残念ながらスペリオルが得た情報の中には

ハロの具体的な場所については全くと言って良いほどなく

しかも一体に関しては本当に何の情報すらもなかった

「こんな中でハロを探すなんて無理だよな．．．」

他にどこかで情報を集めたりとか出来ないかな．．．」

そんな事を考えながら歩いていると

黒いフードを被った何者かがスペリオルの前に立ち塞がった

「……お前……何者だ？」

『……名乗る名はない……』

だが……貴様の敵なのは……間違いない……!』

そう言つてフードの男はスペリオルすらも捉えきれない速度で背後に回り込んできた

そしてそのまま姿を消していったのだがここでスペリオルは違和感に気がついた
スキルの換装で使えない装備があると画面に表示されており

慌ててインベントリを確認すると

「なっ?!嘘だろ?!守護天使シリーズが使用不能になつてる!？」

何故か守護天使シリーズが使用不可能にされており

インベントリから取り出してみるとボロボロに破壊されていた

一体何が起こつたのか分からなつたが原因はたつた一つだけだつた

「あのやろう……!あの一瞬で何かしたのかよ……!？」

とにかくスペリオルはこの状況はまずいと思い

一度、ギルドに戻つてイズに鎧の状態を見てもらう事にした

「うゝん……これは壊れたというよりも呪われた感じが妥当かも……」

「マジかよ……それじゃあ何かしらのイベントがあるつて事だよな

怪しいのはさっきのフードの男か・・・

おそらくが探さなくても相手から来てくれるだろうけど・・・」

「問題はこの装備じゃ戦えないって事よね・・・」

実はフェイのイベントをやっている時に

守護天使の情報を聞いた事があったから

もしかしたらそこにヒントがあるかもしれないわ」

「なるほど・・・それじゃあそこに向かってみるとするか」

スペリオルはイズの情報を頼りにその場所へと向かってみる事にした

するとその場には確かに守護天使についての情報が書かれていた

そこには守護天使は元々、二人の兄弟だったらしいのだが

兄が邪悪なる神によって捕まってしまうだけが残されてしまったらしい

そしてその弟は今も天界を守護しているとの事だった

「・・・弟・・・つまり俺が使っているのはその弟の鎧ってわけか

待てよ・・・それだったらその兄っていうのは一体誰なんだ？」

『・・・それはお前もあつた事のある男だ・・・』

「っ!?!誰だ!?!」

突如として声が聞こえてきて振り返るとそこには白い羽が生えた少年が立っていた

初めてあったはずなのに何故だかもっと前から知っているような気がしたスペリオル

するとそんな驚いているスペリオルの横にゆっくりとその少年は向かった

『・・・俺はこの壁画に描かれている二人の天使・・・その弟だ

そして兄は・・・お前をここに誘った・・・フードの男・・・』

「・・・なるほどな・・・通りでこの守護天使の鎧に詳しいわけか

で？お前が俺の前に現れたって事はその兄を取り戻して欲しいって事か？」

『ああ・・・兄を正気に戻す事が出来れば・・・おそらくあの邪悪なる神

あれを封印する事が出来るはず・・・力を貸してくれ』

「むしろ力を貸して欲しいのはこっちなんだけど・・・

まあいいや・・・それじゃあよろしく頼むぜ」

『ああ・・・それじゃあ俺の力をお前に授けるとしよう・・・』

天使の少年が光を放つと守護天使シリーズが光を放ち進化を始める

ユニーク装備・守護大天使シリーズ

聖剣ツインバスターソード

STR+600 AGI+400

『破壊不可』『ソウルアップ』

守護大天使の兜

VIT+150 AGI+130 DEX+120

『破壊不可』『守護大天使の加護』

守護大天使の鎧

VIT+250 INT+150 AGI+150

『破壊不可』『守護大天使の翼』

守護大天使の籠手

STR+170 INT+150

『破壊不可』

守護大天使の脚甲

VIT+150 AGI+170

『破壊不可』

守護大天使の加護

あらゆる状態異常を無効にし

範囲内にいる相手のバフを解除する

守護大天使の翼

発動すると背中に翼が生えて空を飛べるようになると同時に

AGIが二倍になる

「おお!!装備が進化した!!元の状態に戻るだけかと思っただけど

まさかここまでしてもらうなんてな・・・って事はもしかしなくても・・・」

そう・・・逆を言えば相手はそれだけ強いという事の証明でもある

これは本格的に覚悟を決めなくてはならないと思っっていると

そこで殺気を感じ急いで振り返ると例のフードをした男が立っていた

『・・・やはりここに来ていたか・・・』

「まあな・・・アンタの弟の力を借りて呪いは解かせてもらったぜ!

ついでのアンタに掛けられている悪い呪いも俺が解かせてもらう!」

『良いだろう・・・!ならばこの騎士エピオンが相手をしてやろう!』

そう言つてフードが剥がされるとそこには赤い鮮血のような鎧を纏い

目に見えるほどの邪悪なオーラを放つ騎士の姿があつた

「行くぞ・・・!」

『ああ・・・!』

こうして今、二人の守護天使の戦いは始まろうとしていた

鎧闘神V S 鎧闘神

いよいよ始まってしまったスペリオルVSエピオンの戦い

二人の力はほとんど拮抗しておりスペリオルも呂布以来の苦戦を強いられていた
「ちい！まるでこっちの動きが先読みされているみたいだな！

しかもあの大剣の攻撃と蛇腹剣の攻撃のバランスが絶妙なのが腹立つ！」

『どうした？守護天使の称号を持つ者がこの程度なのか？』

「アンタが強すぎるんだよ!!」

てかアンタだって元はすごい守護天使なんだろうが!?

そんなアンタと比べたら俺は弱い方だったの!!」

『ならばここで終わるがいい・・・！守護天使！』

「それだけはごめんだっての!!」

スペリオルが苦戦を強いられている一番の理由は

相手が使っているそれぞれ特徴の違う武器

それが全ての距離からの攻撃を防いでいるのだ

だからこそスペリオルも中々、攻めきれずにいたが

先ほどからの攻防でようやく攻め手が見えてきた

(確かにあの蛇腹剣の攻撃が鬱陶しくはあるが)

近距離戦から二刀流の俺の方が上だ！)

己の有利な状況へと持っていく為にスベリオルは突撃し

エピオンとの接近戦に持ち込むと彼の持っていた大剣を弾き飛ばし

そのままエピオンを十字に切り飛ばした

『ぐは?!』

「はあ．．．はあ．．．！俺の．．．勝ちだ．．．！」

『．．．確かにお前は強い．．．！』

ならば私も．．．全力で相手をしよう．．．！ソウルアップ！』

「何っ?!」

エピオンはソウルアップを使うとその体が巨大化していき

黒く禍々しい巨人へとその姿を変えた

スベリオルはまさか自分と同じスキルを使うとは思っておらず

それに驚いているとエピオンの拳が飛んできて間一髪その攻撃を躲す

『さあ．．．！貴様も鎧闘神となれ．．．！』

そしてどちらが本物か．．．勝負をつけるぞ．．．！』

「どうやら本当に戦いは避けられないみたいだな．．．！ソウルアップ！」

スペリオルもソウルアップを発動すると

装備が進化した影響なのか鎧闘神の姿が変わっていたが

今の彼にはそんな事を気にしている余裕などなかった

『いざ尋常に．．．勝負だ！』

「お前の呪縛．．．俺が解く！」

鎧闘神同士の戦いは周囲を破壊するほどのぶつかり合いであり

もはやフィールドが壊れてしまうのではないかというほどだった

これには流石にこのイベントを考えた運営陣も悲鳴を上げていたが

戦っている当人達はそんな事を気にしている余裕などなく

彼らの頭の中にあるのはどうやって相手を倒せばいいのかだけだった

（ぐっ！? さっきの人型で戦っていた時とは違ってパワーが段違いだ．．．！

残るはスピードで押し切るしかないんだが．．．

あの先読みをどうにかしないと．．．！）

スペリオルが苦戦を強いられていた理由は相手がまるで未来を見ているかのような

先を読む能力が高く攻撃と防御に全くと言っていいほど隙がない事だった

しかも鎧闘神になった事でパワーの優劣も今は変わってしまったており

エピオンの方が力が強く打ち合いになれば確実にスペリオルの方が負けるだろう
つまり現状ではスペリオルが優っている部分は何もないのだ

(だがそれならどうして向こうはすぐに決着をつけないんだ?)

もしかして・・・あの先読みの能力には制限があるのか?)

確かにスペリオルの考えている通りエピオンは能力を使っているにも関わらず
決定的な部分でしか能力を使っておらず攻撃が当たる瞬間も少なくはなかった
先読みの能力があるのならそれを使わない手はないはずなのである

「・・・そうか！その先読みの能力にはインターバルが存在するののか！」

だったら・・・！相手の予測を上回るだけの連撃を浴びせればいいだけだ！」

ウイングは白い光の輝きを放ち始めると目に見えないほどの速度で攻撃を始める
エピオンも能力を使ってその攻撃を見切っている様子だったが

やはりインターバルが存在するようにで最初の数回しか躲せず

徐々に攻撃が当たるようになっており装甲に罅が入っていく

『バカな!?!同じ鎧闘神なのに・・・この私が・・・負ける・・・だと!?!』

「これで終わりだ！いい加減に目を覚ましやがれえええええ!!」

そして最後の一撃がエピオンの体を切り裂くと同時に巨大化は解けて

彼の被っていた兜が壊れるとその素顔が明らかとなる

「なっ?!こいつつて前に戦った事のある電光騎士!?!」

『うう・・・私は一体・・・何をしていたんだ・・・?』

『・・・どうやら正気を取り戻したようだな・・・兄さん』

『ヒイロ・・・そうか・・・私は長い間、バロックガンの呪縛に囚われていたのだな
そして・・・目の前にいる新しい守護天使が我らを救ってくれたのか』

呪縛から解き放たれた守護天使の兄はゆつくりとスペリオルに近づいていく

『改めて礼を言おう・・・私はミリアルド・・・』

バロックガンからの呪縛から解き放ってくれた事を感謝する

これからは私も君の力として共に戦わせてくれ』

そう告げるとミリアルドの手から光が放たれスペリオルの中に入っていく

しかしてつきりスペリオルは新しいスキルを得られるかと思っただが

それらしいアナウンスはなくなっただのだろうと思っっていると

『その力は私の中にあつた鎧闘神の力だ』

いずれバロックガンと戦う時に必要となるだろう』

「なるほど・・・この光が本当の力を発揮するのはその時つて事か

まあありがたく受け取らせてもらうよ・・・それじゃあな」

『・・・どうか君に神の加護があらん事を・・・』

『・・・エピオンが敗れたか・・・だが封印の場所は突き止める事が出来た・・・
いよいよ我が地上を支配する時が来たようだな・・・!』

月の機甲神

守護天使シリーズが進化した後

スペリオルは再びハロの情報を探そうとした時だった

公式からメツセージが届きそれを確認すると

そこにはマップに目印だけが書かれており

何故か文字は書かれていない謎のメツセージが届いた

「・・・一応は公式からのメツセージだよな？」

だとしたら行っても問題はないかな？」

スペリオルはそのままマップに書かれた場所に向かう事にした

するとそこには何やら神殿があり

そこに立つと見慣れた場所に飛ばされていた

「ここは・・・確か前にエルガイヤーを貰った・・・」

『・・・よく来たな・・・戦士よ・・・』

「アンタは・・・確か薔薇騎士か・・・」

そこに居たのはかつてエルガイヤーをくれた薔薇騎士だったが

何やら様子がおかしくスペリオルは何があったのだろうかと思っていると

『君はかつて倒した・・・ジークジオンという怪物を覚えてるのか?』

「ジークジオン? ああ・・・そう言えばそんな奴も倒したな」

そう・・・かつてジークジオンと呼ばれる怪物

それを戦うクエストがありスペリオルはそこで

金色の神であるスペリオルドラゴンへと進化を果たした

それが一体、何の関係があるのだろうかと思っていると

『実はそのジークジオンの怨念が出現するようになった・・・』

そして今・・・その怪物はとあるエリアで暴れ続けている』

「マジか・・・手応えがあったから倒したと思ったんだけど・・・」

まあ運営が復活させたんだろうなく・・・てかボスの使い回しって・・・」

『そこで・・・君に討伐してもらおうと思つてここに君を呼んだのだ』

「そうは言われてもなく・・・今はあれを使えないんだよなく・・・」

金色の神はその強すぎるスキル故に制限もかなり厳しくなっている

特にインターバルに関してはとて長く前のクエストで使つてしまい

今のスペリオルは金色の神を発動する事は出来なかつた

『安心したまえ・・・その為にとある物を用意させて貰つた』

「とある物？」

『ああ．．．今からその場所に案内する．．．ついてきたまえ』

薔薇騎士はそう言つてスタスタと歩いて行つてしまひ

スペリオルは急いでその跡をついていくと倉庫のような場所に辿り着いた

そして薔薇騎士が何かの端末を操作すると扉が開かれていき

そこから現れたのはエルガイヤーによく似た白い機甲神が立っていた

『これは月の機甲神．．．アルテイヤー．．．』

かつての戦闘で大破してしまひ長らく修理を続けていたが

つい先日、ようやく修理が終わつてな．．．これを君に渡そうと思つていたんだ』

「アルテイヤー．．．これも同じ機甲神つて事は．．．」

『そうだ．．．このアルテイヤーが合体する事で

ガンジエネシスは初めて本来の力を発揮する

その力ならばジークジオンの怨念も消滅させる事が出来るだろう』

「ガンジエネシス本来の力．．．!」

ただでさえボス戦では最強の力を誇るガンジエネシスだったが

なんと薔薇騎士の話ではその力はまだ全力ではなかったらしい

しかしこのアルテイヤーが合体すればガンジエネシスは本来の姿となり

その力ならばあのジークジオンを倒せると彼は考えていたようだ

『さあ・・・今こそ本当の輝光合身をするんだ!』

「ああ!エルガイヤー!輝光合身!」

スペリオルはエルガイヤーを召喚し輝光合身と叫ぶと

他の五体の機甲神が召喚されそれに応えるようにアルテイヤーも飛んでいく

そしてそれぞれが各部位へと変形、合体し

最後にアルテイヤーが背中に装着され大きな翼となる

「これが本当のガンジエネシス・・・!」

確かに見た目だけじゃなくパワーも凄じ上がっている・・・!」

『今のガンジエネシスならば光を超えた速度を出せるだろう』

ジークジオンはこの場所で今も暴れているらしい行つて来てくれ』

「ああ・・・!こいつで最後の決着をつけてくるぜ・・・!」

そのままスペリオルは薔薇騎士が記した場所へと向かった

その後ろ姿を見ながら薔薇騎士はかつていた弟の姿を思い出していた

『どこだアアアア!?どこにイるううううう!!??』

「うわぁ・・・めっちゃくちゃ暴れてるじゃん・・・」

もうあれは理性とかない感じだな・・・」

完全に理性を無くしモンスターとなっていたジークジオンは

もはや目につくものを壊すだけの存在となっており

おそらくその恨みを向けている相手は間違いないくスペリオルだろう

「おい！お前の探している相手はここにいないぞ!？」

『見つけたああああ!!見つけたゾおおおお!!』

貴様だけハハハハデ殺しテヤルウウウ!!』

「本当に何の理性もない怪物になってるな・・・!」

だったらここで俺が引導を渡してやる!」

本来の姿となったガンジエネシスはまるで太陽のような輝きを放つと

その輝きがジエネシスブレードへと集まっていく

そしてその輝きはモンスターとなったジークジオンの体を溶かしていく

『ナンダこの光ハ!!我が体がトケテいくダトおおおお!!』

「消え去れええええ!!」

『がアアアア!!?』

ジエネシスブレードの一撃を受けたジークジオンは

そのまま光に飲み込まれて消滅しもはや怨念の欠片すらも残っていないかった
スペリオルはもう二度と復活しない事を祈りながらその最後を見届けたのだった

トレーズ君臨

スペリオルがジークジオンの怨念を倒し終えた翌日

サリー、カナデ、クロム、マイ、ユイの五人に

謎のメッセージが届きみんな同じ場所が示されていた

しかもその場所は前にも五人が行った場所だった

「……まさかまたここに来る事になるなんてね……」

五人がやって来ていたのは

かつて伝説の武具についてを教えてくれた木の精霊の場所だった

『よくぞ来てくれた……実はお主達にとある話があつてな……』

「話って一体何なの？」

『実はオズワルドと呼ばれる集団が突如として現れてのう……』

その者達がこの森に対して侵攻を始めたのじゃ……』

「オズワルド……確か前にもあつた事があるかも……」

そうか……あの時、スペリオルが戦っていた仮面の騎士だ！」

「スペリオルが戦った事のある相手か……」

それを聞いたらなんか戦い気が失せるな．．．」
「でも気になる相手ではあるよね？」

とりあえずは偵察だけには行ったほうがいいんじゃないかな？」
カナデの提案でサリー達は偵察だけをしに向かう事にした
するとそこにはかつてサリーも見た事のある機兵の姿があった
しかしその機兵の横に立っている男だけは見た事がなかった

「あの仮面の騎士じゃない．．．一体何者？」

「よく分からないが．．．」

とにかくあいつらのリーダーである事だけは間違いないな
どうする？間違いない戦いになったら機兵戦になるぞ？」

「それじゃあ私達が先に行きます！轟機兵!!」

「僕も行つてこようかな？冥機兵！」

マイ、ユイそしてカナデの三人は機兵を召喚して彼らの目の前に立つたが
何故か男は慌てる様子はなくかなり冷静な顔をしていた

三人はどうしてなのだろうと思つていと突如、横から攻撃された

『トレーズ様を傷つける者は誰であろうとも許さない!』

『私達、双騎士レディ姉妹が貴方達のお相手をしてあげましょう．．．!』

「アレって前にスペリオルが破壊したはずの機兵!？」

「なんでアレがまたここにいるのよ!？」

「それは分からんが完全に三人は足止めされちまったな

どうする?ここで撤退するか?それとも俺達であいつの相手をするか?」

確かに今回の目的はあくまでの偵察なので戦う意味などない

しかしまだ彼の実力を見たわけではないので出来れば戦いたいと考えていた

そしてサリーが下した決断は・・・戦う事だった

「ここは戦おう・・・!相手の実力は把握しておかないと・・・!斬機兵!」

「それじゃ俺も召喚させてもらおうとしよう・・・!咬機兵!」

サリーとクロムはそれぞれ機兵を召喚して男の前に降り立つと

男は例の機兵に乗り込んでまるで中世の騎士かのように槍を構える

『私の名はトレーズ・・・そしてこれが私の愛機・エレガントールギス・・・』

以後、見知りおいてもらおう』

「敵を相手に名前を名乗るなんて・・・随分と礼儀正しいんだな・・・」

『決闘の前に名を名乗るのは騎士として当然の事・・・』

では始めさせてもらおう・・・私達の決闘を・・・!』

「なんか感覚が狂いそうになるけど勝負は勝負!」

サリーは速攻でエレガントールギスに突っ込んでいくが

まるでトレーズはダンスでも踊るかの様に華麗な動きで攻撃を躲していく
それを見かねたクロムも一緒に攻撃を始めるのだが

二対一でもトレーズは全く苦ともせずに二人を圧倒する

(この男……！本当に只者じゃない……！)

下手したらスペリオルが戦った仮面の騎士よりも強いかも……！)

『どうしたのかね？まさかその程度で私の命を狙っていたわけではあるまい？』

だが……私もそこまで暇ではないのでね……一気に決めさせてもらおう……！』
[!:]

エレガントールギスは急に速度を上げて二人を攻撃してくる

もはやその動きは目で捉える事が出来ず二体の機兵はボロボロになっていく

それでもはや完璧に立てなくなるほどのダメージを受けた機兵は消えてしまい
残されたのはサリー、クロムはエレガントールギスの前に放り出されるが

何故かトレーズは追撃してこようとはしてこなかった

『もはや勝負はついたようだ……レディ……君達も撤退したまえ』

『はっ！』

気がつけばマイ、ユイ、カナデの方も機兵がボロボロにやられており

デスこそしていないが完全に自分達の敗北だとサリー達に語っていた
そしてそのままトレーズ達はその場と後にし

残されたサリー達はボロボロになった機兵を見ていた

「ここまでボロボロにやられるとはな・・・」

こりやあこのクエストはもう続けられないかもな・・・」

「いや・・・もしかしたらこれ自体がイベントなのかもしれないよ？」

そうでなければ僕達を見逃す理由が彼らにはないからね」

「つて事はもしかしてこの後で何か来るんですか？」

そんな風に考えているといつの間にかボロボロになった機兵の前に

四人の老人が立っており何やら色々と調べている様子だった

『おお・・・随分と派手にやられたものじゃのう・・・』

まあ相手があのオズワルドならば仕方のない事か・・・』

「爺さん達・・・もしかしてこれを修理出来るのか？」

『残念じゃがここまでボロボロになっておつては修理は出来ん・・・』

じゃが・・・この残骸を使って生まれ変わらせる事は出来るじやろう・・・』

『ならば君達の面倒は私が見るとしよう・・・』

「!?いつの間にな!?」

『私の名は啓示騎士ガンダムエックス・・・』

君達を強くする為にやって来た・・・使者だ・・・』

新生アルガス騎士団

「啓示騎士？私達を強くするって一体……」

『君達はまだ自分達の持つている武器の力を真に引き出せてはいない

それを引き出すための試練を用意した……ついてきたまえ』

エックスはサリー達とある場所へと連れていった

そこには四つの扉があり

それぞれがトラランプのマークが刻まれていた

『この奥に君達が越えなくてはならない者達がいる

そしてその試練を超えた時……君達は新たな力に目覚めるだろう』

そう言つてエックスは呪文を唱えようと扉が開かれる

五人はそれぞれ扉の中に入っていくとそこには石像が置かれていた

サリー達は一体何だろうと思つていると

急に目の前にあつた石像が光り始めてポロポロと表面が崩れていく

『初めまして……私はシャッフル騎士団の一人

剣士ローズガンダム』

『俺様は闘士マックスガンダムだ!』

『オイラは武道家ドラゴンガンダムだぜ!』

『・・・重戦士・・・ボルトガンダム・・・!』

『同じ騎士団を名乗る者として・・・』

私達があなた方の試練を務めるといたしましょう・・・!』

剣士ローズガンダムはカナデと

闘士マックスガンダムはサリーと

武道家ドラゴンガンダムはクロムと

重戦士ボルトガンダムはマイ、ユイとの戦いを始める

しかしこの試練は思った以上にちゃんと編成を考えられていた

「まずいね・・・遠近どっちを攻めても崩れる隙がないね・・・」

剣士ローズガンダムと戦っているカナデは攻め切れずにいた

というのもローズガンダムは剣士ではあるのだが

遠距離武器も持っているのだからどんな距離でも戦える万能型なのだ

逆を言えばカナデにとってはとても攻め難い相手の一人でもある

『オラオラオラ! どうしたどうした!? こんなんじゃないやねえだろ!』

(ぐっ?! 私よりも動きが早いし小回りも効く……!)

接近戦だと圧倒的に不利だけど振り解けない……!

闘士マックスガンダムと戦っているサリーは超近距離での戦闘を行っているのだが

手数も速度も圧倒的に向こうの方が上でありサリーは苦戦を強いられていた

しかも距離を開こうとしても相手はピツタリと自分にくっついてくるので離れられない

『オイラの動きを捉える事が出来てないっすね!』

いくら盾が丈夫でも使い手はそんなでもないっすね!!』

「ちい……これだから早い相手は好きじゃないんだよ……!」

つか空中を縦横無尽に飛び回るとか流石に卑怯じゃないか!』

武道家ドラゴンガンダムは拳法の使い手という事もあり

部屋を目一杯使った動きでクロムを翻弄しており徐々にダメージが蓄積されていく

しかし今のクロムには彼を捉えるだけの力はないし何よりも問題なのは

盾や短剣よりも相手の棍棒の方が射程が長く攻撃を当てられない事だった

『又ウウウウン!!』

「すごい力……！当たったら不味そうだよ……お姉ちゃん」

「そうだね……でも近づかないと攻撃を当てられない……！」

重戦士ボルトガンダムはまさにその名前に恥じないだけ力を持っており

近づけばおそらく一撃で粉碎されるのは目に見えているのだが

逆にそれは勝機を逃すという事でもありマイとユイは覚悟を決める事にした

「さてと……僕も覚悟を決めた方がいいかもね……！」

フレアアクセル……！」

『剣士の私に真つ向勝負を挑むとは……血迷いましたか!?!』

ローズガンダムは一気に近づいてきたカナデに向かってレイピアを突き刺したが

手応えがなく幻影だった事に気がついたがもう既に遅かった

「これで終わりだよ！ファイアボール！」

『ぐっ!?!』

懐に入り込まれたローズガンダムはカナデの一撃を躲し切れず

そのまま魔法を受けて吹き飛ばされた

「こうなったらもつと手数を増やすだけ……！ 臆！ 影分身！ 超加速！」
『数が増えた!? おもしれえ! その勝負を受けてやるよ!!』

サリーは影分身と超加速で更に速度を上げて再びマックスガンダムに攻撃する
向こうもそれに対抗して手数を増やすのだが残念ながらサリーの方が上手であり
徐々に押されていきとうとうマックスガンダムの方が押し負けた

「これで終わり! トリプルスラッシュ!!」

『ゴア!?!』

最後はサリーの渾身の一撃を受けてマックスガンダムは膝をついた

「こうなったら……！ ネクロ！ 堅牢！」

『盾を大きくしただけじゃオイラには勝てないっすよ!?!』

ドラゴンガンダムはネクロが盾と合体して巨大化したとしても

自分の攻撃を受け切ることなんて出来るはずもないと考えていたが

クロムは攻撃を受け止める為にネクロを合体させたわけではなかった

「そこだ! シールドバッシュ!!」

『何!?! どおおおお!!?!』

クロムの考えていた作戦とはネクロを合体させる事によって

盾での攻撃範囲を大きくし

確実にドラゴンガンダムに一撃を当てようとしていたのだ

そしてそれは見事に成功しドラゴンガンダムは壁に激突した

「いくよお姉ちゃん！」

「うん！ダブルスタンプ！」

『又ウウウウウ・・・!?!』

二人の強力な一撃を簡単に受け止めるボルトガンダムだったが

明らかに先ほどよりもパワーが上がっている事に気がついた

実は二人とも攻撃を当てる前に決戦仕様を使ってSTRを上げていたのだ

「ハアアアアア!!」

『グオオオオオオ?!?!』

最後は二人の一撃にボルトガンダムは耐え切る事が出来ず

そのまま顔面にくらい地面に倒されるのだった

そして五人が見事に試練をクリアすると

五人の装備が進化していた

サリィ

導きの竖琴↓導きのシヨートル

砂漠シリーズ↓魔神シリーズ

導きのシヨートル

全てのステータス+300

ステータスの50%を味方に加える

「ソウルアップ」「破壊不可」

カナデ

梟の杖↓梟の鎌

冥府シリーズ↓死神シリーズ

梟の鎌

INT+400

「ソウルアップ」「破壊不可」

クロム

龍の盾↓龍の矛、龍の大楯

飛龍シリーズ↓龍神シリーズ

龍の大楯

VIT+400

「ソウルアップ」「破壊不可」

龍の矛

STR+VITの50%の数値

「破壊不可」

マイ、ユイ

獅子の斧↓獅子の双斧

闘士シリーズ↓大地シリーズ

獅子の双斧

STR+400

「ソウルアップ」「破壊不可」

「すごい・・・！本当に装備がパワーアップした！

しかもこのスキルってスペリオルの持っているのと同じ」

「って事は俺達も巨大化出来るって事か・・・！」

「やりました！」

『見事に試練を超えたな・・・』

だがこれはまだ始まりに過ぎない・・・

邪神の復活は近い・・・それまでにもっと強くなるのだ・・・！」

そう言い残してエックスは姿を消してしまった

残されたサリー達は不安に思いながらも

とりあえずは強くなつた事を素直に喜ぶのだった

『・・・本当にこれで良かったのですか？トレーズ様・・・』

『無論だ・・・彼らにはもつと強くなつてもらわなくては困る・・・』

出なければ・・・あのバロックガンには勝てないだろう・・・』

海に眠りし財宝

それはとある日の事

珍しくイズとクロムのペアで素材を取りに海まで来ていた時だった

「……そういえばこの辺にも海賊の残した財宝の情報があつたよな？」

「言われてみればそうね……」

もしかして例のハ口と何か関連があるのかしら？」

そう……実は彼らの来ていた海にも海賊の伝説が残されており

もしかしたら例のハ口が眠っているかもしれないと思い

二人はその周辺で財宝についての情報を調べて回る事にした

「なるほどね……確かにここには財宝が眠っているみたいだけど

どうやらその財宝……かなりのいわくがあるみたいよ？」

「いわくつきの代物か……なんか当たりそうな気はするが

ここで手を出していいのかどうかと言われると迷うな……」

近くにあった古くもはや誰も住んでいない漁村に一つの本があつた

それにはとある海賊についてが記されていたのだが

同時にそれは財宝が呪われていると言う事の証明でもあった

その書物によれば昔、とある女海賊が伝説の財宝を手にした

しかしその財宝を手にした瞬間、まるでそれに取り憑かれたかのように

船員達はその財宝を求めて殺し合いを始めてしまい

最初に財宝を手にした彼女だけが生き残った

そして死んだ今でもその怨念だけが残っており財宝を守っているらしいとの事

「う〜ん・・・話を聞く限りだと混乱系のデバフが掛かったって事なのか？」

いやそんな単純な話じゃないんだろが・・・同士討ちは流石に不味いだろ・・・」

「そうね・・・それに財宝は深海に眠っているみたいだし

どちらにしてもそれなりの準備をしてからじゃないと無理かもしれないわね・・・」

二人はその情報を頼りに今日は素材集めだけを行なつて

別の日にちゃんと準備をしてからその財宝を取りに向かう事にした

そして数日後、二人は再び例の海までやってきていた

「とりあえずこれを使えば水中の中でも活動する事が出来るようになるわ

それでこつちが混乱系のデバフを無効化してくれるポーションね？」

「サンキュ。あとはコレがちゃんと効く事を祈るだけか」

「それだけじゃないわよ？前にも話したけど番人として女海賊の亡霊がいるんだから」
そう・・・イズの言う通り警戒するべきは財宝の呪いだけではなく

その呪いに囚われたままになっているその女海賊の亡霊にも警戒しなくてはなら
ない

それを理解した二人は水中で活動出来るポーションを飲んでから海の中へと入る
しばらく潜っていると深海に洞窟のようなものを発見し二人はそこへ向かう

そして中に入るとそこには空気が通っているようで
息をしても大丈夫だと判断し一息つく事にした

「流石にここでは息が出来るみたいだな・・・」

まあボス戦で制限時間があると俺みたいな盾使いには笑えないからな」

「あら？サリーちゃんは最初のボス戦で水中戦を経験したらいいわよ？」

「やっぱりあいつも十分に異常な部類だろ・・・」

改めて自分はとんでもない仲間がいるギルドにいるんだと再確認したクロム

その様子を見てイズが少しだけ笑っているとそこへ怪しげな瘴気が流れてくる

二人はすぐにそれに気がついて先ほど用意していたポーションを飲む

「・・・どうやら混乱はしないみたいだな・・・」

「そうね・・・後はこの瘴気が出ている場所に向かうだけだけど・・・」

「ああ……間違いなくボス戦になるだろうな……」

二人はおそらく苦戦するであろうとボス戦を覚悟をしながら先に進んでいく
すると奥には大量の財宝が置かれた空間があり中心にオレンジのハ口が置かれてい
た

しかしそのハ口の後ろには何か邪悪なオーラのようなものが漂っており

徐々にそれが形になっていくと異形な怪物へと姿を変えた

『ヤラヌ……！ワタシノ財宝……！誰ニモ渡スモノカアアアア!!』

「どうやらこいつが例の怨念って奴か！ネクロ！アーマード！」

「フエイ・アイテム強化！それっ！」

イズは強化されたグレネードで牽制攻撃を行い

その間にクロムが近づいて攻撃を当てようとするが

相手の体が霧状になってしまい当たり判定がなかった

「マジかよ……コレだからゴースト系のモンスターは苦手なんだ」

「だったら光属性のグレネードならどうかしら!？」

『ギヤアアア!!』

物理的な攻撃やその他の属性攻撃は効かないと判断し

イズはゴースト系が苦手としている光属性のグレネードを投擲する

それを見た二人はとても満足そうな笑みを浮かべていた

『うむ！流石はワシらをモチーフにしているだけはあるな！』

それではこの友情を司るハロを授けるとしよう！』

『それじゃあ世界を救う為に頑張ってくればいいんじゃないの？』

そう言い残して二人は消えていってしまい

イズとクロムは友情のハロを手にしたのだった

『．．．もうすぐ黒き月が落ちてくる．．．』

残されたハロは後一つ．．．果たして救世主は現れるのでしょうか．．．』

八紘の陣

それはとある日の事、スペリオルの耳にとある情報が入ってきた

それはとても珍しい綺麗な鳥型のモンスターが現れたと言うものだった
一目でいいから見たいと思った彼は情報のあった場所に向かったのだが
そこには何もなくあったのは不思議な祠だけだった

「コレ・・・前にも見た事があるな・・・」

そうか！コレって武化舞可達を手に入れたあそこに似ているのか！

・・・えっ？って事はもしかして・・・ここにも何か・・・」

『残念だけどここに眠っているのは閻皇帝じゃないよ』

「えっ？」

突如として声が聞こえてきて振り返ると

そこには四人の豪華な鎧を纏った侍の姿があった

「・・・えっと・・・誰？」

『ワシらはおつて頑駄無大將軍と呼ばれていた存在じゃよ』

「將軍!?しかもそれが四人も・・・って事はこの祠って・・・」

『その通り……ワシらを祀った祠じゃよ』

そして……ここには將軍の証が眠っておる』

「將軍の……証……」

なんでそんな大切な事を俺に教えてくれるんですか？」

確かにスペリオルの考えている通り

普通ならばこんな大切な事を教えるわけではないだろう

しかし彼らがこの重要な事実を教える事情が存在していた

『実はな……闇皇帝すらも超える邪悪なる存在……』

その名も闇邪神が目覚めようとしておるのじゃ……』

「闇邪神……名前からしてヤバそうなんだけど……」

『闇邪神は闇皇帝すらも超える力を持っており……』

その邪悪なる力で様々な者を洗脳し己の尖兵とする……』

その依代となろうとしているのが……カピタン卿と呼ばれる男だ』

『そして……闇邪神に対抗できる力はたった一つだけしかない……』

それが將軍の証にして武化舞可を束ねる力……結晶鳳凰の力だ……!』

「結晶鳳凰……もしかして例の鳥型モンスターはそれか……」

それで？ どうすればその人に認めてもらえるんだ？」

『フツ・・・彼ならばすでに君の事を認めているよ

後は君がこの中にある証を手にするだけさ』

そう告げると四人の将軍は聖なる光を祠に注ぎ込む

すると中から額に緑色の結晶が付いた鳳凰が姿を現し

まるでスペリオルの姿を見て安心したかのような顔を浮かべながら

彼の手に収まり光となってその体に入っていく

『スキル：八紘の陣を取得しました』

八紘の陣

全ての武化舞可を装備する事ができ更にステータスを二倍にする

効果時間は十分 使用回数は三日に一回

「・・・またなんかとんでもないスキルを手に入れたんですけど・・・

まあとりあえずはありがたく受け取るとして・・・」

『うむ・・・カピターン卿はおそらく結晶鳳凰の力を感じ取って

こちらへと向かって来ているはずじゃ・・・気をつけるのじゃぞ・・・』

そう言い残して歴代の将軍達は消えていってしまい

残されたスペリオルは相手が来るまで待っている

奥からとてつもなく巨大な何か近づいているのが見えた

「おいおい……！敵が来るのは知ってたけど

要塞ごと来るなんて聞いてないんですけど!？」

なんと相手はまさかの巨大移動要塞に乗ってこちらに向かって来ており

流石のスペリオルも驚きを隠せなかったがすぐさま冷静に頭を回転させる

(このままこつちにあれが向かってきたら普通に殺される！)

なら……まずはどうにかしてアレの動きを止めるのが先だ！)

「烈火大鋼!!」

スペリオルはその身を大鋼と融合させて巨人に変わると

そのままこちらに突っ込んでくる要塞を受け止めようとする

しかしそのパワーはあまりにも強く徐々にスペリオルが押されていた

『ぐっ!!なんてパワーだよ……!？」

こつちが必死に抑えようとしているのに……!!

でも……これくらいで負けてられるかああああ!!』

決死の力を振り絞りスペリオルは一気に要塞を持ち上げると

そのまま要塞はひっくり返り動きは完全に止まった

それと同時に力を使い果たしたかのようにスペリオルも元の姿に戻り

地面に座り込んでいるがまだ戦いは始まってすらいなかった
機能を停止したはずの要塞から何者かが出てくると

その体から禍々しいまでのオーラを放っており

すぐにスペリオルはその人物がカピタン卿だと理解した

『ほう？まさか我が要塞・亜怒羅巢低阿を止めるとはな・・・』

確かにその力、認めてやらん事もない・・・だが・・・！』

「!?」

禍々しいオーラがカピタン卿の全身から放たれ

そのオーラが晴れていくと彼の姿が禍々しいものへと変貌していた

『我が闇の力の前ではたとえどんな光であろうとも無力なり・・・！』

それを貴様にも教えてやろう・・・！』

「・・・悪いがたとえお前の闇がどんなに強力だったとしても・・・」

俺の光を消すことなんて出来やしない・・・それをお前に教えてやる！

これが俺の光だ！八紘の陣!!」

スペリオルがスキルを唱えると結晶鳳凰が姿を現し

それに呼応するかのように武化舞可達が召喚されスペリオルに装備されていく

そして最後に兜の額部分に結晶鳳凰が合体しスペリオルは烈火大將軍となった

『バカな!?なんだこの光は!? 我の闇を越えるほどの光などあるはずがない!!』

「お前みたいに人の体を借りて悪事をするような奴の闇なんてたかが知れてるんだよ
!」

『黙れええええ!!』

カピターン卿は逆上してその目から光線を放つが

今のスペリオルにはそんなものは通用せず

彼はモノともしないで突き進むながら號刀を抜く

『来るな．．．！来るな来るなクルナアアア!!』

「これで終わりだ！ 覚刀奥義！ 大魂斬りいいいい!!」

『ギヤアアアアアア!!?』

全身から光を放ちそのエネルギーを刀身に込めた一撃は

見事、カピターン卿を捉え彼に取り憑いていた闇邪神の魂だけを切り裂いた

残されたカピターン卿は元の姿へと戻り穏やかな顔で眠っている

「はあ．．．終わったああああ．．．ん?」

スペリオルはコレで一件落着だと思いつながら

先ほど自分が斬撃を放った場所を見つめてしまう

そして彼は気がついてしまった．．．

自分が斬ったのは閻邪神の魂だけではなかったという事を・・

「・・・流石にこの威力は予想外だったわく・・・」

なんと彼の斬撃が放った後は綺麗なまでに天まで真つ二つになっており流石のスペリオルもこの威力にはドン引きだった

一方その頃、運営側では・・・

「ちくしょおおおお!! やつぱりあいつやりやがったああああ!!」

「天まで真つ二つにするとかどんな剣豪でも無理だろ普通・・・」

てかさんなスキルにした覚えがないんだけど・・・」

「つて事は元のステータスが更に強化された事で

ゲームの処理ではあれぐらいの威力になったつて事か・・・」

「・・・それ・・・もうスペリオルがバグみたいな存在つて言つてね?」

「いや・・・もはやバグとか生やさしい話じゃないだろ・・・」

「とにかく急いで復旧作業だああああ!!」

今日は寝られないと思つて覚悟しろおおおお!!」

『イイイイアアアア!!』

全てを欲する武者

とある日の事、街で散策をしていたカスミはとある噂を耳にした

それはこのフィールドのどこかに今は亡き伝説の刀鍛冶・マゴハチ

その男が打ったとされる刀が眠っているとの情報を聞きつけた

もちろん刀が大好きな彼女がそれに惹かれないわけもなく

ギルドに残っていたマイ、ユイの二人を連れて刀が眠る場所へと向かった

「……これは……まるで本能寺のようだな……」

「凄いですね……本当に歴史上の建物みたいです……!」

三人が辿り着いたのは本能寺の変を再現したような建物であり

どうやら情報ではここに伝説の刀が眠っているらしい

三人は城の中へと入っていくとそこは完全に焼け落ちており

ゆっくりと進まなければ崩落の危険性がそこにはあった

そしてしばらく歩いてみると奥には一本の刀が突き刺さっていた

カスミはすぐにそれこそがマゴハチの作り出した名刀だと理解したが

同じくそれが普通の刀ではない事も察していた

「?どうしたんですか?アレを手に入れに来たんじゃ……」

「迂闊に近づかない方がいい……アレは妖刀だ……!」

『ほう?一眼見ただけでこの刀の妖気に気づくとは……』

「どうやらよほどの手練れがやってきたようだな……面白い……!」

「!?!」

突如として声が聞こえてきたかと思うと

突き刺さっている妖刀の隣に黒いモヤのようなものが現れると

そこから何やら禍々しいオーラを纏った武將が姿を現した

『我が名は信長ガンダムエピオン……!』

そしてこれは我が愛刀……へし切り長谷部!

この刀が欲しいというのならば……力づくで奪ってみせろ……!』

どうやら刀を手に入れるには信長を倒すしかないようなのだが

彼がそう告げた瞬間に禍々しい面が彼の顔に装着されると同時に

へし切り長谷部に信長の禍々しいオーラは取り憑いていき

それが具現化して尋常ではない刃へとその姿を変えていた

その姿を見て三人は戦う以外の選択肢はないと判断する

「どうやら戦うしかないようだな……!二人とも!頼む!」

「はー!!」

『さあ・・・来るがいい!その力を我に見せてみよ!!』

この中で一番の速度を持つカスミが信長に突っ込んでいくが

信長の名は伊達ではなく簡単にカスミの一撃を受け止めていた

しかしこれくらいはやってくるだろうとカスミ達は判断していたのか

受け止められたカスミの後ろからマイとユイの二人が追撃しようとするが

その瞬間、信長の持っていた刀の刀身が伸びて三人を薙ぎ払うように攻撃する

「ぐっ!?オーラが具現化されている事もあって刀身は無限か・・・!」

『その通り・・・!この刀は儂の全てを欲する心が具現化した刃!』

喰らうがいい!絶刀・・・燬灼龍穿!!』

「「キヤアアアアアア!?!」」

信長の高熱を纏った刃はカスミ達を一撃で薙ぎ払い

彼女達のHPを一気に一割まで持っていった

『どうする?まさかここで終わりというわけではあるまい?』

「本当に強い・・・!ならばここは・・・!これで戦おう!」

カスミは白鳳シリーズへと装備を変更しその刃を構える

その姿を見て信長は少しだけ驚いたような表情を浮かべていた

『ほう？あの一撃を受けて尚も儂と刀で勝負するか．．．！』

面白い．．．！ならば再びこの一撃を受けてみるがいい！絶刀・燬灼龍穿!!』

「させません！グランドウォール!!」

『何っ!?!』

信長が渾身の一撃を放った瞬間

マイとユイの二人が岩の壁を作り出してその一撃を受け止めた

そしてその瞬間を狙っていたかのようにカスミが信長の上空に飛んでおり

そのまま彼女は渾身の一撃を信長に当てる

「はあああああ！風流爆!!」

『グオオオオオ!!?!』

カスミの一撃を受けた信長は先ほどまで着けていた禍々しい面が砕け散り

それと同時に彼が放っていたオーラも消失し元の姿へと戻った

『．．．見事だ．．．まさか儂が負けるとはな．．．』

だがその真つ直ぐ折れぬ心があれば．．．これを託すに値するだろう』

「信長殿．．．」

『お前達も出てくるがいい．．．見届け人はもう終わりじゃ』

『はっ!』

「ええ!? 忍者さんも居たんですか!?!」

なんと彼らの戦いを見守っていた存在もいたようで

信長の呼びかけに答えて二人の忍びが姿を現した

『拙者の名は佐助デルタガンダム。こっちは才蔵デルタカイでござる

まさか本当に信長様の試練を超える者が現れるとは・・・驚きでござるよ!』

『うむ・・・だがそれでこそ我らの技を与えるに不足なし・・・』

それぞれ我らの前に近づいてこい!』

その言葉を聞いて三人はそれぞれ信長達の前に立つと

彼らはその象徴でもある武器を受け渡してくれた

すると彼女らの衣装は変わっていき

カスミは信長をイメージしたユニーク装備・六天魔王シリーズ

マイは佐助をイメージしたユニーク装備・猿飛シリーズ

ユイは才蔵をイメージしたユニーク装備・霧隠シリーズをそれぞれ手に入れた

『うむ! すごく似合っているでござるよ!』

「しかし・・・本当に良かったのか? この刀は貴方の愛刀なんじゃ・・・」

『構わぬ! 我が墓石として存在するくらいならば

その刀は新しき主に預けるのが誉である!』

それに……その刀の力をいずれば必要になる時がやってくる』

「必要な時……もしかして例の滅びの時ですか？」

『うむ……滅びの時……詳しくは知らぬが』

伝承では黒い月がこの地上に降りてきて

その全てを喰らい尽くすとの事らしい……

そしてそれを止める事が出来るのは五体のハ口』

やはり信長も例の滅びのイベントに関わっている人物だったようで

その話を聞いたカスミ達は今の現状を整理し始める

「五体のハ口……既に四体は集めているが……」

「残りの一体がまだどこにあるのか分からないんですよね？」

『案ずるな……残りの一体ならばどこにあるのか知っておる』

「本当ですか!？」

『ああ……残る最後の一体は……とある場所に眠っている』

しかし気をつけるがいい……そこには宝を守る番人も存在する

恐ろしく強大な……猿の化け物がな……!』

大いなる怒り

カスミ達が信長から聞いた情報を頼りに

彼は最後のハ口がある場所へと向かっていた

しかもそこには強力な門番すらもいるらしく

警戒しながらもその場所へと向かうと

何故かそこでスペリオルの持っていた龍帝剣が反応していた

「なんだ？なんで急に龍帝剣が反応し始めたんだ？」

急に龍帝剣が反応して何が起こったのだろうと思っていると

光が放たれて大きな岩がゆっくりと割れて洞窟が出現した

「まさか龍帝剣が鍵になつてるとは……」

つて驚いてる場合じゃないよな……中に入ってみるか」

スペリオルはゆっくりと洞窟の中へと入っていくと

そこには金色の巨大な雲が立ち塞がっており

一体これは何なのだろうと思っているとそこから雄叫びが聞こえてきた

すぐに危険だと判断したスペリオルはその場を離れると

その雲から巨大な猿の怪物が姿を現した

「マジで猿の怪物かよ．．．！しかもデケエ．．．！」

スペリオルもまさかここまで巨大な怪物が姿を現すとは思っておらず

サイコゴレムなどを召喚しようかと思つたのだが

そんな物を召喚してしまえば確実に生き埋めになつてしまうので

まずはここから脱出しないといけないと考えて洞窟を脱出しようとする

『ギャオオオオオオ!!』

「早っ!?あの巨体でその速度は詐欺だろ!？」

下手したらサリーとかとてい勝負じゃねえか!？」

その後ろを巨大な猿の怪物が凄まじい速度で追つてきており

それを見ていたスペリオルはサリーと良い勝負だと考えていた

しかしそんな事を言っている場合ではなく

まずは目の前にいる怪物を倒さなければいけないと思つていた時だった

「!？」

再び龍帝剣が光り出すとスペリオルは謎の空間に飛ばされていた

そしてそこには見た事もない青年が緑色のハ口を所有しており

その力を使って今、自分が戦っている怪物を倒している光景が映っていた

（これは・・・誰かの記憶なのか？だが・・・ヒントは貰った！）

「行くぞ龍帝剣！はあああああ!!」

スペリオルが力を溜めていくと彼から緑色のオーラが出始め

そしてそれが徐々に龍の形へと変貌していく

「喰らえ!!超絶至極!蒼炎激龍破あああああ!!」

『グオオオオオオオ!!?』

巨大な緑色の龍の形をしたオーラはそのまま猿の怪物へと放たれた

直撃を受けた怪物はその光に飲み込まれていき光が収まると

そこにはボロボロではあるがおそらく猿の怪物の正体だったのであろう子供の姿が

あった

「おいおい・・・こんな子があんな怪物だったって言うのかよ・・・」

『いえ・・・この子は怪物などではありませんよ・・・』

「っ?!誰だ!?!」

突如として背後から声が聞こえてきてスペリオルが振り返ると

そこにはまるで僧侶のような高貴な姿をした男が立っていた

いや・・・正確にはその場にいるのではなく立体映像である事はすぐに分かった

『初めまして・・・私は三蔵と申します』

「三蔵!?それって西遊記に出てくるあの三蔵って事か!?

それじゃあまさか・・・この大猿になっていた子供って!!」

『そのまさかです・・・彼の名前は悟空・・・』

五つのハロと同じくこの星を救う為に必要な存在です』

「マジかよ・・・なんか頭が混乱してきた・・・」

状況についていけないスペリオルはとにかく状況を整理する事にした
まずは五つ目のハロを探しにきたのだがいたのは悟空という存在であり

三蔵の話では彼もまたこの世界を救うのに必要な存在だという事

それは理解出来たのだが結局のところ

このクエストは何だったのだろうと思っていた時だった

『大丈夫ですよ・・・すでに最後のハロは貴方の手の中にありますから・・・』

「えっ?それってどういう・・・!?!」

スペリオルは三蔵の言っている事が分からず聞き返そうとした瞬間

三度、龍帝剣が輝きを放ち始めて再び彼は謎の空間に飛ばされる

『よお!悟空の事、元に戻してくれて本当にありがとうな!』

「えっと・・・貴方は一体・・・?」

『俺は劉備ユニコーンガンダムだ!』

正直な話、俺以外に悟空を止められる人間がいるなんて思ってもいかなかったよ！
でも……あいつを止めてくれてよかった……！改めて礼を言うぜ！』

「はあ……つてそれどころじゃない！」

確か劉備さんは最後のハ口を持ってましたよね？！

そいつが今どこにあるのか教えてもらっても良いですか？！

どうしてもそれが必要なんです!!」

『そんなに慌てなくても大丈夫だよ

アンタをここに呼んだのはそのハ口を渡す為だったんだからさ』

そう告げると劉備は自分の後ろについていたハ口を手にして

ゆつくりとスペリオルの元に近づいていき彼に手渡した

『これで五体のハ口が君達の元に集ったけど

油断しちやダメだからね？まだ強敵は残っているから』

「強敵……ですか？」

『そう……そしてそいつを倒す為には悟空、本来の力が必要なんだ

そして君なら……必ず悟空の力を引き出せると俺は信じてるぜ！』

劉備がそう告げると徐々にスペリオルの視界が光に包まれていき

それが晴れていくと彼は元の空間に戻ってきており

その手には劉備から受け取ったハ口が収まっていた

『……これで五つのハ口が揃いましたね……』

「そうらしいけど……まだ悟空の事が残ってるんだろ？」

劉備の話ではこいつの力がないと

今回の事件の黒幕には勝てないって言われたぞ？」

『ええ……お恥ずかしい話ですがその男はかつての私の同胞であり

彼と私は意見の相違から対立していました……

ですが……今の私にはもう彼を止めるだけの力は残っていません……

救世主よ……どうか貴方の力で彼を……窮奇を止めてください……』

そう言い残して三蔵を映し出していた立体映像は消えてしまい

残されたスペリオルは悟空の元へと近づいていくと

彼は最初に入っていた金色の雲の中へと入ってそのまま縮んでしまった

『キーアイテム：筋斗雲を入手しました』

「……これがどんな風に関わってくるのか……」

なんか考えただけでも……怖くなってくるな……」

『いよいよ全てのハ口が揃ったか．．．！』

だがもう遅い．．．！滅びの時はもうすぐそこまで迫っている．．．！』

伏龍、羽ばたく

それはスペリオルがハ口を手にする少し前の事

イズと一緒にとある洞窟で素材を集めていた時だった

「……ん？なんか……囲まれてないか？」

「どうやらそうみたいだけど……何か様子がおかしいわね？」

スペリオル達は明らかに囲まれていたのだが

問題はその囲っているのがモンスターではなく

街などにいるような兵士のNPCだった

しかし背中から邪悪なオーラが放たれているので

おそらく正常な状態ではないのだろうと判断していた

「……流石に倒すわけにはいかないし……」

どうにかして無力化したいが……何かアイテムあったりする？」

「そうね……それならこのスタングレネードがいいかしら？」

イズはスタングレネードを思い切り投げると

兵士達はその強烈な光と音で動けなくなり動きが止まる

その間にスペリオル達は洞窟を脱出して外に出ると

そこには先ほど以上の兵士達が待ち構えており

流星にこれはまずいと判断したスペリオルは大守護天使シリーズに換装し

イズを抱えて空へと逃げた

「あつぶねく……てか一体何なんだ？」

何かしらのイベントなのは間違いないと思うけど

流星に発生源が分からないからクリア方法も謎なんだが……」

「そうねく……とりあえずがこの事態を引き起こしていいような

元凶を探すのがいいんじゃないかしら？」

「そうだなく……それじゃあ!？」

スペリオルはそのままイズを連れて空から元凶を探ろうとしていた時

突如として何かか飛んできてこちらに対して攻撃を仕掛けてきた

一体何者なのかと思つてその姿を確認すると

そいつはまるで鳥のような姿をした人形のモンスターだった

『ゲヒヤヒヤヒヤ!俺様の名は朶思大王!お前らをスタスタに切り裂いてやる!!』

「空を飛べる相手とか……厄介な相手だな……!」

「つ?!スペリオル!下からも攻撃がくるわ!!」

イズの声により間一髪で攻撃を躲したスペリオルは下を見るとそこにはサイコゴーレム並の巨体を誇るモンスター姿があった

『外したか・・・私は木鹿大王・・・ここでお前らを・・・潰す・・・!』

「また随分と厄介な相手が現れたな・・・!サイコゴーレム召喚!」

スペリオルはサイコゴーレムを召喚し木鹿大王と戦わせて

自分はその間にイズを地上に下ろしてその間に義兄弟の絆で張飛、関羽を召喚

そして再び大守護天使シリーズに換装し朶思大王との空中戦を繰り広げる事にした

「先に行け!俺はこいつらをどうにかしてから行く!」

「分かった!スペリオルも気をつけてね!!」

イズは張飛と関羽の二人を連れて森の中を走っていくと

近くにあった川から何かが出現して襲い掛かってきた

『危ねえ!炸裂!大雷蛇!!』

『ちよっ!?!危ないじゃないの!?!随分と酷い事をするわ〜!』

『何者だテメエ!?!』

『私の名前は帶來洞主・・・さあ・・・私と遊びましょう?』

そう言つて帶來洞主が襲い掛かってきたが張飛がそれを受け持つてくれた

その間に二人は奥へと進もうとした瞬間、今度は別のモンスターが彼らの前に立ち塞

がった

『我が名は兀突骨！いざ尋常に．．．勝負！』

『ここは拙者がお相手致す！イズ殿は先に行かれよ！』

「ありがとう！」

こうしてイズは関羽の助けもあつて森の奥へと進んでいくと

そこに居たのはこれまでに見た事もないほどの邪悪なオーラを放った男だった
しかもその手にはスペリオルが持っていた玉璽と同じ．．．
いや．．．それ以上の黒い瘴気を放った漆黒の玉璽が握られていた

『ほう？まさか南方四天王を突破してくるとは予想外でした．．．』

ですがまあ．．．たった一人だけで来たのならば計算内ではありますか』

「あなた．．．一体何者なの？」

『私は龐統．．．風雛の称号を持つ．．．かつて伏龍の同門だった男ですよ

しかし今は．．．私の方が優れている．．．！この暗黒玉璽のおかげでね！！』

龐統が暗黒玉璽を翳すとんでもないほどの瘴気が放たれる

それはステータスの異常を起すようなものではなかったのだが

それでも間近で浴びていたイズはその強烈さに思わず膝をついてしまう

『さあ．．．！見せてあげましょう！これこそが我が真の姿．．．！』

そして・・・伏龍を超えて翼を広げた鳳の姿だ!!」

龐統は先ほどの南方四天王の体が合体したような異形の存在へと変わっており

その邪悪なオーラを感じ取ったイズは爆弾を相手に投げ込むのだが

異形の怪物へと変わった龐統は暗黒玉璽のオーラに守られておりダメージが入らな
かった

『無駄ムダむだ!もはやワタシニそんな物は通用シナインダヨ!!』

「まずはあの暗黒玉璽をどうにかしないと・・・!」

でも・・・一体どうすればいいの・・・!?!」

「三位一体!星・龍・ざあああああん!!」

イズが苦戦を強いられている時

そこへ真龍帝シリーズへと換装したスperlオルが飛来し

攻撃を仕掛けようとしていた龐統に向かって渾身の一撃を放った

しかしやはりというべきなのか攻撃は当たったがダメージはなかった

「ちい・・・!これでもダメなのかよ・・・!ん?!」

なんだ!?!急に龍帝剣から光が!!」

光が収まるとそこにはスperlオルだけではなくイズの姿もあり

そして二人の前には何とも気品の溢れた男が立っていた

『初めまして・・・私は諸葛孔明・・・またの名を伏龍と言います』

「諸葛孔明!?まさか本物に会えるなんて・・・」

『今は時間もありませんし手短にいきましょう』

スペリオルさんはそのまま龍帝剣を翳してください

イズさん・・・私の手を掴んでくれますか?』

二人は孔明に言われた通りに行動すると龍帝剣の輝きが増し

その光がイズに注がれていくと彼女の姿が変わっていた

『スキル・目覚めし伏龍を獲得しました』

「これって!?!」

『そこそが龍帝の光・・・』

どうかその力を使って彼を・・・龐統を止めてください・・・!』

孔明がそう言って全てを二人に託すと同時に光が晴れていき

二人は先ほどと同じ場所に戻ってきていた

『何だナンダなんだその光ハアアアアアアア!!?』

「もうこの力があれば貴方を恐れる必要はないわ!天魔覆滅!」

イズがスキルを発動した瞬間、上空に巨大な陣が浮かび上がり

そこから放たれた光が邪悪なオーラを消していく

先ほどまで操られていた兵士達は正気に戻り

龐統からは暗黒玉璽の禍々しいオーラが消え去った

「これで終わりよ！白龍転身！」

スキルを発動したイズはその体を白い龍へと変えて空高く飛んでいく

『アア……私はまた……お前にマケルノカ……孔明……』

「天翔龍凰撃!!」

渾身の必殺技を受けた龐統はそのままHPを削られていき

手にしていた暗黒玉璽も粉々に砕け散っていた

(……これでようやく……お前の元に行ける……徐庶……)

「……今の声って……」

「……もしかしたらアイツはアイツで何かを抱えていたのかもな……」

二人は龐統が先ほど口にした男の元に行ける事を祈るのだった

『……忌々しき天の光め……！今度こそ……地上を我が闇で……！』

煉獄の闇

それはNWOを騒がせている一つの事件だった
なんでも幽霊のようなモンスターが現れて

プレイヤーを突如として襲っているらしいのだが
問題はそのモンスターは倒した相手に取り憑いて
再び暴れ出してしまおうというものだった

幸いな事に倒す相手がいなくなれば解放されるらしいのだが
その時は本体を相手しなくてはいけないので

結局は全滅する事になってしまおうらしい
「随分と厄介なモンスターが登場したもんだな？」

倒しても相手に取り憑くんなら倒せないんじゃないのか？」

「そうは思うけど・・・」

運営がそんなチートモンスターを出すとは思えないし

多分だけ倒す為の何かがあるんだと思う・・・

それでカナデが過去の書物に関連した情報がないか調べてくれるんだけど」

「見つけたよ

多分だけど張り紙に書かれていたモンスターに間違いないんじゃないかな？」

そこへ丁度よくカナデが帰ってきてその手には一冊の本が握られていた

スペリオルとサリーの二人はその本の中を見ながらカナデの説明を聞いていた
「かつてこの世界を闇が覆うとした時、三人の英雄が立ち上がったんだ

そしてその大いなる闇を封じてそれぞれ龍、虎、鳳凰となつて天に帰っていた
後に人々は彼らの事を三侯・・・と呼ぶようになったらしい」

「三侯!? それって俺の龍帝剣の説明にあつた名前じゃねえか!？」

「確かメイプルの持つていた剣にその名前があつたはず・・・」

つまりそのモンスターを倒せるにはスペリオルかメイプルだけって事？」

サリーは三侯の魂を宿した剣を持つて二人ならばモンスターを倒せると思つたが
どうやら事はそんなに簡単な事ではないようでカナデは話を続ける

「実はその封印された存在についていうのは蚩尤って言うらしいんだけど・・・」

今、現れているのは言うならばその力の一端でしかないんだ・・・」

「そうか・・・確か三侯に封印されたんだつたもんな・・・」

つまりはその封印されている本体を倒さなきゃダメだつて事か・・・

それで? その本体ってどこにいるのかまでは分からないのか?」

「この書物ではそこまで詳しい事は書かれてなかったよ

ここから先は自分達の足で調べるしかないかな？」

カナデの話では現在、現れている蚩尤はあくまでの力の一端でしかなく

結局のところは三侯が封印されたときれている本体を倒すしかなかった

しかし現状ではその本体がどこにいるのかまでは分からないように

ここから先は自力で調べるしかないとスベリオルがギルドハウスを出た時だった

「あれ？なんでメイプルとミイが一緒にいるんだ？」

「実はさっきまで一緒に狩りしてたんだけど・・・」

ミイのギルドの人がスベリオル達の話に出ていたモンスターにやられたらしく

て・・・」

「ギルドマスターとしては今回の事態を放っておけないからな

勝手ですまないがその蚩尤というモンスターの討伐を手伝わせてもらえないか？」

「そっか！そういうえばミイの持つている剣も三侯の魂を宿してるんだったか!!」

「ああ・・・これならば遅れを取ることはないだろう

しかし問題はやはり本体の場所だな・・・

闇雲に探したとしても時間が掛かるし

何よりも封印された場所を分かりやすくしているとは・・・」

確かにミイの言う通りこのまま手掛かりが何も無い状態で探したとしても
そもそもマップが広すぎて探すには膨大な時間が必要になるし

封印が施された場所がそんなに分かりやすい場所にあるとはとても思えなかつた
みんなはどうか良い方法はないだろうかと頭を捻っている時だつた

「?なんかスペリオルの剣・・・光つてない?」

「?うお!?マジで光つてるよ・・・!」

「スペリオルのだけじゃなくて私やミイのも一緒だよ!!」

「どうやら共鳴しているようだな・・・もしかして・・・!」

スペリオル達は剣を合わせてみるとそこから強烈な光が放たれて

その光はどこかへ飛んでいき急いで彼らはその光を追いかけていく

するとそこには何かの紋章が刻まれた巨大な岩の扉があつた

三人がその扉の前で再び剣を翳すとゆっくり扉は開き始めた

「どうやらここで間違いないようだな・・・」

「ああ・・・何が出てくるか分からないし・・・警戒しておけよ?」

三人はゆっくりとその岩の扉の奥にある階段を降りていくと

何やら開けた場所に出たのだがそこにはスペリオルが驚く物があつた

「あれは・・・!?巨大な玉璽!?でも色が違う・・・!つて事は暗黒玉璽か!!」

でも……どっちにしてもデカすぎだろ!? どうなってんだよ!」

そう……そこにあったのは機兵と並ぶほど巨大な暗黒玉璽だった

これには実物を見た事があるスペリオルも驚いていたが

問題はそこではなくその暗黒玉璽から邪悪なエネルギーが出てきている事だった
何故ならばこの暗黒玉璽こそが三侯が封印した蚩尤の本体だった

そして三侯の魂を宿した剣に反応したのか暗黒玉璽はゆつくりとひび割れていき
その中から巨大なモンスターが出てきてスペリオル達に襲い掛かった

「マジかよ……!これが蚩尤の本体なのか!」

「!スペリオル!後ろ!!」

メイプルの声が聞こえて後ろを振り返ると

そこには巷で噂になっていた蚩尤の力が形になったモンスターが飛んでおり
そいつはまるで暗黒玉璽に吸い込まれるように取り込まれると

モンスターはその姿を変えて完全な姿へと復活した

『地上は久しいな……!』

今度こそ……この世の全てを闇に染めてくれよう……!』

「そんな事はさせねえよ……!やるぞ!メイプル!ミィ!」

「うん!」

「任せろ！」

こうしてスペリオル、メイプル、ミイの三人と煉獄の闇・蚩尤との決戦が始まったのだった

三侯の魂

蚩尤との戦いを始めたスペリオル達だったが

彼らは思った以上に苦戦を強いられており追い詰められていた

「クツソ……あの暗黒瘴気が厄介だな……！」

「貫通攻撃を当ててもあの瘴気は自動回復効果もあるらしい……」

どうにかしてあの暗黒瘴気を消し去らなければ……！」

彼らが苦戦している最大の要因は蚩尤の纏う暗黒瘴気だった

そのオーラはあらゆる攻撃を軽減させておりまともなダメージを与えられず

貫通ダメージを与えたとしても自動回復効果もあるので即座に回復されてしまう

つまり一時間近く戦っているはずなのに

スペリオル達は一ミリもHPを減らせていないのだ

「このままだとジリ貧だな……！」

どうにかして突破口が欲しいが……！」

『どうやら三侯の魂を宿しているとは言っても

所詮はその力を使いこなせてはいない雑魚か……！』

ならば……！今度こそ永遠の闇に沈むがいい！！』

蚩尤は巨大な刀をその手に持ちそれを振り翳した

その波動だけでスペリオル達は吹き飛ばされ

HPが一気に一割まで削られる

「ぐっ……！？マジかよ……！」

「なんて威力……！」

「このままじゃ……負けちゃうよ……！」

『クハハハ！どうやらこれで終わりのようだな……！』

喰らうがいい……！天魔爆煉砲！！』

蚩尤はトドメとばかりに砲台を呼び出し

それに暗黒瘴気を集めてスペリオル達に向かって放たれる

流石の彼らもこれまでだと諦めようとしたその時だった

「!?」

突如として龍帝剣が輝きを放ち始めると

スペリオルは不思議な空間に飛ばされていた

「……」は……一体……？」

『……龍帝の魂を受け継ぎし者よ……汝の望みはなんだ？』

「!?」

スペリオルが後ろを振り返るとそこには巨大な龍がいた

あまりの大きさに驚いていたが同時にスペリオルはその正体に気がついていた

「……もしかして……龍帝の魂か……!」

『スペリオルよ……汝の望みはなんだ?』

「俺の……願ひ……」

正直な話をするのならばスペリオルは龍帝が何を言っているのか理解出来なかった
しかし彼が願う事はいつだってたった一つだけ

「……俺が願うのはいつだってたった一つ……みんなと楽しく過ごす事!

みんなと笑い合う明日を手にいれる事だ!」

『よかろう……!ならば汝の魂を示せ!』

「龍帝よ!俺の魂は……自由と共にある……!」

その言葉を聞くと同時に龍帝は光り輝いていきスペリオルの体を包み込んでいく

『なんだ!?一体何が起こっていると言うのだ!?』

「これは……スペリオルが……龍に……」

「凄……!カッコいいよスペリオル!」

スペリオルはかつて龍帝の魂を目覚めさせた者と同じく天を駆け巡り

かつて龍帝が呼ばれていた名と同じ名を受け継いだ瞬間だった
そう・・・天翔ける戦神・翔烈帝と・・・!

『馬鹿な!? 龍帝の魂が蘇ったというのか!』

ありえん!! そんな事はありえん!!』

「蚩尤! たとえ貴様がどんなに邪悪で強力な存在であろうとも・・・

決して俺達は負けない! 俺達の光で・・・お前を倒す!!」

翔烈帝となったスペリオルは進化した龍帝剣・天翔龍帝剣をその手に持ち

蚩尤と切り結んでおりその光景にメイプルとミイは目を奪われていた

「凄いなスペリオルは・・・私達も・・・負けてられないね・・・!」

「ああ・・・! その通りだ・・・!」

『そうだよ! 今こそ君の中に眠る本当の勇気を振り絞る時だ!』

『貴様が望む真の理想・・・それを今、ここで実現させてみせよ!』

「孫権さん!」

「曹操殿まで・・・! 一体どうして・・・!」

突如として現れた二人にメイプルとミイは驚きを隠せながったが

それと同時にメイプルとミイの剣からスペリオルと同様の光が放たれる

そしてその光が晴れていくとメイプルは虎暁の魂が具現化した神獣・虎燐魄を身に纏

い

かつての彼が呼ばれていた碧眼の獣神・轟大帝へと変わっており
 ミイも同じく雀瞬の魂が具現化した神獣・鳳熾魂をその身に纏い
 紅蓮の焰神・機武帝へと変わっていた

「これって!?!スペリオルと同じ・・・三侯の力?」

「・・・どうやら私達も認められたという事だな・・・!」

「これならば私達もスペリオルと一緒に戦える!」

「うん!」

メイプルは進化した天華虎錠刀をミイは天鳳星凰剣と天鳳威天剣を手に

蚩尤の元へと向かいスペリオルと同時に攻撃を放つ

『おのれええええ!!再び我の邪魔をするのかあああああ!!』

忌々しいいいいい!!忌々しいぞ三侯よおおおおお!!』

蚩尤は怒りに我を忘れたようでもはや当たり構わず攻撃していた

しかし今のスペリオル達にはこれしきの攻撃は通用せず

三人は集まって最後の一撃を蚩尤に向かって放った

「これで終わりにするぞ!天翔星龍ざあああああん!!」

「猛虎獣烈覇あああああ!!」

「七星紅蓮焰舞!!」

『グバアアアアアアアア!!?!?』

三人の必殺技を受けた蚩尤は見事に胴体を貫かれ

その体はボロボロになって崩れ去った

「はあ．．．はあ．．．なんとか．．．勝った．．．」

「もうヘトヘトだよ．．．」

「同じくだ．．．出来る事ならもう二度と戦いたくはないな．．．」

こうしてスペリオル達は無事に勝利を収めみんなの待つギルドに帰る事にした

しかしこの時の彼らは気づいていなかった．．．蚩尤の闇はまだ完全には消えていない事

そして．．．その闇を回収した謎の人物の存在についても．．．

『ようやく究極の闇を手に入れる事が出来た．．．!』

これで今度こそ．．．私が新しい世界の神となるのだ．．．!』

そして別の場所・空よりも高い山ではとある神が長い眠りから目を覚ましていた
『……無垢なる魂を持つ者よ……我が元を集え……』

幻魔王

もうそろそろ第八層の実装が近くになり

それに伴って第九回イベントも差し迫ってきていた

そんな中、スペリオルとはあるメッセージを受け取った

そこに書かれていた内容とは

『雷龍剣を受け継ぎし者よ』

汝、最終奥義を身に付けたくば我が元に来たれり』

正直な話、もうこれ以上の強さは別に要らないのではないかとも思ったが

それでも強者と戦えるのなら喜んで受けるのが彼であり

急いでその場所に向かうとそこには一人の魔法使いの姿があった

『来たね・・・僕は騎士ヴィスクエア』

新しく雷龍剣を受け継ぎし戦士よ・・・

君に雷龍剣の最終奥義を学ぶ覚悟はあるかい？』

「その覚悟があるからこそここまで来たんだ！」

『・・・分かった・・・ならばこの先へと進んでみるといい』

ヴイスクエアは鍵を使って山の遺跡の扉を開いた

そしてスペリオルが中に入るとその扉は自動的に閉まり

何も見えない暗闇の中を突き進んでいくと開けた場所に出た

ここで一体何が起ころのだろうとスペリオルは考えていると

何やら尋常ではないオーラが向こうから近づいてくるのが分かった

『よくぞここまで来た……！雷龍剣を受け継ぎし者よ……！』

我が名は幻魔王バイスガンダム！

汝、最終奥義を身に付ける資格があるかどうか

この私自らが見極めてやろう……！』

「是非ともお願いさせてもらおうか……！」

スペリオルは魔竜シリーズに装備を換装すると

対するバイスガンダムも剣を引き抜いて彼と同じ構えを取っていた

(なるほどな……そりゃあ雷龍剣の最終奥義を身に付ける試験なんだし

当然……向こうが使ってくるのも同じ技ってわけか……！)

「『雷鳴斬!!』』

まさに両者の一撃は鏡合わせのように全く同じ威力ではあったが

バイスガンダムの方が一步、上手だったようので即座に次の技を放ってきた

『雷電破!!』

「チイ! 雷龍撃!!」

お互いの一撃が当たった瞬間、凄まじい爆発音が響くと同時に両者は一気に壁まで吹き飛ばされそのまま激突してしまう

『むう……! どうやら私の予想を超えるほどの強さを持つているか……!』

面白い……! ならば我が最大奥義で貴様を倒してやろう!』

バイスガンダムは持っていた剣を天に翳すと黒い雷が刀身に纏う

それを見てスペリオルも最大の一撃を放つ為に剣に雷を纏う

「これで終わりだ! 超! 雷鳴斬!!」

『魔龍影雷鳴斬!』

光と闇の斬撃は凄まじい爆発を引き起こすのだが

先ほどとは違いどちらも吹き飛ばされてはおらず

どちらの威力が上か真つ向からの力比べをしていた

「うおおおお!!」

『バカな!? この私が……負ける……だと!?』

最後はスペリオルの斬撃が勝ちバイスガンダムはその光に飲み込まれた

しかしそれでも倒し切れてはいなかったようで

ボロボロになりながらもまだ立ち上がっていた

『面白い……！面白いぞ……！』

ならば私も見せてやろう！我が最強の力を！

来い！幻魔機兵！バイザード!!』

バイスガンダムが叫ぶと地面が割れてそこから双頭の龍が姿を現した

そしてバイスガンダムが乗り込むと龍は姿を変えて邪悪な機兵に姿を変えた

「だつたらこつちも……！ドラグーン！」

スペリオルもドラグーンを呼び出してそれに乗り込む

そしてバイザードとの戦闘に望むのだが向こうの方が強く

とてもではないがドラグーンでは勝ち目はなかった

「ぐっ!?なんて力だよ……！このままじゃ……!?!」

『ギヤオオオオオン!!』

「なっ何だ!?!」

突如として何かの雄叫びが聞こえてきて振り返ると

何かがスペリオルの元に飛んできていた

するとヴィスクエアがモニターに映し出されて

飛んでくる機体について説明してくれる

『それは雷龍劍の最終奥義へと至る雷龍大系の一つ！』

龍機ドラゴパルサー！今こそ、その力を使う時だ！』

「分かった！」

ドラグーンはドラゴパルサーに向かって飛んでいくと

その体に付いていた聖なる鎧がドラグーンに装着されていき

聖龍機マルスドラグーンへと進化を果たした

「スゲー……！こんだけの力があれば……俺は負けねえ!!」

『そうか……ドラゴパルサーも奴を認めたか……!!』

面白い……！ならば我が全力の一撃を受けてみるがいい!!』

「ああ……！これが最後だ！雷よ！我に力をおおおお!!」

白銀のハルバードに雷の力が溜まっていき

マルスドラグーンは再び必殺の一撃を叩き込む

「超！サンダアアア……バリアントオオオオオオオ!!」

『ウオオオオオ!!』

二人の一撃は洞窟を破壊するほどの衝撃を放ち

勝利したのは他でもない……バイザードを両断したマルスドラグーン

そう……スペリオルの勝利だった

『……見事なり……。お前ならば雷龍大系を使い熟す事も出来るだろう……。』

「……なあアンタ……。本当は別に悪人ってわけじゃないんだろ？」

なんてこんな勝負を挑むような事をしたんだよ？」

『……これこそが試練だからだ……』

雷龍剣を受け継ぎし者は絶対に迷ってはいけない……

相手が過去に善人であったとしても……許してはいけないのだ』

そう言いながらバイスガンダムはスペリオルに手を翳すと

スペリオルが身につけていた魔竜シリーズが聖龍シリーズへと変わっていた

『……気をつけろ……。まだこの世界には奴がいる……。！』

幻魔を統べる……。最悪の王がな……。！』

バイスガンダムは最後にそう言い残して消えていき

スペリオルはその言葉を受け止めながらその場を後にした

t h u n d e r s t o r m

第九回イベントに向けてみんなが色々なクエストを受けている頃

スペリオルは久しぶりにクエストなど関係なく

一人でのんびりとフィールドを探索していた時だった

「ん？随分とデツカい雷だなく・・・誰かのスキルか？」

雷系のスキル・・・確か一人だけ有名な奴が居たな・・・

えつと・・・thunder stormってギルドの・・・誰だっけ？」

「ベルベットです！」

「そうそう！そういう名前だった！・・・え？」

どこからともなく声が聞こえてきて振り返ると

そこにはなんとベルベット本人の姿があつた

「・・・えつと・・・いつからそこに？」

「先ほどの雷を放った直後くらいです！」

こっちもまさか伝説のスペリオルさんとお会い出来て光栄です！

どうか私と決闘してもらえないでしょうか!？」

「ベルベット……！すっ少しは落ち着いて」

何とも前のめりなベルベットを止めてくれたのは

彼女の仲間であるヒナタであり彼女の服を掴んで止めてくれた

「あはは……悪いけど今日はのんびりするって決めてるから

決闘に関してはまた後日してもらえると助かるかな……」

「そうでしたか……お邪魔して申し訳なかったす……」

「わっ私の方からもごめんなさい……！」

（……なんか……メイプルとサリーのコンビを思い出すな）

二人の様子を見てスペリオルは自分のギルドにいる彼女らの事を思い出した

そしてここであつたのも何かの縁という事もあり

スペリオルは彼女らの狩りに付き合う事にした

「しかし随分とすごい装備だな……装備のスキル枠すら使ってるのか

なんか決闘したら苦戦させられそうだな……」

「そんな事ないっすよ!?あのスペリオルさんと私じゃ格が違いますって!」

「……微妙に褒められてるのか何なのか分からない……」

まあいいか……それにしても……ヒナタのスキルも凄いな……

氷と重力か……なんかこつちもこつちで相手にしたら面倒そうだ」

「そつそんな事・・・！あつありがとうございます・・・！」

こうして仲良くみんなまで歩いていると何やら巨大なモンスター達が姿を現した

流石のベルベット達もこれは予想外だったようで逃げるべきかどうか悩んでいたのだが

「・・・まあこれくらいなら余裕か・・・聖機兵召喚！ガンレックス！」

スペリオルはガンレックスを呼び出して巨大モンスター達を次々に倒していく

その光景を見ていたベルベットは興奮を隠しきれずヒナタに關しては怯えていた
そしてある程度のモンスターを倒したところでスペリオルは違和感に気がついた

（・・・さっきのモンスター・・・この階層では本来見かけないやつだな・・・）

バグってわけじゃないなら・・・何かしらのイベントが発生してるって事なのか？

「？どうかしたんすか？」

「・・・もう少し先を調べに向かった方がいいかもしれないと思つてさ・・・」

でもなく・・・俺は今回オフでゲームムしたいからなく・・・」

「それなら私達に任せて欲しいっす！」

スペリオルは先ほどの件についてどうしようか悩んでいると

急にベルベットが目の前に出てきて今回の件は自分達に任せて欲しいと言われた
それを言われて彼女達ほどの実力ならばスペリオルも任せて大丈夫だろうと思ひ

後日、彼女達は改めて今回のクエストについてを調査する事になった

そしてスペリオルはそのお礼としてベルベットとの決闘を受ける事にした

「あつあの……本当にいいんすか？今日はオフだったんじゃ……」

「別にこれくらいなら問題はないさ」

それに……君がどれくらい強いのか教えてもらいたいしね……！

換装！破牙シリーズ！

スペリオルが破牙シリーズの鎧に身を包むと

ベルベットはとても嬉しそうな笑みを浮かべており

その顔を見ていたスペリオルは彼女も自分と同じ戦闘狂だと悟る

「それじゃあ……胸を貸していただきますー」

そう告げるとベルベットは光と同じ速度でスペリオルに近づき

そのまま拳を放ってくるが彼は簡単にその攻撃を受け流した

しかしベルベットはこれくらいやって当然だと思っていたようで

あまり驚きはせずそのまま攻撃を続けてくる

（へえ？戦う事に関しては天性の才能を持っているって感じか……

なかなかに見どころがありそうだけど……まだまだ甘いかな！）

「!?」

自分が攻撃していたにも関わらず拳が飛んできて
ベルベットは驚きの表情を見せるが

即座にその攻撃を紙一重で躲したと思った時だった

「!? どうして!?!」

「攻撃は躲したはずなのに自分は攻撃を受けているのか・・・てか?」

確かにお前は俺の一撃を躲したが・・・二撃目に反応出来なかつたんだよ

覚えておいた方がいいぜ?これが夫婦手っていう現実の空手にある技の一つだ!」

スペリオルは現実の武術をゲームで応用しており

ベルベットはその差によって負けて決闘はスペリオルの勝利となった

(凄い・・・!スペリオルさんはやっぱり強かったっす!)

自分もいつか・・・あの人と対等に戦えるようになってみたいっす!)

そしてベルベットは新しい目標を手にいれ目を輝かせていた

「で?さっきの可愛い女の子は一体誰だったのかな?スペリオル?」

「えっと・・・たまたま知り合った上位プレイヤーの二人です・・・」

「ふ〜ん・・・たまたまね〜?」

一方でスペリオルが先ほどまでベルベット達と一緒にいたところを見られており、誤解を解くのにしばらく時間が掛かったとか・・・

神雷を司る者

ベルベツトとヒナタの二人は

前にスペリオルとやってきた場所へとやって来た

そしてモンスターが現れているのがとある山からだを知り

その場に向かうと何故かともんでもない数のモンスターが沸いていた

「これ・・・百匹どころの騒ぎじゃないよね？」

「うっうん・・・！さっ流石にこの数を相手にし続けるのは・・・！」

二人はどうすれば彼らの増殖を止められるだろうと思っている

山の中から攻撃が飛んできて二人を囲んでいたモンスターを全滅させた

一体、何が起こっているのだろうか？と二人は洞窟の中へと入っていく

するとそこにはあの神話の時代に三侯と共に戦った英雄

その忘れられた魂が眠ると言われている伝説の武器・方天武戟が突き刺さっていた

「あれは・・・何かは分からないっすけど飛んでもない雷・・・」

おそらく名のある方が使っていたもので間違いないっすね・・・」

『ほう？俺の武器を見てそこまで判断するとは・・・面白い・・・！』

「!?」

ベルベットはどこからか声が聞こえてきて警戒していると

方天武戦の隣にモヤのようなものが出来始めてそれが形を成していった

そしてそこから現れたのは他でもないかつてスペリオルと激闘を繰り広げた男
戦国において最強と言われた武将・呂布の姿がそこにはあった

『お前か?この俺の魂を呼び覚ました強者は?まさか女とはな・・・』

しかし・・・本当に貴様がその資格を持っているのか・・・

試させてもらおう・・・!』

呂布は突き刺さっていた方天武戦を手にすると

二人が思わずたじろいでしまうほどのオーラを発する

しかし同時にベルベットはこれほどの強者と戦える事にワクワクしていた

『ほう?この俺の全力を見て笑みを浮かべるとはな・・・貴様で二人目だ

さて・・・ではその笑みがいつ消えるのか・・・試させてもらおう!』

呂布はベルベットに対して凄まじい一撃を放つ

その攻撃を自慢の速度で躲しベルベットは呂布の背後に回り込む

しかし呂布はまるでそれを予見していたかのように

後方に飛んできたベルベットに対して迎撃を仕掛けてきた

(そんな!?私の攻撃を一瞬で予測した!?この人・・・強い・・・!!)

『その素早さだけは認めてやろう・・・だが戦闘経験に関してはまだ浅いな・・・!見せてやろう・・・!これが本当の攻撃というものだ!暴風激烈斬!!』

「っ!?きやああああ!!」

「ベルベツト!!」

呂布の一撃はまさしく竜巻のような威力を誇っており

その一撃を受けたベルベツトは簡単に吹き飛ばされてしまう

それをどうにかヒナタが受け止めて回復させるが

状況に関しては未だに彼女の方が不利だろう

『どうした?まさかこの程度で終わるわけじゃないだろ?』

もつと俺に見せてみる!貴様らの魂というものを!!』

「まだ・・・まだ・・・です・・・!」

『そうだ!もつと俺を滾らせろ!あの男は俺を満足させてくれたぞ!』

貴様らも己の限界を打ち破りこの俺を楽しませろおおお!!』

「はああああ!!」

ベルベツトはおそらく自分が出せる限界速度を引き出して

呂布の周りを旋回する

もちろん彼には見えていないだろうが気配は感じ取っている

再び迎撃しようと体を動かそうとした瞬間、呂布の体が重くなった

『ぐっ!? 貴様の力かあああああ!!』

「いつ今です! ベルベツト!!」

「喰らえええええ!!」

『させるか! 旋風迅雷爆裂衝!!』

両者の一撃は凄まじいまでの爆発を引き起こし

あまりの爆風にヒナタは目を閉じてしまうが

その煙の中からベルベツトが飛んできて地面に激突する

ヒナタは急いで彼女の元に向かいHPを回復させるが一割近くまで減らされており

回復させれるまでには時間が掛かると思っている

「そっそんな．．．!? あれを受けてもまだ．．．!!」

なんと爆風の中からは五体満足な体で出てきた呂布の姿があり

HPを確認すると先ほどの一撃で二割ほどしか削れていなかった

流石の二人ももうダメだと諦めようとした時だった

『．．．見事だ．．．これで問題はないな? 武義?』

何故か呂布はもう戦う意志を見せてはおらず何者かに話しかけて来た

二人は一体、誰と話しているのだろうかと思っ

て、呂布の後ろに巨大な亀の怪物がいるのが見え

た。しかしその目はとても穏やかであり彼女らに対して戦闘の意志を見せてはいなかつた

『……どうやらこいつも貴様の事を認めたようだ……』

女……もう一度だけ名を聞いておこう』

「……ベルベットつす……！」

『そうか……貴様にこいつを託そう……』

そして奴らと共に……強大な闇と戦え……！』

ベルベットが呂布の持っていた方天武戟を受け取ると

呂布の体が光り出してベルベットの中へと入り彼女の装備が変わった

ユニーク装備・玄武シリーズ

方天武戟

STR+400 AGI+300

「天武大烈斬」「武幻爆裂衝」

玄武の兜

STR+200 INT+150

「黒曜の闘神」

玄武の鎧

STR+250 VIT+350 AGI+300

「靈亀甲盾」「天の刃」

玄武の籠手

STR+150 VIT+150

玄武の脚甲

VIT+150 AGI+200

天武大烈斬

天の力を宿した必殺技で確立で相手を即死させる

武幻爆裂衝

大地を割り相手に防御不能の攻撃を当てる必殺技

靈亀甲盾

発動すると一分間だけ全ての攻撃を防ぐ盾を召喚出来る

天の刃

あらゆるデバフを無効化し攻撃する事で相手のバフを解除出来る

黒曜の闘神

スキルを発動すると武義の魂が具現化した存在・武煌壁を呼び出し
それと一体となることで神雷帝へと進化を果たす事が出来る

「・・・これが・・・呂布さんの力つすか・・・!」

「よつよかつたね?ベルベット!」

「はいっす!後は呂布さんの言っていた大いなる闇との戦いだけつすね!」

一方その頃、運営側では・・・

「・・・まさか無茶振りで用意してたイベントがこんな終盤までくるなんて・・・」

「どうするんすか?最終決戦・・・下手したらフィールドが壊れますよ?」

「会社に知られたら・・・減俸どころの騒ぎじゃないですよね?」

「当たり前だろ!?!お前ら!急いで決戦場の強度チェックをするぞ!!」

あのスペリオル達の事だから絶対に手加減なんてしないだろうからな!!」

『はいいいいい!!』

ラピッドファイア

thunder stormの二人と冒険した数日後

スペリオルはメイプルとサリーとの約束で

とある場所にレベル上げをしに向かおうとしていた時だった

そこで思わぬ事から彼はとある二人と戦う事になっていた

「貴様が何者か知らんが・・・倒させてもらう・・・！」

「援護しますー！リリイ!!」

(・・・どうしてこうなった?)

時は少し前に遡りスペリオルは二人との約束の場所に向かう途中で

これまで取得してきたスキルを色々と試していく事にした

その中で彼が試したかったのは聖竜シリーズへと進化した装備

これだけは未だに謎となっているスキルが二つあるのだ

「この?になっているスキルはどうやったら使えるようになるんだ？」

また何かしらのイベントが必要なんて言わないよな・・・」

『グオオオオオン!!』

「いや何か伝えようとしてくれるのは嬉しいけど

基本的にはお前が何を言おうとしているのか分からないから」

ドラグーンが叫び声を上げて何かしらを伝えようとしてくれるが

スペリオルはそれが何かまでは理解出来ないの

嬉しいと思う反面、どうしようかと悩んでいた時だった

「巨大なモンスター!? しかも見た事がない!!」

「リリイ……! その下にはブレイヤーらしき人がいるぞ!」

「どうやら待ち伏せされていたようだな……!」

「えっ?」

声が聞こえてスペリオルが後ろを見ると

そこには騎士のような格好をした美少女と執事の服をした男が立っていた

しかも完全に彼の事を敵と判断しているようで戦闘体勢に入っていた

そして現在に戻りスペリオルはどうにかして穏便に済ませられないかと模索する

「あつあの……別にこつちとしては戦う意志はないんだけど……」

「そんな怪物を従えておいて戦う意志がないだど!? ありえん!

悪いがやられる前にやらせてもらおう!」

「結局こうなるんかい!!」

残念ながら今の彼らは聞く耳を持たないようで

仕方なくスペリオルは彼らとの戦闘に臨む事にしたのだが

二人の連携は思った以上に完成されており流石のスペリオルでも苦戦を強いられていた

(あの二人・・・攻撃と支援で武装が変わるのか・・・俺みたいな感じだな・・・)

しかし問題はその連携力の高さか・・・マイとユイよりも上なんじゃないか?)

二人の連携はあのマイとユイの双子故の連携よりも上であり

この強さならば上位プレイヤーに違いないとスペリオルは考えていた

だからこそ手加減をしては逆に失礼だと考え全力で戦う事にした

「悪いが手加減は無しだ・・・！本気で行かせてもらおうぜ！」

換装！真龍帝シリーズ！そして義兄弟の絆！」

『おう！チームワークなら俺達も負けてないぜ！』

『左様！我ら義兄弟の絆に勝るものなし！』

完全に人数の有利が無くなった事によって二人とも攻撃専用の装備に変わったが

それでもスペリオルの方が実力は高く形成逆転といった形になっていた

「最後はこれだ！三位一体！星・龍・ざあああああん!!」

「ぐっ!?!」

「これは!？」

最後はスペリオルの必殺技に吹き飛ばされてしまう二人だったが

何故かトドメは刺されずHPが残されている事に疑問を感じていると

そこへ武装解除したスペリオルが近づいて二人に対して手を差し伸べる

「これでわかつてもらえたか?別に俺はお前らの敵じゃねえよ」

「・・・その顔・・・!?もしかしてスペリオルか!？」

「今かよ!？」

こうしてどうにか誤解を解く事が出来たスペリオルは事情を説明し

それを聞いた二人は改めて自己紹介すると同時に今回の件を謝罪してくれた

「本当に申し訳なかった!」

私はラピッドファイアのギルドマスターをしているリリイだ」

「俺はウィルバートだ。気軽にウィルって呼んでくれて構わない

それにしても・・・本当に悪かったな」

「いやもう謝ってもらったから別に気にしなくてもいいって・・・」

それよりも二人の連携は凄いな・・・今まで戦った誰よりも上だったぞ?」

スペリオルは素直に二人と戦った事に対して称賛の言葉を述べると

ウィルはとても照れくさそうな顔をしていたがリリイは毅然とした態度をしていた

「彼とは長い間、一緒にやってきたパートナーだからな

そう言った意味では彼以上に私を理解してくれている人はいない

しかし・・・自分達が手も足も出ない相手に出会ったのは初めてだ」

「いやまあ・・・俺に関しては自分で言うのもなんだけど

ほとんどチートみたいなもんだからなく・・・」

「いや・・・ゲーマーであるからこそ分かる・・・

貴方の強さは装備だけじゃなくその根源・・・自力の強さが明らかに違う

それこそ武術を完全にマスターした達人のようだった」

なんとリリイは先ほどの戦いでスペリオルが達人級の武術の使い手だと悟ったよう

で

流石のスペリオルもこんなに早くバレるとは思っておらず驚いた顔をしていた

しかし同時にそれほどまでの実力を持っているのだと笑みを浮かべていた

「・・・二人はこれからも強くなっていきそうだな・・・」

今度、また相手する時はもつと苦戦する事になりそうだな・・・！」

「それはこちらのセリフです・・・ですがまた負けるつもりはありません

次は・・・必ず勝たせてもらいますよ・・・！」

こうして二人は固い握手を交わしてその場を離れていくのだった

「・・・あつ！メイプルとサリーの事、忘れてた!!」

この後、スペリオルは罰として一週間ほど

現実でもゲームでも二人に付き合わされる事になるのだった

第九回イベント

色々な出会いを経ていよいよ第九回イベントが始まろうとしていた

今回のイベントはどうやら全員協力での探索イベントらしく

それぞれのフィールドに出てくる限定モンスターを倒し

その討伐数によって得られる報酬が増えていくそうだ

「なるほどな……今回は全員で協力しなくちゃいけないから

情報も共有していった方が良いつてわけか……

探索に関してはどうする？ やっぱりばらけた方が良さそうか？」

「そうだね……とりあえず機動力のある私とカスミ、スペリオルが搜索して

メイプル達にはその教えた場所でモンスターを倒してもらおうか」

サリーは探索には不向きであるメイプル達は

一番最初にモンスターを見つけた場所でそのまま狩り続けてもらい

その間に機動力のある自分達で他の場所の搜索をしようと考えていた

「おっ？ そろそろイベントが始まるみたいだな

それじゃあ俺達はそろそろ行くからそっちも適当にな〜」

スペリオルは一足先に最も強い敵がいるであろう七層に向かい
そこでイベント限定のモンスターを空から探していた時だった

「・・・おいおい・・・」

なんかこの間から随分と運営は俺に対して対抗心を出してない？」

スペリオルの前に現れたのは空を泳ぐノコギリザメの群れであり

彼は明らかに運営が空を飛べる自分対策に用意してきただろうと考えていた

そしてもちろん彼の考えている通りなので運営側は何も言い返せなかった

「と言っても・・・見た感じからして前回みたいな強敵って感じじゃないな？」

もしかして撃破数を稼がせる為に敢えてこれくらい難易度にしてるのか？」

大守護天使シリーズの装備を身に纏いモンスターの首を綺麗に落としていくスペリ

オル

もはやその様子は魚を捌いている料理人のようにしか見えず

運営側もこのままでは自分達が作ったモンスターが調理されてしまうと思っていた

しかしスペリオルはそんな事は気にしておらず

むしろ気になっていたのは明らかに前回のイベントよりも弱いステータスだった

何か狙いがあるのかも思ったが今回のイベントの仕様を考えて

初心者でも狩りやすいようにしているのかと思いきや考えるのをやめた

(と言つてもこのままだと一人でここにいるモンスターは狩り尽くしそうだな．．．)

なんかもつと派手にいっぱい出てきてくれるような場所はないものか．．．)

もはや一体一体を相手にする事自体が面倒になっているスペリオルは

一気に数を稼ぐ為の方法はないだろうかと考えていた時だった

「ん？なんか向こうでも戦っている人影が見えるな．．．

つて事はもしかして向こうにも限定のモンスターがいるつて事かな？」

スペリオルは自分に向かってくるモンスターを全て斬り落とし

そのまま凄まじい速度でその戦闘が起こっている場所に向かうと

そこでは前にあつた事のあるリリィとウイルの二人が協力してモンスターの大量と

戦っていた

しかしスペリオルが目撃していたのは彼らの従えているティムモンスターの方だっ

た

(へえ？あの様子からしてあれは二人で制御する系のモンスターみたいだな．．．)

そんなのがあるなんて初めて聞いたけど．．．こうなつてくると能力も見てみたい

が．．．

流石にそれはルール違反だしなんだか苦労しているみたいだから手助けするとしま

すか)

「スペリオル・・・推して参る！」

上空から一気に落下し二人に迫るモンスターを吹き飛ばすスペリオル

二人は一瞬、何が起こったのだと警戒を強めるがスペリオルの姿を見て警戒を解除した

「スペリオルさん!？」

「なんか苦戦しているみたいだったから割り込ませてもらったぜ？」

もしかして余計な事しちゃったか？」

「いえーむしろ助けていただいてありがとうございます！」

実はウイルが本調子ではなくて・・・

少しだけここをお任せしてもよろしいですか？」

「構わねえよ・・・！こっぴつた大勢との戦いは第一回イベントで慣れてるんでな！」

さあ大暴れと行こうか！ソウルアップ！」

スペリオルはスキルを使って鎧闘神へと姿を変えてモンスター達を蹂躪していく

その姿を見てラピッドファイアの二人は

この前の戦闘で自分達がどれほど手加減されていたのかを理解した

(凄い・・・！これがあのペインすらも勝てないと言っていた勇者の実力・・・！)

これに追いつく為には・・・私達はどれほどの努力をすれば・・・)

「・・・本当に・・・凄まじいね・・・」

「ウイル!?もう体は大丈夫なのか?」

先ほどまでタイムモンスター力の力を借りて索敵をしていた影響で

ウイルは思った以上に疲労しておりリリイはその事を心配していたが

どうやら本人はそんな疲労すらも気にせずスペリオルの戦いを見ていた

「あの強さ・・・スキルや装備だけじゃなく本人の技量も凄まじい・・・」

それは前回戦った時に理解したつもりでいたはずだったんだけど・・・」

「・・・ああ・・・私達はそれでもスペリオルさんを過小評価していたようだ・・・」

あれだけの強さを得るのにどれだけの研鑽を積んだのか・・・

あれはまさしく・・・ゲーマーの鬼だ・・・!」

まさか自分の事をそんな風に評価されているとは思っていないスペリオルは

そのまま大暴れを繰り返したった五分ほどでその場にいたモンスターを全滅させた

のだった

一方その頃、運営側では・・・

「・・・やっぱり普通のモンスターじゃ相手になりませんね・・・」

「そりやそうだろ？あのイベントを超えた奴らだぞ？」

今更こんな雑魚モンスター相手にやられるような玉じゃないって」

「だがあしかし!!このイベントの後半は俺達が作り出したレイドボスが控えている!!

いくらアイツらでもこれを倒すには相当な時間が掛かるはずだ！

そして今度こそ！イベント期間をフルに使わせてもらおうぞ!!」

(・・・そして結局はフラグ回収されるんだろうな・・・)

即席チーム

ラピッドファイアの二人を助けたスペリオル

そしてその場にいたイベント限定のモンスターを倒し

ソウルアップのスキルを解除して二人の元に向かった

「ふう……これであらかたの敵は倒したな

そっちはもう大丈夫そうか？ダメなら肩を貸すけど」

「いや……もう大丈夫だよ。スキルを使うと毎回こうなるから

もうそろそろ慣れないといけないんだけどね……」

「そんなに負担が掛かるって……」

そのスキル……修正してもらった方がいいんじゃないか？」

流石のスペリオルも同じような経験があるからなのか

ウイルのそれに関してでは運営に言った方がいいのではないかと思っていたが

「このスキルは僕達にとつては戦術の要とも言えるものだからね……」

あまり修正なんかをしてほしくはないし使えなくなるのは尚更、困るんだ……」

「……なるほどね……それなら俺は特に何も言うつもりはないけど」

少しはそつちのギルドマスターの気持ちも考えてあげなよ？」
「どうやら本人はこれだけの便利さを考えれば

想定内の代償だと考えているようだった

しかしスペリオルはあまりそれを良いとは思っていなかった

その理由は彼の相方でもあるリレイが悲しそうな顔をしていたからだ

いくら自分の体の事だと言っても心配する人間は彼じゃない

そう・・・彼を大切だと思っている人が彼の事を心配するのだ

そしてそうやって心配させるのはとても間違っている事だとスペリオルは考えていた

「さて・・・ここからどうしたもんかね〜・・・」

みんなに合流してもいいんだけど・・・

出現したモンスターは狩り尽くしたからなく・・・」

情報を集めるはずが完全に殲滅戦へと変わっていたスペリオル

当初の目的を果たしていないのでみんなと合流するのも気が引けてしまい

これからどうしようかと考えていると後ろの二人から声を掛けられる

「スペリオルさん・・・もしよかつたら私達と行動を共にしてもらえないだろうか？」

素敵に関しては我々の方が上だろうがこの通り、ウィルがまともに動けなくなつてし

まう

それを補ってもらいたいと考えているのだが……いいだろうか？」

「そりゃ俺は構わないけど……そっちこそ良いのか？」

俺と一緒にいくつて事は自分達のスキルを見せるつて事だぞ？」

「ああ……ですがそれ以上に貴方と組む事には利益がある……」

いえ……それ以上にトッププレイヤーの実力を間近で見たいのです」

「そういう事なら俺としては別に文句もないけど……ちよつと待つてね？」

スペリオルはちゃんとメイプル達に連絡し許可をもらつてから

二人に同行する事を決めて彼らの指示通りに移動を始める

「やはり便利だね……僕達も空を飛べるタイムモンスターにすればよかったかな？」

「いやいや!!二人のタイムモンスターも十分に強力だからな!？」

多分だけど普通に超が付くほどのレアモンスターだからな!？」

そうやつて移動する中でスペリオルは二人にミカの事を羨ましいと思われていたが

彼らのタイムモンスターもとんでもなく強く強力な能力を持っていた

それを考えたらミカもそこまで珍しくないのではないかと思つてしまうほど

そんな話をしてると二人が発見した場所までやつてきたのだが

「?先に誰か戦つてるな……しかもあの雷……もしかして……」

スペリオルはその場に着陸するとそこに居たのはthunder stormの二人だった

しかもベルベットに関しては装備が明らかに変わっており

その姿はまるで死闘を繰り広げた事のある相手・・・呂布のようだった

「・・・随分と懐かしい格好だな・・・！ちよつとテンションが上がってきた・・・！」

「ちよつ!?スペリオルさん!？」

なんとスペリオルは二人の姿を見た瞬間

ミカから飛び降りてそのまま二人の加勢をしに向かってしまった

戦いに真剣だった二人は何が起こっているのか分からなかったが

目の前に現れたスペリオルの姿を見てその訳を察した

「スペリオルさん!!」

「二人共、悪いが勝手に加勢させてもらうぜ？」

ちよつとテンションが上がってきたんでな・・・!!

換装!真龍帝!」

スペリオルは真龍帝装備に切り替わると

そのまま凄まじい勢いでモンスターを倒していく

「すごいっす・・・!!私も負けていられないっすね!!」

その姿を見てベルベットも負けていられないと

まるでスペリオルに背中を預けるようにして戦っており

本来ならば見る事の出来なかつたであろう劉備と呂布の共闘を見ているようだった

「全く・・・！少しは私達の事も考えてもらえないでしょうか？」

「その通りだよ・・・僕達に協力してくれてたんじゃないのかい？」

「別に良いだろ？今回は敵も味方もないんだからさ」

さてと・・・そんなじやまいっちょよ大暴れといきましようか!!」

こうしてスペリオルは thunder storm、ラピッドファイア

二つのギルドのメンバーと共にモンスターを倒していくのだった

そしてイベントはいよいよ後半を迎えようとしていた・・・!

ボスは食べられるもの

数日ほど四人と一緒に行動していたスペリオル

そしていいよイベントは後半を迎えようとしていた

「・・・今日はなんかモンスターが少なくないか？」

これじゃあイベント報酬なんて貰えないぞ？」

「確かに・・・」

でも運営がこんな分かりやすいミスをするとは・・・」

今回もウイルの力を借りてモンスターを探していたスペリオル達だったが

何故かイベント限定のモンスターが全くと言っていいほど見当たらず

もしかして自分達が知らない間にイベントが終わってしまったのではないかと

そんな風に思っていると突如として上空から巨大な何かが降ってきた

スペリオル達は急いでそれを避けると降ってきたのは巨大なタコとイカのモンス

ターだった

「こいつは・・・！もしかしてレイドボスか!？」

「えっ!?! って事は後半戦はレイドボス戦って事っすか!？」

この瞬間、二体のレイドボスは気づいてしまった
自分達がボスではなくスペリオルの前では捕食されるものだということ・・・

「いや〜！食った食った！」

メイプルに言われた時はモンスターなんて食えるかって思ってたけど

案外、本物に近い味がするから美味しいもんだな！」

スペリオルは見事にタコとイカのレイドボスを撃破し

そのまま調理までされて一欠片も残さずに食した

その光景を見ていたベルベット達は開いた口が塞がらなかつた

「・・・自分・・・モンスターが食べられるものなんだって初めて知ったつす・・・」

「いや・・・むしろあんな事をするのはメイプルと彼くらいだ・・・」

まあ確かにタコやイカのような見た目だったから美味しそうと思わない事はない
が・・・」

「リリイ・・・そこは別にフォローしなくても大丈夫だと思っぞ？」

普通にあんな化け物を食べるのは常人には無理な事だ」

そう・・・本来ならばモンスターを食べるなんて事は思い付きもしないのが普通

しかしメイプルはそれを思いついて実行し見事に色々なスキルを獲得
そしてスペリオルもそれを聞いてしまったからこそ

目の前の二体を美味しそうと思っでしま

結果として見事に平らげるとい事になってしまったのだつた

「そういえばメイプルが言つていたみたいなスキルは獲得出来なかつたな？

もしかしてイベントモンスターだからダメつて事なのか？

まあいいや・・・とりあえず二匹は倒したし他も探しに行きますか！」

「そうですね・・・今のが後半戦で普通に出てくるのなら

そこまで強くないプレイヤーにとつては厳しい戦いになるかもしれません

私達がフォローして助けないと最悪の場合は全滅の可能性もあります」

スペリオル達は急いで他の場所へと向かい

様々なレイドボスを倒しながら撃破数を稼いでいった

そんな中で彼が気になつていたのはその数だつた

(・・・あれ？このままいくともしかして・・・)

イベント期間前に終わるんじゃないか？)

そんな彼の予想は完全に当たつてしま

みんなの奮闘もあつてイベントは半分以上の期間を残して

最大報酬に達してしまいかかなり早く終了してしまうのだった

一方その頃、運営側では……

「……とうとうメイプルだけじゃなく

スペリオルもモンスターを食べるようになったか……」

「てかあいつヤバすぎるだろ……完全に目が捕食者の目になってたぞ？」

「それよりもイベントどうするんだ？ 思ったよりも早く終わったから

とてもじゃないけど第八層の実装まで時間が出来ちまったぞ？」

「まっまあ！ それ以外にも色々なクエストを用意してるし

八層が追加されるまではそれで時間を潰せるだろうさ！」

（……でもそのクエストが発生する度

俺達が泣く羽目になっているのは気のせいだろうか……）

囲まれる男

それは第九回イベントが終わったすぐ後の事だった

スペリオルはようやくギルドのみんなと合流した瞬間

何故か彼は怒りのオーラを出している女性陣に正座させられていた

しかもそこには何故かミイとミザリーの姿もあつた

「……えっと……俺……何かしましたかね？」

「特に何もしてないよ？ええ……本当に何もしてないからこそ

私達がこんなに怒ってるって感じかな？」

「そうだね……まあ心当たりがあるとしたら

この前のイベントって事だけは分かっているんじゃないの？」

確かに全員が怒る理由に関しての心当たりは

もはやあのイベント以外にないのだが

問題は何もしていないのに彼女達が怒っているという事

流石に理由もなく怒るとは思えないのだが

本当にどうして怒っているのか全く分からず

かと言って聞くわけにはいかないの

どうしようかと必死で悩んでいるスペリオルに

見兼ねたイズがどうしてみんなが怒っているのかを教えてください

「みんながこんな怒っているのはスペリオルが構ってくれなかったからよ？」

本当は一緒にイベントをしたかったからこんな風に不貞腐れてるの」

「イズさん!？」

「そういう事かよ．．．いやまあそれに関しては悪かったよ

てか．．．普通に別行動に対して許可は貰ったと思うんだけど」

「それはそれ!これはこれだよ!!」

「いや．．．言ってる事がめちゃくちゃなんだけど．．．」

しかしそれでもあまりにも可愛らしい理由だったので

スペリオルもそこまで怒る気にはなれず

むしろ確かに自分が悪かったと思いつながらどうしようかと考えていた時だった

「ん?メッセージか．．．一体、誰からだ?」

スペリオルも画面にメッセージが来たという表示が出てきて

誰からなのか確認すると前に知り合った事のある料理ギルドのマスターからだった

そこに書かれていたのは何でも知り合いのパーティーに出す為の材料が足りておら

ず

スペリオルにその材料を取りに行ってももらえないかという依頼だった
「ふむ……そうだ！ 丁度いい！ この依頼をみんなで受けるとするか！」

『えっ？』

こうしてスペリオルはイベントと一緒に出来なかったお詫びとして
みんなと一緒に料理の素材を狩りに向かうのだった

「あつ！ 因みに言つとくけど今回は食べちゃダメだからな？ メイプル」

「わっ私だってそんな毎回、食べてるわけじゃないよ!!」

(いや……それはどうだろう……)

まずスペリオルがやってきたのは綺麗な七色の花畑であり

ここにやってきた理由はこの場所にいる蜂型のモンスターから

レインボーハチミツと言われているアイテムを手に入れる為だった

「どうする？ 一応は蜂の巣からも取れなくはないから

手分けした方がいいとは思うけど……」

「それなら私とカスミとイズさんで取りに行ってくる

メイプル達と一緒になら殲滅戦にはもってこいでしょ？」

「確かに……でも頼むからこの花畑を荒らすなよ？」

「わっ分かってるよ!!」

こうしてスペリオルは残されたメイプル、ミイ、ミザリーと一緒に自分達へと襲いかかってくる蜂型モンスターを倒していくのだった

「とりあえずはこれくらいで十分かな？」

まあ足りないって言われたら後で集めに来ればいいか……

後は……メインディッシュのアレを倒さないといけないよな……」

「アレ？」

メイプルはスペリオルの話しているアレが何かまでは分からなかったがとりあえずサリー達と合流してスペリオルに案内された場所に向かうとそこにはとても巨大な黒い牛型のモンスターが鎮座していた

「……あんなモンスター見た事ないんだけど……」

「だろぅな……あのモンスターは料理を作る人には伝説的なモンスターでな……

倒す事が出来れば最高級の肉をドロップしてくれるんだけど……

問題はその強さがトッププレイヤーでも苦戦するレベルって強さで

それ故にほとんど幻なんて呼ばれてるモンスターなんだよ

俺もモンスター全種類討伐なんて事をやってなかったらマジで近づかなかったぞ」
「ねえねえ！あの牛さんのお肉ってそんなに美味しいの!？」

「現実世界で言うなら最高級の肉に匹敵するんだろうな・・・食べた事ないけど」

その言葉を聞いてメイプルは完全にやる気になったように

最初から全開と言わんばかりに天鎧王を呼び出し

その場にいた牛型のモンスターを全滅させるのだった

(・・・あいつ・・・どんだけ食い意地はってんだよ・・・)

こうして無事に素材集めは終わりスベリオル達は素材を運ぶと

そこでお礼とばかりに集めた素材を使った料理を振舞われて

メイプル達は今朝の怒りを完全に忘れたかのような幸せな笑みを浮かべるのだった

(一件落着・・・全く・・・) 機嫌取りも楽しやないな・・・)

生まれ変わる二人

もうそろそろ第九層が実装されようとしている中で

ギルド・ラピッドファイアの二人はこの前のスペリオルとの共闘で自分達の実力がまだまだ彼らには及ぼないという事を実感し

新しいスキルや装備を手に入れられないかと探索していた時だった

「・・・この先に怪しいオーラを放っている鳥型のモンスターがいるな・・・

どうする？新しいイベントがありそうな気がするが・・・」

「私達はむしろそれを探しに来たのだから行かないわけにはいかない

その鳥型のモンスターがいる場所へと向かってみよう」

二人はその鳥型のモンスターがいる場所に向かうと

そこに居たのは確かに巨大な黒い鳥のモンスターだった

このモンスターを倒せば新しい装備が手に入ると思い

二人は戦闘を開始したのだがその黒い鳥のモンスターはかなり強く

更に空を飛ぶという事もあってなかなかダメージを与えられなかった

「くっ！しかもこの風・・・！強力なノックバック効果が・・・！」

「これじゃあ近づく事すら出来ずにこっちのHPが先に尽きる・・・！」

そして最も厄介だったのはその鳥が放つ旋風

それには普通ではありえないほどのノックバック効果があり

ただでさえ空を飛ぶ相手なのに距離を縮める事が出来なかった

一体どうすればいいのだろうかと二人が思っている

鳥型のモンスターが本気を出してリリイが遠くまで吹き飛ばされてしまう

そして巨大な一本の木に体がぶつかって止まる事が出来たのだがHPは一割

とてもではないがここから逆転するのは厳しいだろう

「はあ・・・はあ・・・このままじゃ・・・えっ？」

リリイは絶望しながらどうすればいいのだろうかと思っている

自分の目の前に何故か一本の薙刀が突き刺さっていた

何故かリリイはその薙刀から眼を離す事が出来ずそれに触れた瞬間だった

「なっ何が!？」

急にリリイの体が光に包まれると次の瞬間、彼女の装備が変わっていた

ユニーク装備・旋風シリーズ（武者??伝・斗機丸零参モチーフ）

旋風の薙刀

STR+150 INT+100 AGI+200

〔大江戸刻閃斬〕

旋風の兜

VIT+100 DEX+50 AGI+150

〔友の絆〕

旋風の鎧

VIT+150 AGI+100

〔我致止飛〕

旋風の籠手

STR+50 AGI+70

旋風の脚甲

VIT+50 AGI+80

大江戸刻閃斬

風属性を纏ったAGIに比例するダメージを与える必殺技

友の絆

パーティメンバーがいる時、HPが十秒間に20%回復する

我致止飛

三分間、自分のステータスを三倍にする代わりに常時混乱状態となる
そして三分を過ぎるとHPが0になり自爆する

「これは・・・!? 良くは分からないがこれなら!!」

リリイはこれまでに見た事もない速度で走り出すと

あつという間に鳥型モンスターの頭上を取り

そこから新しい必殺技を放った

「大江戸刻閃斬!!」

『ギャオオオオ!!』

目にも見えないほどの速度で鳥型モンスターは斬り裂かれ

その姿を見ていたウィルは驚いていたが同時に

彼女のとてもし綺麗な動きに思わず見惚れてしまっていた

「大丈夫か? ウィル」

「あつああ・・・大丈夫だ・・・ありがとう」

リリイに手を貸されてウィルは起こされる

そして二人はボスモンスターに近づいていくと

急にモンスターが光り出してウィルの事を包み込んでいく

ユニーク装備・黒鳥シリーズ

斬斧刀

STR+100 AGI+150

トライアットショットガン

INT+100 AGI+50

電撃斬斧刀

斬斧刀とトライアットショットガンが合体した姿

STR+150 INT+150 AGI+250

黒鳥の兜

VIT+100 DEX+50 AGI+100

黒鳥の鎧

VIT+150 DEX+100 AGI+50

「黒鋼雷鳥変化」 「爆碎雷鳥」

黒鳥の籠手

STR+50 AGI+70

「武者縛導策」

黒鳥の具足

VIT+50 AGI+80

黒鋼雷鳥変化

雷を纏った鳥のような姿に変化し超高速で飛行することが可能になる

爆碎雷鳥

黒鋼雷鳥変化を使用している状態でしか使えないスキル

雷属性のエネルギーを纏って対象に突撃して攻撃する

確率で相手を麻痺させる

武者縛導策

腕から手錠を発射して相手を十秒間だけ行動不能にする

「うくん．．．なんとというか．．．悪者っぽくなってしまったな．．．」

「だがこれで新しい力は手に入れる事が出来た．．．!」

これで第九層のイベントが来ても問題はなさそうだな．．．!」

二人はこれでようやくスペリオル達と対等に渡り合えると思っていたが

彼らは知らなかった．．．スペリオルがまだまだ進化するという事を．．．

乙女心？

ある日の事、ギルドの中でカスミはとある事で悩んでいた

それはみんなが色んな進化を遂げているのに対して

確かにカスミだけは少しだけ遅れていると言わざる得ないだろう

と言つても他のプレイヤーからしてみれば十分に強いのだが・・・

なので今回は一人でもつと強くなる為の方法を探しにとある場所へ来ていた

「・・・懐かしいな・・・」

ここで私は初めてこの装備を手に入れたんだったな・・・」

そこは他でもないカスミが黒竜シリーズと白鳳シリーズを手に入れた場所であり

ここならば何か強くなる為の情報が残されているのではないかと思ひ

道場の中を詳しく探していると額縁の後ろに隠し扉があるのを発見した

「まさかこんなものがあるとはな・・・よし！」

隠し扉を開けて奥へと進んでいくと

何やら書物がたくさんある部屋へと辿り着いた

これだけの書物があるのならば

自分が強くなる為の方法があるのではないかと思

「そこにあつた本をくまなく読んでいくと面白い記述が書かれているものがあつた
「これは・・・なんと読むのだ？」

よくは分からないがこれが番長装備の極意のようだな」

そこに書かれていた内容とは合身攻と呼ばれるものであり

それは番長二人が心と体を合わせる事で更なる力を得る方法

それを知つたカスミはどうにか出来ないかと思つていと

『スキル・合身攻を取得しました』

「・・・えっ?」

てつきり本人としては合身攻を取得する為のクエストがあるのだと思つていたが

どうやらこの本を見る事自体が取得条件だつたようで

それをあつさりクリアしてしまいカスミの頭は理解が追いついていなかった

そしてようやく事態を理解すると同時に何もなかったのだと更に落ち込んでしま

「うう・・・出来れば強敵と戦つて力を得た方がカッコいいと思つていたのに・・・

これではみんなにカッコよくスキルを見せられないではないか・・・」

流石のカスミもこのスキルの入手方法に関しては文句があるようで

少し不貞腐れた様子を見せながら道場を後にすると

何やら外で騒ぎが起こっているらしく何事かと思つて向かうと

そこではNPCが何かに襲われているようで一体、何事かと思つていると「なつなんだこの巨大なモンスターは!?」

なんとそこに現れたのは巨大な一つ目をしたゴリラ型のモンスターでありどうやらNPC達はこのモンスターに追われていたようだ

もちろんカスミはこれを倒そうと考えていたのだが問題はその大きさだったハクを大きくしたとしても相手の方が大きくおそらくは力も強い

かと言つて自分にはみんなのような機兵を持つているわけでもなかったそれ故にどうやってあんな巨大なモンスターと戦えばいいのだろうと思つていた時カスミは先ほど手に入れたスキルの事を思い出した

「そうだ！こんな時こそあのスキルを使えばいいのか！」

とはいえ人の前であの姿を披露するのは・・・ここは白鳳装備でいく！」

カスミは白鳳シリーズに装備を切り替えるとそのままスキルを発動する「行くぞ！合身攻!!」

スキルを発動した瞬間、カスミの体から黒龍シリーズの装備が出てきて彼女を包み込むと上が白鳳、下が黒龍シリーズの装備へと切り替わり

そしてカスミは巨大化しモンスターと並ぶほどの大きさへと変化していた

「凄いなーこれが合身攻の能力か！

これならば何の問題もなく戦える！

白扇！乱れ打ちいいいい！！」

目にも止まらぬほどの速度でカスミは何度も剣を振り抜き

巨大モンスターのHPは一瞬にしてなくなり消滅した

これにはカスミも自分でやった事にも関わらず驚いていると

何やらNPCの人達が話しかけていたようで

彼女は元の大きさに戻り装備を戻して近づいていった

『いやーまさかこんな場所で番長に会えるとは驚きだべ

もしかしたらお前さんならこの極意の書を開けるかもしれないねえだなー！』

そう言つてNPCはカスミに黒と白の巻物を手渡した

どうやらこれこそが本当の報酬だったようで

今はこれを開く事は出来ないがいずれその時が来るだろう

そんな事を考えながらカスミは嬉しそうにギルドへ帰ると

そこには先に帰つて来ていたスペリオルの姿があった

「おっ？随分と嬉しそうな顔してるけど何かあったのか？」

「うむ！聞いてくれ！実は新しいスキルとその手掛かりを手に入れたんだ！」

嬉しそうにそんな話をするカスミの顔は恋する乙女のようにだったと
後に同じくギルドホームに居たのに気づかれなかったクロムは告げる

赤備えの鎧

新しい階層が追加されるという事で

ペインは新しい装備やスキルが必要だと考え

前に話していた赤備えの鎧があるという場所へ向かっていた

そしてそこにはなんととも言えない顔をした

赤い鳥型のモンスターが鳥籠に捕まっていた

「……えつと……これを助けたらいいのかな？」

『……』

ペインは助けるべきかどうか悩んでいる理由は

何故かその捕まっている鳥型のモンスターは

ペインを睨んでいたからだ

もしかしたら鳥籠から出したら攻撃されてしまうのではないか

そう考えたからこそ出さない方がいいかと思っっていると

何やら向こうのほうで音が聞こえてきて

それが戦闘音だと判断したペインは鳥籠を破壊した

「すまないが行かなくちゃいけないところがあるから

君とはここでお別れだ！もう捕まるんじゃないよ！」

『……ゾナー……』

ペインは戦闘音のあつた場所に着くと

そこでは何やら寄生生物のようなモンスター達が暴れており

しかも何かを探し回っているようで建物などを破壊していた

「やめろ！これ以上はお前らの好きになさせない！」

『なんだ？随分と勇ましい奴が出てきたな？』

だがたった一人でこれだけの数を相手に出来るのか!？」

リーダーらしきモンスターは他のモンスターに命令してペインを襲わせる

流石のペインも一人でこれだけの数を相手にするのはキツかったようで

徐々にHPを奪われていくのだが敵の数は一向に減っている様子はなかった

それもそのはずであり続々と援軍が海から現れていた

『どうした？このままだとお前の方が先にくたばりそうだな!？」

(くっ……!このままでは本当に……!)

『ゾナー!』

「なっなんだ!？」

なんと急に上空から先ほど助けた鳥型のモンスターが現れて

ペインを体の中に取り込むとそのまま光を放ち始める

そして次の瞬間、姿を現したのは赤い鎧を身に纏ったペインの姿だった

ユニーク装備・○秘シリーズ

運知大

アタリの場合・STR+400

ハズレの場合・STR+10

「頑駄無流秘奥義 ○秘無刀斬」

○秘の兜

VIT+150 INT+50 DEX+100

「刀身があると思えば、ある!!!」

○秘の鎧

VIT+250 INT+150

「突来四連打」「最善門」

○秘の籠手

STR+100 VIT+150

○秘の足甲

VIT+100 AGI+150

頑駄無流秘奥義 ○秘無刀斬

運知大から放たれる斬撃で相手に防御無視のダメージを与える

刀身があると思えば、ある!!!

運知大のハズレを引いた場合でもMPを消費して

アタリと同じ攻撃力に変化させる事が出来る

突来四連打

肩と背中中のパーツが外れて相手に自動で攻撃する

最善門

巨大な戦略兵器を呼び出す事が出来る

しかし一分以内に使用しないと自爆でHPを半分消費する

一ヶ月に一回しか使用できない

「これが赤備えの鎧か・・・！これならどんな敵が来ても戦える・・・！」

『まさかそれが伝説の鎧か!?おのれえええええ!!』

お前ら！あの鎧をなんとしてでも奪い取れえええええ!!』

「そうはさせるか！突来四連打!!」

ペインがスキルを発動すると肩と背中の中のパーツが分離し

四つの遠距離武器が自動で周りにいる敵を倒していく

先ほど以上の殲滅速度であり相手の増援を超える速さで敵を倒していた

『馬鹿な!?これだけの大群があつという間に倒されるだど!?』

「次はお前の番だ!運知大!!」

ペインは腰にある刀を引き抜いたのだが

どうやら引いたのはハズレだったようで攻撃力は立ったの10

しかも刀身にはまごう事なきハズレの三文字が書かれていた

『ハハハハ!!どうやらお前は運に恵まれていないようだな!?』

「確かに俺はあまり運がない方かもしれないな・・・」

だが・・・それだけで勝負に負けるわけじゃない!

刀身があると思えば、ある!!!」

『なっ?!そんなの反則じゃねえか?!』

ペインがスキルを発動すると刃のないはずの刀からエネルギーの刃が現れ

攻撃力も10から一気に400まで急上昇を果たす

「これで終わりだ!頑駄無流秘奥義 ○秘無刀斬!!」

『ギヤアアアア!!この俺がこんなところでえええええ!!』

リーダーのモンスターを倒したペインはそのまま刀を収めるのだが
まだ戦いは終わっておらずリーダーが消えた瞬間、地震が発生し

何事かと思っていると海から巨大なモンスターが姿を現した

「あれが先ほどから増援を作り出していたモンスターか……！」

ちようどいい……！最後のスキルを君で試させてもらおう……！最善門！」

ペインがスキルを使うと巨大な門が彼の後ろに現れ

彼はそれに乗り込み全ての武装を展開して相手を捉える

「一斉照射！」

そして最後のトリガーを引くと全ての武器が放たれ

マザーモンスターを含む全てのモンスターを一瞬で消滅させた

これには流石のペインも驚いている様子だったが問題もあつた

それはこの武器が使い切りのものだという事であり

一ヶ月間は再び使う事が出来ないという事だった

「これじゃあ次のイベントには使えなさそうだな……」

だが新しい装備やスキルも手に入れられたし次はリベンジが出来そうだな！」

そう言ってペインは嬉しそうな顔をしながら街へと戻るのだった

その頃、遙か彼方の上空にある月の中では金と青の卵が置かれていた
そして今・・・その二つの卵がひび割れ・・・
その中に潜んでいる凶暴な獣が目覚めようとしていた・・・！

ソウルドライブ

久しぶりに一人でNWOにログインしたスペリオル

実は今日に関してはとある目的があつてログインしていた

その目的とは他でもない・・・バイクを手に入れる事だつた

「正直、移動手段に関してはミカもいるし

そもそも自分で空を飛べばいいんだけど

バイクに乗るのは少しだけ違うからなく

この三層ならそれもありそうだと思うんだけど・・・

なんか空を飛ぶ乗り物ばかりでバイクとかはなさそうだな・・・」

流石にファンタジーという設定を守っているからなのか

現代風な乗り物は置かれておらずスペリオルは諦めかけていた時

どこからともなく声のようなものが聞こえてきて

それに導かれるままに歩いていくと何やら光り輝く球を発見した

「なんだ？これ・・・」

『それはソウルドライブ・・・』

機械に心を宿す事が出来ると言われている伝説の装置……

どうか？ お主もこれを手に入れてみたことはないかい？」

どうやら発見したそれはソウルドライブというらしく

その横に現れた謎の男に話し掛けられるスペリオルだったが

その瞬間、彼の画面にはクエストのメッセージが表示されていた

「なるほど……まだクエストが残ってたってわけか……」

まあちよつと面白そうだし受けてみるかな」

そう言つてスペリオルはクエストを受注すると

謎の男は嬉しそうな声を上げながらフードを取ると

なんとその顔は機械になっており

威厳のある声とは全く感じさせないほどの風貌となつていた

『よくぞ私の依頼を受けてくれた！』

よかろう！ 君にこのソウルドライブを与える為の試練を与えよう！』

「……なんか受けなきゃ良かったかな……」

あまりにも煩わしい対応に流石のスペリオルも引いていたが

それでも一度、受けた以上はクエストをこなさなくてはいけないと

その男に案内されるがままにとある場所へと向かう

「……()は？」

『ここはかつS・D・G. と呼ばれる組織が合った場所さ』

平和になった世の中にはもう必要ないと思って解散させたんだが

どうやら再び悪の魔の手がこの世界に迫ろうとしているみたいなんだ』

「悪の魔の手か……」

正直もう聞きすぎて狙われ過ぎじゃねえかって思えてきた……」

おそらくはもう二桁になるであろう数の魔の手に関して聞いてきたスペリオル

運営側も考えるのが面倒になってきたのではないかとメタい事を考えてしまうが

今はそんな事を気にしている場合ではなく謎の男が自分に何をさせようとしているのか

それを確かめて彼の出すクエストをクリアさせる事を優先する

『さて……()で君にやってもらう事だけど』

そこまで難しい頃じゃない……このソウルドライブは持ち主を選ぶ

これが君に適応しなかったら諦めて欲しいというだけだ

至極、単純な事だろう？』

「確かに……それじゃあ試させてもらおうかな？」

『ではあそのリングに入ってくれ』

それを動けないスペリオルに向かって放った

もちろんそれを避けられるわけもなくスペリオルに直撃しようとしたその瞬間

「……がんばれ！スペリオル！！……」

「っ！？」

突如として声が頭の中に響いてきてスペリオルは光に包まれる

そして次の瞬間、彼はソウルドライブを取り込んだ新しい装備を身に纏っていた

『なんと……！ソウルドライブが彼を新しい宿主と認めたのか!!』

「……一瞬……メイブルの声がしたような……」

まあいい……！まずはお前を倒さないとな……！！」

『けっ！おもしろええ！やれるもんならやってみるよ!!』

ザッパーザクは先ほどと同じようにガトリングガンを放ってくるが

今のスペリオルはソウルドライブが発動しており謎のエネルギーが体を巡っていた

それにより彼の攻撃は全て無効化され

何事もなかったかのように真つ直ぐ突き進んでいく

そしてそのままそのエネルギーを拳に集中させていき必殺の一撃を放つ

「ぶっ飛びやがれ！キャプテン……パアアアアアンチ!!」

『ゴバアアアアア!!生き返ってもやられ役かよおおお!!』

こうしてザツパーザクは空の彼方まで殴り飛ばされた

その後、スペリオルは正式にソウルドライブに認められた事もあり見事にクエストはクリアしたとして彼の一日は終わったのだった